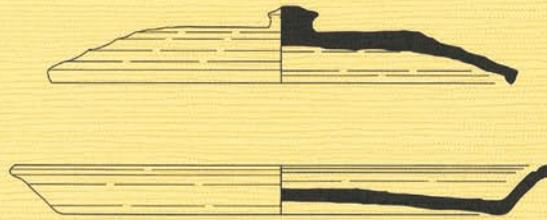


天神溝田遺跡 I

いの町道奥名西線道路改良工事に伴う発掘調査報告書



2010.2

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

天神溝田遺跡 I

いの町道奥名西線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

2010. 2

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

いの町は、四国で最も透明度の高い清流仁淀川の流れとともに、土佐和紙発祥の地として栄えてきた町です。また、歴史的商屋の町並みと、現在でも伝統的土佐和紙技術が継承され、観光資源としても全国的に注目されつつあります。平成16年に旧本川村、吾北村と合併したことから隣県の愛媛県と接し、西の玄関口として旧伊野町から新しいの町に変わりました。

この度、いの町道改良工事に伴い、天神溝田遺跡の調査が行われ報告書が刊行されることとなりました。天神溝田遺跡の調査では、弥生時代から近世期に至るまでの、いの町の歴史的変遷が追える数多くの遺構、遺物が出土しました。この調査成果は、地域の歴史的役割、ひいては県内の歴史を解明する上で重要な位置を占める成果となりました。

国土交通省が計画している高知西バイパスや、アクセス的役割の町道の整備に伴い、いの町の今後更なる発展が期待されている今、先人によって刻まれた歴史の一部が明らかとなったことは大変意義深いものがあると思います。

この成果が豊かな地域史の復元に寄与し、地域の再発見に繋がるとともに、一人でも多くの方々が埋蔵文化財に関心を持たれ、ひいてはより一層の文化振興の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に従事してくださった現場作業員の皆様、また、調査にあたって多大にご協力頂きました地域の皆様方に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成22年2月

(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 小笠原 孝夫

例 言

- 1.本書は、いの町の町道奥名西線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託による天神溝田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2.発掘調査及び整理業務は、いの町から委託を受け、(財)高知県文化財団が受託し、埋蔵文化財センターが調査の実施にあたった。
- 3.天神溝田遺跡は、高知県吾川郡いの町字城山他に所在する。
- 4.調査期間は、平成20年7月1日～平成21年2月15日にかけて発掘調査及び基礎整理を行い、本報告書刊行に向けての整理業務を平成21年10月1日～平成22年2月28日まで実施した。
- 5.調査面積は、1,425㎡（調査延べ面積）である。
- 6.発掘調査・整理業務は以下の体制で行った。

平成20年度 発掘調査・整理業務

総 括：埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫
総 務：次長 森田尚宏 総務課長 恒石雅彦 主任 谷真理子
調査総括：調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：調査第二班長 吉成承三 主任調査員 坂本幸繁

平成21年度 整理業務

総 括：埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫
総 務：次長 森田尚宏 総務課長 里見敦典 主任 弘末節子
調査総括：調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：調査第二班長 吉成承三
- 7.発掘調査にあたって、事前の樹木伐採については(社)いの町シルバー人材センターに委託し作業を実施した。また、基準点設置については(株)アンプル、航空写真測量については(株)四航コンサルタントに委託し業務を実施した。
- 8.本書の執筆は、吉成・坂本(第Ⅱ章)が行い、編集は吉成が行った。現場測量図面・遺構図・遺物図等のデジタルトレース・写真図版等の図版作成は、矢野(技術補助員)・横山(測量補助員)が行った。
- 9.発掘作業及び整理作業については下記の方々に従事して頂いた。また、同センター諸氏より貴重な助言を頂いた。記して感謝する次第である。(敬称略、五十音順)

技術補助員：矢野雅子 測量補助員：横山藍
現場作業員：大原栄美・尾崎定富・白井三郎・新川太郎・杉本直助・中島美恵子・林美津恵・町田憲嗣
・山口壽子・山口優幸・山中益代
整理作業員：岡内真理子・川谷文香・永森亜紀・橋田美紀・松山真澄・山中美代子
- 10.調査の実施については、いの町教育委員会及びいの町技術監理課の協力を得た。また、地元住民の方々には遺跡に対する深い御理解と御援助を頂き、厚く感謝の意を表したい。
- 11.出土遺物の注記は、調査略号08-3ITMとし、図面・写真資料とともに(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過(調査日誌抄)	3
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の概要	
1. 調査の方法	11
2. 各調査区の概要	11
(1) I区	11
(2) II区	11
第Ⅳ章 調査の成果	
1. 調査I区の概要と成果	13
(1) 調査区の概要	13
(2) 基本層序	13
(3) 検出遺構	13
i 掘立柱建物跡	17
ii 柵列	21
iii 溝	22
iv 土坑	23
v 性格不明遺構	31
vi ピット	31
(4) 遺物	34
i ピット出土遺物	34
ii 包含層出土遺物	36
2. 調査II区の概要と成果	40
(1) 調査区の概要	40
(2) 基本層序	41
i II-1区	41
ii II-2区	41
iii II-3区	45
(3) 検出遺構	45
i 掘立柱建物跡	45
ii 溝	51

iii 土坑	52
iv ピット	54
(4) 遺物	54
i II - 1区出土遺物	54
ii II - 3区出土遺物	59
第V章 考察	
1. 弥生時代 - 調査 I 区のSK19出土遺物について -	89
(1) SK19出土土器の分類	89
i 壺	89
ii 甕	90
iii 鉢	90
iv 高杯	90
(2) SK19出土土器の位置付け	90
i 器種組成	90
ii 各器種の特徴	90
iii 編年的位置付け	91
2. 古代 - 調査 I 区の古代掘立柱建物跡の方向性 -	91
(1) 古代の条里と I 区掘立柱建物跡の方向	91
(2) I 区出土遺物の帰属時期	93
3. 中世 - 調査 II 区の遺構と遺物 -	93
(1) II 区の掘立柱建物跡と溝	93
(2) 調査 II 区出土の瓦質土器について	96
(3) 瓦質土器の編年	96
i 釜	96
ii 鍋・播鉢	97
iii 風炉・火鉢・茶釜	99
(4) 出土遺物からみた木塚城跡との比較と今後の検討課題	99
補註	100
参考文献・調査報告書	101

挿図目次

図 1 いの町位置図	1
図 2 いの町道計画範囲図 (S:1/3,000)	2
図 3 遺跡位置図 (S:1/30,000)	6
図 4 天神溝田遺跡周辺の遺跡	8

図5	調査区位置図・グリッド設定図	12
図6	I区遺構配置図(S:1/100)	14
図7	I区調査区セクション図(S:1/80)	15
図8	I区SB配置図(S:1/100)	16
図9	I区SB1遺構図(S:1/100)・出土遺物(S:1/3)	17
図10	I区SB2遺構図(S:1/100)・出土遺物(S:1/3)	17
図11	I区SB3遺構図(S:1/100)	18
図12	I区SB4遺構図(S:1/100)・出土遺物(S:1/3)	18
図13	I区SB5遺構図(S:1/100)・出土遺物(S:1/3)	19
図14	I区SB6遺構図(S:1/100)・(S:1/40)・出土遺物(S:1/3)	20
図15	I区SB7遺構図(S:1/100)・出土遺物(S:1/3)	21
図16	I区SB8遺構図(S:1/100)	21
図17	I区SA1遺構図(S:1/100)	22
図18	I区SD遺構図(S:1/40)・出土遺物(S:1/3)	22
図19	I区SK1遺構図(S:1/40)・出土遺物(S:1/3)	23
図20	I区SK5遺構図(S:1/40)・出土遺物(S:1/3)	24
図21	I区SK6遺構図(S:1/40)・出土遺物(S:1/3)	24
図22	I区SK遺構図1(S:1/40)	25
図23	I区SK遺構図2(S:1/40)	26
図24	I区SK15遺構図(S:1/40)・出土遺物(S:1/3)	27
図25	I区下層遺構図(弥生時代)(S:1/20)(S:1/40)(S:1/300)	29
図26	I区SK19出土遺物1(S:1/4)	30
図27	I区SK19出土遺物2(S:1/3)(S:1/4)	31
図28	I区SX1遺構図(S:1/40)	32
図29	I区SX1出土遺物(S:1/3)(S:1/4)	33
図30	I区Pit遺構図(S:1/40)	34
図31	I区Pit出土遺物(S:1/3)(S:1/4)	35
図32	I区包含層出土遺物1(S:1/3)	37
図33	I区包含層出土遺物2(S:1/3)	38
図34	I区包含層出土遺物3(S:1/3)(S:1/4)	40
図35	II区遺構配置図(S:1/300)	42
図36	II-1区調査区セクション図(S:1/80)	43
図37	II-2・II-3区調査区セクション図(S:1/80)	44
図38	II区SB配置図(S:1/300)	46
図39	II-1区SB1遺構図(S:1/40)(S:1/100)	47
図40	II-1区SB3遺構図(S:1/100)	47
図41	II-1区SB2遺構図(S:1/40)(S:1/100)	48
図42	II-1区SB4遺構図(S:1/40)(S:1/100)	49

図43	Ⅱ - 2区SB1遺構図(S:1/40) (S:1/100)・出土遺物(S:1/3)	50
図44	Ⅱ - 1区SDセクション図(S:1/40)	51
図45	Ⅱ - 1区SK遺構図(S:1/40)	53
図46	Ⅱ - 2区SK遺構図(S:1/40)	54
図47	Ⅱ - 1区Pit 28遺構図(S:1/40)	55
図48	Ⅱ - 1区包含層出土遺物1 (S:1/3)	56
図49	Ⅱ - 1区包含層出土遺物2 (S:1/3)	57
図50	Ⅱ - 1区包含層出土遺物3 (S:1/3)	58
図51	Ⅱ - 1区包含層出土遺物4 (S:1/3)	60
図52	Ⅱ - 1区包含層出土遺物5 (S:1/3)	61
図53	Ⅱ - 3区包含層出土遺物6 (S:1/3) (S:1/4)	62
図54	I区SK19出土土器分類図1 (S:1/6)	90
図55	I区SK19出土土器分類図2 (S:1/6)	91
図56	推定条里ライン検出図(S:1/2,000)	92
図57	I・Ⅱ区全体出土遺物組成図	94
図58	I区出土遺物組成図	94
図59	I・Ⅱ区全体出土遺物器種別象徴図	95
図60	I区出土遺物器種別象徴図	95
図61	Ⅱ区出土瓦質土器分類図(S:1/4)	97
図62	土佐瓦質土器編年図(S:1/8)	98

遺物観察表目次

I 遺物観察表凡例	64
Ⅱ 遺構計測表凡例	64
遺物観察表1	65
遺物観察表2	66
遺物観察表3	67
遺物観察表4	68
遺物観察表5	69
遺物観察表6	70
遺物観察表7	71
遺物観察表8	72
遺物観察表9	73
遺物観察表10	74

遺構計測表目次

表1	I区遺構(SB)計測表	75
表2	I区遺構(SA)計測表	77
表3	I区遺構(SK)計測表	77
表4	I区遺構(SX)計測表	78
表5	I区遺構(Pit)計測表	79
表6	II-1区遺構(SB)計測表	86
表7	II-1区遺構(SK)計測表	87
表8	II-1区遺構(Pit)計測表	87
表9	II-2区遺構(SB)計測表	88
表10	II-2区遺構(Pit)計測表	88

写真図版目次

図版1	天神溝田遺跡全景(西より)	I区SD3遺物出土状態3
図版2	天神溝田遺跡全景(東より)	I区SD3遺物出土状態4
図版3	調査区遠景(北より)	I区SD3完掘状態
	調査区近景(北東より)	図版9
図版4	I区調査前風景(東より)	I区SK19遺物出土状態1(西より)
	I区遺構検出状態(西より)	I区SK19遺物出土状態2
図版5	I区遺構完掘状態(東より)	I区SK19遺物出土状態3
	I区遺構完掘状態(上空より)	I区SK18炭化物検出状態
図版6	I区西側下層遺構検出状態(南東より)	I区SX1完掘状態
	I区南壁セクション(北西より)	図版10
図版7	I区Ⅲ層石包丁出土状態	II-1区東側遺構検出状態(南東より)
	I区Pit 11青磁出土状態	II-1区遺構完掘状態(上空より)
	I区Pit 65柱痕検出状態	図版11
	I区Pit 147礎盤出土状態	II-1南壁セクション(北より)
	I区Ⅲ層土師器・須恵器出土状態	II-1区SD完掘状態(西より)
	I区Pit 136土錘出土状態	図版12
	I区Pit 88礎盤出土状態	II-1区SB完掘状態(西より)
	I区Pit 311礎盤出土状態	II-1区Pit 7礎盤出土状態
図版8	I区SD3遺物出土状態1(北より)	II-1区Pit 15礎盤出土状態
	I区SD3遺物出土状態2	II-1区Pit 28礎盤出土状態
		II-1区Pit 28柱痕完掘状態
		図版13
		II-1区Ⅲ層土錘出土状態
		II-1区Ⅲ層瓦質土器播鉢出土状態
		II-1区Ⅳ層土師質土器釜脚部出土状態

	II - 1区IV層青磁碗出土状態	図版24	I区SK19出土遺物
	II - 1区III層古瀬戸天目茶碗出土状態	図版25	I区SK19出土遺物(表面)
	II - 1区III層瓦質土器鍋出土状態		I区SK19出土遺物(裏面)
	II - 1区IV層土錘出土状態		I区SX1出土遺物(外面)
	II - 1区IV層鉄滓出土状態		I区SX1出土遺物(内面)
図版14	II - 1区IV層瓦質土器鍋出土状態	図版26	I区Pit出土土師器(外面)
	II - 1区IV層常滑焼広口壺出土状態		I区Pit出土土師器(内面)
	II - 1区SD22白磁碗出土状態	図版27	I区Pit出土須恵器・黒色土器・土師質土器(外面)
	II - 1区SD22砥石出土状態		I区Pit出土須恵器・黒色土器・土師質土器(内面)
	II - 1区IV層瓦質土器羽釜出土状態		
	II - 1区IV層砥石出土状態		
	II - 1区SD22瓦質土器挿鉢出土状態	図版28	I区Pit出土土師質土器(外面)
	II - 1区Pit 8土師質土器杯出土状態		I区Pit出土土師質土器(内面)
図版15	II - 1区C II - 21 - 7グリッドIV層遺物出土状態(西より)	図版29	I区Pit出土瓦器(外面)
			I区Pit出土瓦器(内面)
	II - 1区IV層瓦質土器挿鉢出土状態	図版30	I区Pit出土土師器・青磁・近世陶磁器・土錘・鉄滓・弥生土器(外面)
	II - 1区IV層常滑焼甕出土状態		I区Pit出土土師器・青磁・近世陶磁器・土錘・鉄滓・弥生土器(内面)
	II - 1区IV層瓦質土器鍋出土状態		
	II - 1区IV層須恵器捏鉢出土状態		
図版16	II - 2区遺構検出状態(西より)		I区包含層出土土師器
	II - 2区遺構完掘状態(上空より)	図版31	I区包含層出土土師器(外面)
図版17	II - 2区南壁セクション(北より)		I区包含層出土土師器(内面)
	II - 2区Pit 1礎盤出土状態	図版32	I区包含層出土土師器(外面)
	II - 2区Pit 3柱痕完掘状態		I区包含層出土土師器(内面)
	II - 2区SK1セクション	図版33	I区包含層出土土師器(外面)
	II - 2区SK2完掘状態		I区包含層出土土師器(内面)
図版18	II - 3区遺構完掘状態(東より)	図版34	I区包含層出土土師器(外面)
	II - 3区南壁セクション(北より)		I区包含層出土土師器(内面)
図版19	I区SB出土遺物(外面)	図版35	I区包含層出土土師器(外面)
	I区SB出土遺物(内面)		I区包含層出土土師器(内面)
図版20	I区SB出土遺物	図版36	I区包含層出土土師器(外面)
	I区SD3出土遺物		I区包含層出土土師器(内面)
図版21	I区SK出土遺物(外面)	図版37	I区包含層出土黒色土器(外面)
	I区SK出土遺物(内面)		I区包含層出土黒色土器(内面)
図版22	I区SK19出土遺物	図版38	I区包含層出土土師質土器(外面)
	I区SK19出土遺物(外面)		I区包含層出土土師質土器(内面)
	I区SK19出土遺物(内面)	図版39	I区包含層出土土師器・緑釉・瓦器・瓦質土器(外面)
図版23	I区SK19出土遺物		

- I 区包含層出土土師器・緑釉・瓦器・瓦質土器(内面)
- I 区包含層出土須恵器
- 図版40 I 区包含層出土須恵器(外面)
- I 区包含層出土須恵器(内面)
- 図版41 I 区包含層出土備前・天目・青磁(外面)
- I 区包含層出土備前・天目・青磁(内面)
- 図版42 I 区包含層出土青磁・陶磁器(外面)
- I 区包含層出土青磁・陶磁器(内面)
- I 区包含層出土土錘
- 図版43 I 区包含層出土鉄滓・砥石
- I 区包含層出土石包丁・弥生土器(外面)
- I 区包含層出土石包丁・弥生土器(内面)
- 図版44 II - 1区出土土師器・土師質土器(外面)
- II - 1区出土土師器・土師質土器(内面)
- 図版45 II - 1区出土須恵器(外面)
- II - 1区出土須恵器(内面)
- 図版46 II - 1区出土瓦質土器(外面)
- II - 1区出土瓦質土器(内面)
- 図版47 II - 1区出土瓦質土器(外面)
- II - 1区出土瓦質土器(内面)
- 図版48 II - 1区出土瓦質土器(外面)
- II - 1区出土瓦質土器(内面)
- 図版49 II - 1区出土瓦質土器・古瀬戸天目(外面)
- II - 1区出土瓦質土器・古瀬戸天目(内面)
- 図版50 II - 1区出土白磁・青磁(外面)
- II - 1区出土白磁・青磁(内面)
- 図版51 II - 1区出土須恵器・備前焼(外面)
- II - 1区出土須恵器・備前焼(内面)
- 図版52 II - 1区出土常滑焼(外面)
- II - 1区出土常滑焼(内面)
- 図版53 II - 1区出土備前・石鍋(外面)
- II - 1区出土備前・石鍋(内面)
- II - 1区出土土錘・砥石・鉄滓
- 図版54 II - 1区出土砥石
- II - 2区出土青花・II - 3区出土土錘・土師質土器・須恵器
- 図版55 II - 3区出土須恵器(外面)
- II - 3区出土須恵器(内面)
- 図版56 II - 3区出土須恵器
- II - 3区ユニット1出土弥生土器(外面)
- II - 3区ユニット1出土弥生土器(内面)

第 I 章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

天神溝田遺跡の所在するいの町は高知県中央部に位置し、東側は高知市に接する。平成16年に旧本川村、吾北村と合併し、仁淀川左岸上流域～中流域まで占める広域な町となった。いの町の南部に位置する中心部には、鉄道に並行して東西に国道33号線が通り、仁淀川橋たもとで、吾北・本川方面に向かう国道194号と分岐する。国道33号線は仁淀川橋をわたると、日高村、佐川町、越知町、仁淀川町と続き、愛媛県松山市に至る。これらの国道は高知県西部の主要国道であり、いの町は県都である高知市に隣接していることから交通の要衝となっており、いの町中心部の現国道は日常的な渋滞道路になっている。いの町内の渋滞緩和および路面冠水の解消、交通安全の確保などを目的として国土交通省の国道33号線のバイパスの計画があり、高知西バイパス建設工事が進められている。現国道に並行して計画されているバイパスは、いの町中心部の南部丘陵地を東西に通り仁淀川を架橋し、さらに対岸の日高方面に向けて新道路が建設される予定である。

いの町では、国土交通省の高知西バイパス建設に伴い、各区間のインターチェンジ周辺の町道を改良・整備する工事計画があり、天神溝田遺跡が立地する天神地区の現況町道を拡幅する工事計画が上がった。計画では、仁淀川左岸側の高知西バイパス天神インターチェンジへの乗り入れ線として、国道33号線から南北に抜ける町道中沢塔ノ向線が既に開通しており、南北のアクセス道路からインターチェンジへの乗り入れ線として宇治川に沿う町道を拡幅するというものであった。また、国土

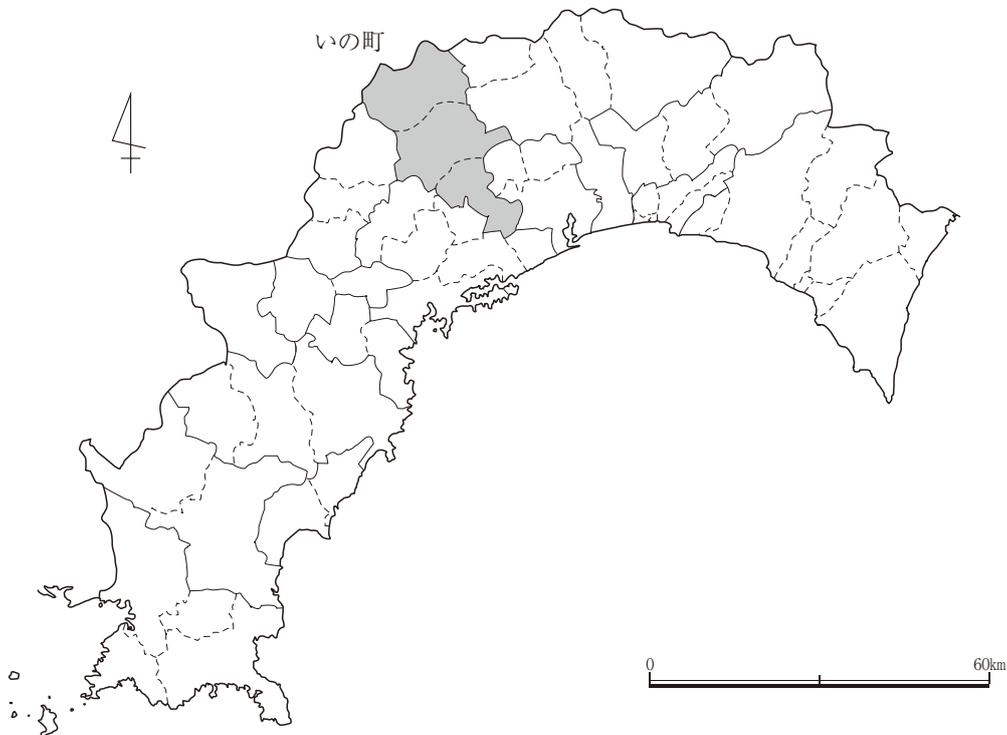


図1 いの町位置図

交通省の高知西バイパス建設工事に係る工事車両の通行には、現況町道では進入・通行が出来ないため、国土交通省からいの町に天神地区の町道改良工事を優先事業として対応するよう工事計画があげられた。天神溝田遺跡は、昭和36年に仁淀川支流の天神川(現・宇治川)の河川改修工事の際、弥生時代の銅剣と銅戈が偶然発見された事から弥生時代の遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地に指定された遺跡である。遺跡範囲としては、宇治川左岸の段丘の一部が指定され、現況は宅地・畑になっている。南側には宇治川に沿って東西に丘陵が連なり、天神溝田遺跡の南側丘陵上には中世の城館である音竹城跡が立地している。また、遺跡の西側に隣接して弥生時代後期の土器が出土した天神遺跡があり、いの町内の中でも遺跡が集中している地区である。

平成18年度に高知西バイパス建設工事に伴い、工事対象範囲が遺跡に隣接しているため南側丘陵裾部を中心に試掘確認調査を県教委から委託を受け埋蔵文化財センターが実施した。その結果、南側丘陵裾部分で古代から中世を中心とする遺構と遺物が確認されたため、天神溝田遺跡の範囲を丘陵裾まで広げた。さらに平成19年度には、県教委の派遣により、町道改良工事計画範囲の試掘調査が実施され、計画範囲の東端で古代から中世にかけて遺構が確認されたため、遺跡の広がりが広範囲に及ぶ事が明らかとなった。このため、事業主体者であるいの町と県教委で調整が図られ、町道改良工事部分について記録保存を目的とした本調査を実施することとなった。しかしながら、いの町には発掘調査に従事できる専門職員が配置されておらず、県教委・国土交通省土佐国道事務所・いの町で協議した結果、県教委の指導により、いの町から委託を受けた埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

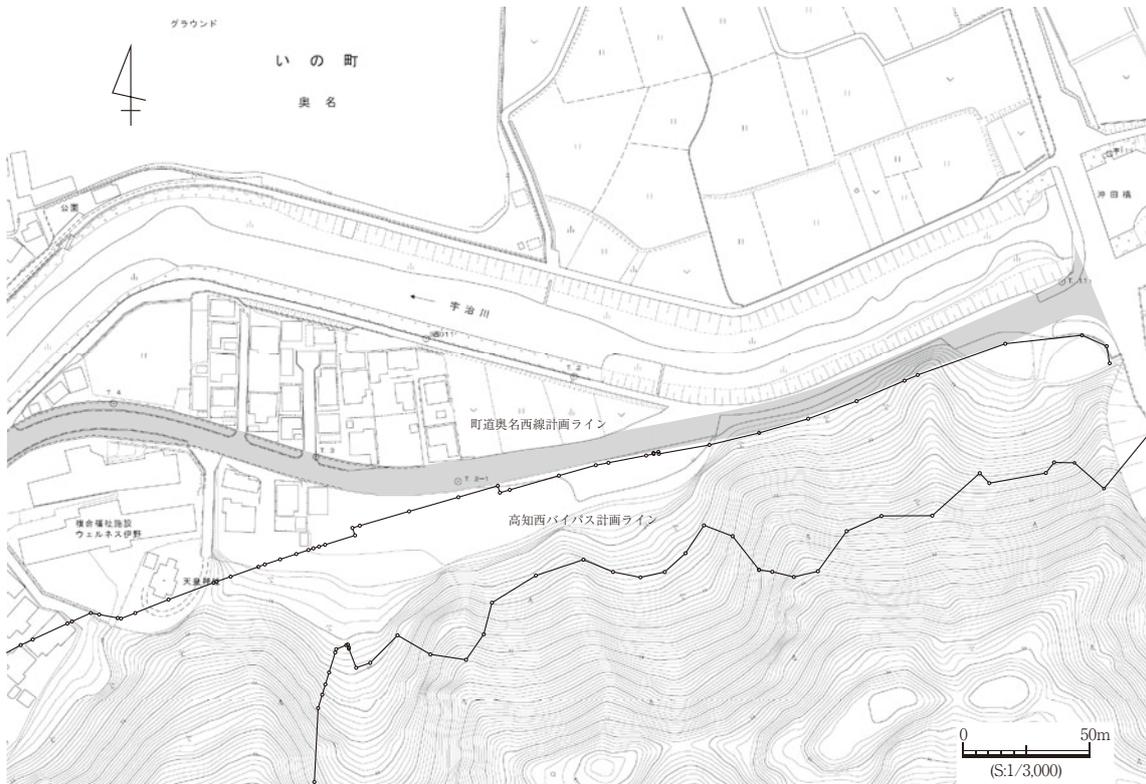


図2 いの町道計画範囲図

2. 調査の経過(調査日誌抄)

現況は、山林・宅地跡であり、現地の基準点測量・調査前の写真撮影・現場事務所の設置などの準備を行い、現地発掘調査は平成20年7月15日から開始し、同年10月31日まで実施した。

以下に経過を記す。

日誌抄(2008年7月3日～10月31日)

7.3(木) 調査前状況写真の撮影を行う。



7.9(水) 基準点設置を行う。

7.15(火) I区の竹伐採作業と調査区設定作業を行う。



7.16(水) I区重機及び人力による包含層掘削と、調査区設置状態の写真撮影を行う。

7.17(木) I区重機及び人力による包含層掘削と、遺構検出作業を行う。

7.23(水) 引き続きI区遺構検出作業を行う。土器集中出土地点の測量を行う。

8.1(金) I区上面遺構検出状態の写真撮影を行う。

8.4(月) I区上面遺構掘削を開始する。ピットを中心に掘削する。

8.11(月) I区遺構掘削・測量を行う。II区現況の住



宅基礎コンクリートなど除去作業を行う。

8.21(木) I区遺構掘削・測量を行う。II区現況道路の簡易舗装アスファルト除去・竹林伐採作業を行う。



8.22(金) I区遺構掘削、II区周辺安全柵設置。

8.25(月) I区遺構掘削・測量を行う。調査区南壁セクション・北壁セクション図作成。II区の調査区を設定する。

8.26(火) II区東部の竹林伐採を実施する。

8.27(水) I区上面遺構については完掘する。

8.28(木) I区上面遺構完掘状態の写真撮影を行う。航空写真測量を実施する。II-1区は重機により表土掘削を行う。



9.1(月) I区遺構測量及び下層遺構検出作業を開始する。

9.2(火) I区下層遺構検出状態の写真撮影後、下層遺構掘削を開始する。II-1区は包含層掘削及び遺構検出作業を行う。

9.3(水) I区下層遺構の測量、下層南壁セクションの図面作成。II-1区は遺構検出作業を行う。

9.8(月) II-1区東半部の遺構検出状態の写真撮影を行う。

- 9.9 (火) II-1区東半部の遺構掘削及び西半部の遺構検出作業を行う。



- 9.11 (木) II-1区東半部の遺構掘削を行う。
II-3区の調査区を設定し重機により表土掘削を行う。
- 9.12 (金) II-1区西半部の遺構検出を行う。
- 9.16 (火) 台風接近のため各調査区台風対策を行う。
- 9.24 (木) I区記者発表を行う。
- 9.25 (木) I区現地説明会準備。II-1区西半部遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 9.27 (土) I区現地説明会を行う。約120名の方が見学に来る。



- 9.29 (月) I区下層遺構(弥生面)検出作業を行う。
II-1区遺構掘削。



- 9.30 (火) 台風のため現場作業中止。
- 10.2 (木) I区下層遺構(弥生面)検出状態の写真撮影を行う。II-1区遺構掘削。
- 10.7 (火) I区下層弥生面の遺構掘削を行う。
II-1区は引続き遺構掘削を行う。調査区西部の拡張を重機により行う。

- 10.8 (水) I区下層西半部完掘状態の写真撮影を行う。西側は重機により拡張を行う。

- 10.9 (木) I区下層遺構調査を行う。II-1区遺構調査及び西拡張部の遺構検出を行う。



- 10.15 (水) I区南壁セクションの写真撮影を行う。
II-1区遺構調査を行う。
- 10.18 (土) I区下層遺構調査を終了する。
- 10.20 (月) II-1区西拡張部の遺構検出作業を行う。
II-2区重機による掘削及び基準点の設置を始める。
- 10.21 (火) II-1区西拡張部の遺構検出作業を行う。
II-2区重機及び人力による掘削を行う。
- 10.22 (水) II-1区西拡張部の遺構検出状態の写真撮影及び南壁セクション図面の作成を行う。
II-2区遺構検出状態の写真撮影を行う。



- 10.28 (火) II-1・2・3区遺構調査と航空写真測量前の清掃を行う。
- 10.29 (水) 航空写真測量を行う。II-1・2区遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 10.30 (木) II-1・2区遺構完掘状態の写真撮影を行う。
II-3区遺構検出状態と北壁セクションの写真撮影を行う。
- 10.31 (金) II-1・2・3区南壁セクション、II-3区東壁セクション及び完掘状態の写真撮影を行い、調査を終了する。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

天神溝田遺跡の所在する吾川郡いの町は、高知県の中央部に位置し、西は吾川郡仁淀川町・高岡郡越知町・高岡郡日高村に隣接し、北は土佐郡大川村・伊吹山(1502.8m)・寒風山(1763.0m)・笹ヶ峰(1859.5m)・平家平(1692.6m)を境に愛媛県と接する。南は土佐市、東は土佐郡土佐町と高知市に隣接している。昭和29年に4町村の合併で伊野町を成し、平成16年10月1日に北東部に位置する旧吾川村北部に位置する旧本川村が合併して、現在のいの町が成立した。面積470.71km²(平成17年10月1日現在)・人口27,068人(平成20年4月1日現在)を有している。北部は古生層からなる山岳地、とりわけ西日本最高峰の石鎚山から連なる高山を多く有することから、「四国のおてっぺん」と呼ばれている北部の本川地区は吉野川の源流域に位置する。南部には古生層からなる丘陵と、東西方向の標高15～20mの沖積層の低地がある。

いの町を流れる仁淀川は、流域面積1,560km²・流路は124kmを誇り、吉野川・四万十川に次ぐ四国第三の河川である。上流域は石鎚山に源を発する面河川と、分水嶺である久万川が合流して形成され、四国山地に深いV字谷を刻む。西から南西縁に沿って蛇行しながら南東に流れたのち、町の中心部をなす南東部の中央を南流し、やがて土佐市を経て土佐湾に注ぐ。上流域には大渡ダムをはじめ、治水・電源開発のための施設も多く、水辺利用率全国1位(2002年)であり、水質は全国4位(1999年)に位置付けられている。全体として仁淀川およびその支流である上八川川・小川川・宇治川・勝賀瀬川・早稲川・奥名川などの河谷や低地に集落が立地する。暖温帯の照葉樹林に町域のほとんどが覆われているが、北部山地の高所は冷温帯でブナ・ミズナラなどの落葉樹林をみる。冬は穏和清明で、かつて製紙の天日乾燥に役立ったが、夏の台風による豪雨は古来しばしば洪水の害をもたらした。特に増水した仁淀川本流が南部低地に逆流して滞水の害を与え、また北部山地では山腹斜面や溪谷の崩壊などの被害が起こる。現在、いの町中心部を流れる宇治川では放水路など、改修工事に伴い、以前のような洪水被害は減少傾向になっている。

産業は南部の平坦地では施設園芸と果樹栽培が中心となっており、中部では生姜を特産としている。工業では、江戸期以来土佐紙の生産で知られており、豊富な水源と町木にも指定されている原料となる三椏の産地にも恵まれ、印刷業や製紙業が盛んである。

交通面では、南部を東西にJR土讃線・土佐電気鉄道が走り、鉄道に並行して高知市に通じる国道33号線が通る。また、仁淀川橋のたもとで国道33号線が分岐し、仁淀川に沿って国道194号線が北西に延びる。そして国道194号線と交差する形で国道439号線が東西に横断しており、国道32号線とを結ぶ主要な幹線道路として整備が進められている。平成11年には、国道194号線の新寒風山トンネルが開通したことにより、高知県の北玄関として愛媛県西条市と結んでおり、交通の要所となっている。

2. 歴史的環境

吾川郡いの町の歴史は、縄文時代まで遡る。宇治川左岸の奥名遺跡から縄文時代中期中葉の船元ⅢA式土器が発見された。同じく大デキ遺跡の水田中から、排水工事の際に縄文晩期の磨製石斧が発見された。また八田神母谷遺跡からは縄文時代後期中葉の伊吹町式土器が発見され、晩期の自然

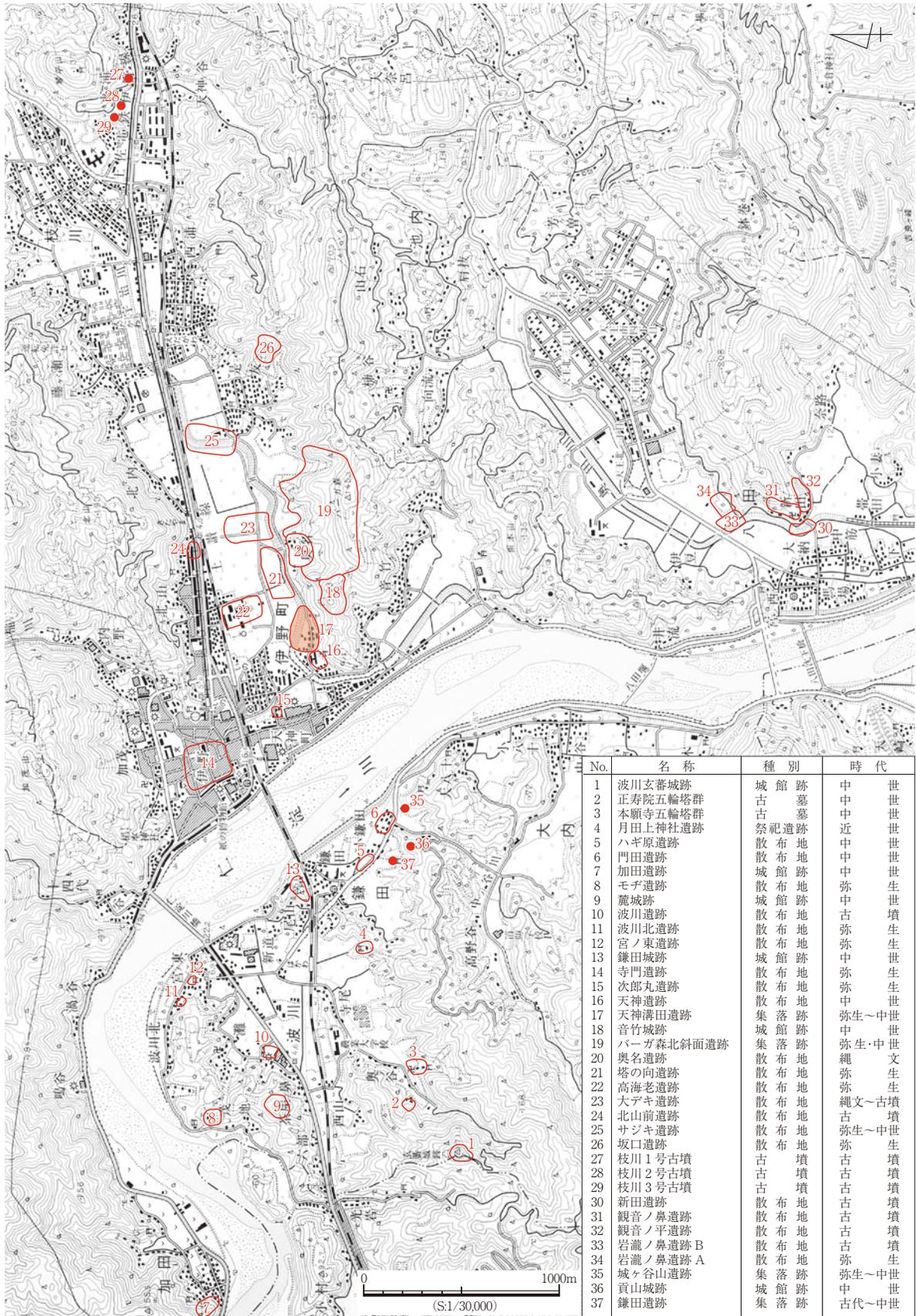


図3 遺跡位置図

流路やピットが検出されたことにはじまり、以降採集経済を基盤とした縄文時代からの生活の営みの一端が伺える。

八田神母谷遺跡からは弥生時代前期の遺物も多く確認される。縄文時代的要素を多分に残す深鉢や浅鉢などの遺物が出土し、周辺部に位置する仁淀川流域の動向を伺うことができる。

弥生時代中期には、土佐に稲作が伝わり根を下ろした段階である。中期中葉には、大デキ遺跡から弥生土器の甕形口縁部が発見され、大デキ遺跡から東へ500m移動したサジキ遺跡からは石包丁が出土している。同時期の遺物として岩瀧ノ鼻遺跡Aから中細形銅剣が出土している。

中期後半になると、バーガ森北斜面遺跡からは石包丁及び竪穴住居跡が3棟発見され、高地性集落の存在も確認された。出土する土器は神西式土器として広く西南四国を中心に分布するタイプで、凹線文を伴うものが多く出土している。バーガ森北斜面遺跡については、昭和32年(1957年)に発見された遺跡であり、奥名・三世庵・岩神地区と大きく三地点に集落の分布が見られ、昭和49年(1974年)・昭和51年(1976年)には学術調査が行われ、町指定文化財になっている。平成11年(2001年)には、伊野町基幹農道整備事業に伴い、記録保存を目的とした発掘調査が行われ、弥生時代中期末の竪穴住居跡、段上遺構などが検出され、弥生時代中期末～後期前半を中心とした土器・石器が出土した。弥生時代後期になるとそのほとんどが低地性遺跡の様相を呈するが、後期初頭の鷹ノ巣山遺跡はいの町北部標高1,150mの越裏門地区に所在する遺跡であり、低地で見られるような遺跡とは性格が異なる。発見された土器はすべて甕形土器の焼成直後のものであって、周辺部には洞窟もなく狩屋としての性格を示している。他には後期前半の寺門遺跡や後期後半の天神溝田遺跡が仁淀川流域の低地に存在する。寺門遺跡からは壺・甕・高杯などが出土し、天神溝田遺跡からは土器のほかに中細形銅剣と中広形銅戈などが出土している。天神溝田遺跡は宇治川の改修工事中に偶然発見された遺跡であり、発見された銅剣と銅戈は町指定文化財になっている。

古墳時代に入ると、弥生時代に確立された農村社会が発展し墳墓の形成を始める。いの町では前期～中期の古墳は確認されていないが、周辺部の西分増井遺跡(高知市春野町)では弥生時代後期後半～古墳前期にかけての拠点集落が成立をする。また、岩瀧ノ鼻遺跡Bから古墳時代中期の馬場末式土器とともに鉄斧が出土している。古墳時代後期において、枝川古墳群と八田古墳がある。枝川古墳群からは3基の横穴式石室を持つ後期古墳が確認される。3基とも円墳であり、須恵器・玉類・硝子環・銀環・鉄刀子・大刀鞘が出土した。

律令期に入り、郡郷制が施行される頃のいの町の大半は吾川郡大野郷に属していたと思われる。当初吾川郡は8郷からなり、仁淀川の両岸に拡大したが、承和8年(841年)に折半された。西岸の波川付近は高岡郡吾川郷に、南部の八田地区を吾川郡桑原郷に入れる説もある。なお東部の枝川地区、池内地区は土佐郡朝倉郷に属したとみられる。大野郷は天平勝宝4年(752年)東大寺の封戸となっており、大野郷の貢納は国司を経て納められ、以後古代を通じて封郷であった。

文治元年(1185年)、源頼朝の守護・地頭設置により、吾川郡は京都六条若宮八幡の別当秀巖の所領とされた。吾川郡のうち、大野郷・仲村郷は室町期以後、六条若宮八幡を管轄する京都醍醐寺三宝院門跡の所領となった。仁淀川流域右岸の天崎遺跡(土佐市高岡乙)から鎌倉時代中頃(13c中葉)以降に埋納されたと思われる中広形銅矛4本が出土した。また、いの町サジキ遺跡からは和鏡の籐花双雀鏡と瓦器椀が出土している。青銅器にまつわる祭祀儀礼の風習がこの頃に垣間見られる。また、室町期には天神溝田遺跡周辺に音竹城が設けられており、古備前焼の壺破片や明染付皿破片など表採

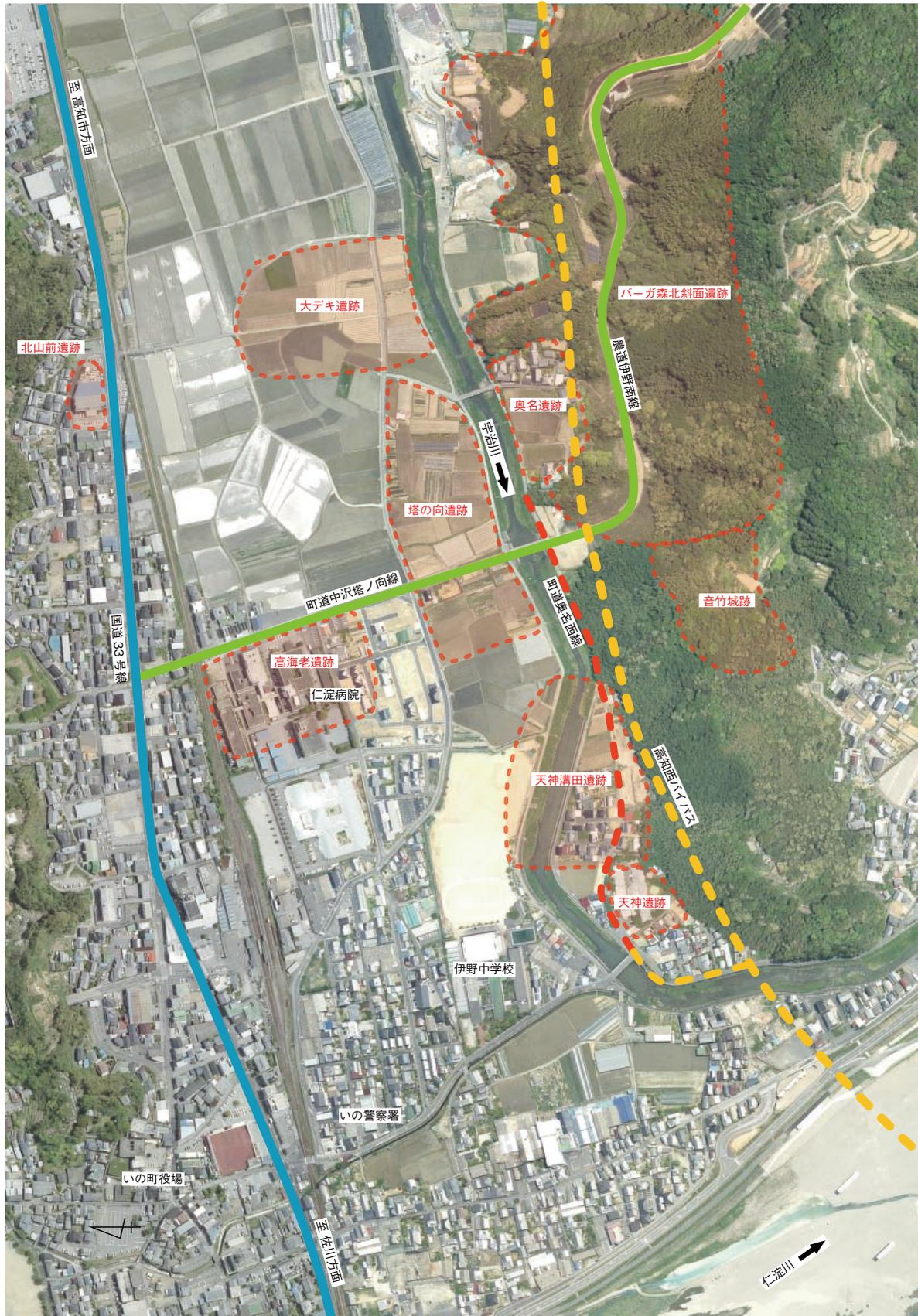


図4 天神溝田遺跡周辺の遺跡

されている。音竹城は山頂部に平場と堀切を中心とする遺構が明瞭に残っており、尾根伝いには、朝倉城跡にもつながっており、今後その関連性も注目される。

波川城跡はいの町波川西南、高岡郡日高村との境である城床に位置する。昭和48年に本丸の一部の調査が行われ、5×2間の建物の礎石群が検出された。波川城跡は波川小研城とも称され、現在は波川玄蕃城ともいわれる。波川玄蕃清宗は蘇我氏を名乗ることから、蘇我神社を氏神として中世に勢力を伸ばした土豪と考えられる。戦国末期の頃には波川・鎌田・大内の地を領している。波川玄蕃清宗は長宗我部元親の高岡郡侵略に際して降伏し、後に元親の妹を妻として姻戚関係を結んだ。一族は天正8年(1580年)に鎌田城で滅ぼされ、玄蕃の妻はその後に養甫尼と称し、成山村に所領を与えられ成山御用紙の開祖となった。

江戸時代初期には、野中兼山により仁淀川上流域に八田堰及び鎌田堰が設けられた。慶安元年(1648年)に仁淀川東岸を開拓するために八田堰を、万治2年(1659年)に西岸を開拓するために鎌田堰築造を開始し、川沿いの諸村の物資移送と吾川郡南部や高岡平野の灌漑のために築かれた。仁淀川左岸には八田堰から導水され弘岡井筋が構築された。井筋は諸木井筋・川窪井筋・南川井筋・北川井筋など多くの分流を形成し、吾川南部の畑地854ha余を灌漑し、内505ha余を新田とした。現在でも灌漑機能によって県下最大の農業地帯となっている。森山村新川には新川閘が設けられ新川川と接続し、東流して長浜川(新川川)を経て浦戸湾へ注ぐようになる。また新川は物資の中継地となり在郷町になった。仁淀川上流域の物資はそれまで仁淀川河口から土佐湾を経て、浦戸湾を通じて高知城下へ運ばれていたが、内陸水路の確立により、より多くの木材物資が城下へ運ばれ、城下の物資も仁淀川上流域へ運ばれるようになった。鎌田堰は八田堰の上流2kmに位置し、長さ540m・幅18m・高さ12.6mを築いた。中央部には長さ7m・幅5mの凹字形をした筏越を松・クスの巨材を用い設けた。堰き止めた用水は鎌田閘(長さ16m・幅2.7m・高さ3.6m)から鎌田井筋へ流れる。井筋は深さ2.7～3m・幅2.7mを測り、大内・高岡・中島を経て新居に入り、再び仁淀川へ入る。全長は約12kmである。

このように仁淀川を中心とした平野部には数多くの遺跡があり、各時代の変遷を追うことができる。流域の結節点ともいえるいの町は、仁淀川の利水により古来から栄えてきた地域であり、水運を利用した物資の流通や他地域からの往来をうかがうことができる。今回の天神溝田遺跡発掘調査は、道路開発に伴う調査であり、いの町中心部の様相を知ることができた。また、今回の調査地点を含めて国土交通省が計画している高知西バイパス建設に伴い、周辺部の遺跡の発掘調査が行われている。平成19年度には、対岸の仁淀川右岸にあたる鎌田地区で、バイパス橋梁工事に伴い城ヶ谷山遺跡の発掘調査が行われている。この調査では平安時代から室町時代前期を中心とする遺構と遺物が確認された。城ヶ谷山遺跡は未発見の遺跡であったが、古代～中世にかけての様相が新たに明らかとなった。また、平成20年度には城ヶ谷山遺跡に隣接して、貢山城跡と鎌田遺跡の発掘調査が行われている。両遺跡とも高知西バイパス建設に伴う試掘調査で発見された遺跡であり、貢山城跡では山頂部の平場と堀切が確認された。前述した波川城跡や、対岸の音竹城跡との関連を知る上で貴重である。貢山城跡西麓に位置する鎌田遺跡では、平安時代末～南北朝期にかけての遺構と遺物が確認されている。貢山城跡では遺物は僅少であったが、検出した堀切の形態及び山麓の鎌田遺跡、城ヶ谷山遺跡の出土遺物などから初現は南北朝期頃と推定されている。また、城ヶ谷山遺跡の出土遺物の中には古代京都産緑釉陶器や黒色土器など畿内からの搬入品や、中世では中国で焼かれた青磁など貿易陶磁器の出土が見られ、仁淀川を介した物資の流通をうかがうことができる。

また、西バイパス建設に伴い周辺地域の遺跡の調査が予定されており、より詳細な状況、歴史的解释に向けての成果が今後の調査に期待されている。

参考文献

- 『伊野町史』 伊野町 1973
- 『高知県史 考古編』 高知県 1968
- 『伏原大塚古墳』 土佐山田町教育委員会 1993
- 『高知県遺跡地図』 高知県教育委員会 1998
- 『高知の研究1 地質・考古編』 清文堂 1983
- 『高知の研究2 古代・中世編』 清文堂 1982
- 『日本の古代遺跡39高知』 保育社 1989
- 『高知県の地質』 高知市民図書館 1969
- 『八田神母谷遺跡』 (財)高知県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第32集 1998
- 『八田奈呂遺跡Ⅰ』 (財)高知県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第38集 1999
- 『八田奈呂遺跡Ⅱ』 (財)高知県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第51集 2000
- 『天崎遺跡』 (財)高知県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第39集 1999
- 『バーガ森北斜面遺跡』 伊野町教育委員会 伊野町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 1999
- 『バーガ森北斜面遺跡Ⅱ』 伊野町教育委員会 伊野町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 2001
- 『高知県の地名 日本歴史地名大系40』 平凡社 1983
- 『角川 日本地名大辞典 39高知』 角川書店 1986
- 『高知県土木史』 社団法人高知県建設業協会 1998
- 『日本城郭大系15香川、徳島、高知』 新人物往来社 1979
- 『平成18年度高知西バイパス建設に伴う鎌田・天神地区試掘調査概要報告書』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2006
- 『平成19年度高知西バイパス建設に伴う城ヶ谷山発掘調査概要報告書』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2007
- 『平成20年度高知西バイパス建設に伴う貢山城跡・鎌田遺跡発掘調査概要報告書』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2008

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法

調査対象地は丘陵裾に位置しており、現地標高14.7～15.4mを測る。現況は、山林・宅地跡である。平成19年度の町道改良工事に伴う事前の試掘調査で、古代～中世にかけての遺構と遺物が確認されたTR5を中心に、丘陵裾に開けた谷部を調査Ⅰ区として設定し、平成18年度に実施した国土交通省の高知西バイパス建設に伴う試掘確認調査で、遺構と遺物が確認された対象地西部全体をⅡ区として調査区を二箇所に分けた。調査のために必要な基準点を委託により調査対象地周辺に配点・設置した。調査には公共座標世界測地形を使用し、各調査区にグリッドを設定した。遺構の測量については、遺構測量システムを使用し、平面図を測量した。土層断面図・出土状況図については、縮尺1/10・1/20で随時測量を行った。各調査区の遺構完掘後、調査区全体の平面図については航空写真測量を実施した。

2. 各調査区の概要

(1) Ⅰ区

調査Ⅰ区は当初竹林であり、調査対象地の一部には排土が置かれており、これらの伐採・移動を行った。竹伐採は人力で行ったが、現町道に隣接しており、道路側に伐採樹木が倒れないようにロープで牽引し、車両通行に注意を払いながら行った。斜面傾斜地であり、包含層が複数面にわたることから、上面遺構の検出は2回に分けて実施した。さらに、下層確認により弥生時代の遺構が検出されたため、調査区を面的に精査を行った。調査面積は述べ768㎡(256㎡×3面)である。

(2) Ⅱ区

調査Ⅱ区は、Ⅰ区から丘陵を挟み西側にあたる。現況は宅地跡・荒地になっている。宅地部分は家屋の基礎であるコンクリートなどが残っており、重機により除去する作業を実施した。Ⅱ区は、高知西バイパス建設に伴う試掘調査で古代～中世にかけての遺構と遺物が確認されており、遺構及び包含層の拡がりや想定される範囲について調査区を設定した。調査対象地が広範囲に及ぶため、試掘調査で遺構・遺物が確認されたトレンチ周辺に東側からⅡ-1区・Ⅱ-2区・Ⅱ-3区と小調査区を付し発掘調査を実施した。町道道路改良工事計画は東側から着手予定のため、Ⅱ-1区から調査を実施した。調査区中央部は谷開口部にあたり、谷部からの堆積層には中世の遺物が認められた。調査区西部は、遺構・遺物も稀薄になる。調査面積は420㎡である。Ⅱ-2区は、Ⅱ-1区と同様の堆積が認められ、包含層が確認されたが遺物量は僅少である。中世の掘立柱建物跡を検出した。調査面積は110㎡である。Ⅱ-3区は、Ⅱ区西部の谷部にあたる。調査区南側谷部からの地下水の影響により還元された箇所も認められる。弥生時代～古墳時代にかけての包含層及び弥生時代終末～古墳時代にかけての炉跡状の遺構を検出した。調査面積は127㎡である。また、Ⅰ区とⅡ区の丘陵地部分については、試掘調査が行われておらず、様相が不明であったため、Ⅱ区の東側丘陵裾のやや開けた平坦部分を試掘し予備調査を行ったが、現表土下は地山であり、削平の影響を受けており、調査の対象外とした。

発掘調査は7月15日から10月31日まで行い、最終調査面積は全体で1,425㎡であった。

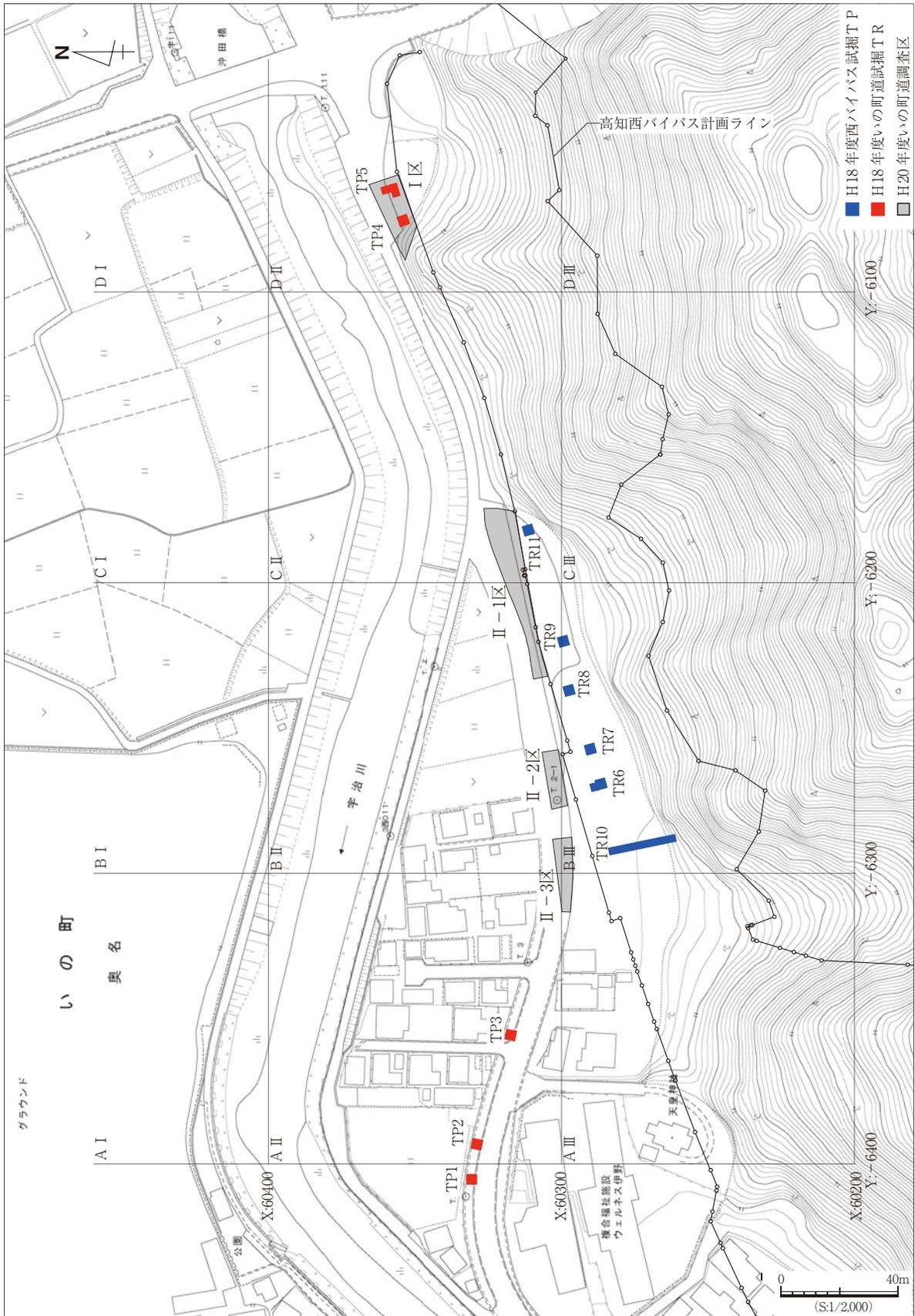


図5 調査区位置図・グリッド設定図

第Ⅳ章 調査の成果

1. 調査Ⅰ区の概要と成果

(1) 調査区の概要

Ⅰ区は、現地標高14.5m前後を測る丘陵裾谷部に位置する。調査区の東側の丘陵は、現況町道の工事の際、地山が削られており、試掘トレンチTR5を中心に谷部に形成された平地部分を調査区とした。地表下30～50cmで古代の包含層(Ⅲ～Ⅵ層)が確認されたため、人力により包含層掘削・遺構検出を行った。斜面傾斜地であり、包含層が複数面にわたることから、上面の古代遺構検出は2回に分けて実施した。さらに、下層確認により弥生時代の遺構が検出された。調査区北部は宇治川が流れているが、宇治川が形成する微高地と、南部丘陵裾部に調査区は立地する。

(2) 基本層序(図7)

調査Ⅰ区の基本層序は以下のとおりである。基本的に粘土質シルトから粘土が堆積しており、丘陵部からの流れ込み堆積と、宇治川の河川堆積によるものと考えられる。堆積は、調査区の北東方向に向けて厚く堆積が認められる。

I:表土(一部近現代の盛土)

II:オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質シルト(ϕ 0.5～1cmの礫を含む。丘陵部からの堆積層)

III:暗褐色(10YR3/3)砂質シルト(ϕ 0.5～1cmの礫を含む。丘陵部からの堆積層)

IV:黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト(ϕ 3～5mmの礫を少量含む。古代遺物包含層)

V:黄褐色(2.5YR5/3)砂質シルト(ϕ 1～3mmの礫を多く含む。)

VI-1:にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土質シルト(ϕ 0.5～1cmの礫を含む。古代遺物包含層)

VI-2:黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト(ϕ 3～5mmの礫を含む。古代遺物包含層)氾濫原堆積

VI-3:黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルトに暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土(ϕ 3～5mmの礫を含む。)が混じる。

(氾濫原堆積。古代遺物包含層)

VII:にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土(ϕ 0.5～2cmの礫を含む。)

VIII:暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土(炭化物を含む。弥生時代遺物包含層)

IX:暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土(ϕ 0.5～1cmの礫を多く含む。弥生時代後期遺構検出面)

現表土は、後世の畑などの開墾の影響を受けていた。また、谷部一帯が竹林であり、樹木の根による攪乱が著しい。Ⅱ層からは近世の遺物が僅少量出土が見られた。Ⅲ～Ⅵ層が古代の遺物包含層であり、8世紀後半～12世紀代にかけての遺物が連綿と出土した。古代～中世にかけての遺構はⅣ層上面・Ⅵ層上面・Ⅶ層上面で検出した。標高14.3～14.6mを測る。また、弥生時代の遺構検出面はⅨ層上面である。標高13.9mを測る。Ⅸ層以下はシルト質粘土が厚く堆積しており、標高12mまで確認したが遺物包含層は確認できなかった。

(3) 検出遺構

Ⅰ区では、掘立柱建物跡(SB) 8棟・柵列(SA) 1条・溝(SD) 7条・土坑(SK) 17基・ピット(Pit) 450個・性格不明遺構(SX) 4基を検出した。これらの遺構は複数時期にまたがり、概ね奈良時代末～平安時代にかけての遺構である。遺構の中心はピットであり、柱痕・礎盤を伴うものも見られた。掘立柱建

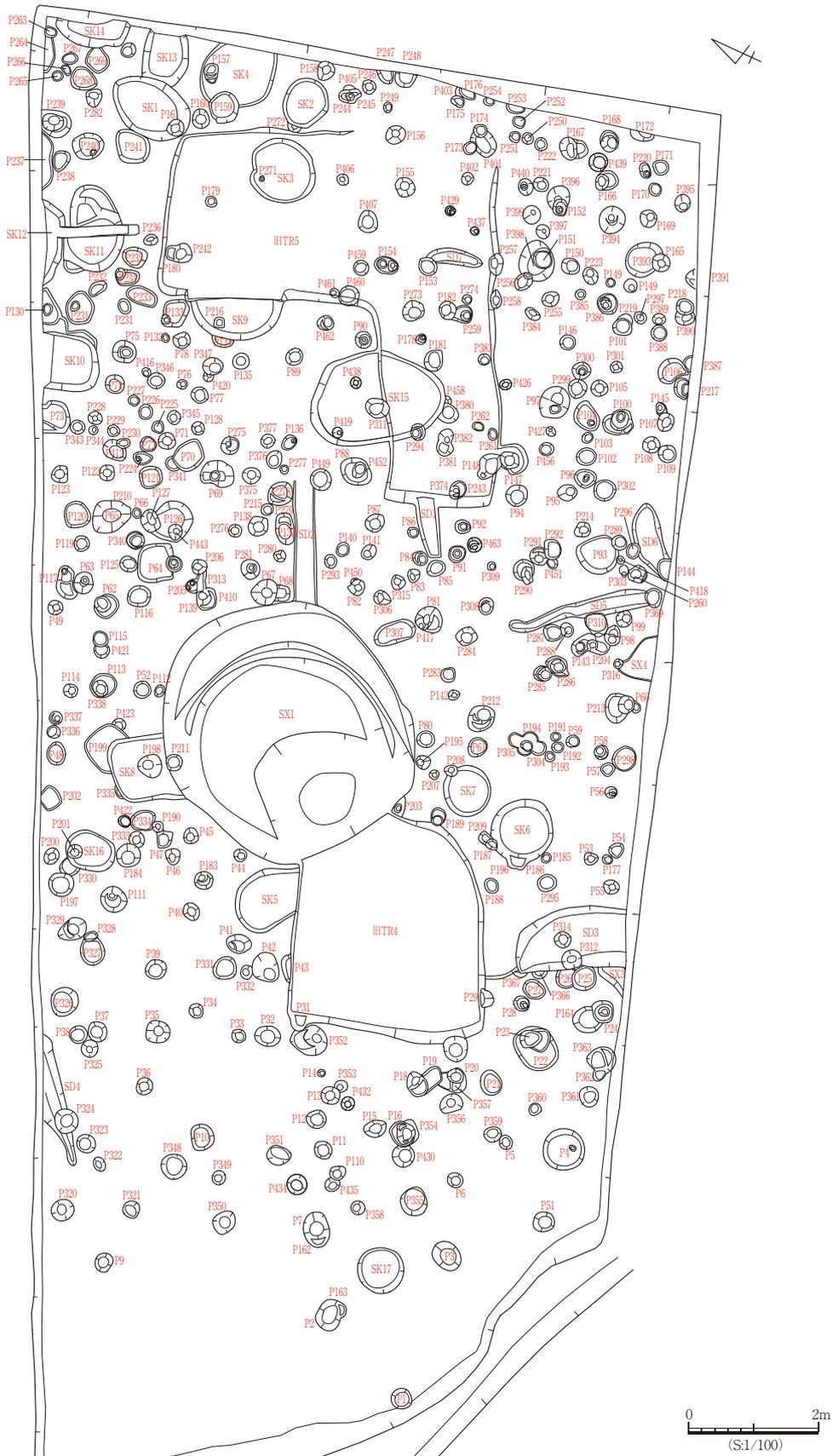


図6 I区 遺構配置図

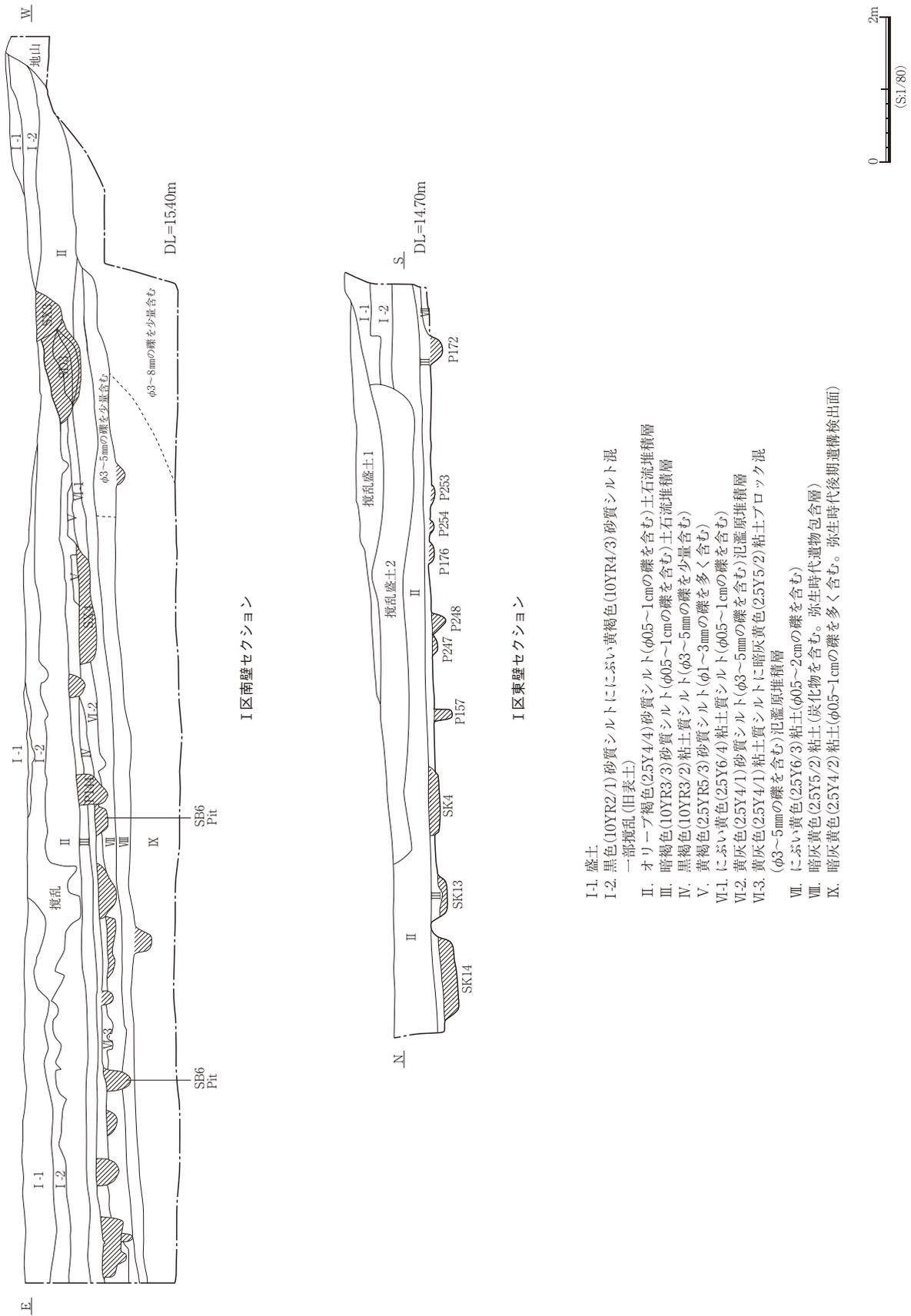


図7 I 区 調査区セクション図

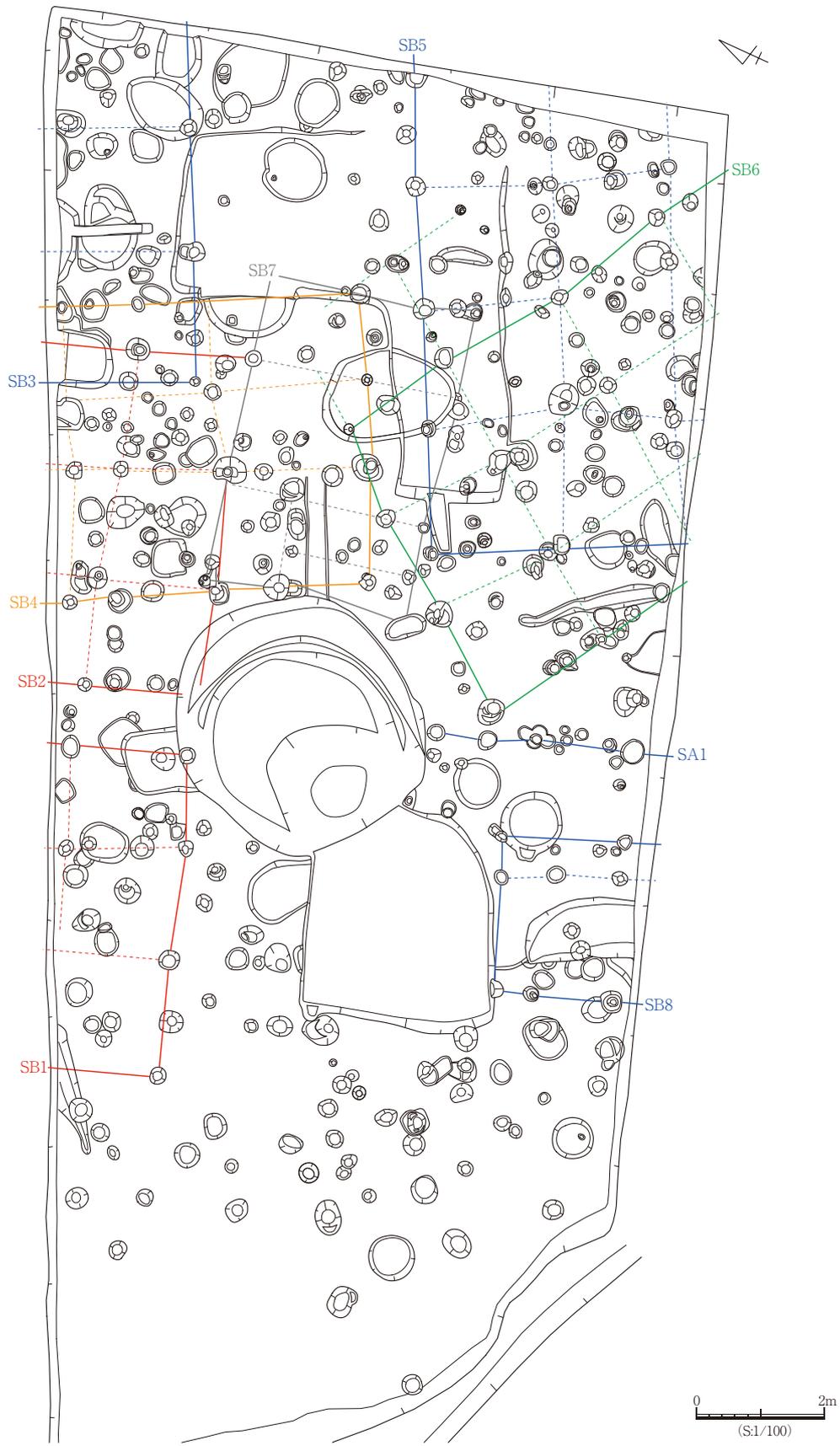


図8 I区 SB配置図

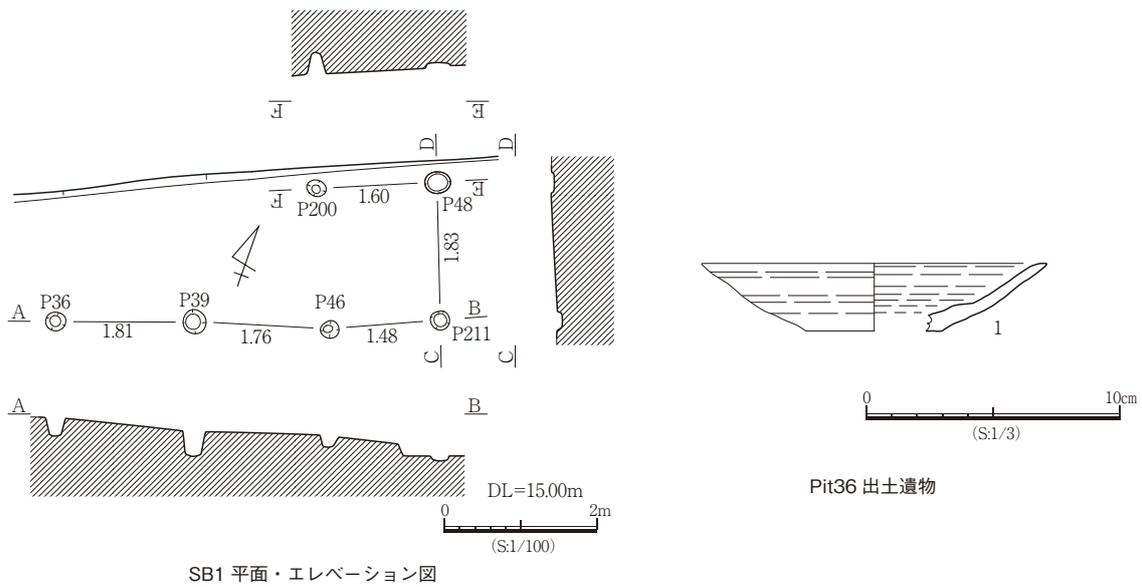


図9 I区 SB1遺構図・出土遺物

物についてはピットの切り合いが著しく、プラン検出は困難を極めた。また、下層では弥生時代後期中葉に位置づけられる土坑を2基検出した。各遺構ごとに記述する。

i 掘立柱建物跡

SB1 (図9)

調査区北端DⅡ-12-1グリッドで検出した桁行3間×梁行1間以上の東西棟建物跡である。棟方向はN-70°-Eを指し、梁桁方向は調査区外に延びる。検出規模は、桁行5.05m、梁行1.83mであり、柱間寸法は桁1.48～1.81m、梁1.83mを測る。検出面積は9.24㎡である。柱穴の形状は円形及び楕円形で、直径0.20～0.33m、深さ6.6～32.5cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、P36からは土師質土器杯片(No.1)が出土した。焼成は良好で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転糸切りによる。他にP46・48から土師器細片9点が出土した。

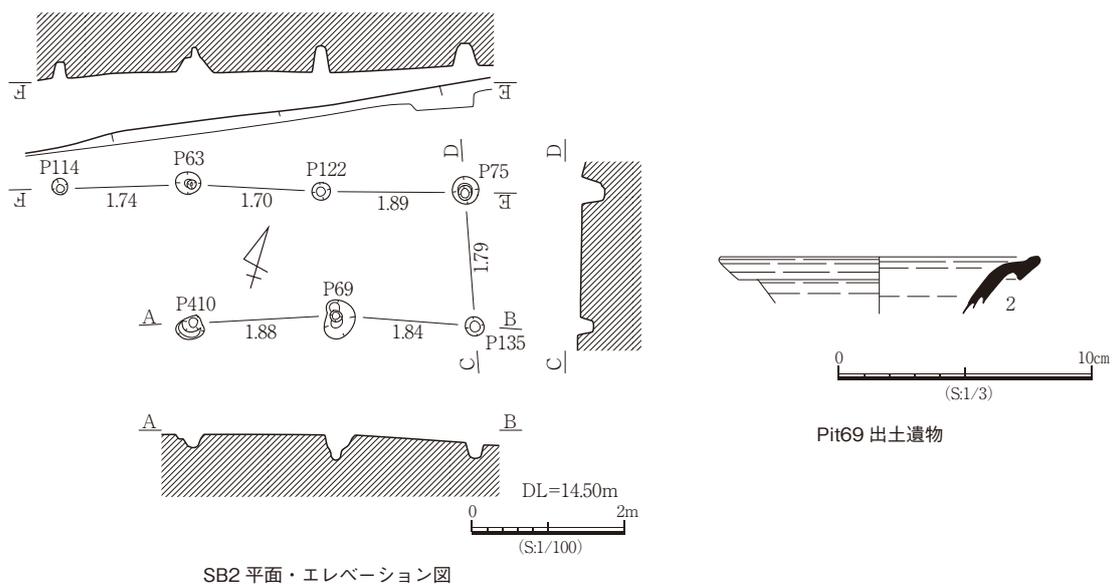
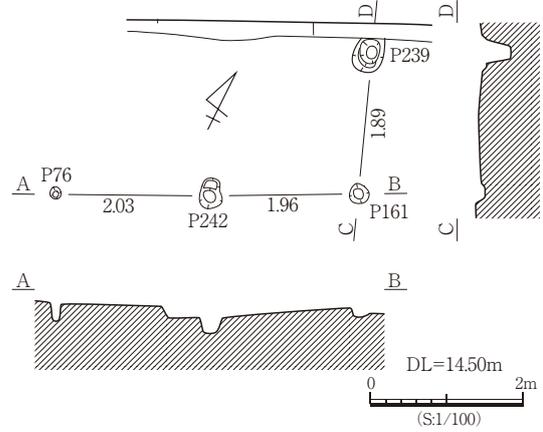


図10 I区 SB2遺構図・出土遺物

SB2 (図10)

調査区北端DⅡ-7-23グリッドで検出した桁行2間×梁行1間以上のSB1に隣接する東西棟建物跡である。棟方向はN-64°-Eを指し、梁桁方向は調査区外に延びる。検出規模は、桁行5.33m、梁行1.79mであり、柱間寸法は桁1.70～1.89m、梁1.79mを測る。検出面積は9.54㎡である。柱穴の形状は円形及び楕円形で、直径0.21～0.52m、深さ20.0～35.1cmを測る。P410はP139に切られ、P139下面で検出された。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、P69から須恵器壺の口縁部片(No.2)が出土した。口縁部は外反し、端部は上下に拡張され面を成す。他に土師器甕口縁部片3点・瓦質土器2点・土師器細片12点が出土し、その他のピットからは土師器細片14点・須恵器1点が出土した。

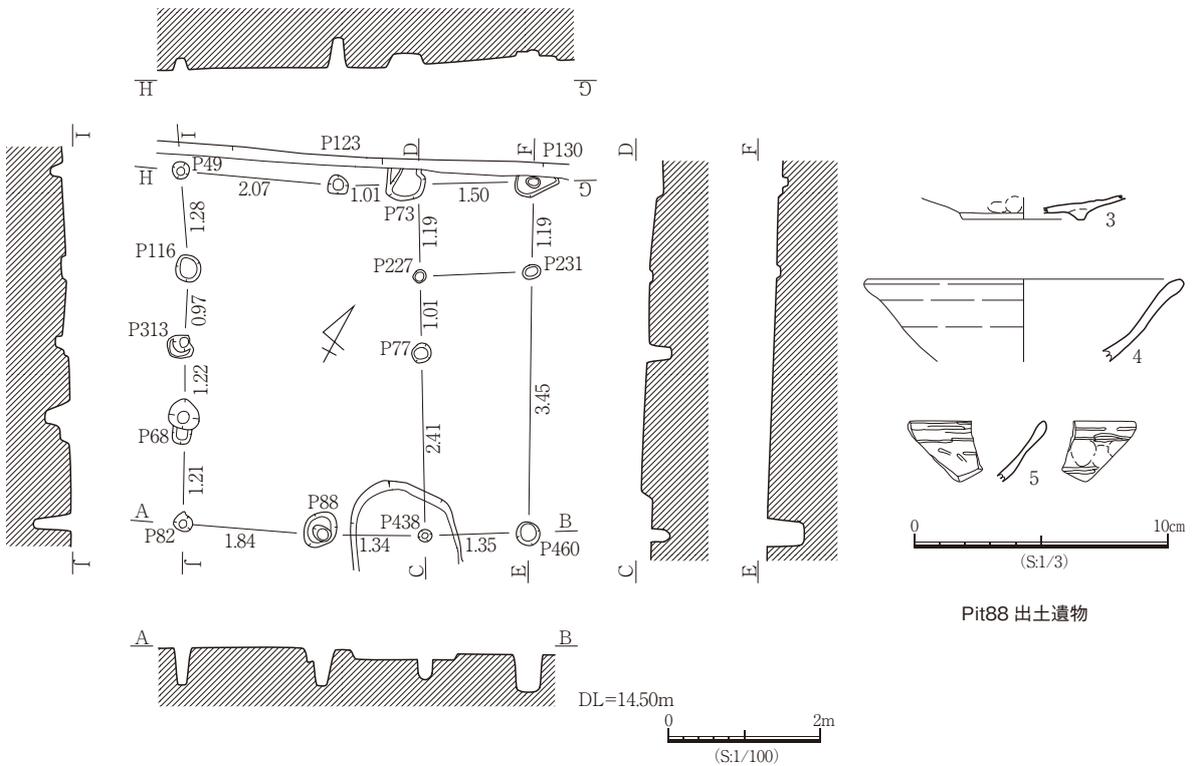


SB3 平面・エレベーション図

SB3 (図11)

調査区北東端DⅡ-7-24グリッドで検出した桁行2間×梁行1間以上の東西棟建物跡である。棟方向はN-64°-Eを指し、梁桁方向は調査区外に延びる。検出規模は、桁行3.99m、梁行1.89mであり、柱間寸法は桁1.96～2.03m、梁1.89mを測る。検出面積は7.54㎡である。柱穴の形状は円形及び楕円形で、直径0.14～0.41m、深さ12.1～38.9cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、P239から瓦器椀・土師器甕・土師器の細片が4点、P242からは黒

図11 I区 SB3遺構図



SB4 平面・エレベーション図

Pit88 出土遺物

図12 I区 SB4遺構図・出土遺物

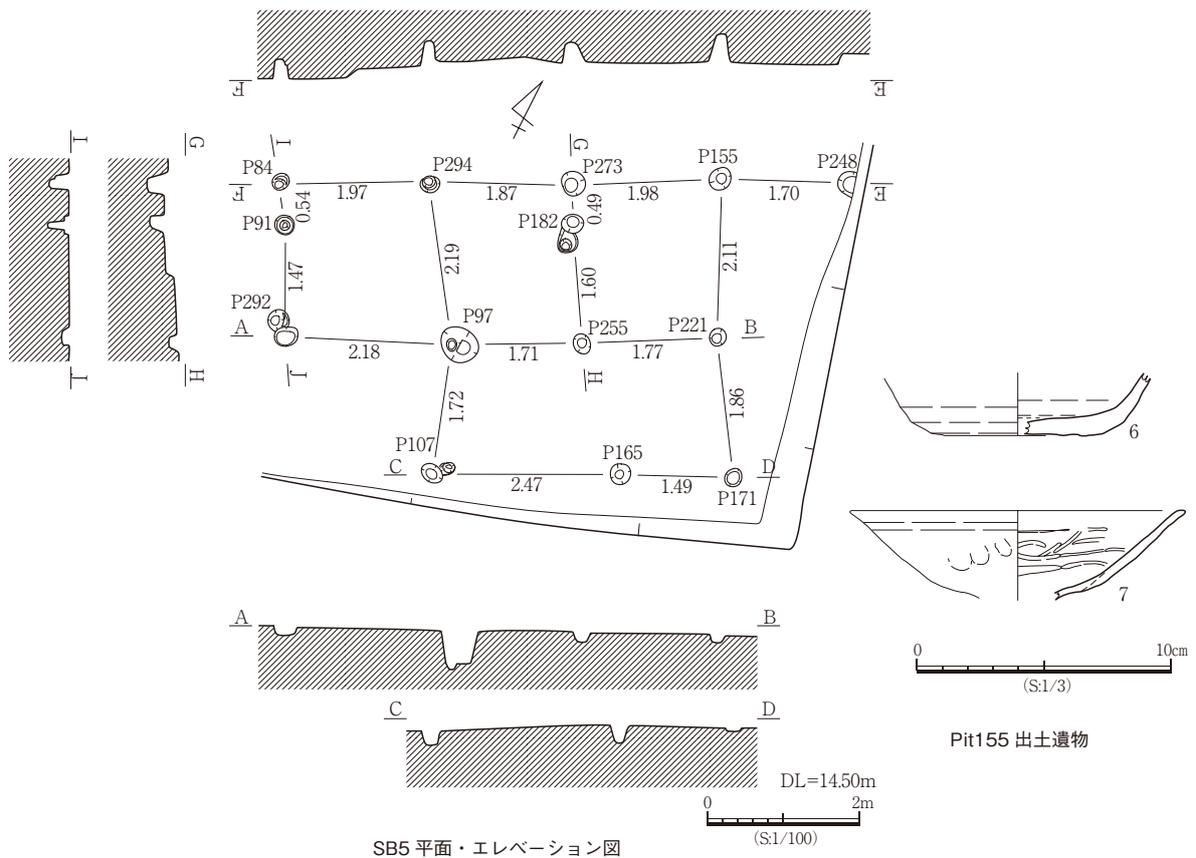


図13 I区 SB5遺構図・出土遺物

色土器椀・土師器の細片6点が出土した。

SB4 (図12)

調査区北東端D II - 7 - 23・24グリッドで検出した桁行2.5間以上×梁行2.5間の建物跡である。棟方向は南北方向と思われ、N - 28° - Eを指し、梁桁方向は調査区外に延びる。検出規模は、桁行4.64m、梁行4.58mであり、柱間寸法は桁0.97～2.41m、梁1.01～2.07mを測る。検出面積は21.25㎡である。棟持柱は無く、柱間が安定した構造である。柱穴の形状は円形及び楕円形で、直径0.16～0.58m、深さ5.2～48.9cmを測る。P438・460は下面で検出された。P313はP139に切られる。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、P88から土師器椀(No.3)・土師質土器椀(No.4)・瓦器椀(No.5)・土師器甕の細片5点などが出土した。No.3は底部片で、断面三角形の低い高台が付く。外面には指オサエの痕が認められ、器壁が薄く特徴的である。No.4は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。No.5の瓦器椀は和泉型と考えられ、口縁部はヨコナデ、端部にヘラミガキが施されている。また、P73・77からは、土師器細片16点と、粘土塊が出土した。P82・116・123・130・460からは土師器の細片37点などが出土した。

SB5 (図13)

調査区北東端D II - 12 - 4・5グリッドにかけて検出した桁行4間以上×梁行4間以上の東西棟建物跡である。棟方向はN - 64° - Eを指し、梁桁方向は調査区外に延びる。検出規模は、桁行7.52m、梁行3.97mであり、柱間寸法は桁1.49～2.47m、梁0.49～2.19mを測る。検出面積は29.85㎡である。柱穴の形状は円形で直径0.22～0.35m、深さ8.8～37.6cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、

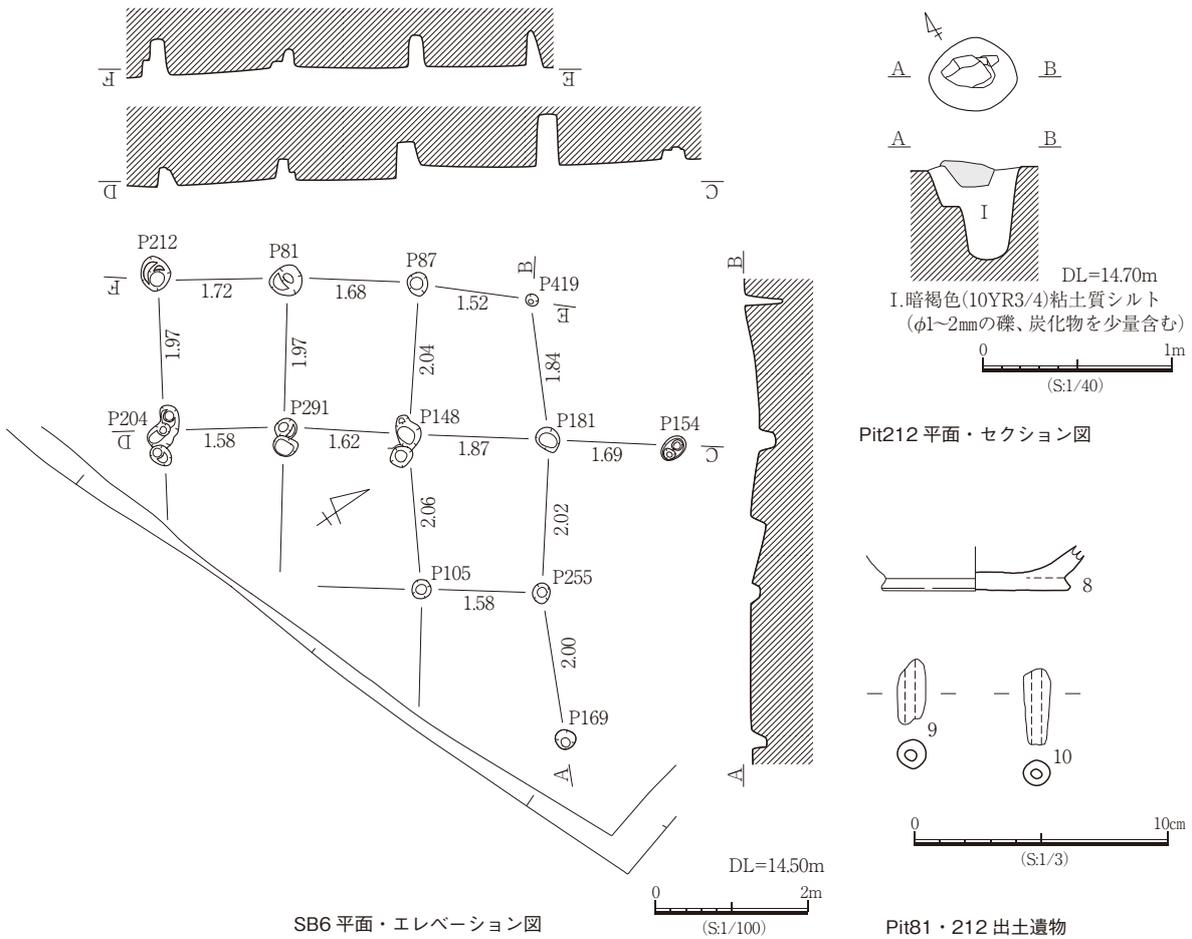


図14 I区 SB6遺構図・出土遺物

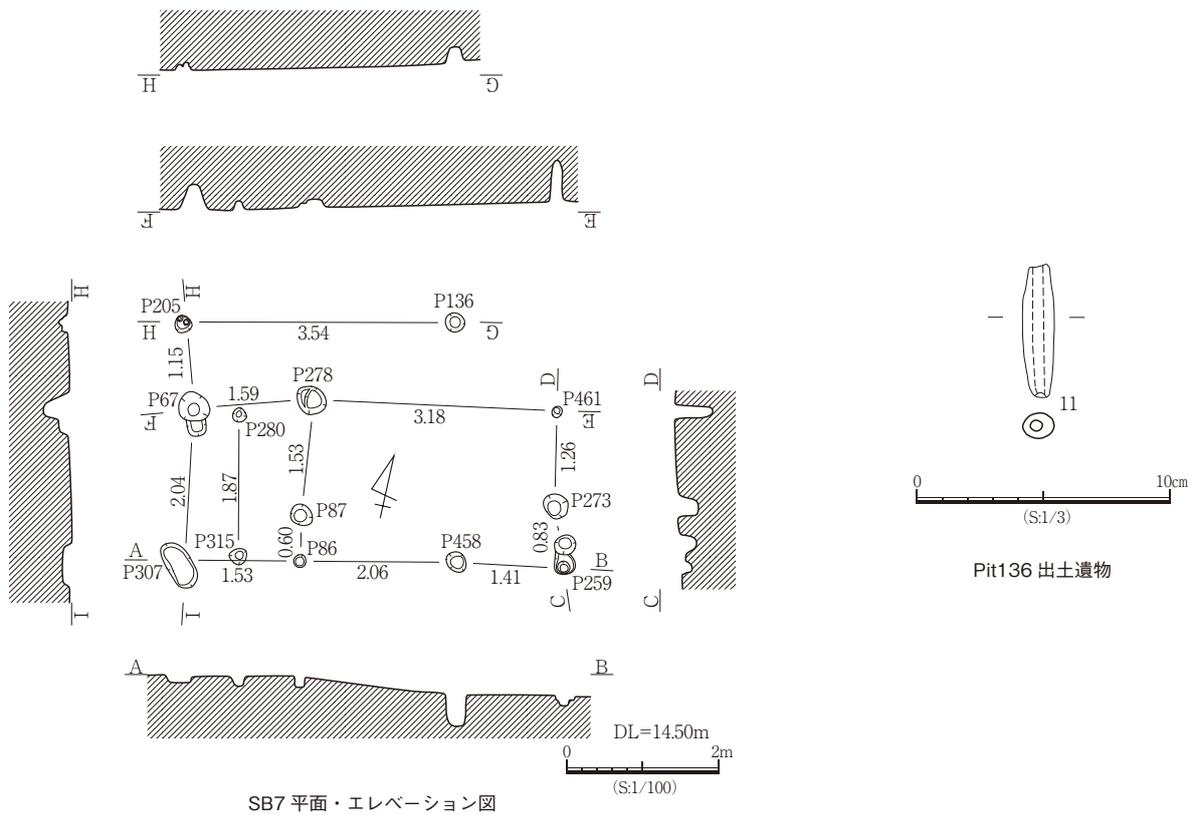
P155からは図示した土師器杯(No.6)・瓦器椀(No.7)を含めて瓦器椀4点・土師器杯2点・土師器の細片22点が出土した。No.6は回転ナデ調整、底部の切り離しは摩耗が著しく明瞭でないが回転糸切りと思われる。No.7の瓦器椀は、口縁部外面に二重のナデが施される。底部と体部の境目が屈曲する。その他のピットからは瓦器椀2点・土師器の細片が88点・須恵器細片1点などが出土した。

SB6 (図14)

調査区北東端D II - 12 - 4・8グリッドにかけて検出した桁行4間以上×梁行3間以上の総柱建物跡である。棟方向はN - 38° - Eを指し、他の建物の方向と異なる。検出規模は、桁行5.86m、梁行6.76mであり、柱間寸法は桁1.84 ~ 2.06m、梁1.52 ~ 1.87mを測る。検出面積は39.61 m²である。柱穴の形状は円形及び楕円形で、直径0.16 ~ 0.46m、深さ15.9 ~ 47.2cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、P81から土錘(No.9・10)・土師器細片を含めて17点が出土した。また、P212からは土師器椀(No.8)・瓦器椀1点・土師器細片18点が出土した。No.8は円盤状高台椀の底部であり、外面の一部にタール痕が認められる。その他のピットからは土師器細片が39点、黒色土器細片1点が出土した。

SB7 (図15)

調査区北東端D II - 12 - 3・4グリッドにかけて検出した桁行3間×梁行2間の東西棟建物跡である。棟方向はN - 78° - Eを指し、梁桁北側の柱列の東端隅柱は、旧試掘抗である。検出規模は、桁行5.00m、梁行3.19mであり、柱間寸法は桁1.53 ~ 2.47m、梁0.60 ~ 2.04mを測る。検出面積は15.95 m²



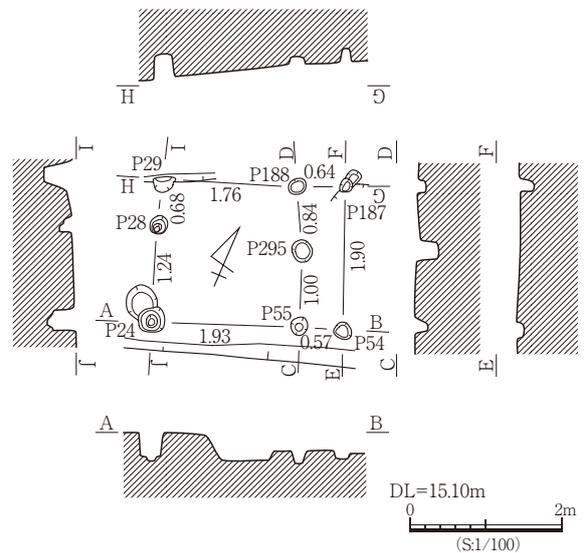
SB7平面・エレベーション図

図15 I区SB7遺構図・出土遺物

である。柱穴の形状は円形及び楕円形で、直径0.13～0.65m、深さ2.7～33.5cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、P136から土師器6点・図示した土錘(No.11)が1点出土した。各ピットからは土師器細片34点が出土した。

SB8 (図16)

調査区北東端DⅡ-12-7・12グリッドにかけて検出した桁行1間以上×梁行1.5間以上の南北棟建物跡である。棟方向はN-64°-Eを指し、梁桁方向は調査区外に延びる。検出規模は、桁行7.52m、梁行3.97mであり、柱間寸法は桁1.49～2.47m、梁0.49～2.19mを測る。検出面積は29.85㎡である。柱穴の形状は円形及び楕円形で、直径0.20～0.35m、深さ7.6～37.7cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、P187からは同安窯系青磁碗1点・土師器細片5点が出土した。各ピットからは、土師器細片38点が出土した。



SB8平面・エレベーション図

図16 I区SB8遺構図

ii 柵列

SA1 (図17)

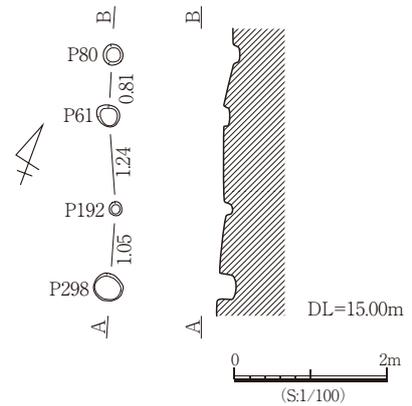
調査区南端DⅡ-12-8グリッドで検出したSB5とSB8の間で検出した。検出長は3.1m以上、柱間寸法は0.81～1.24mを測る。軸方向はN-20°-Wを指し、南北方向に延びる。柱穴の形状は円形で、

直径0.16～0.38m、深さ8.2～21.1cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、各ピットからは土師器細片4点が出土した。

iii 溝

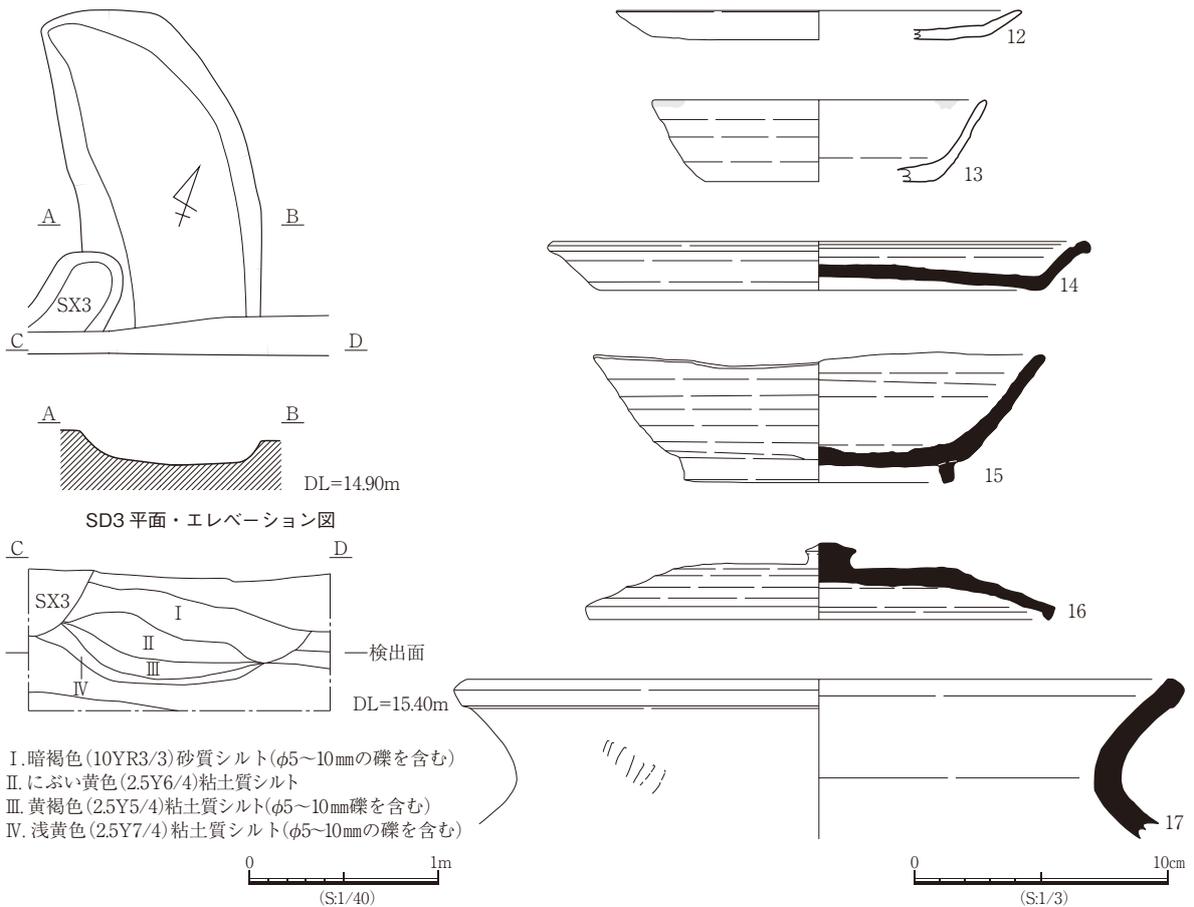
SD3 (図18)

調査区南端D II - 12 - 7グリッドで検出した。調査区西側の丘陵裾段部からの傾斜地で等高線に並行して検出した。検出長は1.68m、幅0.72～1.02m、深さは検出面から22cmを測る。埋土は、I層が暗褐色砂質シルトであり、SD3のプランはI層をI区包含層IV層まで下げた段階で検出した。埋土は、にぶい黄色から黄褐色を呈した粘土質シルトであり、5～10mm大の細かい礫を含んでいる。遺物はI～II層に多く含まれ、I層からは須恵器皿(No.14)・須恵器杯(No.15)・須恵器蓋(No.16)、II層からは土師器皿(No.12)・土師器杯(No.13)・須恵器甕(No.17)が出土した。No.13は口縁部の一部にタール痕が認められる。No.14は口縁部内面に沈線が施される。No.15は外底部にヘラ切りの痕跡が残る。No.16は宝珠形のツマミ部が形骸化している。8世紀後半～9世紀前半代の遺構と考える。



SA1 平面・エレベーション図

図17 I区 SA1遺構図



- I. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト (φ5～10mmの礫を含む)
- II. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘土質シルト
- III. 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土質シルト (φ5～10mmの礫を含む)
- IV. 浅黄色 (2.5Y7/4) 粘土質シルト (φ5～10mmの礫を含む)

SD3 南壁セクション図

SD3 出土遺物

図18 I区 SD遺構図・出土遺物

iv 土坑

I区では、土坑19基を検出した。古代～中世にかけての土坑17基、弥生時代の土坑が2基である。以下に、各土坑ごとに記述する。

SK1 (図19)

調査区北東部、D II - 7 - 25 グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。長軸1.33m、短軸0.89m、深さは7.7cm前後を測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、暗褐色粘土質シルトが主体であり、炭化物、2mm大の角礫を含んだオリーブ褐色粘土質シルトが混じる。遺構からは瓦質土器羽釜(No.18)をはじめ、瓦質土器鍋片2点・土師器羽釜2点・土師質土器細片28点・粘土塊などが出土した。No.18は羽釜の鏝部分であり、口縁部直下に断面台形の短い鏝が付く。口唇部は沈線状に凹む。

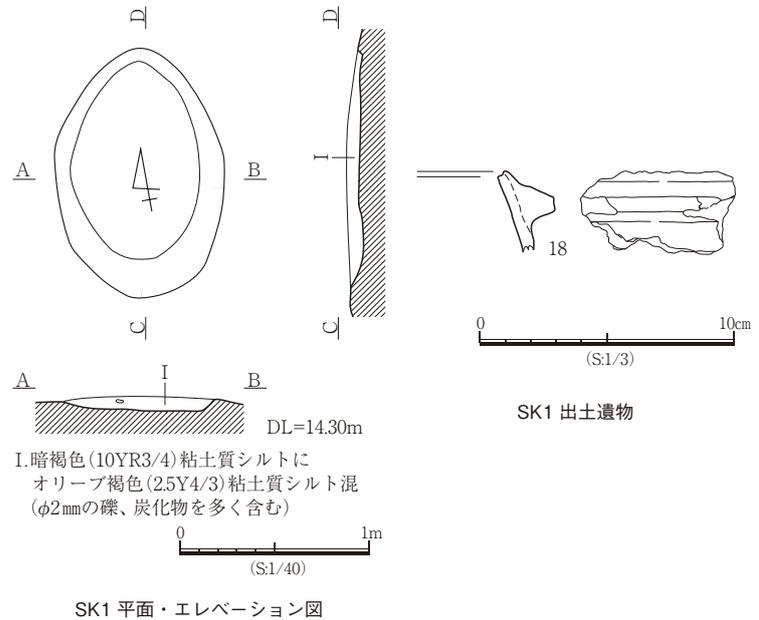


図19 I区 SK1遺構図・出土遺物

SK2 (図22)

調査区東部、D II - 7 - 25グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。長軸1.33m、短軸0.89m、深さは7.7cm前後を測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色粘土質シルトが主体であり、1～2mm大の角礫が混じる。遺構からは瓦質土器鍋片1点・瓦器椀2点・土師器細片10点が出土した。

SK3 (図22)

調査区東部、D II - 7 - 25グリッドで検出した平面円形を呈する土坑である。長軸1.08m、短軸0.98m、深さは14.5cm前後を測り、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色粘土質シルトが主体であり、1～2mm大の角礫が混じる。遺構からは須恵器片1点・土師質土器片5点が出土した。

SK4 (図22)

調査区東部、D II - 7 - 25グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。長軸1.30m、短軸1.02m、深さは8.8cm前後を測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、灰黄褐色粘土質シルトであり、3～5mm大の角礫を含む。P157・159に切られており、II層はP157の埋土である。遺構からは瓦質土器1点・須恵器甕1点・土師器甕1点・土師器細片6点が出土した。

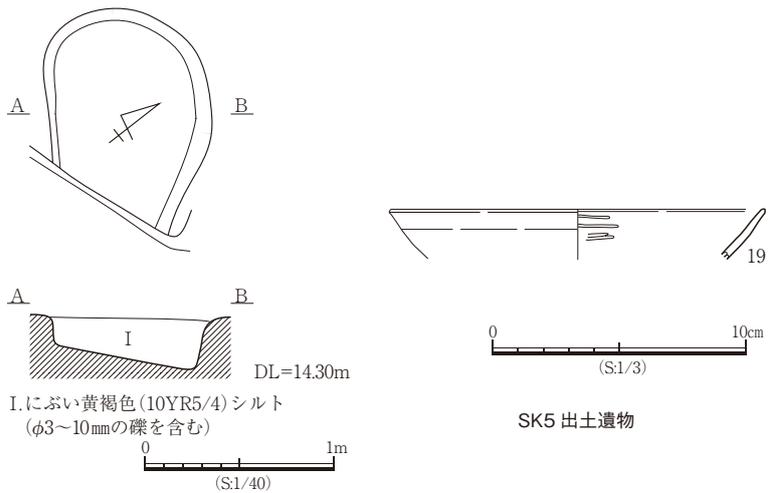
SK5 (図20)

調査区北東部、D II - 12 - 2グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。長軸1.05m、短軸0.85m、深さは25.1cm前後を測り、北側底面が落ち込み、断面形は台形状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色シルトが主体であり、3～10mmの礫を含む。遺構からは黒色土器椀(No.19)をはじめ、土師器細片28点・土師器甕片7点・須恵器杯1点が出土した。No.19は黒色土器椀A類で、内面はヘラ磨きが

施される。搬入品と考えられる。

SK6 (図21)

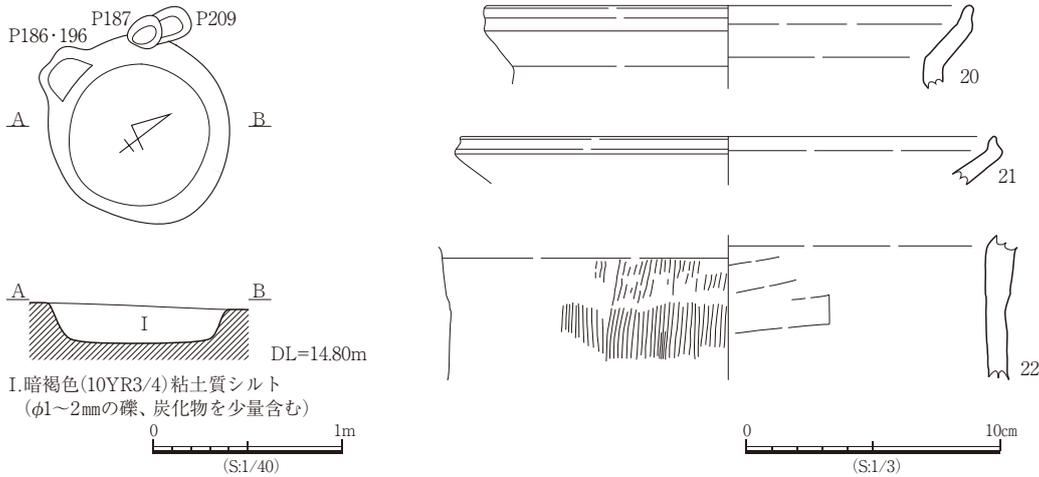
調査区南部、D II - 12 - 7グリッドで検出した平面円形を呈する土坑である。P186・196を切り、P187・209に切られる。長軸1.03m、短軸0.95m、深さは17.9cm前後を測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、暗褐色粘土質シルトが主体であり、炭化物、1～2mm大の角礫を含む。遺構からは土師器甕(No.20～22)をはじめ、土師器細片67点・須恵器1点が出土した。No.20・21は口縁部が



SK5 平面・セクション図

図20 I区 SK5遺構図・出土遺物

くの字に外反する甕であり、口縁部はヨコナデ調整が施され、端部は僅かに上方に拡張がみられる。No.22は口縁部が欠損するが、胴部外面は縦、内面は横方向を基調とするハケ調整が施される。



SK6 平面・セクション図

SK6 出土遺物

図21 I区 SK6遺構図・出土遺物

SK7 (図22)

調査区南部、D II - 12 - 7グリッドで検出した平面円形を呈する土坑である。P208に切られる。長軸0.78m、短軸0.73m、深さは29.8cm前後を測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、暗褐色粘土質シルトが主体であり、炭化物、1～2mm大の礫を含む。遺構からは土師器細片66点・須恵器5点・黒色土器A類1点の他に、鉄滓が出土した。

SK8 (図22)

調査区北部、D II - 12 - 2グリッドで検出した平面隅丸方形を呈する土坑である。南側はSX1に切られ、全体的な規模は不明である。検出規模は長軸1.01m、短軸0.92m、深さは5.2cm前後を測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、灰黄褐色粘土質シルトであり、遺物は出土しなかった。

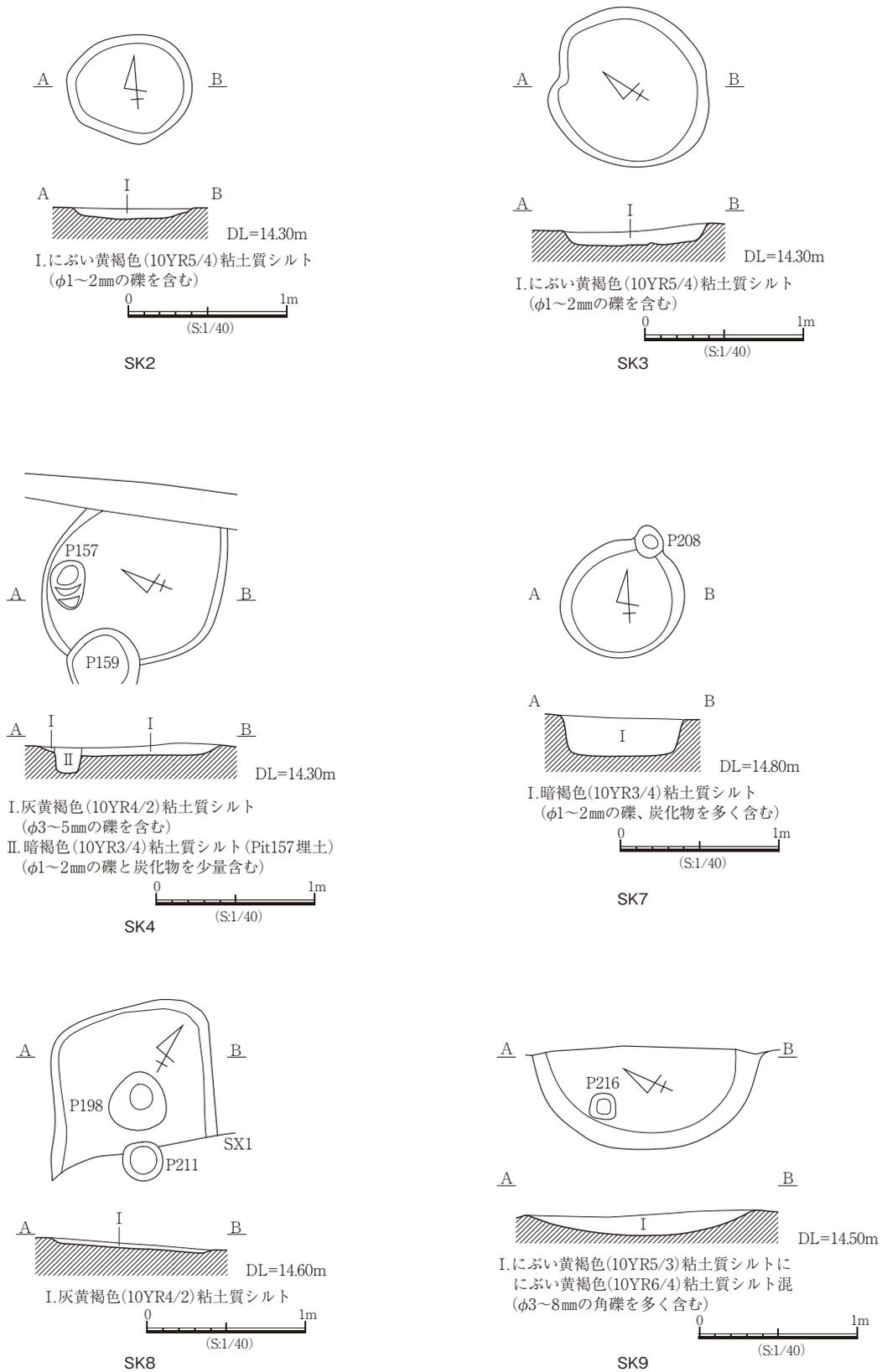


図22 I区 SK遺構図1

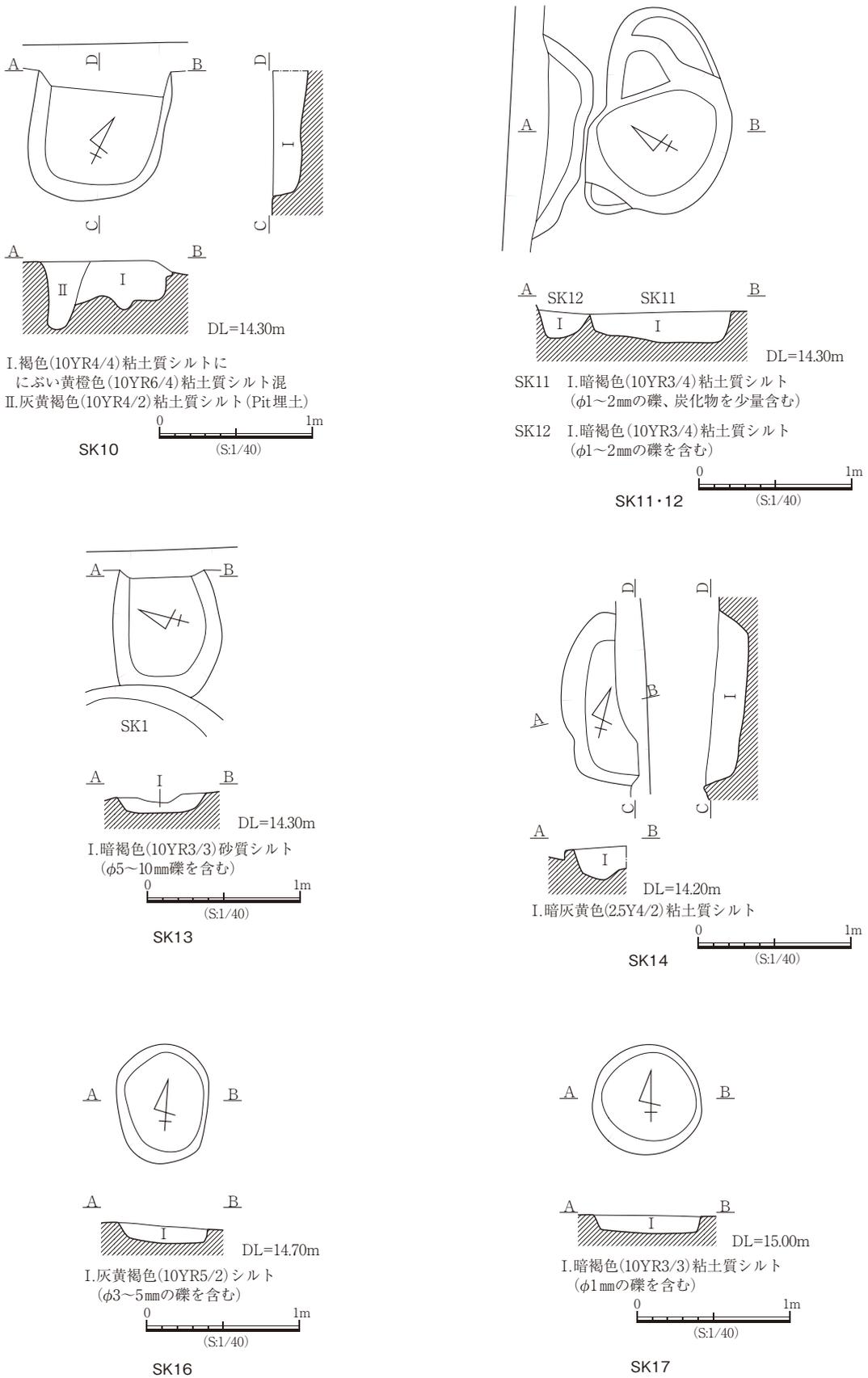


図23 I区 SK遺構図2

SK9 (図22)

調査区北東部、D II - 7 - 24 グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。遺構東側は試掘坑により全体規模は不明である。検出規模は長軸1.40m、短軸0.65m、深さは41.1cm前後を測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色粘土質シルトが主体であり、3～8mm大の角礫を含む。遺構からは東播系捏鉢1点・瓦質土器2点・土師器6点が出土した。

SK10 (図23)

調査区北東部、D II - 7 - 23 グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。遺構北側は調査区外に延び、全体規模は不明である。検出規模は長軸0.87m、短軸0.74m、深さは52.8cm前後を測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、にぶい黄橙色粘土質シルトがブロック状に混じった褐色粘土質シルトが主体である。北壁セクションで土坑断面を観察すると、ピットとの切り合いが認められる。遺構からは土師器細片18点・瓦質土器片1点・須恵器1点が出土した。

SK11・12 (図23)

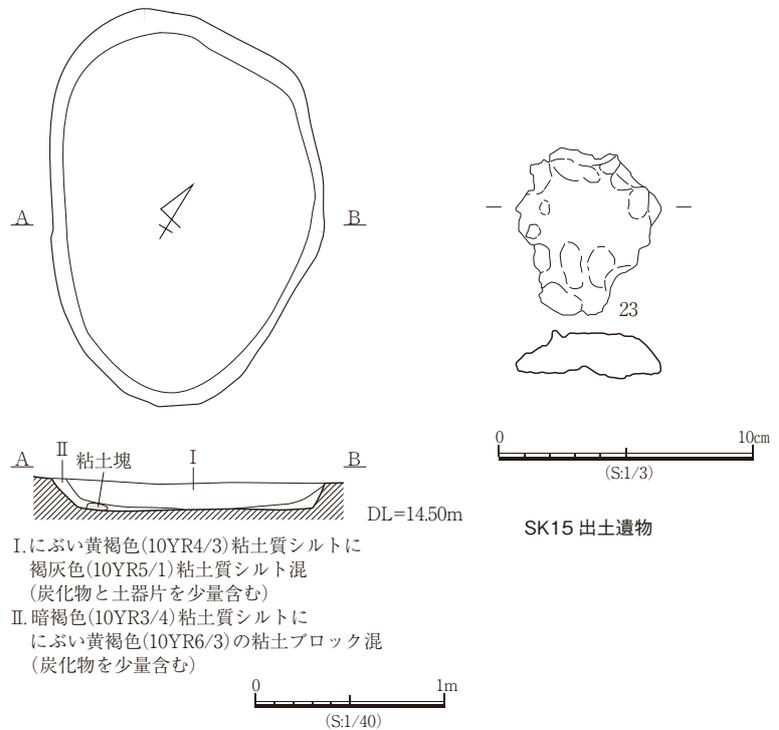
調査区北東部、D II - 7 - 24 グリッドで検出した平面不整楕円形を呈する土坑である。SK11は、長軸1.35m、短軸0.80m、深さは20.2cm前後を測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、暗褐色粘土質シルトが主体であり、炭化物、1～2mm大の角礫を含む。遺構からは須恵器皿1点・瓦質土器鍋1点・土師器甕1点・土師器細片18点が出土した。SK12は、遺構北側が調査区外に延びており、全体規模は不明である。検出規模は長軸1.30m、短軸0.29m、深さ20.3cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトで1～2mm大の礫が混じる。遺構からは土師器細片9点・須恵器片1点・土師器甕1点・土師質土器4点が出土した。

SK13 (図23)

調査区北東部、D II - 7 - 25 グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。土坑西側はSK1に切られ、東側は調査区外に延び全体規模は不明である。検出規模は長軸0.72m、短軸0.71m、深さは16.5cm前後を測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、暗褐色砂質シルトで、5～10mmの礫が混じる。埋土中から土師器4点・土師器甕3点・瓦質土器1点が出土した。

SK14 (図23)

調査区北東隅部、D II - 7 - 20 グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。土坑東側は調査区外であり、全体規模は不明である。検出規模は長軸



I. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトに
 褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト混
 (炭化物と土器片を少量含む)
 II. 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルトに
 にぶい黄褐色(10YR6/3)の粘土ブロック混
 (炭化物を少量含む)

SK15 平面・セクション図

図24 I区 SK15遺構図・出土遺物

1.15m、短軸0.36m、深さは17.2cm前後を測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、暗灰黄色粘土質シルトであり、埋土中から土師質土器片10点・須恵器片1点・瓦質土器鍋1点・常滑焼甕1点が出土した。遺物から14世紀後半頃の土坑と考えられる。

SK15 (図24)

調査区北東部、DⅡ-12-4グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。長軸2.10m、短軸1.43m、深さは18.5cm前後を測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色粘土質シルトに褐灰色粘土質シルトがブロックで混じり、炭化物を含む。埋土中から土師質土器片58点の他に、125.5gを測る鉄滓(No.23)・粘土塊52.7gが出土した。Ⅱ層は暗褐色粘土質シルトであり、炭化物と焼土が混じる。焼成施設の可能性が考えられる。

SK16 (図23)

調査区北部、DⅡ-12-2グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。長軸0.79m、短軸0.58m、深さは13.3cm前後を測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、灰黄褐色シルトに3～5mm大の礫が混じる。埋土中から土師器細片4点が出土した。

SK17 (図23)

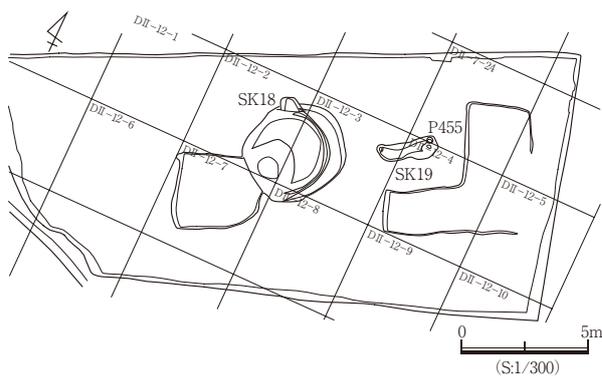
調査区西部、DⅡ-12-6グリッドで検出した平面円形を呈する土坑である。長軸0.74m、短軸0.71m、深さは8.2cm前後を測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、暗褐色粘土質シルトに1mm大の礫が混じる。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SK18 (下層遺構・図25)

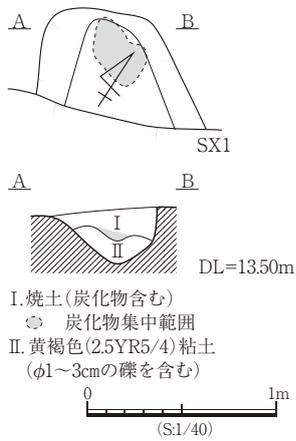
調査区北部、DⅡ-12-2グリッドの下層(Ⅷ層上面)で検出した平面楕円形を呈する土坑である。土坑南側はSX1に切られており、全体規模は不明である。検出規模は長軸0.73m、短軸0.65m、深さは15.0cm前後を測り、断面形はU字状を呈する。埋土は、Ⅰ層が炭化物を含んだ焼土層であり、Ⅱ層の黄褐色粘土層上面に炭化物の集中がみられた。土坑から遺物は出土しなかったが、弥生時代後期の包含層直下で検出されており、周辺の同一面で弥生時代後期中葉に比定できる土坑(SK19)が検出されていることから、同時期の焼成土坑と思われる。

SK19 (下層遺構・図25・26・27)

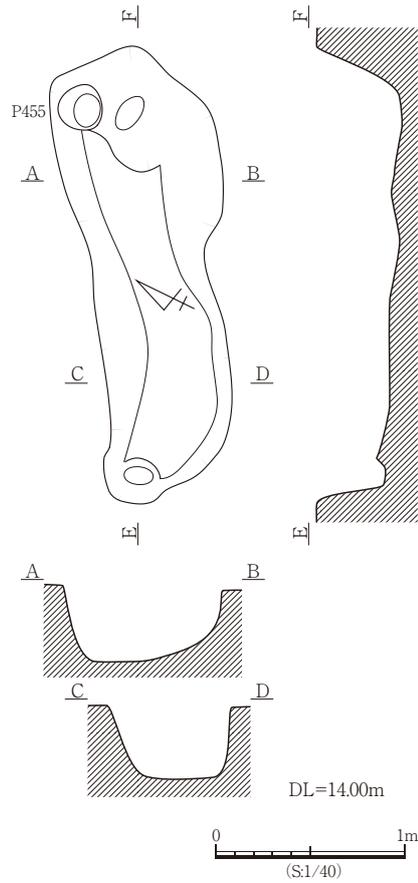
調査区北部、DⅡ-12-4グリッドの下層(Ⅷ層上面)で検出した平面形溝状を呈する土坑である。規模は長軸2.29m、短軸0.60m、深さは31.2cm前後を測り、断面形はU字状、一部は舟底状を呈する。埋土は、Ⅰ層が黒褐色粘土であり、Ⅱ層は炭化物を含んだ暗灰黄色粘土である。Ⅱ層中で弥生土器が一括集中して出土した。これらの弥生土器はほぼ完形復元が可能であり、壺5個・甕11個・鉢1個・高杯2個(No.24～42)が出土した。また、叩石(No.43)を含む直径15～20cm前後を測る円礫が数個出土した。No.24～26は小型の壺・甕であり、3個体認められる。No.27は鉢で底部から斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁端部は面を成す。No.28・29は高杯であり、同一個体の可能性がある。No.28の杯部は口縁部が大きく外反し、端部は外方に拡張され、沈線が施される。内面はヘラミガキが顕著であり、口縁部は横方向、体部は放射状にヘラミガキが施される。No.29は脚部であり、上位に五条の平行沈線が施される。No.30・31は貼付口縁の甕であり、口縁部は粘土帯を貼付し肥厚する。No.30の口縁端部は丸く、No.31は面を成す。No.31の外表面はハケ調整痕が認められる。No.32は甕であり、短い頸部から口縁部は外反する。外面の頸部にタタキ目を残す。No.33は壺であり、胴部上位に最大径を持ち、口縁部は大きく外反する。ハケ調整が施されている。No.34～36は甕であり、短い頸部から



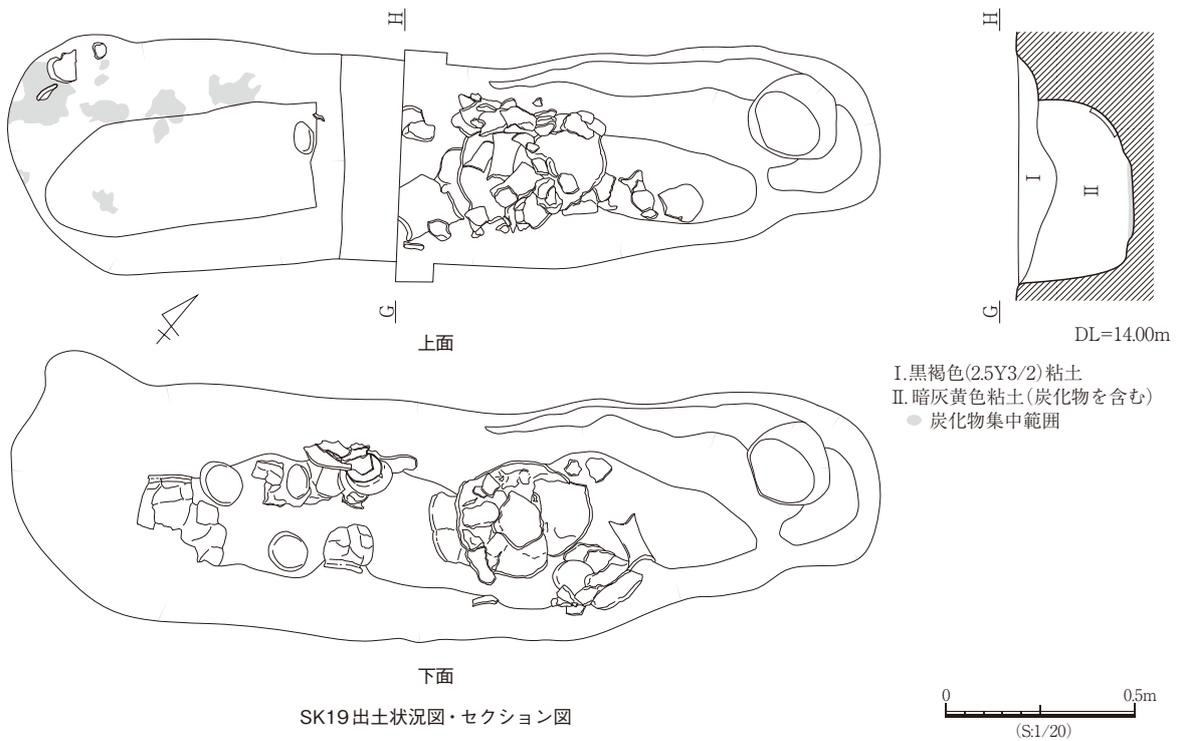
SK18・SK19・Pit455 I 区下層遺構配置図



SK18平面図・セクション図



SK19平面図・エレベーション図



SK19出土状況図・セクション図

図25 I 区 下層遺構図(弥生時代)

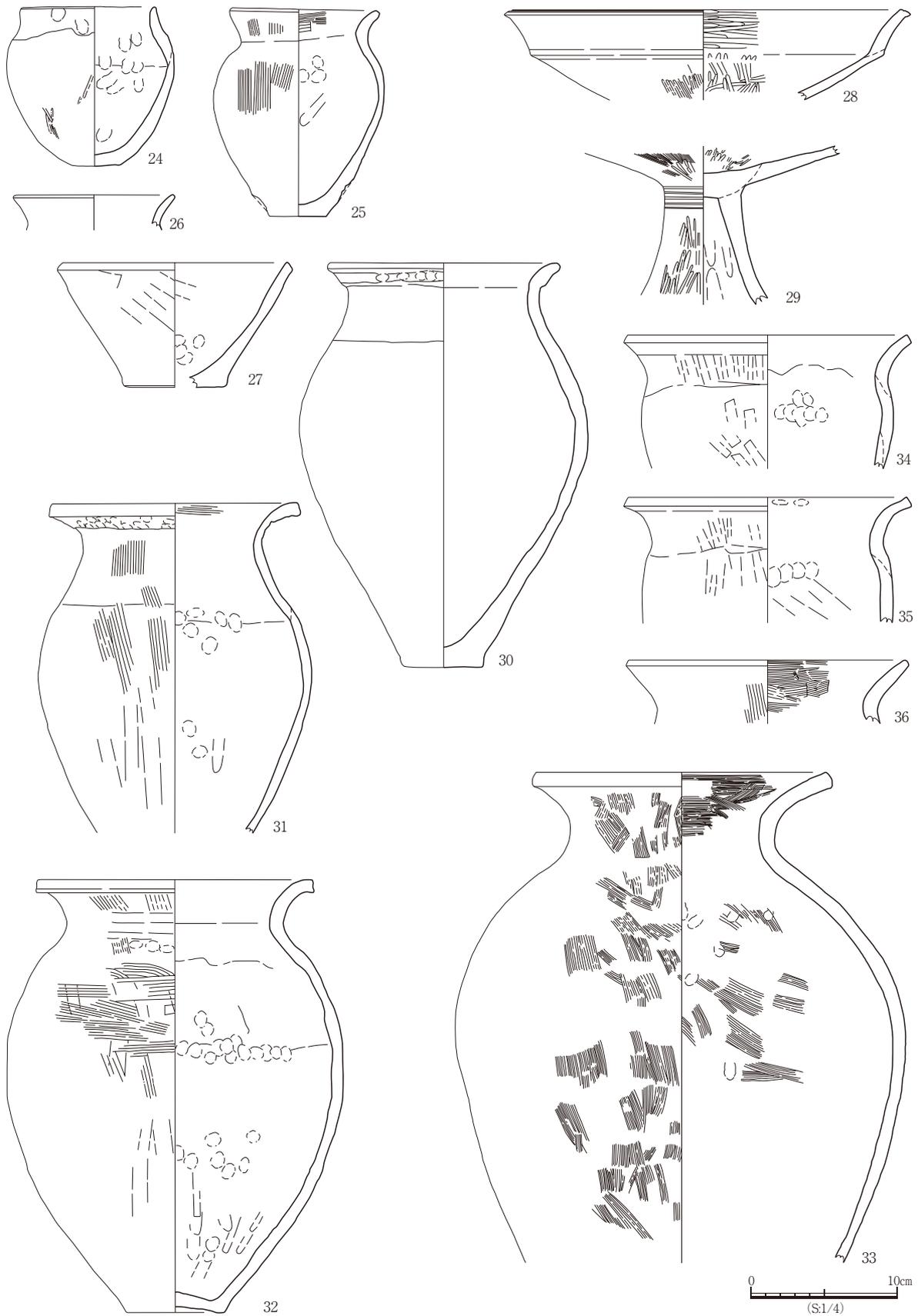


図26 I区 SK19出土遺物1

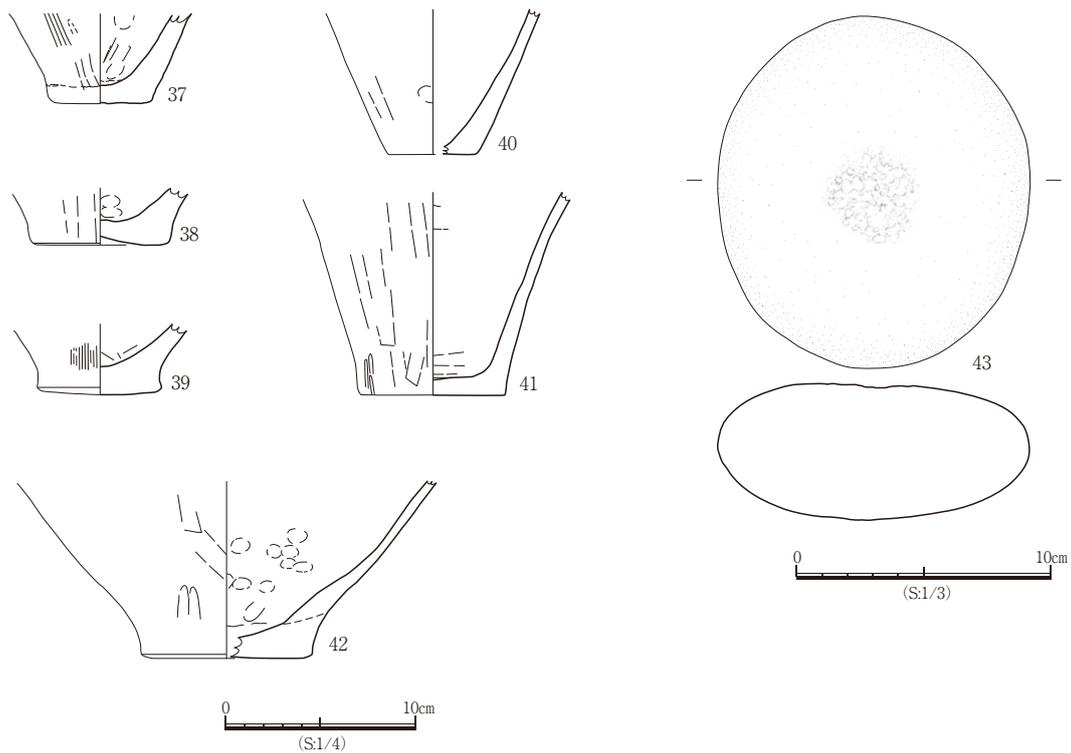


図27 I区 SK19出土遺物2

口縁部は外反し、No.34・35の端部は面をなす。外面はヘラ状工具によるナデが縦方向に施される。No.37・39・42は壺、No.38・40・41は甕の底部と考えられる。II層の暗灰黄色粘土層上面で土坑の西半分には炭化物の集中がみられた。出土遺物から弥生時代後期中葉頃の土坑と考えられる。

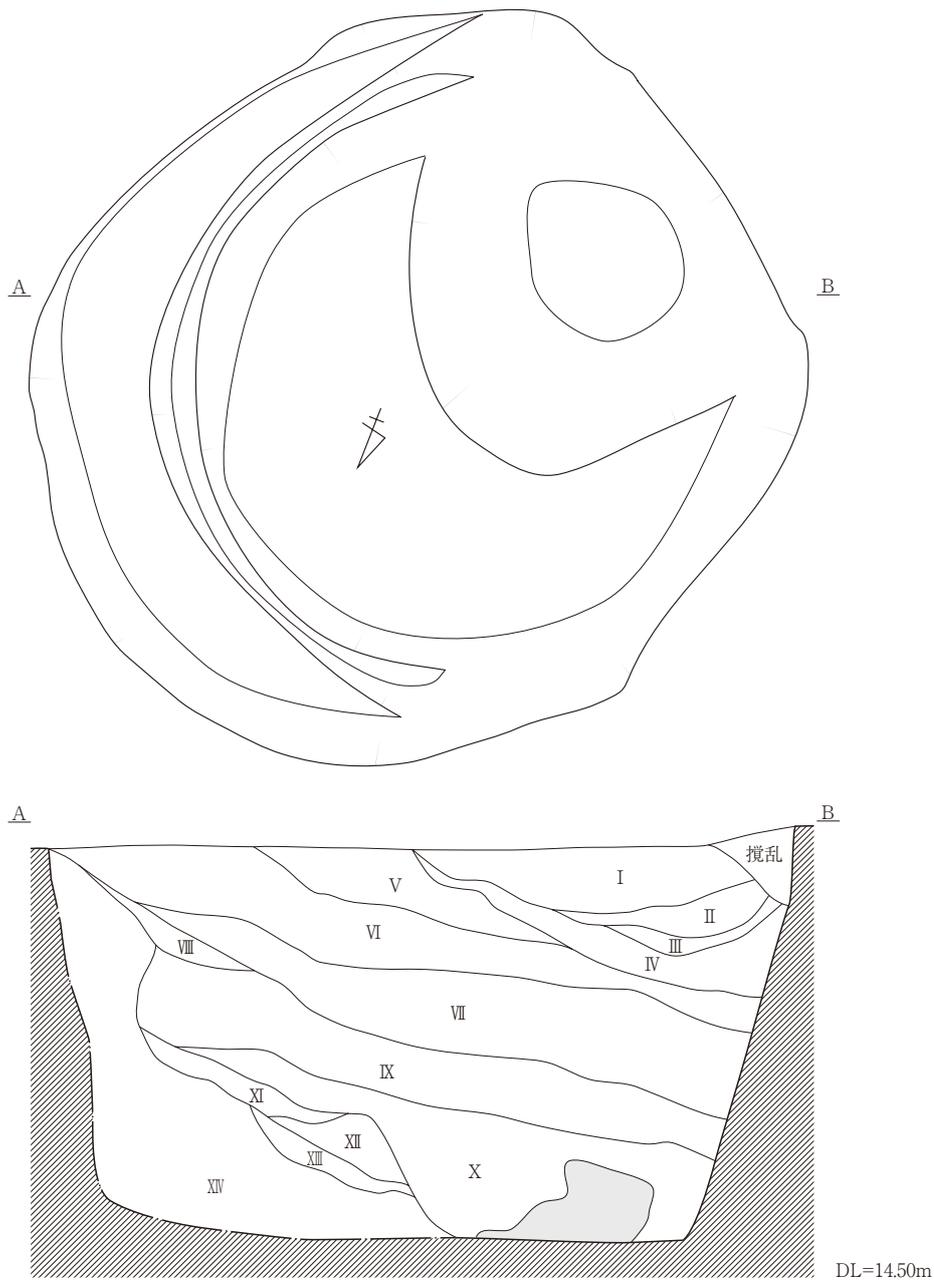
v 性格不明遺構

SX1 (図28・29)

調査区の中央部で検出した。平面形は円形であり、長軸4.25m、短軸3.83m、深さは最深部で2.57mを測る。東側の一部に三日月状を呈したテラスが2段に成形され、西側の最深部に向かって階段状を呈する。埋土は、にぶい黄橙色・褐色系を呈したシルト質粘土及び粘土であり、X層は地下水の影響によりグライ化している。底面の標高は12.3mを測り、グライ化により緑灰色を呈する。地下湧水面まで掘削した井戸状の施設ではないかと思われる。埋土からは、図示した黒色土器・緑釉陶器・土師器甕・青磁碗・弥生土器片(No.44～49)の他に土師器甕片12点・土師器細片79点・備前甕片1点・弥生土器片4点の他に鉄滓94.9gが出土した。No.44の黒色土器は内面のみ黒色処理されたA類である。胎土から搬入品と考えられる。No.45の緑釉陶器皿は京都洛北産であり搬入品である。No.46は土師器長胴甕の口縁部であり、胎土にチャートがみられる。No.47は青磁碗であり、外面に丸鑿状工具による蓮弁文が施される。No.48・49は弥生土器であり、混入品と考えられる。No.47の青磁碗が埋土上層から出土しており、15世紀後半頃に埋没したものと思われる。

vi ピット

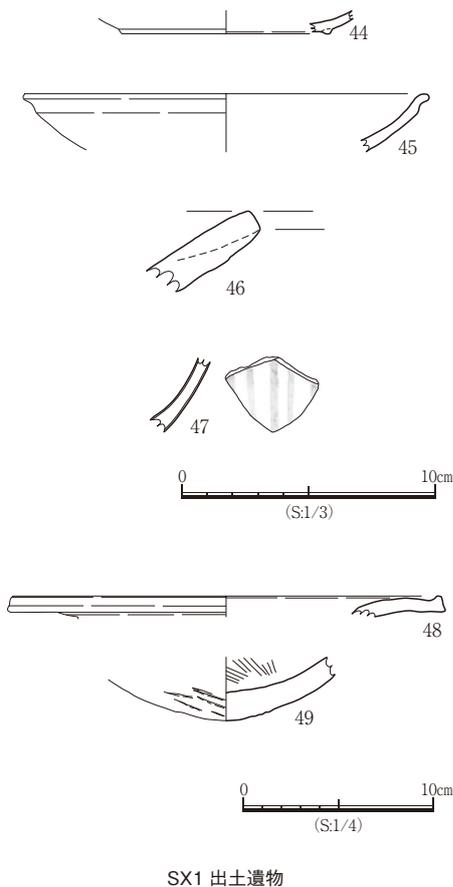
I区ではピットを463個検出した。大半が掘立柱建物跡の柱穴と思われ、柱痕及び礎盤として使用された石が検出された柱穴もあった。ここでは、特徴的なピットについて記述する。他のピットについての形状・規模などの内容については、遺物が出土したピットを中心に遺構計測表に記載した。



- I. にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘土(φ1cmの礫を含む)
- II. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト(φ0.5~1cmの礫を含む)
- III. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土(φ1cmの礫を含む)
- IV. 褐灰色 (10YR5/1) 粘土質シルト(緑灰色 (10GY6/1) 粘土ブロックを含む)
- V. にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘土(φ1~3cmの礫を含む)
- VI. にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘土(φ1cmの礫を含む)
- VII. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト質粘土(φ1~3cmの礫を含む)
- VIII. 褐灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト(φ0.5~1cmの礫を含む)
- IX. 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘土質シルト(緑灰色 (10GY6/1) 粘土ブロック、φ0.5~1cmの礫を含む)
- X. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質粘土(緑灰色 (10GY6/1) 粘土ブロックを含む)
- XI. 灰色 (5Y4/1) 粘土質シルト(φ0.5~1cmの礫を含む)
- XII. 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土
- XIII. 灰色 (5Y4/1) 粘土質シルト(φ0.5~1cmの礫を含む)
- XIV. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土(○ 緑灰色 (10GY6/1) 粘土ブロックを含む)

SX1平面・セクション図

図28 I区 SX1遺構図



SX1 出土遺物

図29 I区 SX1出土遺物

Pit11 (図30)

調査区西部、D II - 12 - 6グリッドで検出した。平面形は円形で、長軸0.29m、短軸0.26m、深さ59.2cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、検出面から深さ22cmで青磁碗の底部片(No.69)が出土した。No.69は無文であり、細かい貫入が認められる。また、底面で柱を安定させるために使用されたと考えられる直径12cm大の角礫が出土した。掘立柱建物の柱穴と考えられ、青磁碗は、柱抜き取り後に上向いた状態で埋めたものと考えられ、地鎮の可能性はある。

Pit22・23 (図30)

調査区南西部、D II - 12 - 12グリッドで検出した。平面形は隅丸方形及び楕円形で、P22の長軸は0.73m、短軸0.61m、深さ10.9cmを測る。埋土はI層が褐色砂質シルト、II層はにぶい黄褐色粘土質シルトであり、浅い皿状を呈する。須恵器片1点、土師器片2点が出土した。P23の長軸は0.34m、短軸0.27m、深さ35.2cmを測る。埋土はIII層がにぶい黄褐色粘土質シルト、IV層は褐色砂質シルトであり、III層から土師器片4点が出土した。P22は隅丸方形プランの掘方であり、P23は柱痕の可能性が考えられる。

Pit30 (図30)

調査区西部、D II - 12 - 7グリッドで検出した。平面形は円形で、長軸0.42m、短軸0.40m、深さ35cmを測る。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトであり、検出面直下で、柱を安定させるために使用されたと考えられる直径20cm大の角礫が出土した。遺物の出土は認められない。

Pit147 (図30)

調査区南東部、D II - 12 - 9グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長軸0.48m、短軸0.40m、深さ61.6cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、検出面で直径35cm前後の角礫が柱痕の上から出土した。また、柱痕底に直径20cmの細長い角礫が出土し、柱の根固め・調整に使用された石と考えられる。埋土中からは瓦器碗片1点・土師器10点・土錘1点が出土した。また、混入と考えられる黒色土器A類の破片が出土した。掘立柱建物の柱穴と考えられ、柱抜き取り後、上面の石は礎盤として使用されている可能性がある。

Pit214 (図30)

調査区南東部、D II - 12 - 9グリッドで検出した。平面形は円形で、長軸0.26m、短軸0.24m、深さ14.1cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、検出面で直径20cm前後の角礫が立った状態で出土した。埋土中からは土師器2点・土錘1点が出土した。

Pit311 (図30)

調査区東部、D II - 12 - 4グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長軸0.37m、短軸0.31m、深さ35.8cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、底面で直径15cm前後の角礫が検出された。柱の



図30 I区 Pit遺構図

根固め、調整に使用された石と考えられる。埋土中からは、土師器4点が出土した。

(4) 遺物

i ピット出土遺物 (図31)

ここでは、ピットから出土した特徴的な遺物について器種ごとに記載する。出土地点など詳細については遺物観察表を参照されたい。

No.50 ~ 56は土師器である。No.50・51は杯であり、底部と体部の境目にやや段を持つ。No.52 ~ 54は椀であり、No.53は輪高台、No.54は円盤状高台である。No.55・56は土師器長胴甕の口縁部片である。No.55は端部を上方に拡張する。No.56は口縁部に粘土帯を貼付、ヨコナデが施されている。外面口縁部直下に縦方向のハケ目が認められる。No.57・58は須恵器であり、No.57は皿で口縁部内面に沈線が施される。No.58は直口壺の口縁部で、端部は尖り気味に仕上げる。No.59は黒色土器A類椀の底部片で断面三角形の低い高台が付く。搬入品である。No.60 ~ 62は土師質土器の杯である。全てロクロ成形、回転ナデ調整が施される。底部切り離しは回転糸切りによる。No.63 ~ 65は土師質土器羽釜である。いずれも播磨型と呼ばれるタイプのものであり、胴部外面に平行タタキ目が残り、口縁部はナデ調整が施されている。鏝はいずれも断面三角形の短い鏝が付く。搬入品である。No.66 ~ 68は瓦器椀である。いずれも和泉型と呼ばれるタイプであり、内面にヘラミガキが施される。口縁部はヨコナデが施される。No.69は無文の青磁碗であり、高台内面まで比較的厚く施釉され

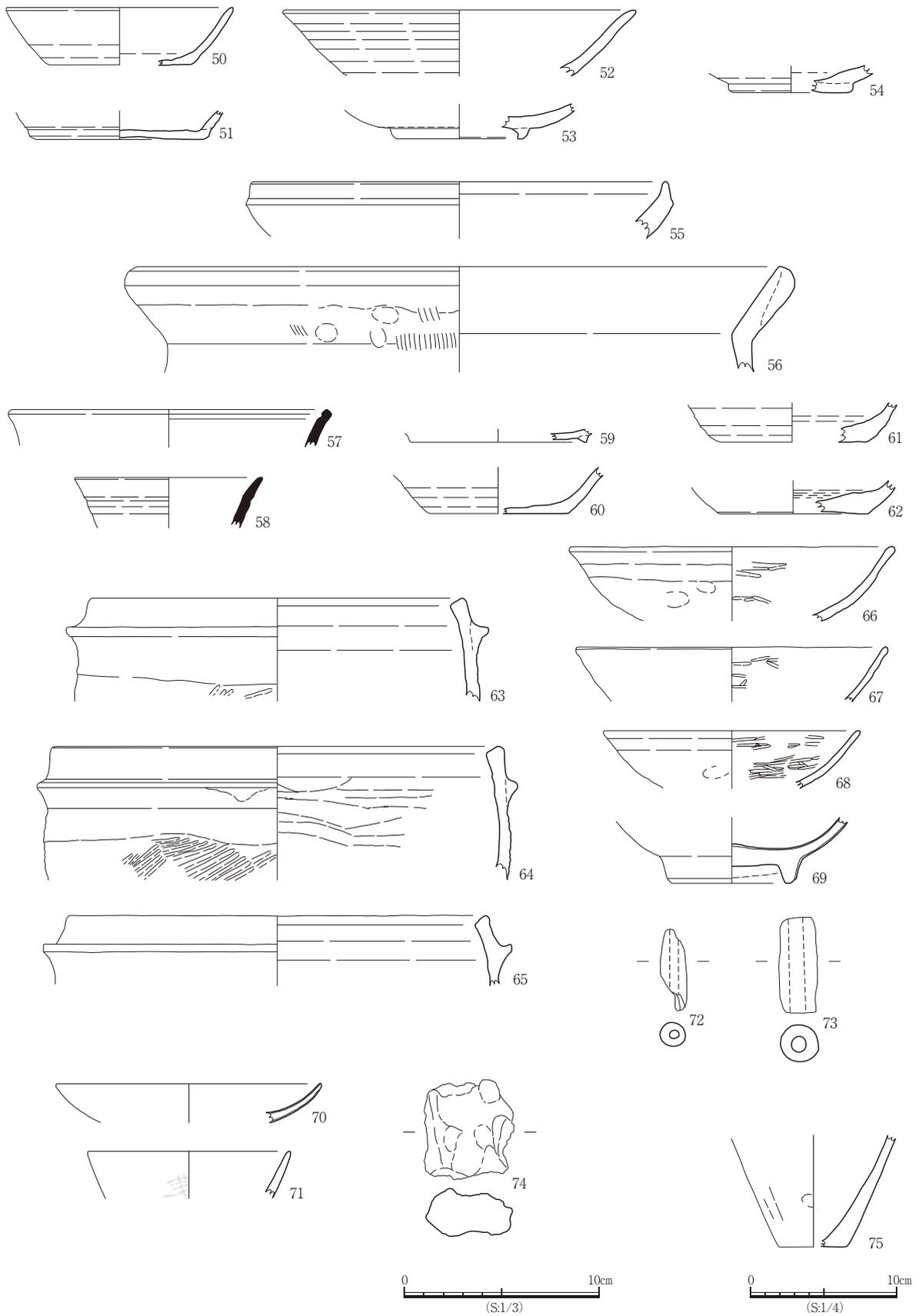


図31 I区 Pit出土遺物

る。No.70・71は近世陶磁器であり、No.70は皿、No.71は広東系の染付け碗である。No.72・73は管状土錘である。No.73は両端を平に成形している。No.74は鉄滓であり、精錬滓と思われる。No.75は弥生土器壺の底部である。平底から斜め上方に直線的に立ち上がる。外面は縦方向のナデ調整が施される。

ii 包含層出土遺物

I区では、大半の遺物が包含層から出土している。古代では、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器など8世紀後半～10世紀前半代を中心とした遺物と、土師質土器・瓦器・陶器・貿易陶磁器などを中心とする12世紀～15世紀代にかけての遺物が出土した。これらの遺物はⅢ・Ⅳ層から出土している。また、下層のⅦ層では弥生土器が出土した。ここでは、包含層から出土した遺物について器種・器形で分類し、特徴的な遺物について記述する。法量・特徴などについては遺物観察表に記載した。

土師器 (図32・33)

No.76～83は皿である。全て回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りである。No.76の内面はヘラミガキが密に施される。No.77～79は直線的に立ち上がり、No.79は大きく外反する。No.80～82は底部から口縁部の立ち上がりに段を持つ。No.83は高台が付く皿である。No.84～89は杯に分類される。全て回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りである。口径12.8～14.0cm、器高2.7～3.3cmを測る。No.89は体部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。No.90～96も杯である。全て回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りである。No.90・94以外は、底部と体部が分割成形によるものであり、接合部に段を有する。分割成形によるものは、底径は8.0～9.0cm前後を測る。No.97は高台付き盤であると思われる、外側に踏ん張る高い高台が付く、器壁が薄い。No.98・99は高台付き碗であり、断面長方形を呈する高台が付く。いずれもナデ調整が施される。No.100～106は土師器甕である。No.100～105は口縁部がくの字に外反する長胴甕であり、No.100～102は口縁端部を上方につまみ上げるように拡張し、端部は尖り気味に仕上げる。口縁部内面は横方向のハケ調整、胴部外面は縦方向のハケ調整が施される。No.103も上方への拡張が僅かに見られる。いずれも、口縁端部外面は強いヨコナデにより沈線状に凹む。No.104の口縁部はヨコナデにより端部は面を成す。No.105は口縁端部を内側につまみ出しており、屈曲がつよい。口縁内面はヨコハケ調整、胴部外面はタテハケ調整。No.106は口縁端部を上方に折り曲げ、屈曲部はヨコナデにより沈線状に凹む。胴部外面は横方向のハケ調整が施され、No.100～105タイプと調整の違いが認められる。No.107は撰津型の羽釜である。口縁部真横に鰐が付く。口縁部・鰐は双方とも強いヨコナデが施される。鰐は先端を尖り気味に仕上げる。

緑釉陶器 (図33)

No.108・109は緑釉陶器の輪花皿である。口縁端部は輪花状に仕上げる。京都産である。

黒色土器 (図33)

No.110～114は黒色土器碗である。No.110～113は内面のみ黒色処理されたA類の碗である。底部内面には細かいヘラ磨きが密に施され、断面三角形の低い高台が付く。胎土からみて搬入品と考えられる。No.114は内外面ともに黒色処理されたB類碗である。断面四角形のしっかりした高台が付く。高台内面はヘラ削りにより、カーボンを削り取る。在地産と考えられる。

土師質土器 (図33)

No.115～117は土師質土器である。全てロクロ成形、回転ナデ調整が施される。No.115は皿であ

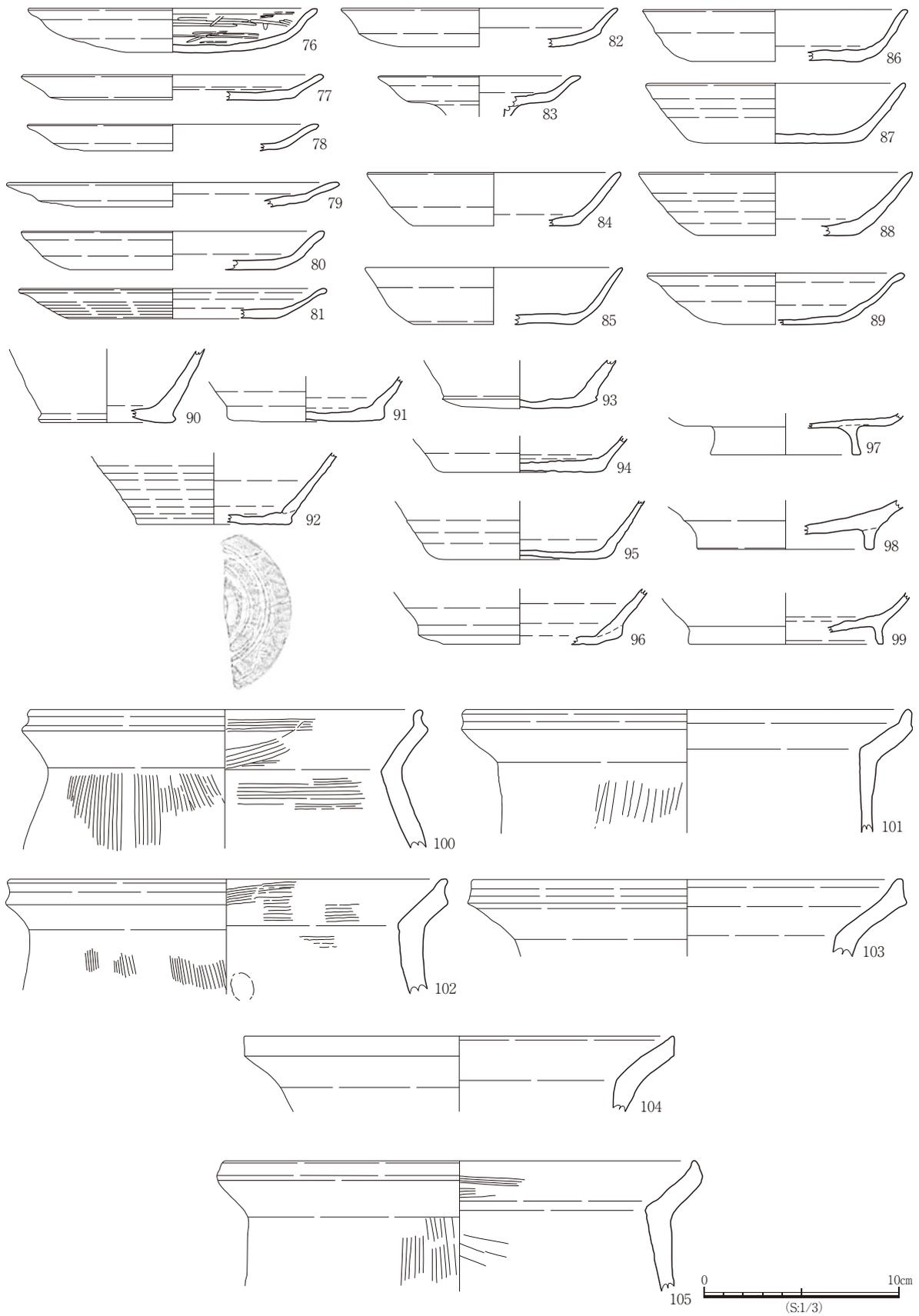


図32 I区 包含層出土遺物1

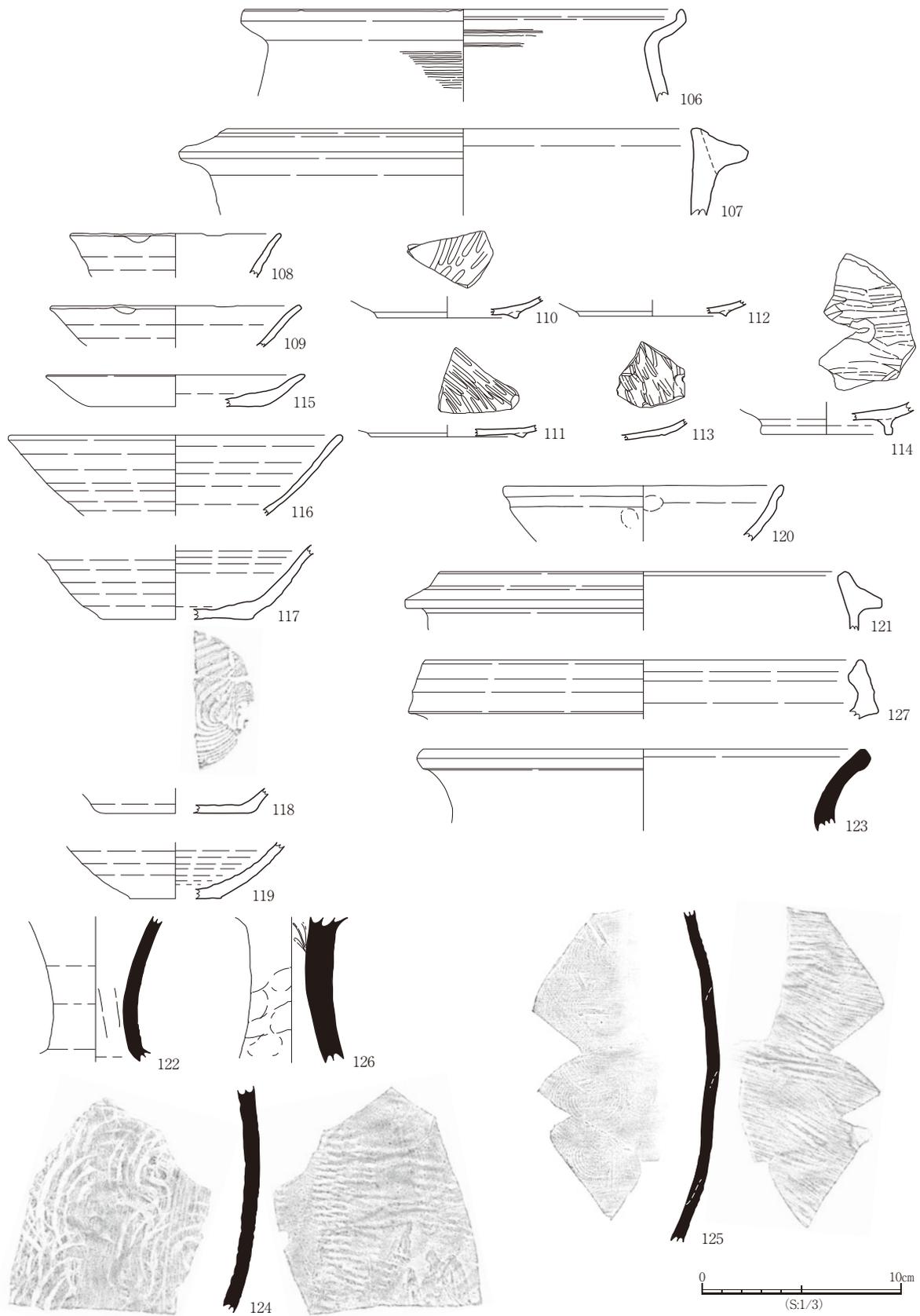


図33 I区 包含層出土遺物2

る。底部切離しは回転糸切りによる。No.116は口径16.6cmと法量が多い。No.117は底径7.8cmを測り、還元気味に固く焼き締る。外底には回転糸切り痕が認められる。No.116と同じタイプの法量の大きい杯になると考えられる。No.119は内面にロクロ目が顕著である。外面口縁直下と底部脇にタールの付着が認められ、灯明皿として使用されているものと思われる。底部は回転糸切り痕が認められ、円柱づくりによる。底径4.6cmを測る。

瓦質土器 (図33)

No.120は瓦器碗である。口縁部外面は強いヨコナデにより凹む。No.121は瓦質土器羽釜である。口縁部直下に端部が垂下する鏝が付く。全体的にナデ調整が施される。

須恵器 (図33)

No.122～126は須恵器である。No.122は長頸壺の頸部であり、口縁部と胴部以下は欠損している。外面は回転ナデ調整、内面は縦方向のナデが施される。No.123～125は須恵器甕であり、No.123の口縁部は玉縁状に肥厚する。No.124・125は甕の胴部片であり、外面平行タタキ、内面は当て具痕が認められる。No.124は青海波文、No.125は単位の細かい同心円状の当て具痕が認められる。No.126は高杯の脚部と考えられる。外面指オサエとナデの痕跡が顕著であり、内面は絞り痕が顕著である。

備前焼 (図33)

No.127は備前焼播鉢の口縁部片である。口縁端部は内傾する面を成し、尖り気味に仕上げる。外面は横方向のナデにより凹線状を呈する。胎土に4mm大の長石が認められる。

古瀬戸 (図34)

No.128は古瀬戸天目茶碗である。体部下半は露胎である。

青磁 (図34)

No.131は瓶、それ以外は碗である。No.129は無文碗であり、透明感のある釉が全面施釉される。No.130は線描きによる細蓮弁文が施される。No.131は瓶の口縁部と思われる。残存している口縁内面まで全面施釉されているため、脚部である可能性も考えられる。No.132は片切彫りによる鎬蓮弁文が施される。

近世陶磁器 (図34)

No.133は肥前産内野山窯の皿である。銅緑釉が高台外面まで施釉され、外底部は露胎である。見込みは蛇の目釉剥ぎ、外底部の高台には砂が付着する。

土製品 (図34)

I区では土錘が比較的まとまって出土している。No.134～148は管状土錘である。一部を欠損しているものが多い。No.137～140・145は完形で、全長4.0～5.7cm、全幅1.3～1.7cmを測り、重量が4.7～8.4gを測る。

鉄滓 (図34)

No.149は鉄滓である。全長7.1cm、全幅4.9cm、重量154.4gを測る。精錬滓の可能性はある。

石製品 (図34)

No.150は砥石である。全長13.6cm、全幅10.5cm、全厚7.4cmを測る。四側面全体使用されており、擦痕が顕著である。仕上げ砥。No.151は磨製石包丁である。穿孔は二穴認められ、半分は欠損する。残存長6.5cm、残存幅3.5cm、全厚0.8cmを測る。刃部に使用痕が認められる。

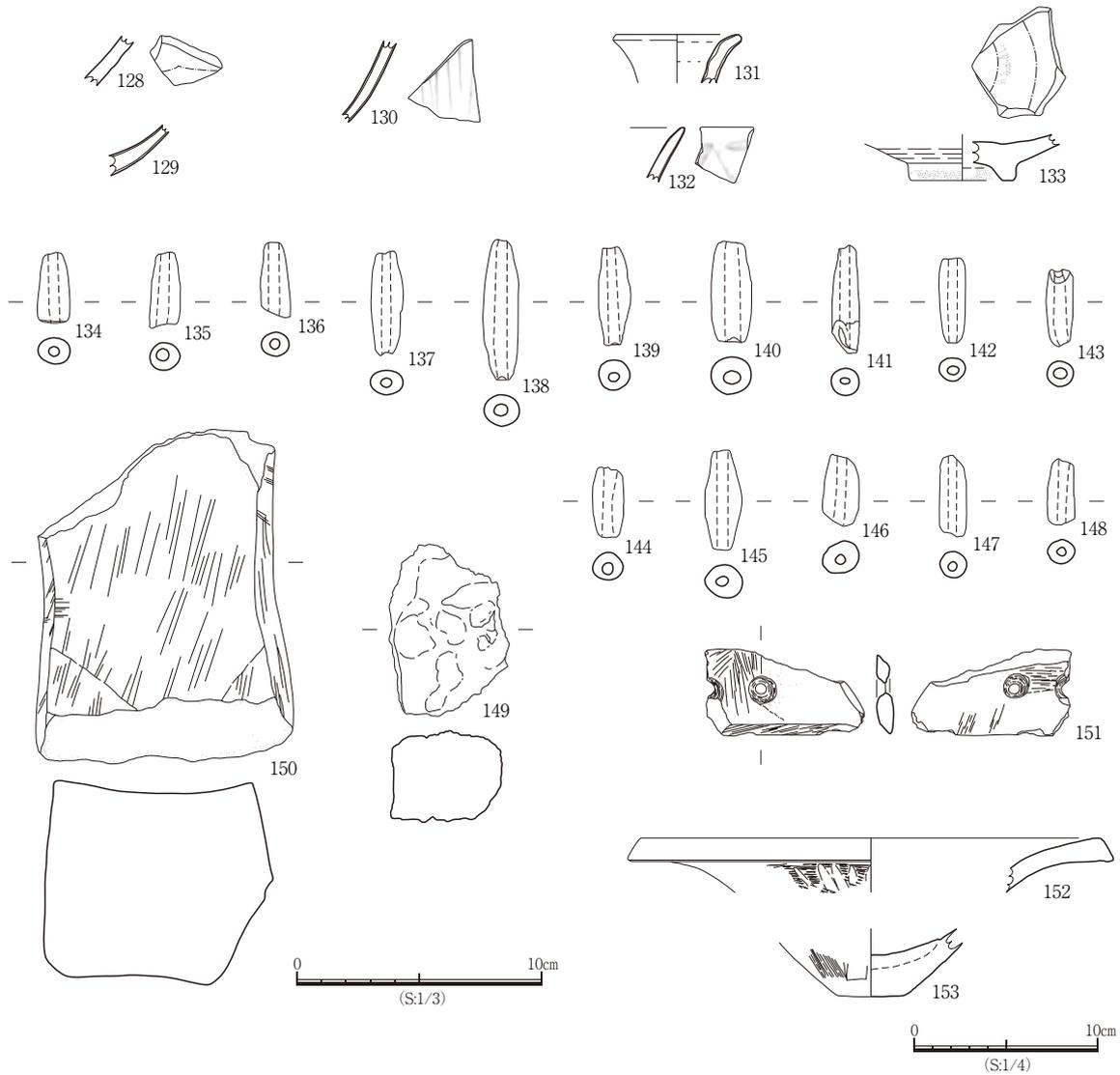


図34 I区 包含層出土遺物3

弥生土器 (図34)

No.152・153は弥生土器である。No.152は壺の口縁部であり、ラッパ状に大きく開き、端部は垂下させ面を成す。外面にはタタキ目が残る。No.153は壺の底部片であり、内底部には粘土を充填した痕が認められる。外面はハケ調整が施される。

2. 調査Ⅱ区の概要と成果

(1) 調査区の概要(図35)

調査Ⅱ区は、I区から丘陵を挟み西側にあたる。現況は宅地跡・荒地になっており、現地表面高は14.50mを測る。調査区南側は丘陵であり、頂部には音竹城跡の主郭があることから、城館に関連する遺構が確認される可能性が想定されていた。Ⅱ区は、高知西バイパス建設に伴う試掘調査で古代から中世にかけての遺構と遺物が確認されており、遺構及び包含層の拡がりや想定される範囲について調査区を設定した。Ⅱ-1区は、試掘調査トレンチTR10で中世の遺構が検出されており、この東部ではV層(整地土)が認められ、上面で遺構を検出した。調査区中央部は谷開口部にあたり、谷部

からの堆積層には中世の遺物が認められた。Ⅵ層が中世の包含層であり、Ⅶ層上面で遺構を検出した。調査区西部は、遺構・遺物も稀薄になる。

Ⅱ-2区は、Ⅱ-1区と同様の堆積が認められ、包含層が確認されたが遺物量も僅少である。Ⅱ-1区西部からⅡ-2区にかけて微高地状に高くなり、Ⅶ層上面で中世の掘立柱建物跡を検出した。

Ⅱ-3区は、Ⅱ区西部の谷部にあたる。調査区南側谷部からの地下水の影響により還元された箇所も認められる。粘土・シルトの堆積であり、Ⅱ-1・2区に比べ砂質の度合いが強くなる。弥生時代～古墳時代にかけての包含層及び弥生時代終末～古墳時代にかけての炉跡状の遺構を検出した。古代～中世にかけての遺構は検出されなかった。

また、Ⅰ区とⅡ区の丘陵地部分については、試掘調査が行われておらず、様相が不明であったため、Ⅱ区の東側、丘陵裾のやや開けた平坦部分を試掘し予備調査を行ったが、現表土下は地山で削平の影響を受けており、調査の対象外とした。

(2) 基本層序

i Ⅱ-1区 (図36)

Ⅱ-1区の基本層序は以下のとおりである。Ⅱ-1区は小谷部に位置しており、調査区東側から中央部・西側にかけて傾斜している。

Ⅰ：表土(現況宅地の整地盛土及び攪乱層)

Ⅱ：にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質粘土(ϕ 5mmの礫を含む。旧耕作土)

Ⅲ：明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質粘土(ϕ 3mmの礫を含む。旧耕作面整地土)

Ⅳ-1：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粘土(ϕ 2mmの礫、炭化物を含む。中世遺物包含層)

Ⅳ-2：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粘土に、にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土混じる。

Ⅴ：明黄褐色(2.5Y6/6)砂質シルト(ϕ 2mmの礫多く含む。調査区東部整地土)

Ⅵ：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粘土(ϕ 2mmの礫を含む。古代～中世遺物包含層)

Ⅶ：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粘土(中世遺構検出面)

Ⅱ-1区の東部はⅤ層整地土がみられ、Ⅴ層上面で中近世の遺構を検出した。Ⅳ-1・2層は14～15世紀にかけての遺物包含層であり、調査区東部から中央部にかけて堆積が認められた。Ⅵ層は古代の遺物を含む。中世の遺物は、調査区中央部の遺構検出面上でまとまって出土が見られた。遺構検出面はⅦ層上面であり、標高13.60m前後を測る。

ii Ⅱ-2区 (図37)

Ⅱ-2区は基本的にⅡ-1区と同じ堆積である。Ⅱ層が細分される。

Ⅰ：表土(現況宅地の整地盛土及び攪乱層)

Ⅱ-1：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト(ϕ 2～4cmの礫を含む。)

Ⅱ-2：黄褐色(2.5Y5/3)シルト(ϕ 1～3cmの礫を含む。)

Ⅱ-3：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト(ϕ 1～2cmの礫を含む。)

Ⅱ-4：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト(ϕ 0.5～2cmの礫を含む。)

Ⅲ：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粘土(ϕ 2mmの礫を含む。)

Ⅳ：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粘土(ϕ 2mmの礫、炭化物を含む。中世遺物包含層)

Ⅴ：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粘土(ϕ 2mmの礫を含む。中世遺構検出面)

Ⅱ-2区ではⅤ層上面で中世の掘立柱建物跡、土坑を検出した。Ⅱ-1区に比べ、包含層は稀薄で遺

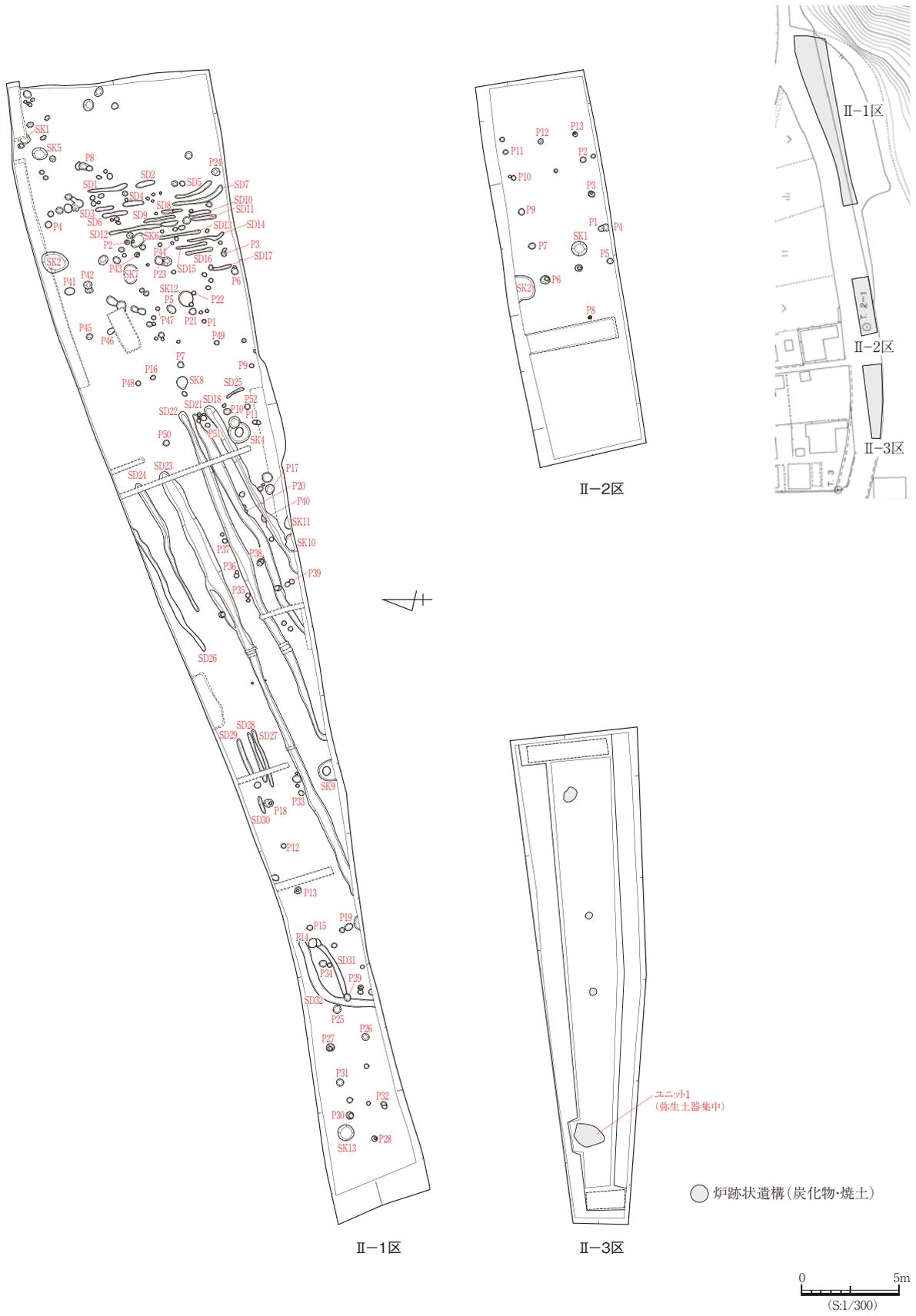


図35 II区 遺構配置図

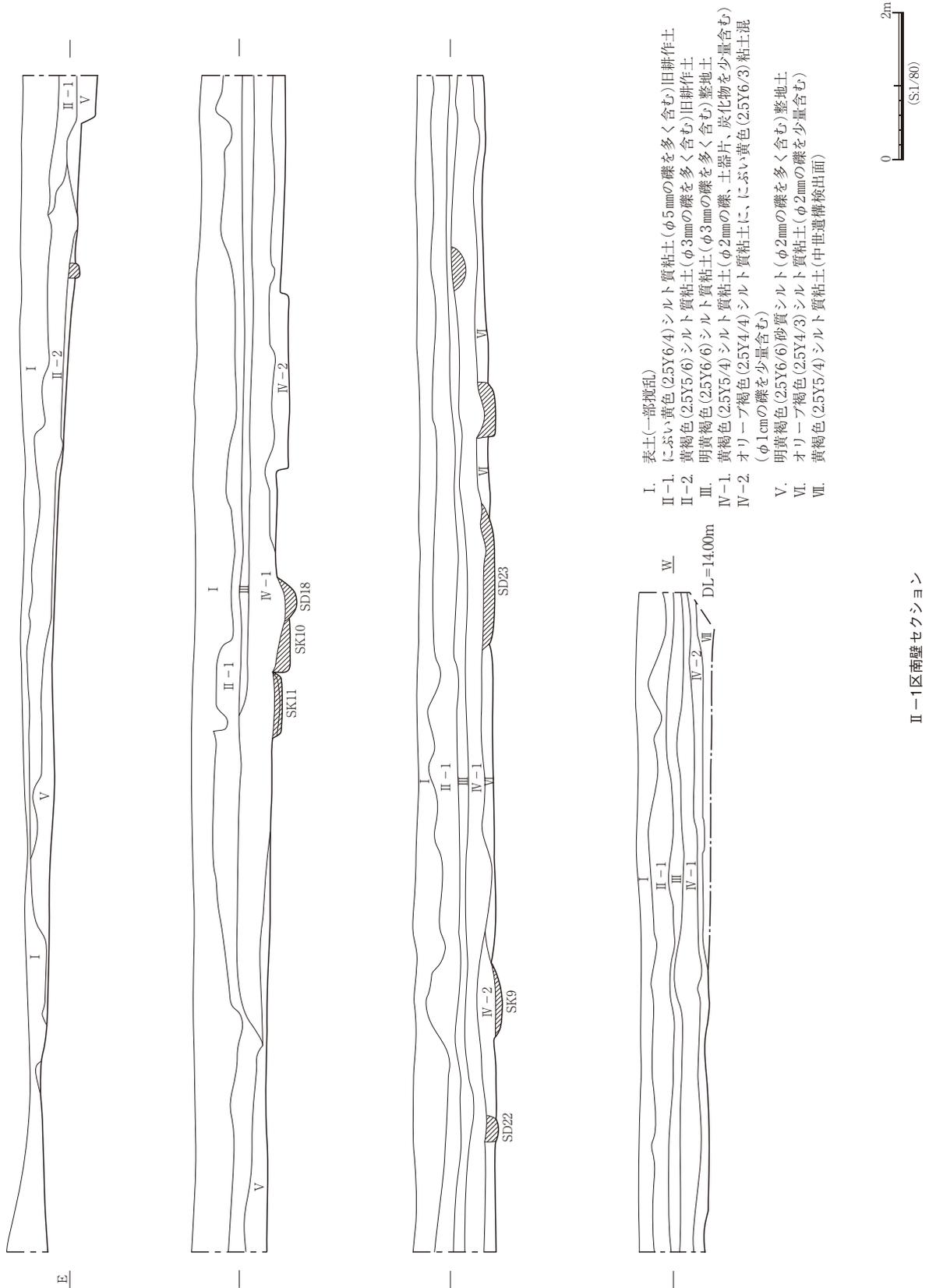


図36 II-1区 調査区セクション図

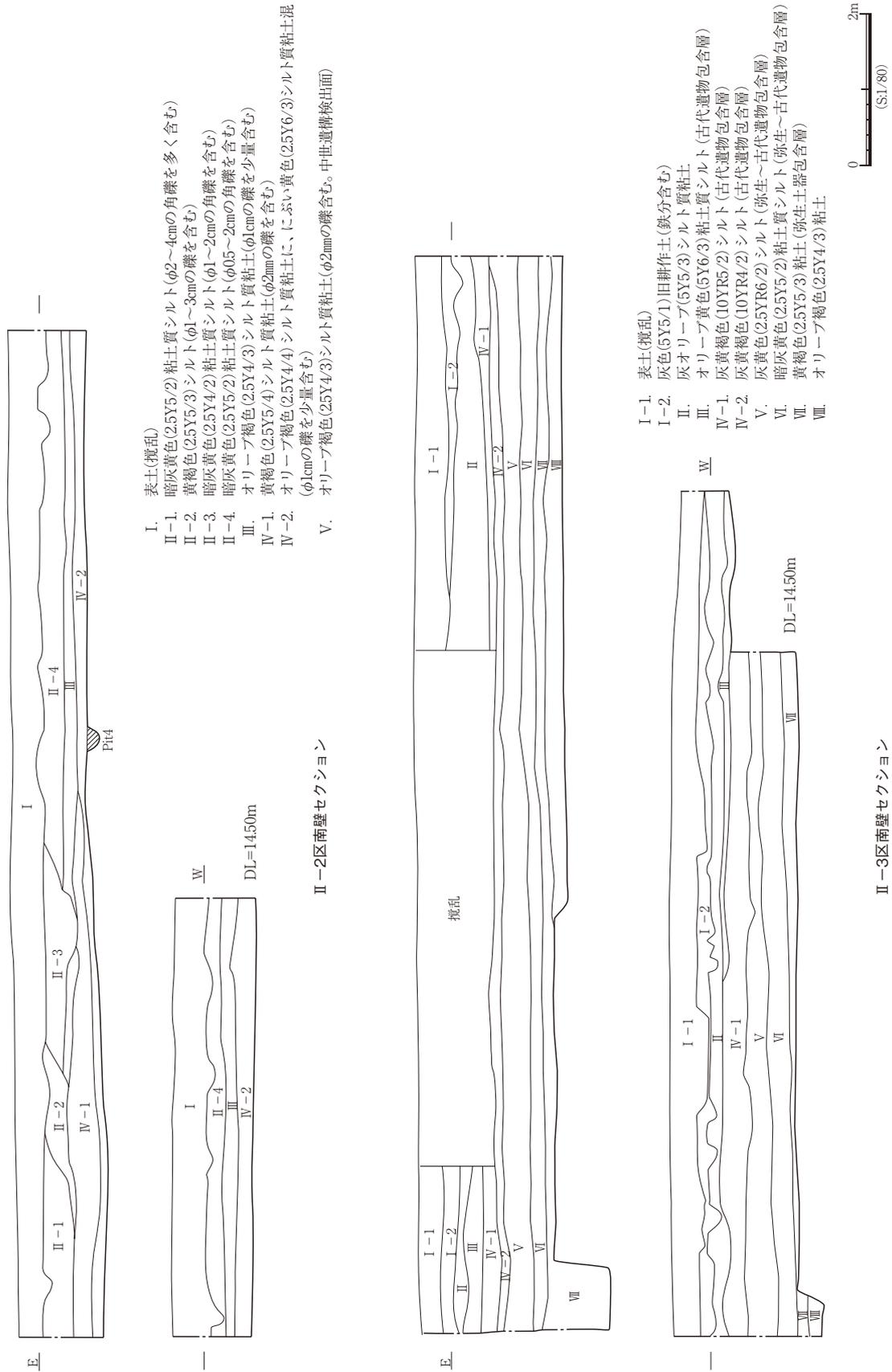


図37 II-2・II-3区 調査区セクション図

物の出土は僅少であった。

iii II-3区(図37)

II-3区は、弥生時代～古代にかけての包含層及び弥生時代終末～古墳時代にかけての炉跡状の遺構を検出した。粘土・シルトが主体であり、II-1・2区に比べシルトが強くなる。また、調査区南側谷部からの地下水の影響により還元された箇所も認められる。

I-1:表土(現況宅地の整地盛土及び攪乱層)

I-2:灰色(5Y5/1)旧耕作土(鉄分含む。)

II:灰オリーブ(5Y5/3)シルト質粘土

III:オリーブ黄色(5Y6/3)粘土質シルト(古代遺物包含層)

IV-1:灰黄褐色(10YR5/2)シルト(古代遺物包含層)

IV-2:灰黄褐色(10YR4/2)シルト(古代遺物包含層)

V:灰黄色(2.5Y6/2)シルト(弥生～古代遺物包含層)

VI:暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト(弥生～古代遺物包含層)

VII:黄褐色(2.5Y5/3)粘土(弥生土器包含層)

VIII:オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土

I層は、宅地跡の攪乱及び整地層であり、宅地基礎などの影響が著しい。整地層下は、旧耕作土が認められる。III層以下が包含層であり、古代の遺物はIV層で比較的多く見られた。V～VI層は砂質シルトと粘土質シルトの互層堆積であり、弥生土器の混入が認められた。古代の段階の洪水堆積であると考えられる。プライマリーな弥生時代後期の包含層はVII層であり、標高13.30m前後で確認した。弥生時代の土器集中及び炉跡状遺構検出面はVII層及びVIII層上面であり、標高13.00m前後を測る。

(3) 検出遺構(図38)

II区では、掘立柱建物跡(SB) 5棟・溝(SD) 32条・土坑(SK) 14基・ピット179個を検出した。II区は調査範囲が広域にあたるため、調査区をII-1～II-3区の三箇所に分けし、調査を実施した。検出された遺構・遺物については小調査区ごとに述べていく。検出された遺構は、複数時期にまたがり、概ね14～15世紀代にかけての遺構である。これらの遺構はII-1・2区にかけて多く検出され、II-3区では古代～中世にかけての遺構は検出されなかったが、弥生時代後期の炉跡状遺構を確認した。各遺構について以下に記述する。

i 掘立柱建物跡

II-1区で4棟、II-2区で1棟検出した。以下に個別に述べる。

SB1(図39)

調査区北東端B II-24-13・14グリッドで検出した桁行1間以上×梁間2間の東西棟建物跡である。棟方向はN-20°-Wを指し、梁桁方向は調査区外に延びる。検出規模は、桁行1.90m、梁行3.63mであり、柱間寸法は桁1.78～1.90m、梁1.81～1.82mを測る。検出面積は6.89㎡である。柱穴の形状は円形及び楕円形で、直径0.20～0.49m、深さ19.4～38.3cmを測る。埋土は暗灰黄色シルトであり、P26から土師器の細片7点が出土した。また、P26・27は検出面で礎盤として使用されたと考えられる角礫が検出された。

SB2(図41)

調査区北東端B II-24-15～B II-25-7グリッドにかけて検出した桁行5間×梁行1間以上の東



図38 II区 SB配置図

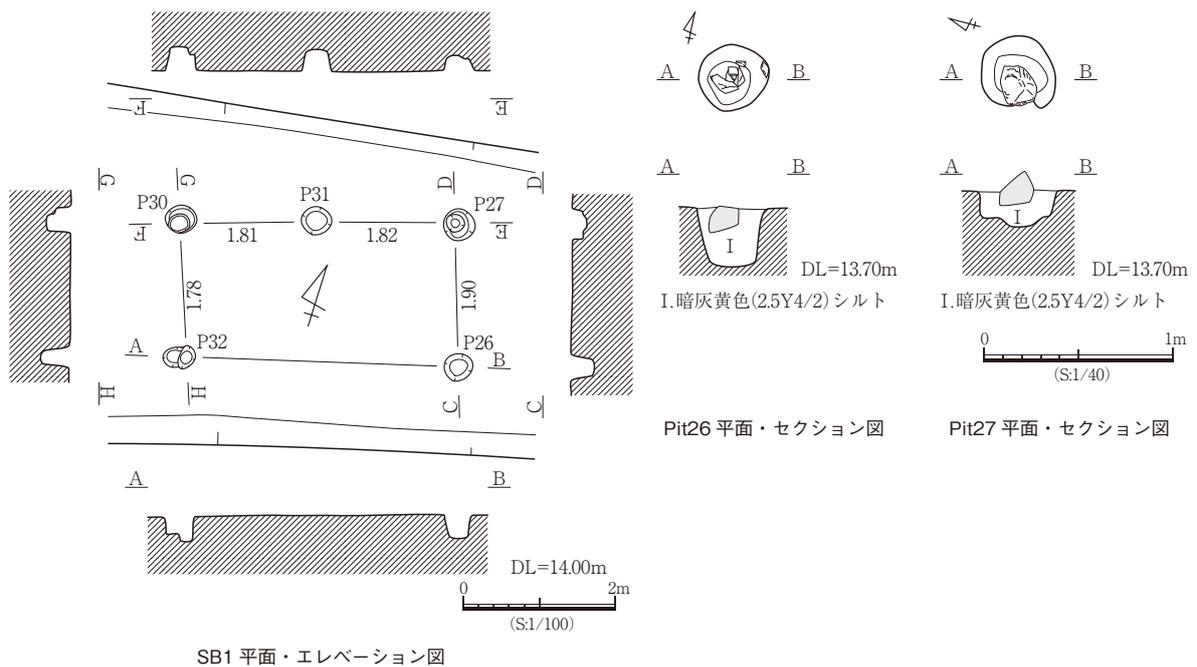


図39 II-1区 SB1遺構図

西棟建物跡である。棟方向はN-72°-Eを指し、梁桁方向は調査区外に延びる。検出規模は、桁行11.2m、梁行1.66mであり、柱間寸法は桁1.99～2.46m、梁1.66mを測る。検出面積は18.59㎡であり、建物の全体規模は不明であるが、桁行5間の規模はII区で最大である。柱穴の形状は円形及び楕円形で直径0.26～0.49m、深さ5.9～49.1cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトであり、P12・13・18から土師器の細片4点が出土した。P25は直径8.0～20.0cmを測る角礫が集中して出土した。柱の根固めとして使用されたものと思われる。P13・18は直径18.3cmの柱痕が認められた。

SB3 (図40)

調査区北東端B II-25-16～C II-21-6グリッドにかけて検出した桁行1間以上×梁行2間の南北棟建物跡である。棟方向はN-18°-Wを指し、桁桁方向は調査区外に延びる。検出規模は、桁行2.35m、梁行3.06mであり、柱間寸法は桁1.42～2.35m、梁1.33～1.73mを測る。検出面積は7.19㎡である。柱穴の形状は円形で直径0.18～0.42m、深さ8.5～25.1cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトであり、各ピットから遺物は出土しなかった。

SB4 (図42)

調査区東端C II-21-2～C II-16-24グリッドにかけて検出した桁行3間×梁行3.5間以上の総柱東西棟建物跡であり、北東に1間の張り出し

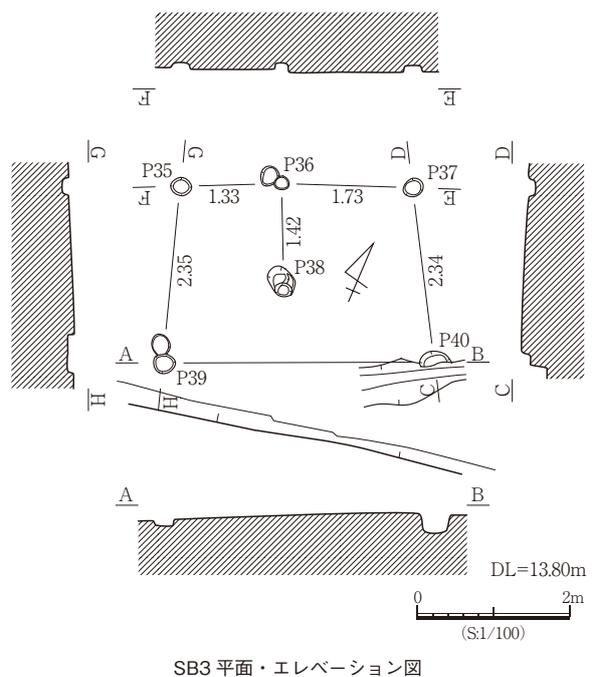


図40 II-1区 SB3遺構図

を持つ。棟方向はN-66°-Eを指し、梁行方向は調査区外に延びる。身舎の規模は、桁行9.28m、梁行5.86mであり、柱間寸法は桁2.55～3.65m、梁1.03～2.96mを測る。また、張り出し部の柱間は、梁側1.03～1.11m、桁側2.55mを測る。身舎の面積は28.30㎡であり、張り出し部は2.63㎡を測る。柱穴は16個であり、形状は円形及び楕円形で直径0.14～0.52m、深さ4.1～50.1cmを測る。P7は直径8.0～22.0cmを測る角礫が集中して出土した。柱を安定させるために使用されたものと思われる。埋土は灰黄褐色シルトであり、瓦器椀と瓦質土器鍋が出土した。P6からは、混入と思われる弥生土器細片の他に瀬戸灰釉片1点・土師質土器片1点が出土した。また、P22からは土師器杯の底部片を含む細片が4点出土した。14世紀後半代の建物跡である。

II-2区 SB1 (図43)

調査区東端B II-22-22～B II-22-25グリッドで検出した桁行4間×梁行2間の東西棟建物跡

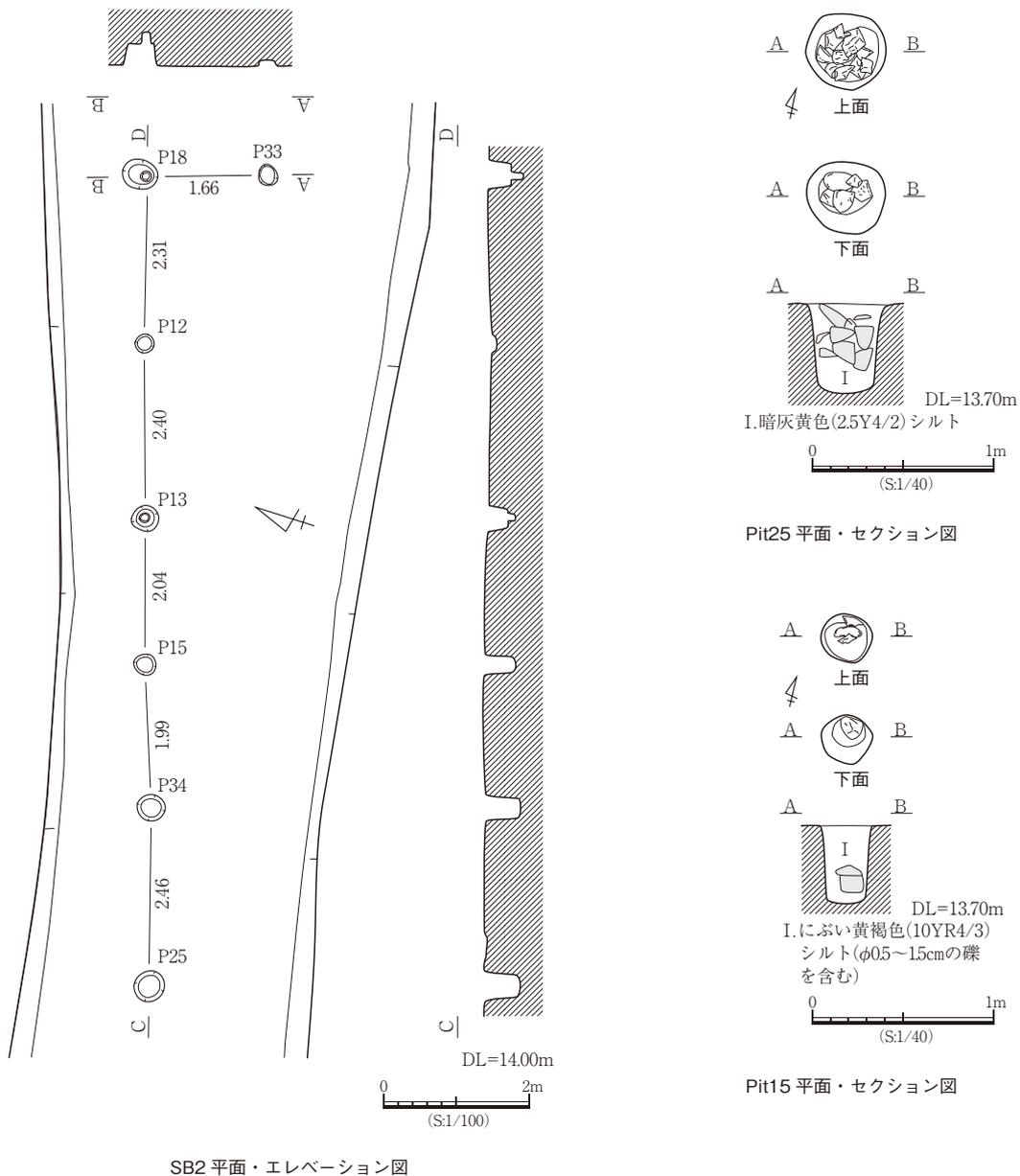


図41 II-1区 SB2遺構図

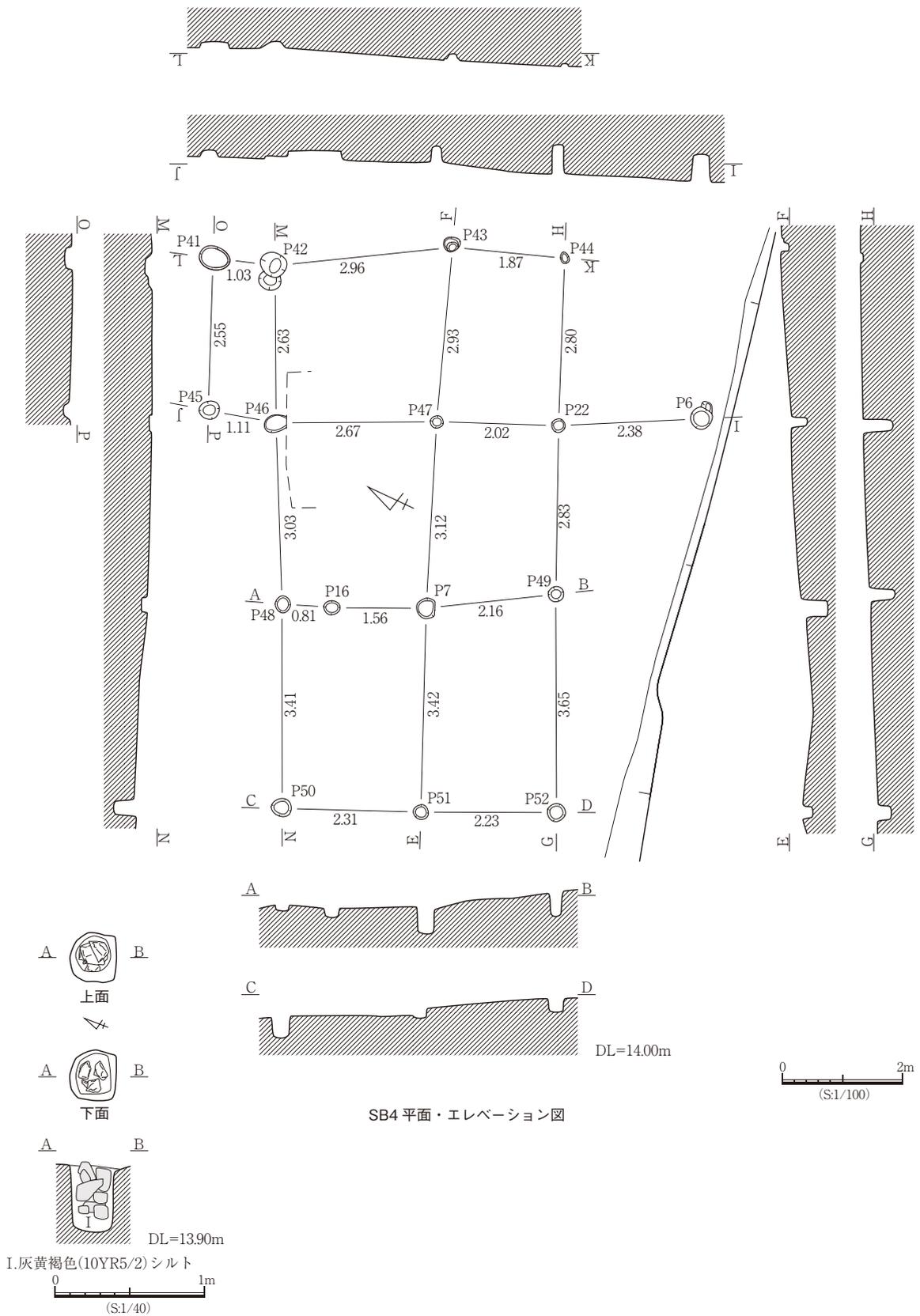


図42 II-1区 SB4遺構図

である。遺構検出面は、標高13.86m前後で検出した。棟方向はN-75°-Eを指す。身舎の規模は、桁行6.88m、梁行3.68mであり、柱間寸法は桁1.39～1.91m、梁1.61～1.89mを測り、身舎の面積は25.31㎡である。柱穴は12個であり、形状は円形及び楕円形で直径0.22～0.54m、深さ8.6～49.1cmを測る。P1・3・5・6は直径8.0～18.0cmを測る角礫が出土した。柱を安定させるために使用されたものと思われる。埋土は、オリブ褐色シルト質粘土が主体であり、P2・3・6・7からは土師質土器細片9点・鉄釘1点・瓦質土器片が出土した。また、P1はP4との切り合いが認められ、P4からは青花碗(C群)の破片が出土していることから、16世紀中葉～後半に建替えられた建物跡と考えられる。

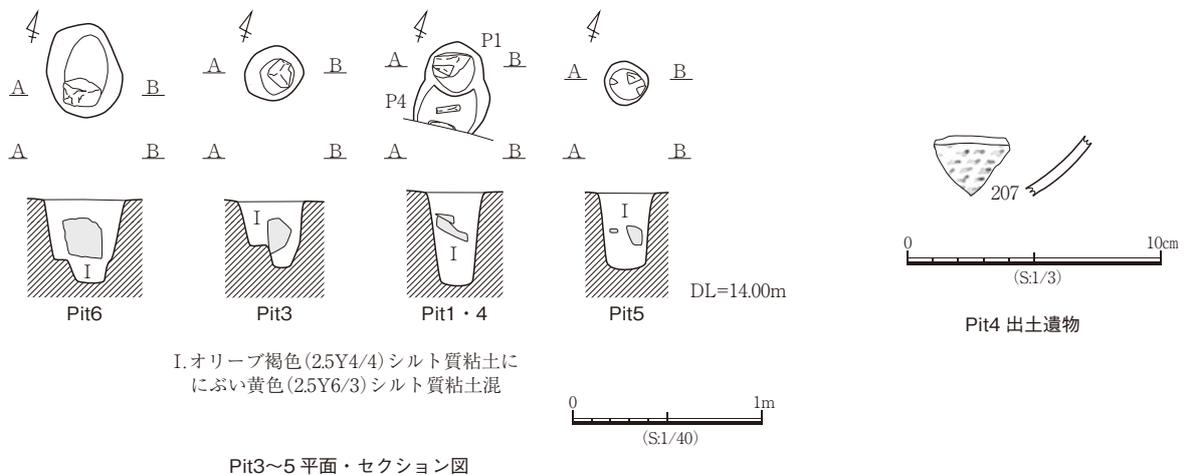
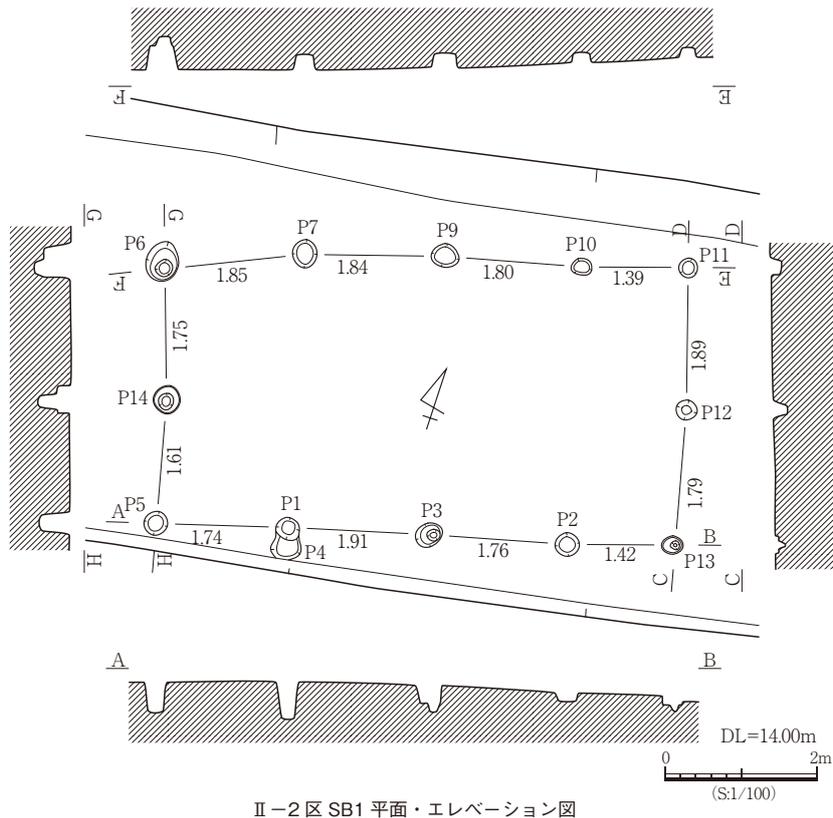


図43 II-2区 SB1遺構図・出土遺物

ii 溝

II-1区では、32条の溝を検出した。この中には畝状遺構・区画溝・道路状遺構に伴う溝などがあげられる。ここでは、出土遺物が出土した特徴的な溝についてのみ記載する。

SD1～17

調査区東部Ⅲ層上面で検出した畝状遺構である。C II-16-25～C II 2-21-10グリッドにかけて断続的に検出されており、延長0.96～3.63m、幅は0.13～0.27m、深さ2.5～18.3cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトであり、SD2から混入と考えられる弥生土器の細片1点、SD6から土師器細片1点が出土した。時期の詳細は不明であるが、SB4のプランを切っている事から15世紀代以降、畝地として利用されていたものと考えられる。

SD18 (図44)

調査区中央南部で検出した断面V字形を呈した溝である。C II-21-11グリッドで調査区外に曲がり、全体規模は不明であるが、検出延長9.09m、幅0.26～0.54m、深さは最深部で35.1cmを測る。方向は、N-61°-Eであり、調査区南壁で溝断面を観察すると、ほぼ直角に曲がるものと思われ、区画溝になるものと思われる。東端から西端に向かって傾斜しており、比高差は17.3cmを測る。埋土は0.5～1.5cmの礫が混じるにぶい黄褐色粘土質シルトである。瓦質土器鍋の破片12点・土師器片18点が出土した。

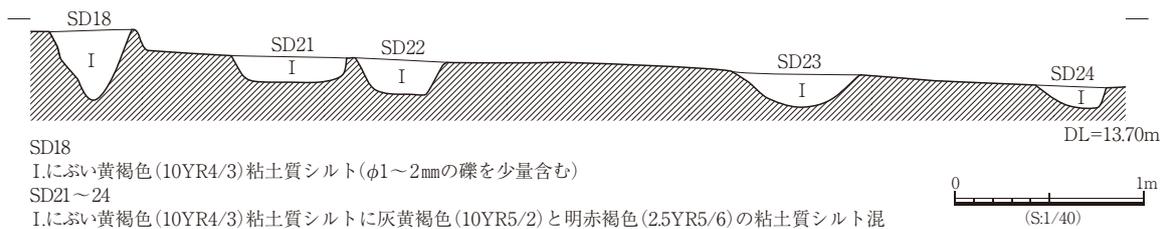


図44 II-1区 SDセクション図

SD21～24 (図44)

調査区中央部で検出した溝であり、N-61～65°-Eで北東から南東方向に続く溝である。同一の方向性を持つ事から、同性格・時期の溝であると考えられる。SD21は、検出延長12.56m、幅0.25～0.62mを測り、深さは最深部で13.4cmを測る。東端から西端に向かって傾斜しており、比高差は4.1cmを測る。溝の断面形は浅い逆台形状を呈し、埋土は、にぶい黄褐色粘土質シルトに灰黄褐色粘土質シルト・明赤褐色粘土質シルトが混じる。遺物は、常滑焼甕の破片1点・瓦質土器片1点・土師器片1点が上層で出土した。SD22は、検出延長18.55m、幅0.22～0.76mを測り、深さは最深部で18.4cmを測る。東端から西端に向かって傾斜しており、比高差は8.6cmを測る。溝の断面形は逆台形状を呈し、埋土は、にぶい黄褐色粘土質シルトに灰黄褐色粘土質シルト・明赤褐色粘土質シルトが混じる。遺物は、瓦質土器片(播鉢・鍋) 8点・土師器片17点・備前焼甕片1点・鉄釘1点が上層で出土した。SD23は、検出延長23.06m、幅0.30～0.98mを測り、深さは最深部で9.6cmを測る。東端から西端に向かって傾斜しており、比高差は8.6cmを測る。溝の断面形は皿状を呈し、北側面が鋭角気味に立ち上がる。埋土は、にぶい黄褐色粘土質シルトに灰黄褐色粘土質シルト・明赤褐色粘土質シルトが混じる。遺物は、常滑焼甕1点・瓦質土器片2点・土師器片6点・備前焼甕片1点・須恵器片1点が上層で出土した。

これらの溝は南側丘陵裾部から北側の宇治川側に傾斜した地形に並行して検出され、検出面上に

IV層・IV-2層が堆積している。常滑焼甕・瓦質土器など14世紀後半～15世紀前半代の遺物の出土が認められ、溝の埋土も共通することから、溝の機能時期は当該期と考えられる。

iii 土坑

II-1区では土坑13基、II-2区では2基の土坑を検出した。中世の土坑が中心である。ここでは、特徴的な土坑についてのみ以下に記載する。調査区東部で検出されたSK1～7については、V層上面で検出した。その他はVII層上面、中世の包含層になっているIV層下で検出した。

SK1 (図45)

調査区北東部、C II-17-16グリッドで検出した平面隅丸方形を呈する土坑である。長軸0.49m、短軸0.89m、深さは7.7cm前後を測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、灰黄褐色シルトであり、出土遺物は無かった。

SK2 (図45)

調査区北東部、C II-16-19グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。長軸1.38m、短軸1.11m、深さは11.6cm前後を測り、断面形は浅い台形状を呈する。埋土は、灰黄褐色シルトが主体であり、遺物は出土しなかった。

SK4 (図45)

調査区中央南部、C II-21-7グリッドで検出した平面円形を呈する土坑である。P10に切られ、SD18を切る。長軸1.14m、短軸1.14m、深さは23.5cm前後を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は、暗褐色粘土質シルトが主体であり、炭化物と2mm大の風化礫を含む。遺構からは常滑焼甕1点・瓦質土器4点・土師器細片11点などが出土した。

SK5 (図45)

調査区北東部、C II-17-16グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。規模は、長軸0.76m、短軸0.63m、深さは36.0cm前後を測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、黄褐色粘土質シルトに5mm大の礫が混じり、炭化物を含む。埋土中からは遺物の出土は認められなかった。

SK6 (図45)

調査区東部、C II-2-5グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。規模は、長軸0.84m、短軸0.53m、深さは5.5～15.0cm前後を測り、断面形は北東側が浅く皿状を呈し、南西側が深くU字状を呈する。埋土は、灰黄褐色シルトであり、土師器細片1点出土したのみであった。

SK7 (図45)

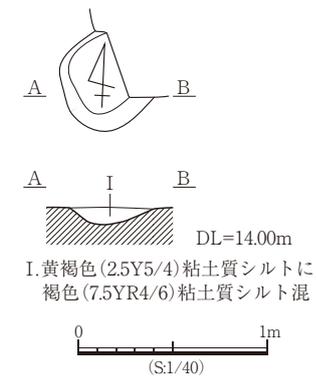
調査区東部、C II-16-24グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。規模は長軸0.99m、短軸0.74m、深さは21.3cm前後を測り、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は、黄褐色粘土質シルトで炭化物を含んでいる。瓦質土器細片1点・土師器細片4点が出土した。

SK13 (図45)

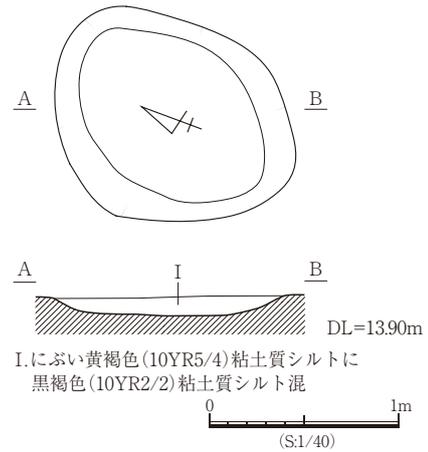
調査区西端部、B II-24-13グリッドで検出した平面円形を呈する土坑である。規模は長軸0.84m、短軸0.83m、深さは8.9cm前後を測り、断面形は東側がやや浅い皿状を呈する。埋土は、暗灰黄色シルトである。遺物は羽口4点・土師器細片2点が出土した。

II-2区 SK1 (図46)

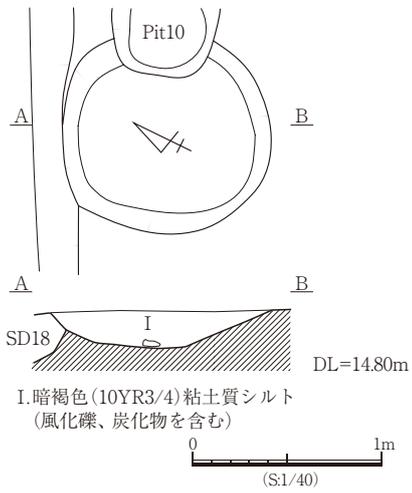
調査II-2区中央部、B II-22-25グリッドで検出した平面円形を呈する土坑である。規模は長軸0.79m、短軸0.77m、深さは20cm前後を測り、断面形は東側がやや浅い皿状を呈する。埋土は、黄褐



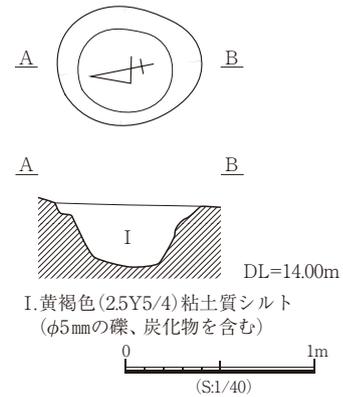
SK1 平面・セクション図



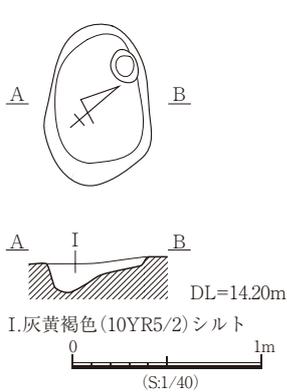
SK2 平面・セクション図



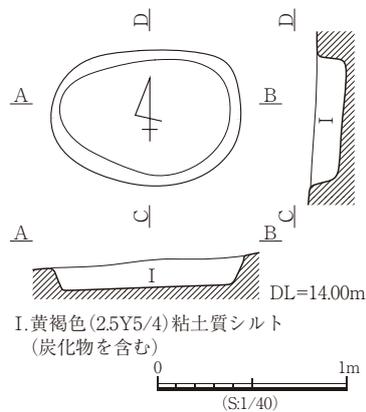
SK4 平面・セクション図



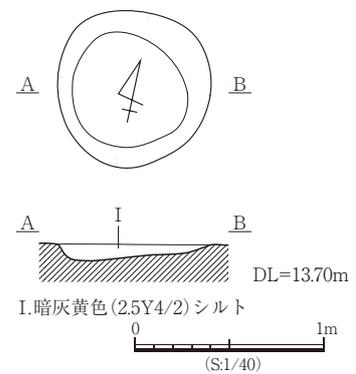
SK5 平面・セクション図



SK6 平面・セクション図



SK7 平面・セクション図



SK13 平面・セクション図

図45 II-1区 SK遺構図

色シルトである。

II-2区 SK2 (図46)

調査II-2区中央北寄り、B II-22-23グリッドで検出した平面楕円形を呈する土坑である。北側は調査区外に続いており全体規模は不明であるが、検出規模は長軸1.40m、短軸0.94m、深さは20cm前後を測り、断面形は東側がやや浅い皿状を呈する。埋土は、黄褐色シルトである。下層はオリーブ褐色シルト質粘土であり、炭化物和少量の土師質土器細片を含んでいる。

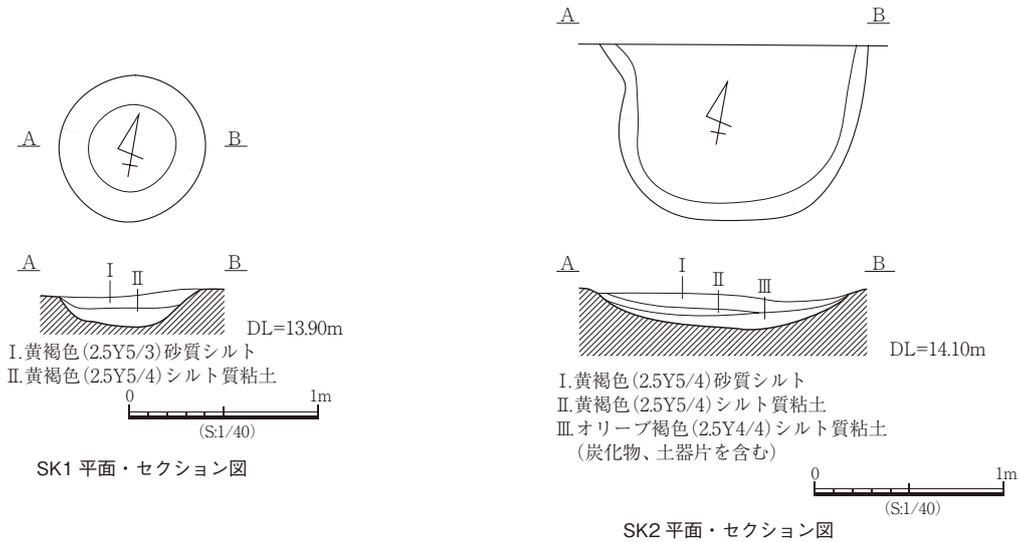


図46 II-2区 SK 遺構図

iv ピット

II区ではピットを179個検出した。大半が掘立柱建物跡の柱穴と思われ、柱痕及び礎盤として使用された石が検出された柱穴もあった。ここでは、特徴的なピットについて記述する。他のピットについての形状・規模などの内容については、遺物が出土したピットを中心に遺構計測表に記載した。

Pit28 (図47)

調査区西端、B II-24-18グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長軸0.48m、短軸0.40m、深さ61.6cmを測る。埋土は、暗褐色粘土質シルトであり、検出面で、直径35cm前後の角礫が柱痕の上から出土した。また、柱痕底に直径20cmの細長い角礫が出土し、柱の根固め・調整に使用された石と考えられる。掘立柱建物の柱穴と考えられ、柱抜き取り後、上面の石は礎盤として使用されている可能性がある。

(4) 遺物

i II-1区出土遺物

II区では、大半の遺物が包含層IV層から出土している。II-1区では、主に土師質土器・東播系須恵器・瓦質土器・瀬戸・備前焼・常滑焼・青磁を中心とする貿易陶磁器など、14～15世紀代を中心とする遺物が出土した。これらの遺物はIII・IV層から出土している。また、下層のVII層では弥生土器が出土した。ここでは、器種・器形で分類し、特徴的な遺物について記述する。法量・特徴などについては遺物観察表に記載した。

土師器 (図48)

No.154は土師器碗である。断面逆台形状の短い高台が付く。

土師質土器 (図48)

No.155・156は杯である。ロクロ成形、回転ナデ調整が施される。底部切離しは回転糸切りによる。No.157は脚付き土釜の脚部である。胴部との取り付け部周辺にタールの付着が認められる。

須恵器 (図48)

No.158～160は東播系須恵器の鉢である。口縁部は玉縁状を呈する。いずれも回転ナデ調整が施される。No.159は器壁が薄く、ナデ調整痕が顕著である。No.160は焼成が不完全で瓦質化している。

瓦質土器 (図48・49)

No.161～175は瓦質土器である。No.161～166は播鉢で、内面に4～5条を基調とする条線が施される。全体的にヨコナデ調整であり、粘土帯貼付が認められないもの、口縁部外面に粘土を貼付したNo.164～166の二通りのタイプが認められる。No.165は体部中位から下半の器壁が薄く、内型成形の可能性がある。体部下半にはタール・煤の付着が認められ、煮炊き具として使用した可能性も考えられる。No.167～173は鍋である。No.167は内湾し、口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚する。端部の接合部は沈線状に凹む。No.168～172は口縁部が短く直立するタイプである。基本的に口縁部は粘土帯を貼付し、肥厚している。いずれも口縁部は丁寧なヨコナデ調整が施され、胴部は丸く膨らむように成形されている。No.173は鍋の底部片であり、器壁は薄い。No.174は口縁部が受け口状を呈した鍋である。口縁部は丁寧にヨコナデが施され、口縁端部外側をつまみ上げ、尖り気味に仕上げる。畿内系の搬入品である。No.175は羽釜であり、口縁部はやや内湾し、鐙の端部は欠損する。外面は凹線が施される。和泉・河内型で搬入品と考えられる。

古瀬戸 (図50)

No.176・177は天目茶碗である。同一個体であると考えられ、No.176の体部下半は露胎、No.177の高台は削り出し、腰折れ気味に立ち上がる。底部はベタ底である。

白磁 (図48)

No.178・179は碗である。双方とも底部片であり、No.178は見込みに沈線が認められる。外面下半は露胎、高台は欠損している。No.179は高台外面まで全面施釉される。IV類に分類される。

青磁 (図50)

No.180は同安窯系青磁碗である。内外面ともに櫛描文が施される。下半は露胎している。No.181は稜花皿であり、口縁部に抉りが入り稜花風に仕上げる。内面には草花文が施される。No.182～184は無文の青磁碗であり、全体的に薄い透明釉が施される。

須恵器 (図50)

No.185は須恵器甕の口縁部である。口縁端部は上方につまみ上げる。内外面に自然釉が付着する。

備前焼 (図50)

No.186～188は播鉢である。No.186は内側に拡張し内傾する面を成す。内面は口縁部下端まで条線が認められる。外面口縁の一部は指オサエにより歪む。IV a期。No.187の口縁部は上方に拡張され、端部は尖り気味に仕上げる。内面は沈線状に凹む。体部内面には斜めに条線が施される。

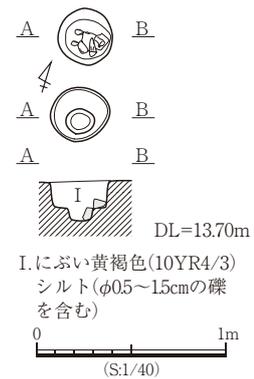


図47 II-1区 Pit28遺構図

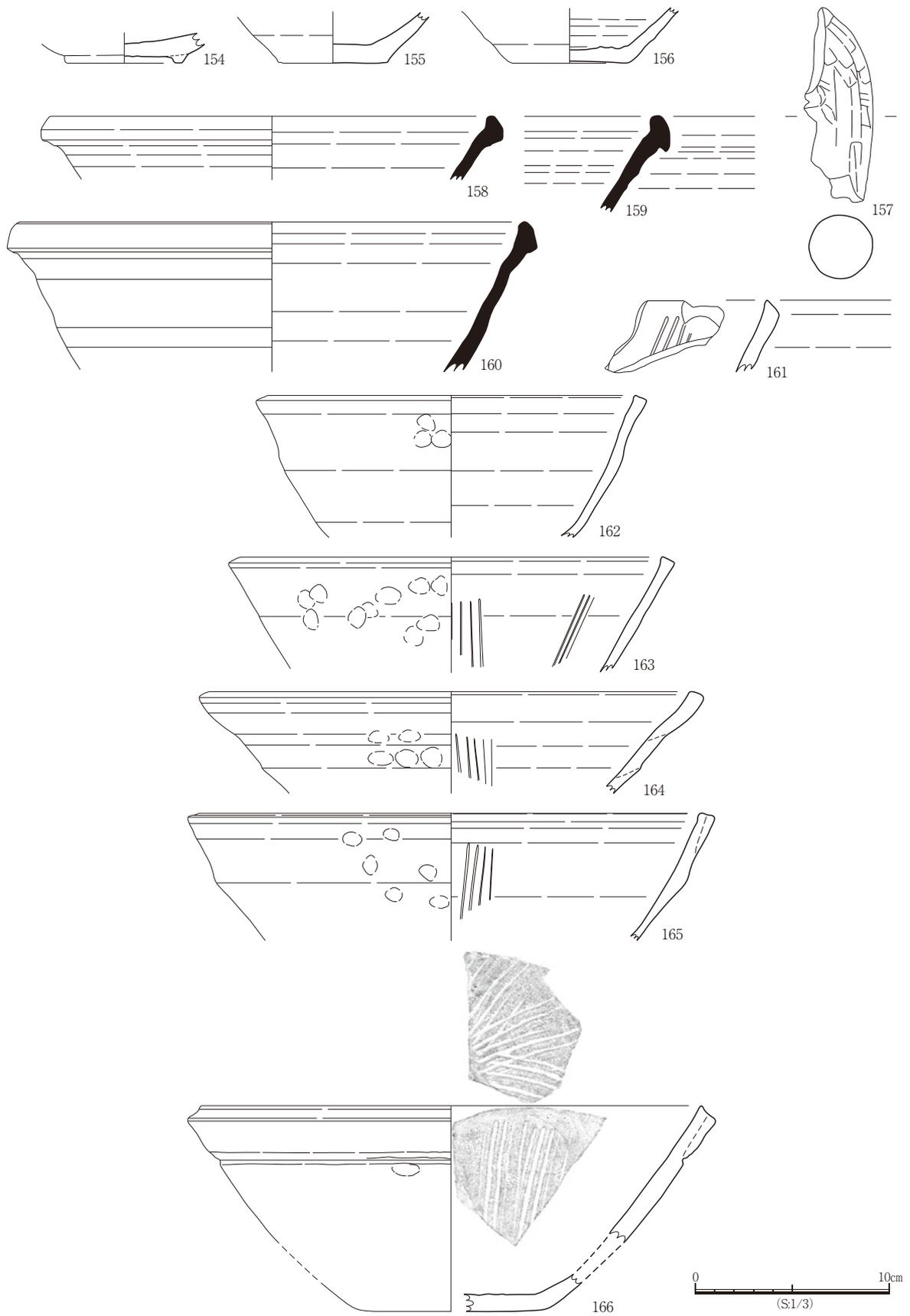


図48 II-1区 包含層出土遺物1

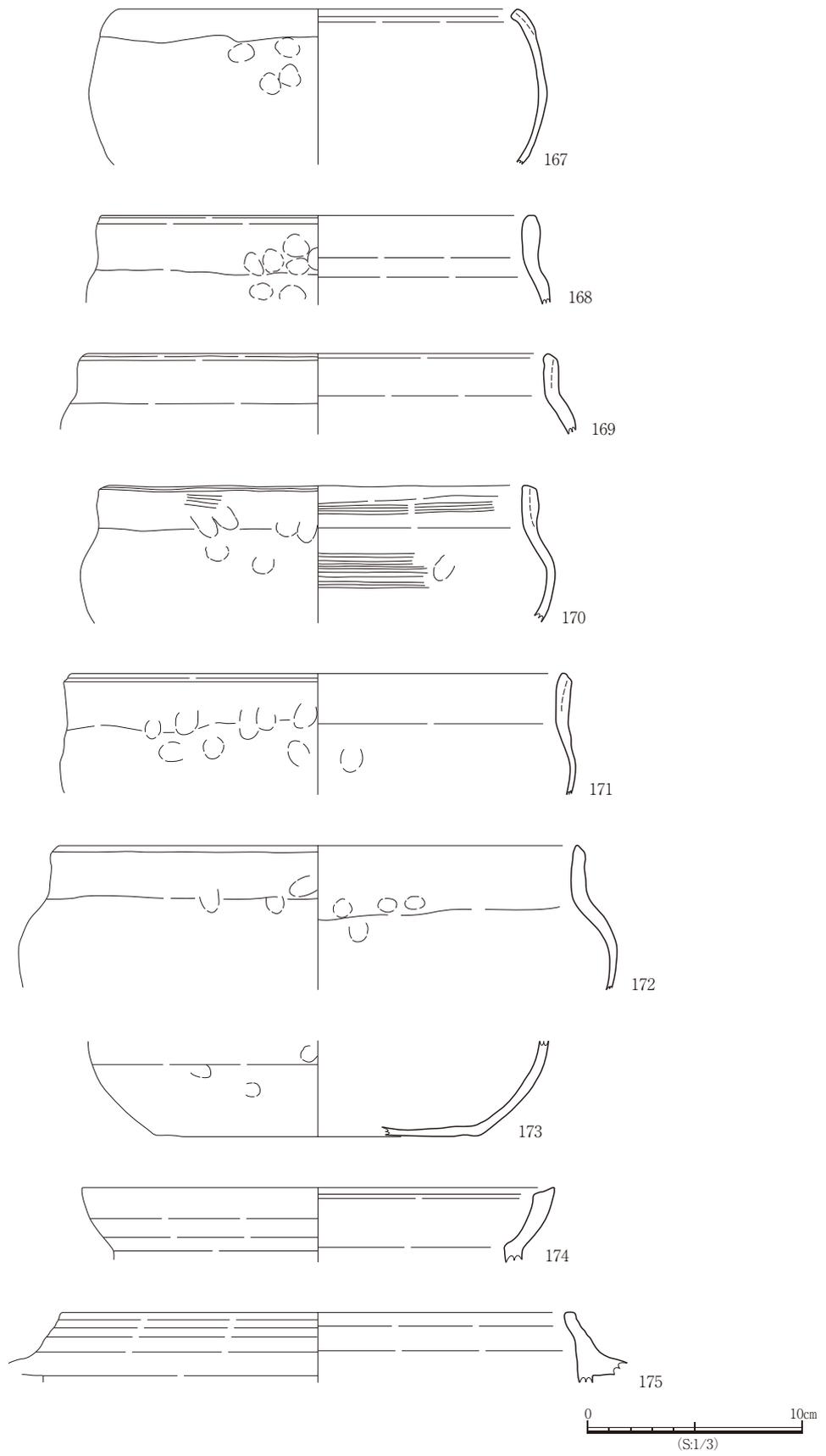


図49 II-1区 包含層出土遺物2

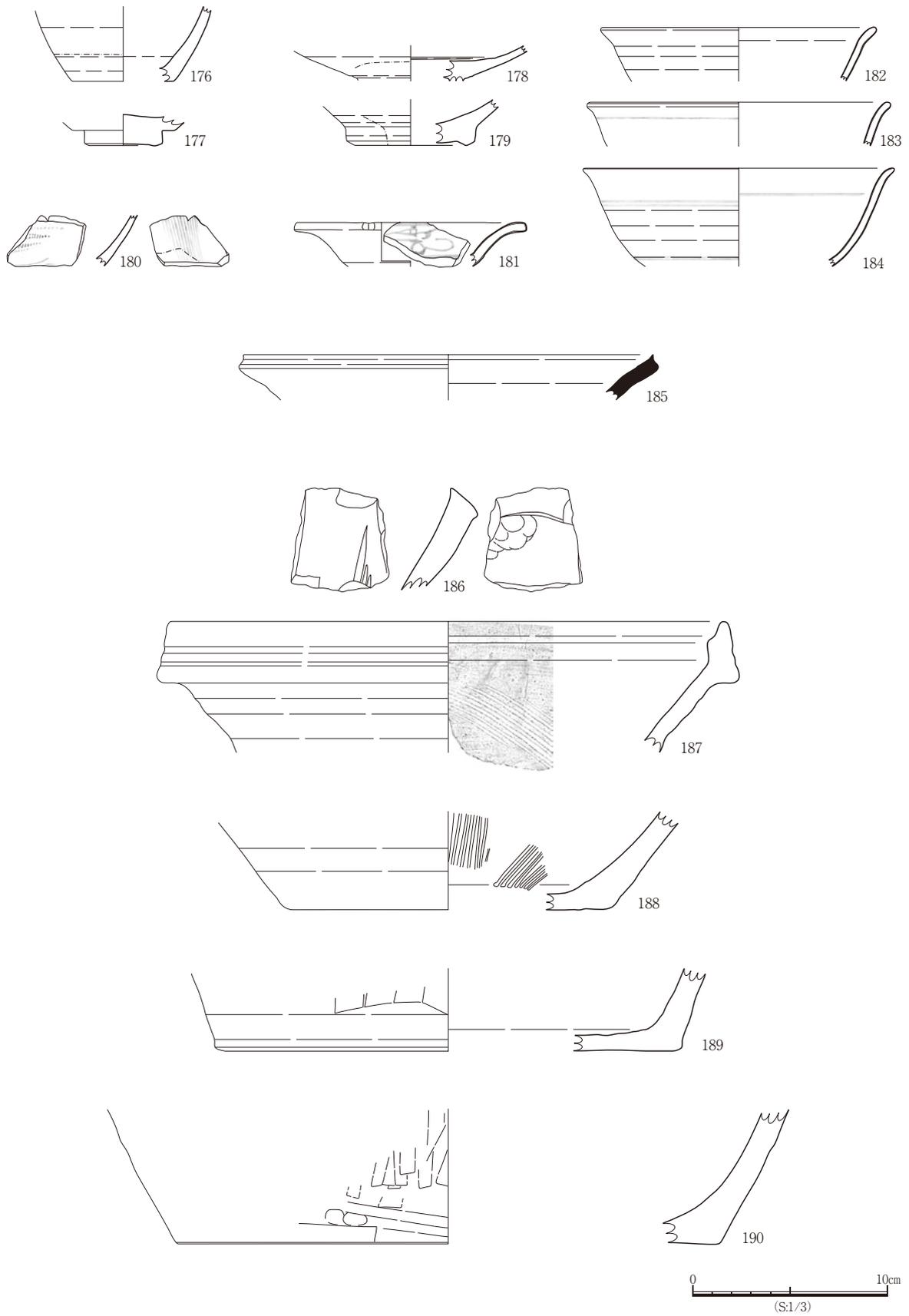


図50 II-1区 包含層出土遺物3

No.188は播鉢底部であり、内面は7条1単位の条線が施される。使用されており、内面は滑らかである。No.189は壺の底部と思われる。外面は縦方向のナデ調整、底部周縁は回転ナデ調整が施される。No.190は甕の底部であり、外面はヘラか板状の工具によるナデが施される。底部周縁は回転ナデによる。

常滑焼 (図51)

No.191は広口壺の口縁部である。口縁部の縁帯は垂下して頸部に接合する。常滑9型式。No.192は甕の胴部であり、外面には帯状連続施文がみられる。内面は、粘土帯の接合痕が顕著であり、指頭によるナデが施される。No.193は甕の底部片と思われ、焼成は還元気味である。外面は横方向のケズリが認められる。

土製品 (図51)

No.194～197は管状土錘である。No.194以外は完存している。全長4.4～5.2cm、全幅1.3～1.75cm、孔径0.28～0.5cm、重量は2.2～6.3gを測る。No.195は還元焼成である。

石製品 (図51・52)

No.198は滑石製の石鍋である。断面台形状の鏝が付く。外面には煤が付着する。No.199～202は砥石である。No.199・201は凝灰岩系の仕上げ砥である。No.199は両端を除いた4面を使用している。擦痕が顕著である。No.201は扁平な円礫の両面と一側片を使用している。側片側の使用頻度が高く平になっている。No.200・202は砂岩製であり、荒砥として使用されたものと思われる。No.200は扁平な円礫の両面を使用している。No.202は片面のみの使用であり、一面だけが平になる。

鉄滓 (図52)

No.203～206は鉄滓である。No.203・204は全長3.2～4.8cm、全幅2.6～3.35cm、重量27.5～29.4gを測る。No.205・206は全長6.7～6.8cm、全幅5.9～7.75cm、重量132～192gを測り、鍛冶滓の可能性はある。

ii II-3区出土遺物 (図53)

No.208は土錘である。一側辺が扁平である。片方の端部は欠損しており、全体形状は不明であるが残長3.15cm、全幅1.75cm、孔径0.41cm、重量7.7gを測る。II層から出土した。No.209は土師質土器羽釜である。口縁部は短く直立し、端部は内側につまみ出す。外面は沈線状に凹み、鏝は面を成し、斜め上方に向く。摂津型C2類に分類される。No.210は須恵器皿であり、口縁部は僅かに内湾気味になる。No.211も須恵器皿であり、内面に1条の沈線が施される。IV層からの出土である。No.212は須恵器の高杯であり、口縁部は大きく外反する。脚が付くが欠損している。回転ナデ調整が施される。No.213は須恵器杯であり外方に開く高台が付く。No.212・213はV層からの出土である。No.214～216は弥生土器であり、VII層の土器集中から出土した。No.214・215は鉢であり、口縁端部は面を成し、ハケ調整が施される。No.216は甕の底部である。丸底であり、内面底部は横方向のケズリ、胴部はハケ調整が施される。

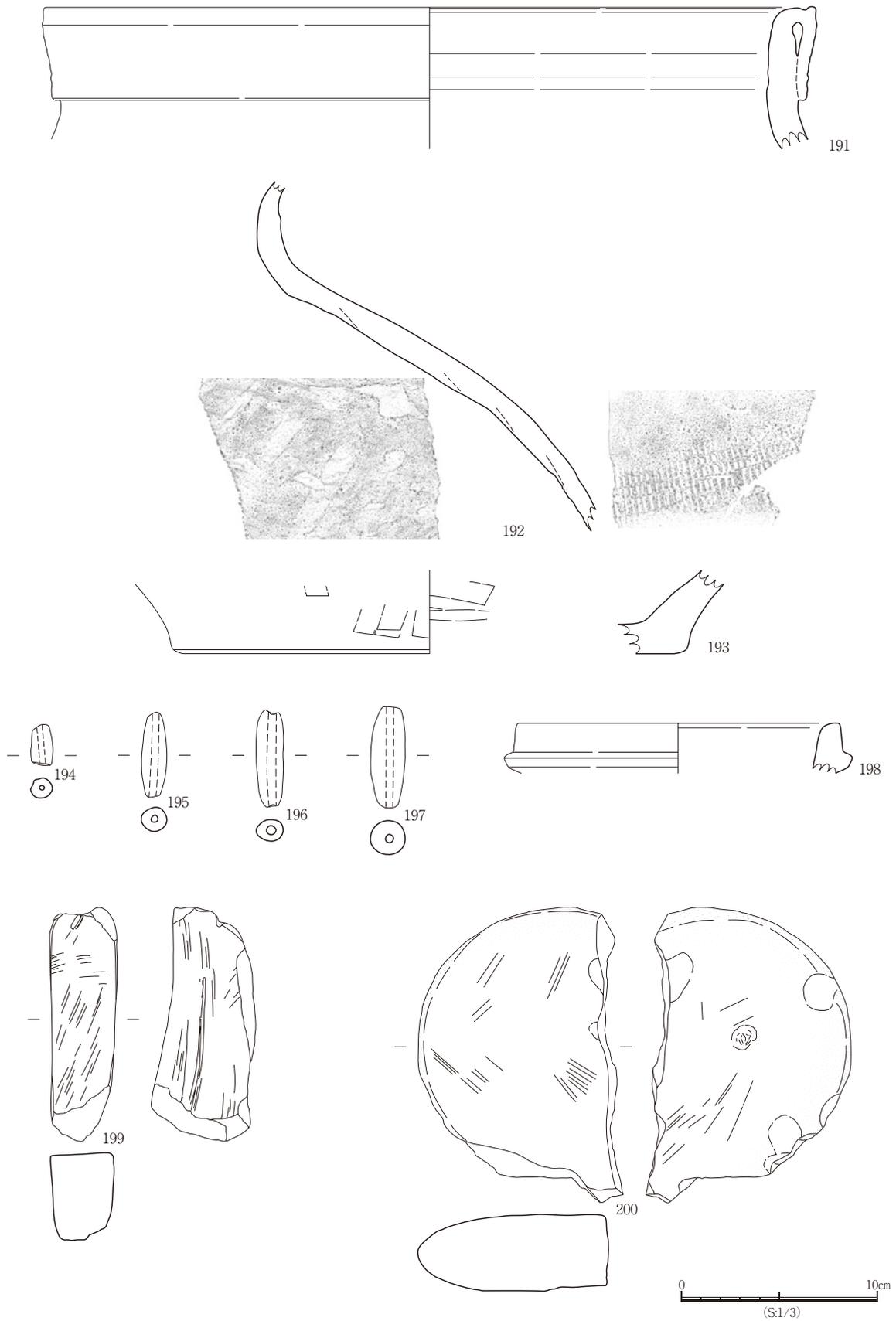


図51 II-1区 包含層出土遺物4



図52 II-1区 包含層出土遺物5

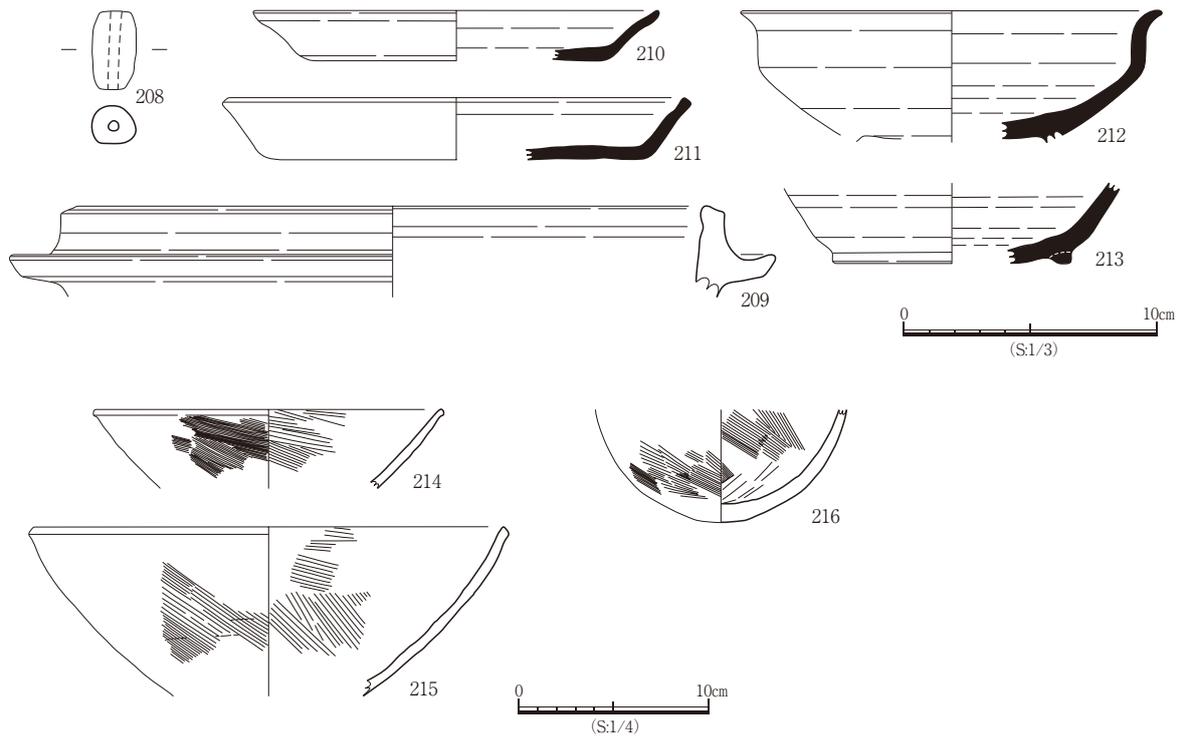


図53 II-3区 包含層出土遺物6

遺物觀察表・遺構計測表

I. 遺物観察表凡例

1. 遺物観察表の法量については、基本的に口径・器高・底径について計測した。残存長については()で記載する。その他、器形により必要なものは直接項目に付け加えた。
土錘については全長・全幅・孔径、石製品については全長・全幅・全厚の順にそれぞれ記載した。
2. 色調については『新版標準土色帳』(農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に準じた。
3. 胎土については肉眼観察で判別できるものについてのみ記載した。
4. その他、備考には器種の分類・年代のわかるものについて記載した。
5. 中世の土器・陶磁器の分類については『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995、貿易陶磁器の分類については『国立歴史民俗博物館資料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁器』 1993を参照した。

II. 遺構計測表凡例

I 区遺構埋土

- A:10YR3/3 暗褐色粘土質シルト(ϕ 1mmの礫を含む)
- B:10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト(ϕ 1~2mmの礫を少量含む)
- C:10YR3/4 暗褐色粘土質シルト(ϕ 1~2mmの礫と炭化物を少量含む)
- D:10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト
- E:10GY6/1 緑灰色粘土
- F:7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト(ϕ 10~20mmの礫を含む)
- G:7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルト(ϕ 5~10mmの礫を含む)

II 区遺構埋土

- A:10YR5/2 灰黄褐色シルト
- B:2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
- C:10YR4/3 にぶい黄褐色シルト(ϕ 5~15mmの礫を含む)
- D:2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質粘土
- E:2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面/外面	胎土	特徴	備考
			口径	器高	底径				
1	I区 Pit 36	土師質 土器 杯	(13.6)	2.7	5.4	10YR7/4 にぶい黄橙色 〃	細砂粒	焼成良好。回転ナデ調整。	11c ~ 12c
2	I区 Pit 69	須恵器 壺	(12.6)	(2.3)	—	7.5Y7/1 灰白色 〃	細砂粒	ロクロ成形。回転ナデ調整。	
3	I区 Pit 88	土師器 椀(底部)	(0.9)	—	(4.8)	10YR7/3 にぶい黄橙色 〃	細砂粒	断面逆台形の低い高台が付く。 外面高台脇に指オサエ。	
4	I区 Pit 88	土師質 土器 椀	(12.4)	(3.3)	—	10YR7/4 にぶい黄橙色 〃	—	回転ナデ調整。	12c 後
5	I区 Pit 88	瓦器 椀	—	(2.4)	—	N5/0 灰色 〃	—	口縁部は肥厚する。口縁部内外面 の一部にミガキ。	12c 後
6	I区 Pit 155	土師器 杯	—	(2.5)	(6.8)	5YR6/6 橙色 〃	φ 0.5mm の礫少量	平底の底部から斜め上外方に立ち 上がる。回転ナデ調整。	15c
7	I区 Pit 155	瓦器 椀	13.0	(3.5)	—	10Y6/1 灰色 7.5Y7/1 灰白色	—	口縁部外面に二重ヨコナデ。一部 にヘラ磨き残る。底部と体部の境 目が屈曲する。	13c 末~14c
8	I区 Pit 212	土師器 椀	—	(1.8)	7.2	7.5YR8/6 浅黄橙色 7.5YR7/4 にぶい黄橙色	細砂粒	円盤状高台。外底の一部にタール 痕。	10c 後
9	I区 Pit 81	土製品 土錘	(2.6)	1.1	0.45	— 10YR7/3 にぶい黄橙色	—	両端部欠損。重量 2.6g。	
10	I区 Pit 81	土製品 土錘	3.05	1.05	0.43	— 7.5Y5/1 灰色	—	上部欠損。重量 2.2g。	
11	I区 Pit 136	土製品 土錘	5.3	1.2	0.43	5YR6/8 橙色 〃	—	焼成良好。重量 6.4g。	
12	I区 SD3	土師器 皿	16.0	—	13.0	5YR6/8 橙色 〃	細砂粒	焼成不良。ナデ調整。	
13	I区 SD3	土師器 杯	13.2	3.3	8.8	7.5YR7/6 橙色 〃	—	回転ナデ調整。口縁部の一部に タール痕。	
14	I区 SD3上	須恵器 皿	21.0	1.9	17.6	10Y7/1 灰白色 〃	—	完形。口縁部内面に沈線。	
15	I区 SD3上	須恵器 杯	17.8	5.2	10.6	5GY5/1 オリーブ灰色	細砂粒	杯B類。1/2 完存。回転ナデ調整。 外底の一部にヘラ削り痕。	8c 末~9c
16	I区 SD3上	須恵器 壺	18.1	3.0	摘み径 2.0	5Y7/2 灰白色 〃	細砂粒	回転ナデ調整。形骸化された宝珠 形のツマミが付く。	8c 後
17	I区 SD3	須恵器 甕	27.6	(6.4)	—	5GY5/1 オリーブ灰色 〃	—	外面頸部ハケ調整後、ヨコナデ調 整。	
18	I区 SK1	瓦質土器 羽釜	—	—	—	5Y6/1 灰色 〃	φ 0.1 ~ 2mmの砂 粒	口唇部は沈線状に凹む。	10c 後
19	I区 SK5	黒色土器 椀	(14.8)	(2.0)	—	7.5Y2/1 黒色 10YR6/6 明黄褐色	—	黒色土器 A 類。内面ヘラ磨き。搬入 品。	9c 後
20	I区 SK6	土師器 甕	19.0	(3.3)	—	5YR7/4 にぶい橙色 〃	φ 0.5mm の チャート	口縁部は外反し端部は尖り気味に 仕上げる。ナデ調整。	9c
21	I区 SK6	土師器 甕	21.0	(1.9)	—	2.5Y6/3 にぶい黄色 〃	—	外反した口縁端部は内傾し尖り気 味に仕上げる。ナデ調整。	
22	I区 SK6	土師器 甕	—	(5.8)	—	10YR5/2 灰黄褐色 7.5YR5/3 にぶい褐色	φ 0.5mm の砂粒 雲母含む	長胴甕。口縁部欠損。外面縦方向の ハケ、内面横方向のナデ。	9c
23	I区 SK15	鉄滓	6.7	5.7	1.9	—	—	重量 82.4g。	
24	I区 SK19	弥生土器 壺	9.2	11.0	3.2	10YR7/3 にぶい黄橙色 〃	—	外面胴体下半の一部にハケ調整。 基本的に内外面ナデ調整。	
25	I区 SK19	弥生土器 甕	9.7	14.4	3.9	2.5Y5/2 暗灰黄色 〃	—	口縁部内面は横方向のハケ。やや 肥厚する。外面は胴部上位から口 縁部にかけて縦ハケ。	
26	I区 SK19	弥生土器 甕	(10.6)	(2.4)	—	10YR6/3 にぶい黄橙色 10YR5/2 灰黄褐色	φ 4mm以 下の礫	口縁端部は外反し丸く納める。ナ デ調整。	

遺物観察表1

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面/外面	胎土	特徴	備考
			口径	器高	底径				
27	I区 SK19	弥生土器 鉢	(15.2)	8.6	7.0	2.5Y5/2 暗灰黄色 10Y6/4 におい黄橙色	φ 4.5mm 以下の 砂礫	内面上部は横方向を基調とするヘラナデ調整。胴部下半以下に指頭圧痕。外面は縦方向を基調にハケ調整後、ヘラナデ調整。口縁部から胴部中位まで黒斑。	
28	I区 SK19	弥生土器 高杯	26.8	(6.2)	—	7.5Y3/1 オリーブ黒色 7.5YR6/6 橙色	—	口縁部は外反し端部を外方につまみ出す。端面には一条の沈線が認められる。口縁部内面は横方向のヘラ磨き、胴部は分割磨きが施される。外面上半にヨコナデ、下半に磨きの一部が残る。	
29	I区 SK19	弥生土器 高杯	—	(11.0)	—	5YR6/6 橙色 〃	—	内面ヘラ磨き。円盤充填。外面に分割ヘラ磨き、体部と脚部の境目に五条のヘラ沈線。脚内面ナデ調整、外面は縦方向のヘラ磨き。	
30	I区 SK19	弥生土器 甕	15.6	27.9	5.5	10YR6/4 におい黄橙色 5YR5/4 におい赤褐色	φ 0.5mm 以下の チャート	口縁部は粘土帯を貼付、指頭による押圧。外面は全体にナデ調整、胴部と頸部の境界にヨコナデ。口縁部と胴部一部に煤付着。器壁は被熱による表面剥離が著しい。	
31	I区 SK19	弥生土器 甕	16.7	(22.8)	18.6	10YR4/4 におい黄橙色 〃	φ 4mm 以下の チャート	口縁部は粘土帯を貼付、指頭による押圧。内面はナデ調整。外面胴部下半はハケ調整後ナデ調整を施す。	
32	I区 SK19	弥生土器 甕	(18.8)	29.8	(6.6)	7.5YR6/4 におい橙色 7.5YR4/3 灰褐色	φ 4mm以 下の礫 φ 8mmの 礫	口縁部は外反し端部は面を成すナデ調整。内面は接合痕があり指頭圧痕が連続する。外面は口縁部から頸部にかけて縦方向のハケ調整後ナデ調整。内面胴部下半は縦にハケ調整後ナデ調整、ケズリが入る。	
33	I区 SK19	弥生土器 壺	19.8	(33.8)	胴径 38.5	—	—	内外面ハケ調整。	
34	I区 SK19	弥生土器 甕	(19.0)	(9.2)	—	10YR6/3 におい黄橙色 10YR5/4 におい黄褐色	φ 4mm 以下の チャート	口縁部は外反し端部は面を成す。内面粘土帯接合部に顕著な指頭圧痕。外面はヘラ状工具による縦方向のナデ調整。煤付着。	
35	I区 SK19	弥生土器 甕	(19.0)	(8.7)	—	5YR5/6 明赤褐色 7.5YR3/1 黒褐色	φ 5mm 以下の チャート	口縁部はナデ調整、端部は面を成す。内面は下半にかけてヘラ状工具による斜状のナデ、外面はヘラ状工具による縦方向のナデ調整。	
36	I区 SK19	弥生土器 甕	(18.8)	(4.4)	—	10YR5/3 におい黄橙色 〃	φ 4mm以 下の礫	外面は縦方向にハケ調整。内面は横方向のハケ調整。口縁の一部にタール付着。	
37	I区 SK19 床面	弥生土器 壺	—	(4.8)	5.2	5YR6/6 橙色 〃	チャート	焼成良好。内面ヘラ削り。外面ハケ調整後ナデ。	
38	I区 SK19	弥生土器 甕	—	(3.05)	(7.0)	10YR4/1 褐灰色 10YR5/3 におい黄褐色	φ 4mm 以下の チャート	内面の一部にタール付着。外面ナデ調整。	
39	I区 SK19	弥生土器 壺	—	(3.75)	6.5	10YR6/6 明黄褐色 〃	φ 5mm 以下の チャート	外面ハケ調整の一部が残る。	
40	I区 SK19	弥生土器 甕	—	(7.7)	4.6	10YR6/3 におい黄橙色 10YR5/2 灰黄褐色	φ 4mm 以下の チャート	内面ナデ調整。外面胴部下半にヘラ状工具によるナデ、底部は比較的薄い。	
41	I区 SK19	弥生土器 甕	—	(10.8)	7.6	2.5Y6/2 灰黄色 10YR6/4 におい黄橙色	φ 4mm 以下の チャート	内面は全体的にナデ調整。外面は縦方向を基調とするヘラ状工具によるナデ。上胴部以上欠損。胴部と底部の境界に横方向のナデ。	
42	I区 SK19	弥生土器 壺	—	(9.4)	—	7.5YR6/6 橙色 〃	φ 6mm以 下の砂礫	胴部上半部は器壁が薄くなる。内底部は凹む。内外面ナデ調整。	
43	I区 SK19	石製品 叩石	14.0	12.3	5.4	—	—	片面中央部凹む。重量 1390g。	

遺物観察表2

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面/外面	胎土	特徴	備考
			口径	器高	底径				
44	I 区 SX1	黒色土器 碗	—	(0.9)	(8.2)	N2/0 黒色 10YR7/4 にぶい黄色	—	黒色土器 A 類。内面の炭素吸着は 不十分。断面三角形の低い高台が 付く。	9c 後
45	I 区 SX1	緑釉陶器 碗	16.0	(2.3)	—	10Y4/2 オリーブ灰色 〃	—	畿内産。A3 類。	
46	I 区 SX1 I 層	土師器 甕	—	(3.2)	—	10YR6/4 にぶい黄橙色 7.5YR5/4 にぶい褐色	φ 0.2 ~ 0.5mm の チャート	長胴甕系口縁部。端部は面を成 す。ナデ調整。	
47	I 区 SX1	青磁 碗	—	(3.0)	—	5GY7/1 明オリーブ灰色 〃	—	B3 類。丸鑿状工具による鑄連弁文。	
48	I 区 SX1	弥生土器 壺	(22.4)	(1.1)	—	7.5YR7/4 にぶい橙色 10YR8/3 浅黄橙色	φ 0.5 ~ 1mm の チャート	口縁端部は面を成し上方に拡張す る。ナデ調整。	
49	I 区 SX1	弥生土器	—	(3.4)	—	5YR6/4 にぶい橙色 10YR7/3 にぶい黄橙色	φ 2 ~ 3 mm の チャート φ 5mm の 碟	外面タタキ (螺旋状に成形)。内面 荒いハケ目。底部は丸底を呈する。	
50	I 区 Pit 367	土師器 杯	11.6	3.0	7.4	7.5YR8/6 浅黄橙色 〃	細砂粒	焼成良好。回転ナデ調整。	9c 後
51	I 区 Pit 243	土師器 杯	—	(1.5)	(9.2)	7.5YR7/6 橙色 10YR7/4 にぶい黄橙	—	回転ナデ調整。底部と体部は分割 成形。外底部はヘラ切りと思われ る。	9c 後
52	I 区 Pit 93	土師器 杯	(18.0)	(3.4)	—	10YR8/2 灰白色 〃	—	回転ナデ調整。	12c 後 ~ 13c 初
53	I 区 Pit 93	土師器 碗	—	(1.8)	(6.6)	2.5Y8/1 灰白色 〃	φ 0.5mm の砂粒	高台畳付は内側につまみ出す。	12c
54	I 区 Pit 189	土師器 碗	—	(1.4)	(6.2)	7.5YR7/4 にぶい橙色 〃	—	内底部は落ち込む。円盤状高台。	10c 後
55	I 区 Pit 437	土師器 甕	21.0	(2.9)	—	7.5YR5/3 にぶい褐色 〃	φ 0.5mm の碟	長胴甕口縁部。端部は上方に拡張 され面を成す。	
56	I 区 Pit 93	土師器 甕	33.0	(5.5)	—	7.5YR6/4 にぶい橙色 7.5YR4/2 灰褐色	チャート	口縁部ヨコナデ。外面縦方向のハ ケ調整。	12c
57	I 区 Pit 27	須恵器 皿	16.2	2.0	—	7/2 灰白色 〃	細砂粒	焼成良好。口縁部内面に一条の沈 線。回転ナデ調整。	8c 後
58	I 区 Pit 407	須恵器 壺	9.6	(2.6)	—	5Y4/1 灰色 〃	—	焼成良好。回転ナデ調整。口縁端部 は尖り気味に仕上げる。	8c 後
59	I 区 Pit 98	黒色土器 碗	—	(0.65)	(9.0)	10YR6/4 にぶい黄橙色 〃	雲母 φ 0.5 ~ 1mm の碟	黒色土器 A 類碗。内面の黒色処理 が不十分。断面三角形の低い高台 が付く。	9c 後
60	I 区 Pit 179	土師質 土器 杯	—	(2.4)	7.2	2.5YR7/6 橙色 2.5YR7/3 淡赤橙色	細砂粒	焼成良好。ロクロ成形。回転ナデ調 整。外底は回転糸切り。	15c
61	I 区 Pit 208	土師質 土器 杯	—	2.0	7.6	7.5YR6/6 橙色 〃	細砂粒	焼成良好。ロクロ成形。回転ナデ調 整。外底は回転糸切り。	15c
62	I 区 Pit 208	土師質 土器 杯	—	(1.7)	(7.6)	10YR6/4 にぶい黄橙色 〃	細砂粒	焼成良好。ロクロ成形。回転ナデ調 整。内底部回転ナデ痕顕著。	13c ~ 14c
63	I 区 Pit 16	土師質 土器 羽釜	19.0	(5.3)	—	7.5YR7/6 橙色 7.5YR8/8 黄褐色	細砂粒	播磨型。焼成良好。内面はナデ調 整。外面は口縁部から断面三角形 状の短い鏝下までヨコナデ。体部 は下半にタタキ成形痕、口縁端部 は内傾する面を成す。	14c ~ 15c
64	I 区 Pit 16	土師質 土器 羽釜	22.6	(6.4)	—	5YR7/6 橙色 〃	細砂粒 長石	播磨型。焼成良好。内面はヨコナ デ。外面は口縁部から鏝下までヨ コナデ。体部は下半にタタキ成形 痕、鏝下から下位は煤付着、40 と 同一個体。	14c ~ 15c
65	I 区 Pit 139	土師質 土器 羽釜	11.4	(3.7)	—	10YR7/6 明黄褐色 〃	細砂粒	焼成良好。鏝は短く尖り気味に仕 上げる。口縁端部は内傾する面を 成す。ヨコナデ調整。	15c

遺物観察表3

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面/外面	胎土	特徴	備考
			口径	器高	底径				
66	I区 Pit 452	瓦器 椀	16.6	(3.0)	—	7.5Y6/1 灰色 〃	φ 0.5mm の礫	焼成良好。口縁部ヨコナデ。外面体 部下半に指頭圧痕。内面平行な簡 略化されたヘラ磨き。和泉型Ⅳ- 2。	13c 前
67	I区 Pit 126	瓦器 椀	15.9	(2.5)	—	2.5Y5/1 黄灰色 〃	細砂粒	焼成良好。内面平行ヘラ磨き。口縁 部ヨコナデ。和泉型Ⅳ-2。	13c 後
68	I区 Pit 281	瓦器 椀	13.2	(3.0)	—	5Y6/1 灰色 〃	細砂粒	焼成良好。カーボン一部剥離。内面 ヘラ磨き。外面口縁部に横方向の ナデ。下半部には指頭圧痕。和泉型 Ⅳ-3。	13c 後
69	I区 Pit 11	青磁 無文D類 碗	—	(3.4)	6.1	5Y6/3 オリーブ黄色 〃	—	焼成良好。高台内面中位まで内外 面全面施釉。豊付は露胎。全体に貫 入。内底部は凸状を呈する。	14c ~ 15c
70	I区 Pit 3	近世 陶磁器 皿	13.4	(2.0)	—	7.5GY7/1 明緑灰色 〃	—		17c
71	I区 Pit 434	近世 陶磁器 染付碗	10.4	(2.4)	—	5GY7/1 明オリーブ灰色 〃	—	広東系碗。外面すのこ状の文様が 描かれる。	19c 後
72	I区 Pit 131	土製品 土錘	(3.4)	(1.3)	(0.46)	2.5Y7/2 灰黄色 2.5Y3/2 黒褐色	細砂粒	焼成良好。片方欠損。重量 (4.4g)。	
73	I区 Pit 321	土製品 土錘	4.9	2.0	0.82	10YR7/3 にぶい黄橙色 〃	細砂粒	焼成良好。両端が扁平。重量17.2g。	
74	I区 Pit 153	鉄滓	5.2	4.6	2.5	—	—	重量 97.2g。	
75	I区 Pit 446	弥生土器 壺	—	(2.8)	10.0	10YR5/1 褐灰色 10YR8/4 浅黄橙色	φ 0.5mm の砂粒	外面ヘラ状工具による磨き。	
76	I区 Ⅲ層	土師器 皿	14.8	2.3	12.2	10YR7/4 にぶい黄橙色 〃	細砂粒	焼成良好。口縁部ナデ調整。内面ヘ ラ磨き。外面ナデ調整。外底部はヘ ラ切り。	
77	I区 Ⅲ層D II-12-7	土師器 皿	(15.4)	1.3	(12.6)	10YR7/4 にぶい黄橙色 〃	細砂粒 (赤色粒)	焼成良好。内面は回転ナデ調整。外 底部はヘラ切り。	
78	I区 Ⅲ層	土師器 皿	15.0	1.35	5.3	7.5YR7/6 橙色 〃	細砂粒	焼成良好。回転ナデ調整。	
79	I区 Ⅲ層	土師器 皿	17.0	(1.3)	—	5YR7/8 橙色 〃	細砂粒	口縁部は強く外反する。回転ナデ 調整。磨耗が著しい。	
80	I区 Ⅲ層	土師器 皿	15.4	2.0	10.6	7.5YR7/6 橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色	細砂粒	焼成良好。回転ナデ調整。外底部は ヘラ切り。	
81	I区 Ⅲ層	土師器 皿	15.6	1.55	(11.0)	10YR8/3 浅黄橙色 〃	細砂粒	回転ナデ調整。外底部はヘラ切り。	
82	I区 Ⅲ層	土師器 皿	14.2	2.0	12.4	7.5YR7/4 橙色 〃	細砂粒 (赤色・ 黒色粒)	回転ナデ調整。	
83	I区 Ⅲ層	土師器 皿	10.4	(2.0)	—	10YR7/4 にぶい黄橙色 〃	細砂粒	焼成良好。回転ナデ調整。底部は高 台付き。	
84	I区 Ⅲ層	土師器 杯	12.8	2.8	8.2	10YR8/6 黄橙色 10YR8/4 浅黄橙色	細砂粒	焼成良好。回転ナデ調整。	
85	I区 Ⅲ層	土師器 杯	13.1	2.95	8.2	10YR7/6 明黄褐色 〃	細砂粒	焼成良好。回転ナデ調整。	
86	I区 Ⅲ層	土師器 杯	13.6	2.7	9.2	2.5Y6/3 にぶい黄色 2.5Y7/3 浅黄色	細砂粒	焼成良好。回転ナデ調整。外底部ヘ ラ切り。	
87	I区 Ⅲ層	土師器 杯	13.0	3.1	9.0	7.5YR7/6 橙色 〃	細砂粒	焼成不良。回転ナデ調整。外底部ヘ ラ切り。	
88	I区 Ⅲ層	土師器 杯	14.0	3.3	8.0	2.5YR6/2 灰黄色 〃	細砂粒	焼成は還元気味。回転ナデ調整。	
89	I区 Ⅲ層	土師器 杯	13.0	2.7	8.4	7.5YR7/6 橙色 〃	細砂粒 (チャー ト)	焼成良好。回転ナデ調整。外底部は ヘラ切り。	
90	I区 Ⅲ層	土師器 杯	—	(3.8)	6.8	10YR8/4 浅黄橙色 7.5YR7/4 にぶい橙色	細砂粒	焼成良好。回転ナデ調整。底部はや や段を持ち内湾気味に立ち上がる。 外底部はヘラ切り。	

遺物観察表4

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面/外面	胎土	特徴	備考
			口径	器高	底径				
91	I 区 Ⅲ層	土師器 杯	—	(2.3)	8.0	7.5YR7/6 橙色 〃	細砂粒	ナデ調整。ベタ底に段を有し外方に立ち上がる。外底部はヘラ切り。	10c 前
92	I 区 Ⅲ層	土師器 杯	—	(3.7)	8.0	7.5YR6/6 橙色 〃	—	分割成形。回転ナデ調整。内底部の接合部が凹む。ベタ底からやや段を持ち外方に立ち上がる。外底部ヘラ切り。	9c 末～10c 初
93	I 区 Ⅲ層	土師器 杯	—	(2.5)	7.9	5YR6/6 橙色 〃	細砂粒	焼成良好。内外面ナデ調整。内底凹む。下半部にやや段を持つ。外底部ヘラ切り。	10c 初
94	I 区 Ⅲ層	土師器 杯	—	(1.9)	8.8	7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/8 黄褐色	細砂粒	焼成良好。内底回転ナデ調整。外底部ヘラ切り。	9c 末～10c 初
95	I 区 Ⅲ層	土師器 杯	—	(3.0)	9.0	7.5YR7/6 橙色 〃	細砂粒	回転ナデ調整。外底部ヘラ切り。内底一部にタール。	9c 末～10c 初
96	I 区 Ⅳ層 D II-12.5	土師器 杯	—	(2.9)	10.4	7.5YR7/6 橙色 〃	細砂粒	分割成形。回転ナデ調整。外底部ヘラ切り。	9c 末～10c 初
97	I 区 Ⅲ層	土師器 盤	—	(2.1)	7.6	10YR8/3 浅黄褐色 〃	細砂粒	焼成良好。器壁薄いつくり。外方に広がる高台が付く。高台外面は面を成す。ナデ調整。	
98	I 区 Ⅲ層	土師器 椀	—	(2.5)	(9.1)	7.5YR7/6 橙色 〃	細砂粒	ナデ調整。	
99	I 区 Ⅱ層	土師器 椀	—	(2.6)	高台径 9.8	7.5YR7/8 黄褐色 〃	細砂粒	高台から内湾気味に立ち上がる。ナデ調整。	
100	I 区 Ⅲ層	土師器 甕	20.0	(7.3)	—	7.5YR5/3 にぶい褐色 〃	φ 0.5mm の礫	焼成良好。口縁部内面及び上胴部に横位のハケ調整。外面口縁部ヨコナデ。体部はタテハケ調整。	
101	I 区 Ⅳ層	土師器 甕	22.6	(6.45)	—	7.5YR5/3 にぶい褐色 7.5YR5/2 灰褐色	φ 0.5mm の礫	焼成良好。口唇部は丸味を持つ。口縁部はヨコナデ調整。外面胴部はタテハケ。	
102	I 区 Ⅳ層	土師器 甕	22.4	(6.0)	—	5YR5/4 にぶい赤褐色 5YR5/4 明赤褐色	φ 0.5mm の礫	焼成良好。口縁部内面ヨコハケ。胴部外面タテハケ。	
103	I 区 Ⅳ層	土師器 長胴甕	(22.0)	(4.0)	—	10YR7/3 にぶい黄褐色 〃	φ 0.5～ 1mmの石 英	口縁部はヨコナデ調整。くの字に外反し端部は上方に拡張する。	
104	I 区 旧 TR5 Ⅳ層	土師器 甕	(22.0)	(3.9)	—	5YR6/6 橙色 〃	φ 0.5～ 1mmの石 英	焼成不良。口縁部ヨコナデ。くの字に外反し端部は面を成す。磨耗が著しい。	
105	I 区 Ⅲ層	土師器 甕	(24.0)	(6.8)	—	10YR6/4 にぶい黄褐色 〃	φ 0.5～ 1mmの砂 粒	内面口縁部ヨコハケ。胴部は一部斜上のケズリ。外面胴部タテハケ。	9c 末～10c 初
106	I 区 Ⅲ層	土師器 甕	22.0	(4.7)	—	7.5YR6/4 にぶい橙色 〃	—	口縁部は上方に屈曲するナデ調整。内面頸部ヨコハケ。外面胴部ヨコハケ。	10c 後
107	I 区 Ⅳ層 D II-12.9	土師器 羽釜	(23.0)	(4.5)	—	10YR6/4 にぶい黄褐色 〃	—	摂津系。口縁真横に断面三角形の鑊が付く。	10c 末
108	I 区 Ⅳ層	緑釉陶器 碗	10.4	(2.2)	—	5Y6/3 オリーブ黄色 〃	—	口縁端部に押圧による輪花。F類。	
109	I 区 Ⅳ層	緑釉陶器 碗	12.4	(2.2)	—	5Y8/3 浅黄色 〃	—	口縁端部に押圧による輪花。F類。	
110	I 区 Ⅳ層	黒色土器 椀	—	(1.1)	(7.0)	N2/0 黒色 5YR6/6 橙色	雲母 細砂粒	黒色土器 A 類。内面へら磨き。断面三角形の低い高台が付く。搬入品。	
111	I 区 Ⅲ層	黒色土器 椀	—	(0.6)	(7.6)	N2/0 黒色 10YR6/3 にぶい黄褐色	雲母 細砂粒	黒色土器 A 類。内面密なへら磨き。断面三角形の低い高台が付く。搬入品。	
112	I 区 Ⅳ層	黒色土器 椀	—	(0.8)	(7.4)	N2/0 黒色 7.5YR6/6 橙色	雲母 細砂粒	黒色土器 A 類。断面三角形の低い高台が付く。搬入品。	
113	I 区 Ⅲ層	黒色土器 椀	—	(1.0)	—	N2/0 黒色 10YR5/4 にぶい黄褐色	細砂粒	黒色土器 A 類。内面は密なへら磨き。高台は剥がれる。内底部は丸みを帯びる。搬入品。	9c 後

遺物観察表5

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面/外面	胎土	特徴	備考
			口径	器高	底径				
114	I区 Ⅲ層	黒色土器 椀	—	(1.7)	6.6	10YR2/1 黒色 〃	φ 5.0mm の礫微量 (チャート)	黒色土器B類。焼成良好。内面は密な平行へら磨き。貼付け高台。内外面カーボン吸着。高台内面はへら削りによりカーボンを削り取る。在地。	11c
115	I区 Ⅲ層	土師質 土器 皿	13.0	1.6	9.4	2.5YR8/3 淡黄色 〃	細砂粒	回転ナデ調整。外底部は回転糸切り。	
116	I区 Ⅲ層	土師質 土器 杯	(16.6)	(4.2)	—	7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/4 におい橙色	細砂粒	焼成良好。回転ナデ調整。	13c
117	I区 Ⅲ層	土師質 土器 杯	—	(3.9)	7.8	2.5Y6/1 黄灰色 2.5Y7/2 灰黄色	細砂粒	焼成良好(やや還元気味で硬く焼き締る)。内外面回転ナデ調整。外底部は回転糸切り。	13c
118	I区 Ⅲ層	土師質 土器 杯	—	(1.3)	7.8	7.5YR8/3 浅黄橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色	細砂粒	焼成不良。回転ナデ調整。外底部は回転糸切り。	13c
119	I区 Ⅱ層	土師質 土器 杯	—	(3.0)	4.6	7.5YR6/8 橙色 〃	細砂粒	焼成良好。ロク口成形。内面はロク口目顕著。外面は口縁部直下と底部脇にタール痕。底部回転糸切り。	15c
120	I区 Ⅲ層	瓦器 椀	14.0	(2.9)	—	—	—	口縁部外面は強いナデにより凹線状を呈する。	
121	I区 Ⅲ層	瓦質土器 羽釜	20.2	3.0	—	2.5GY5/1 オリーブ灰 〃	—	口縁端部は面を成す。内面はヨコナデ。外面は口縁部から鈔までヨコナデ。	14c
122	I区 Ⅲ層	須恵器 壺	—	(7.5)	—	5Y6/1 灰色 5Y5/1 灰色	φ 4.0mm の礫	外面に自然釉が付着。	
123	I区 Ⅲ層	須恵器 甕	22.4	(4.2)	—	—	—	口縁端部は面取りされ断面方形を呈する。ヨコナデ調整。	
124	I区 Ⅲ層	須恵器 甕	—	(12.0)	—	N4/0 灰色 〃	φ 0.5 ~ 1mmの礫	内面に当て具痕。外面に平行タタキ。	
125	I区 Ⅲ層	須恵器 甕	—	—	—	2.5Y6/2 灰黄色 10YR5/2 灰黄褐色	細砂粒	焼成不良。内面は単位の細かい当て具痕。外面は平行タタキ。一部酸化焙焼成により褐色を呈する。	
126	I区 Ⅲ層	須恵器 高杯脚	—	(7.6)	—	7.5Y7/1 灰白色 〃	—	内面は絞り痕。外面は指頭圧痕。	
127	I区 Ⅱ層	備前焼 播鉢	(22.0)	(3.1)	—	7.5YR4/3 褐色 7.5YR5/1 褐灰色	φ 4mmの 長石	口縁部は内湾気味に屈曲する。口縁部はヨコナデ。端部は上方に尖り気味に仕上げる。	
128	I区 Ⅳ層	古瀬戸 天目茶碗	—	(2.05)	—	10YR2/1 黒色 〃	—	下半部は露胎。	
129	I区 Ⅰ層	青磁 碗	—	(2.1)	—	7.5GY6/1 緑灰色 〃	—	無文D類。比較的透明感のある釉が全面施釉される。貫入。	
130	I区 —	青磁 碗	—	(3.4)	—	10Y6/2 オリーブ灰色 〃	—	青磁碗B類。線描き細連弁文。	
131	I区 Ⅱ層	青磁 瓶	(5.2)	(2.0)	—	10Y6/2 オリーブ灰色 〃	—	内外面全面施釉。脚部か?	
132	I区 Ⅳ層	青磁 碗	—	(2.3)	—	10Y6/2 オリーブ灰色 〃	—	青磁碗B類。片切彫りによる鍋連弁文碗。	
133	I区 Ⅱ層	陶磁器 皿	—	(1.9)	(4.2)	5G7/1 明緑灰色 〃	—	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台に砂目。外底部露胎。内野山。	
134	I区 Ⅲ層	土製品 土鍾	(2.9)	1.3	(0.4)	7.5YR6/6 橙色 〃	細砂粒	焼成良好。重量 (3.0) g。	
135	I区 Ⅲ層	土製品 土鍾	(3.0)	1.2	(0.5)	10YR8/3 浅黄橙色 〃	細砂粒	焼成良好。重量 (13.3) g。	
136	I区 Ⅲ層	土製品 土鍾	(3.0)	1.2	(0.4)	10YR7/3 におい黄橙色 〃	細砂粒	焼成良好。重量 (3.4) g。	
137	I区 Ⅲ層	土製品 土鍾	4.1	1.3	0.4	2.5Y5/6 明赤褐色 〃	細砂粒	一部被熱する。重量 4.7g。	
138	I区 Ⅲ層	土製品 土鍾	5.7	1.4	0.5	7.5YR6/8 橙色 〃	細砂粒	焼成良好。重量 8.4g。	

遺物観察表6

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面/外面	胎土	特徴	備考
			口径	器高	底径				
139	I区 Ⅲ層	土製品 土鍾	4.0	1.3	0.45	—	細砂粒	重量 4.9g。	
140	I区 Ⅲ層	土製品 土鍾	4.1	1.7	0.7	—	細砂粒	重量 (7.7) g。	
141	I区 Ⅱ層	土製品 土鍾	(4.6)	(1.1)	(0.4)	—	細砂粒	重量 (4.3) g。	
142	I区 Ⅲ層	土製品 土鍾	3.5	1.2	0.4	—	細砂粒	重量 2.7g。	
143	I区 Ⅲ層	土製品 土鍾	(3.2)	1.1	0.5	—	細砂粒	重量 (2.8) g。	
144	I区 Ⅳ層	土製品 土鍾	(2.9)	1.25	0.49	— 10YR7/4 にぶい黄橙色	細砂粒	端部欠損。重量 3.0g。	
145	I区 Ⅳ層	土製品 土鍾	4.1	1.5	0.5	— 7.5Y6/6 橙色	細砂粒	中央部が肥厚する。重量 5.8g。	
146	I区 Ⅲ層	土製品 土鍾	2.9	1.5	0.43	10YR6/3 にぶい黄橙色 〃	細砂粒	下方欠損。重量 4.6g。	
147	I区 Ⅳ層	土製品 土鍾	3.35	1.1	0.35	2.5Y7/3 浅黄色 〃	細砂粒	両端部欠損。重量 3.9g。	
148	I区 Ⅳ層	土製品 土鍾	2.7	1.1	0.38	10YR7/3 にぶい黄橙色 〃	細砂粒	両端部欠損。重量 2.2g。	
149	I区 Ⅱ層	鉄滓	7.1	4.9	3.8	—	—	重量 154.4g。	
150	I区 DⅡ - 12・7・8	石製品 砥石	13.6	10.5	8.1	—	—	全面使用。重量 1700g。	
151	I区 Ⅲ層	石製品 石包丁	6.5	3.5	0.7	—	頁岩 粘板岩	1/2 欠損。刃部に擦痕。重量 20.3g。	
152	I区 ユニット1 Ⅳ層	弥生土器 壺	(25.0)	(3.0)	—	5YR7/6 橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色	φ 1.0 ~ 3mmの チャート	口縁部はラップ状に開き端部はやや垂下し面を成す、外面タタキ成形後、口縁下端部はヨコハケナデ調整。	
153	I区 Ⅴ層	弥生土器 壺	—	(3.75)	3.8	2.5Y6/1 黄灰色 2.5Y3/1 黒褐色	φ 1 ~ 2 mmの チャート	内底部に粘土充填、外面ハケ調整。	
154	Ⅱ - 1 区 TR1 Ⅲ層	土師器 椀	—	(1.6)	6.0 (高台高 0.4)	7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/4 にぶい橙色	φ 0.5mm の砂礫	焼成良好。断面逆台形状の短い高台が付く。	12c 後
155	Ⅱ - 1 区 Ⅲ層	土師質 土器 杯	—	(2.6)	5.6	10YR8/4 浅黄色 2.5Y8/4 淡黄色	細砂粒	焼成良好。回転ナデ調整。外面一部被熱し赤褐色を呈する。外底部回転糸切り。	15c
156	Ⅱ - 1 区 Pit8	土師質 土器 杯	—	(2.9)	5.8	7.5YR8/3 浅黄橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色	細砂粒	ロクロ成形。回転ナデ調整。	14c ~ 15c 前
157	Ⅱ - 1 区 Ⅳ層	土師質 土器 釜脚部	10.2	3.5	103.2	10YR7/4 にぶい黄橙色 〃	φ 1 ~ 3 mmの チャート	胴部と脚部の接合部にタールが付着。	
158	Ⅱ - 1 区 TR1 Ⅲ層	須恵器 捏鉢	(22.8)	(3.3)	—	10Y8/1 灰白色 〃	細砂粒	東播系捏鉢。口縁部は玉縁状を呈する。内面は内側に強い屈曲を持つ。Ⅲ - 1 類。	
159	Ⅱ - 1 区 Ⅳ層	須恵器 捏鉢	—	(5.0)	—	5Y6/1 灰色 〃	φ 1 ~ 3 mmの礫	東播系捏鉢。口縁部は玉縁状を呈する。外面回転ナデ調整が顕著。Ⅲ - 2 類。	14c
160	Ⅱ - 1 区 Ⅳ層	須恵器 捏鉢	(26.0)	(7.8)	—	5Y7/1 灰白色 2.5Y6/1 黄灰色	細砂粒	東播系捏鉢。口縁部は玉縁状を呈する。内外面とも回転ナデ調整。焼成が不完全で瓦質化。Ⅲ - 1 類。	
161	Ⅱ - 1 区 Ⅳ層	瓦質土器 搦鉢	—	(3.7)	—	7.5Y8/1 灰白色 〃	細砂粒	内面四条を基調とする条線。	14c 後 ~ 15c 前
162	Ⅱ - 1 区 SK4	瓦質土器 片口鉢	(19.0)	(7.4)	—	5Y7/1 灰白色 N4/0 灰色	細砂粒	焼成良好。口縁部はやや凹み、端部は面を成す。体部は斜め上外方に立ち上がる。全体的にヨコナデ調整。	14c 後 ~ 15c 前

遺物観察表7

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面/外面	胎土	特徴	備考
			口径	器高	底径				
163	Ⅱ-1 区 Ⅲ層	瓦質土器 播鉢	(23.4)	(6.0)	—	5Y7/1 灰白色 N4/0 灰色	細砂粒	口縁端部は面を成す。内面は三条を基調とする条線が施される。ヨコナデ調整。	14c 後～15c 前
164	Ⅱ-1 区 SD22	瓦質土器 播鉢	(24.6)	(5.3)	—	2.5Y7/1 灰白色 〃	細砂粒	口縁部は肥厚し端部は面を成す。口縁直下は指オサエ、ヨコナデにより凹む。内面は五条一単位の条線が施される。ヨコナデ調整。	14c 後～15c 前
165	Ⅱ-1 区 Ⅳ層	瓦質土器 播鉢	(26.0)	(6.65)	—	5Y7/1 灰白色 N4/0 灰色	細砂粒	体部下半部の器壁が薄くなる。口縁部は水平な面を成しわずかに内側につまみ出す。内面は四条を基調とする条線が施され、体部下半部にはタールが付着。	14c 後～15c 前
166	Ⅱ-1 区 Ⅳ層	瓦質土器 播鉢	25.8	10.7	9.6	2.5Y8/3 淡黄色 〃	細砂粒	口縁部外面に粘土帯貼付。五条一単位の条線が放射状に施される。	14c 後～15c 前
167	Ⅱ-1 区 Ⅳ層	瓦質土器 鍋	(18.6)	(7.3)	—	2.5Y6/1 黄灰色 2.5Y6/3 にぶい黄色	細砂粒	口縁部は内湾。外面に粘土帯貼付し肥厚する。端部接合部分は沈線状に凹む。接合部の指頭圧痕が顕著。全体的にナデ調整。	14c 後
168	Ⅱ-1 区 Ⅲ層	瓦質土器 鍋	(20.2)	(4.2)	—	5Y7/1 灰白色 5Y5/1 灰色	細砂粒	口縁部は直立する。ヨコナデ調整。外面は指頭圧痕が顕著。	
169	Ⅱ-1 区 Ⅳ層	瓦質土器 鍋	(21.4)	(3.8)	—	2.5Y7/2 灰黄色 〃	細砂粒	炭素吸着が不十分で焼成不良。口縁部は直立し全体的にナデ調整。口縁端部の粘土帯接合部は沈線状に凹む。	
170	Ⅱ-1 区 Ⅲ～Ⅳ 層	瓦質土器 鍋	19.2	(6.5)	—	10Y7/1 灰白色 〃	細砂粒	口縁部は直立し肥厚する。粘土帯貼付で端部接合部は沈線状に凹む。内面ヨコナデ調整。	
171	Ⅱ-1 区 Ⅳ層	瓦質土器 鍋	23.0	(5.7)	—	5Y7/1 灰白色 5Y8/1 灰白色	細砂粒	口縁部は粘土帯貼付で端部接合部は沈線状に凹む。内面全体的にナデ調整。外面には指頭圧痕。	
172	Ⅱ-1 区 Ⅳ層	瓦質土器 鍋	24.1	(6.8)	—	—	細砂粒	口縁部は直立し体部は袋状にふくらむ。	
173	Ⅱ-1 区 Ⅳ層	瓦質土器 鍋	—	(4.0)	14.8	2.5GY8/1 灰白色 〃	細砂粒	器壁がやや薄い、内外面ナデ調整。平底で底部は薄くつくる。	
174	Ⅱ-1 区 Ⅳ-2層	瓦質土器 鍋	(22.0)	(3.5)	—	2.5Y6/2 灰黄色 N4/0 灰色	細砂粒	Cタイプ。口縁部は受け口状を呈する。内面は横位のナデ調整。外面には煤が付着。搬入品。畿内系鍋。	14c 後～15c 前
175	Ⅱ-1 区 Ⅳ-2層	瓦質土器 羽釜	(23.8)	3.3	—	5Y7/1 灰白色 5Y6/1 灰色	細砂粒	口縁部はやや内湾。鏝は端部欠損する。和泉河内型。	
176	Ⅱ-1 区 Ⅲ層	古瀬戸 天目茶碗	—	(3.9)	(8.0)	5YR2/1 黒褐色 2.5Y8/3 淡黄色	細砂粒	No.177 と同一個体。体部下半は露胎。	
177	Ⅱ-1 区 Ⅲ層	古瀬戸 天目茶碗	—	(1.6)	(4.0)	5YR2/1 黒褐色 2.5Y8/3 淡黄色	細砂粒	高台は削り出し、腰折れ気味に立ち上がる。No.176 と同一個体。	
178	Ⅱ-1 区 TR1 Ⅲ層	白磁 碗	—	(1.9)	—	10Y8/1 灰白色 〃	細砂粒	Ⅳ又はⅤ類か？内面見込みに沈線。外面下半部は露胎。高台欠損。	
179	Ⅱ-1 区 SD22	白磁 碗	—	(2.4)	(6.6)	7.5YR8/1 灰白色 〃	細砂粒	Ⅳ類底部。高台外面まで施釉。	
180	Ⅱ-1 区 Ⅲ層	青磁 碗	—	—	—	5Y6/3 オリーブ黄色 〃	細砂粒	同安窯。内外面とも櫛描文。下半は露胎。	12c 後
181	Ⅱ-1 区 TR1 Ⅲ層	青磁 稜花皿	(11.6)	(2.3)	—	2.5GY7/1 明オリーブ灰色 〃	細砂粒	内面草花文が施される。	

遺物観察表8

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面/外面	胎土	特徴	備考
			口径	器高	底径				
182	II-1 区 IV層	青磁 碗	(14.0)	(2.8)	—	10Y6/2 灰色 〃	細砂粒	無文D類。透明感のある釉が薄く 全面施釉される。	
183	II-1 区 III層	青磁 碗	15.6	(2.3)	—	10Y6/2 オリーブ灰色 10Y7/2 灰白色	細砂粒	無文D類。薄い透明釉が施される。	
184	II-1 区 IV層	青磁 碗	(16.0)	(5.1)	—	7.5GY7/1 明緑灰色 〃	細砂粒	無文D類。薄い透明釉が施される。	14c
185	II-1 区 III層	須恵器 甕	21.0	(2.4)	—	2.5Y6/2 灰黄色 2.5Y5/2 暗灰黄色	細砂粒	口縁端部は上方にツマミ上げる。 内外面に自然釉が付着。	
186	II-1 区 III層	備前焼 播鉢	—	—	—	5Y4/2 灰褐色 〃	φ 1cm の碟	口縁部は内側に拡張し内傾する 面を成す。口縁下端まで条線が入 る。外面は指オサエにより歪む。備 前IV a期。	14c ~ 15c 前
187	II-1 区 III層	備前焼 播鉢	28.6	(6.8)	—	7.5YR7/3 にぶい橙色 10R4/4 赤褐色	φ 1 ~ 5 mmの碟	口縁端部は尖り気味に仕上げる。 内面は強いヨコナデにより段が 出来、七条を基調とする斜状の 条線が施される。口縁部外面は 強いナデにより二条の凹線に なる。備前IV b ~ V期。	
188	II-1 区 IV-2層	備前焼 播鉢	—	(5.1)	(17.0)	2.5YR6/4 にぶい橙色 5YR5/2 灰褐色	φ 5mmの 碟	使用痕があり内面は滑らか、七 条を基調とする条線が入る。	
189	II-1 区 IV-2層	備前焼 壺	—	(4.3)	(24.0)	2.5Y5/1 黄灰色 7.5Y4/3 褐色	φ 1 ~ 3 mmの碟	外面は縦方向のナデ調整。下半 底部寄りには回転ナデ調整。底 部の厚みは比較的薄い。	
190	II-1 区 IV-2層	備前焼 甕	—	(7.0)	(28.0)	2.5Y5/2 暗灰黄色 7.5YR4/2 灰黄色	φ 1 ~ 5 mmの碟	焼成良好。外面はヘラ状工具に よる縦方向のナデ調整。下半底 部寄りには回転ナデ調整。	
191	II-1 区 IV-2層	常滑焼 広口壺	(39.2)	(7.3)	—	2.5YR4/3 にぶい赤褐色 2.5YR4/2 灰赤色	φ 1 ~ 3 mmの碟	口縁部の縁帯は垂下して頸部に 接合する(縁帯幅4.8cm)。正法 寺9型式。	15c
192	II-1 区 III層	常滑焼 甕	—	(18.1)	—	10YR6/4 にぶい黄橙色 5YR5/3 にぶい赤褐色	φ 1 ~ 3 mmの碟	帯状連続施文(列点文)。内面の 粘土帯接合部は顕著。指で斜上 にナデ調整。	
193	II-1 区 IV層	常滑焼 甕	—	(4.3)	(26.2)	7.5Y6/1 灰色 7.5Y5/1 灰色	φ 1 ~ 3 mmの碟	底部還元気味。内面は横位の ナデ調整。外面は横位のケズリ。	
194	II-1 区 III層	土製品 土錘	(2.1)	1.1	0.28	— 2.5YR6/4 にぶい橙色	細砂粒	被熱し赤色化する。重量 2.2g。	
195	II-1 区 SD18	土製品 土錘	4.4	1.3	0.35	5Y4/1 灰色 〃	細砂粒	焼成はやや還元気味。重量 5.7g。	
196	II-1 区 IV-2層	土製品 土錘	5.0	1.35	0.5	— 10Y5/4 赤褐色	細砂粒	重量 6.3g。	
197	II-1 区 III層	土製品 土錘	5.2	1.75	0.4	— 10YR7/4 にぶい黄橙色	細砂粒	重量 14.7g。	
198	II-1 区 IV層	石製品 石鍋	(16.4)	(2.6)	—	N4/0 灰色 7.5Y2/1 黒色	—	断面台形状の短い鑿が付く。	
199	II-1 区 SD22	石製品 砥石	11.7	3.4	4.4	—	—	凝灰岩。仕上砥。重量 289.5g。	
200	II-1 区 IV-2層	石製品 砥石	15.2	10.2	3.95	—	—	礫岩。荒砥。重量 790g。	
201	II-1 区 IV-2層	石製品 砥石	13.1	9.7	3.95	—	—	凝灰岩。仕上砥。重量 490g。	

遺物観察表9

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面/外面	胎土	特徴	備考
			口径	器高	底径				
202	Ⅱ-1 区 Pit6	石製品 砥石	12.5	13.9	9.6	—	—	砂岩。荒砥。重量 2280g。	
203	Ⅱ-1 区 Ⅳ-2層	鉄滓	4.8	2.6	1.3	—	—	重量 29.4g。	
204	Ⅱ-1 区 Ⅱ層	鉄滓	3.2	3.35	26.5	—	—	重量 27.5g。	
205	Ⅱ-1 区 Ⅳ-2層	鉄滓	6.8	5.9	2.7	—	—	重量 132.0g。	
206	Ⅱ-1 区 Pit1	鉄滓	6.75	7.75	3.65	—	—	重量 191.1g。	
207	Ⅱ-2 区 Pit4	青花 碗	(2.5)	—	—	—	—	青花碗C群。略式化された唐草文。	
208	Ⅱ-3 区 Ⅲ層	土製品 土錘	(3.15)	1.75	0.41	— 10YR7/3 にぶい黄褐色	細砂粒	一側辺が扁平になる。重量 7.7g。	
209	Ⅱ-3 区 Ⅲ～Ⅴ 層	土師質 土器 羽釜	(25.0)	(3.6)	—	10YR4/2 灰黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色	φ 1～3 mmの チャート	焼成良好。口縁部は短く直立し、端部は内側につまみ出す。外面沈線状に凹む。鏝部分は面を成し斜め上方に向く。撰津型 C2 類。	11c 後半～12c
210	Ⅱ-3 区 南TR Ⅳ層	須恵器 皿	(15.9)	2.0	(12.4)	—	細砂粒	口縁部は僅かに内湾気味になる。回転ナデ調整。	
211	Ⅱ-3 区 南TR Ⅳ層	須恵器 皿	(18.1)	2.45	(14.0)	—	細砂粒	口縁部内面に一条の沈線。回転ナデ調整。	
212	Ⅱ-3 区 Ⅴ層	須恵器 高杯	(16.4)	(5.25)	—	5Y7/1 灰白色 〃	細砂粒	体部は斜め上外方に立ち上がり、脚部は欠損。口縁部は如意状に外反する。回転ナデ調整。	
213	Ⅱ-3 区 北TR Ⅴ層	須恵器 杯	—	(3.2)	(9.4)	7.5Y7/1 灰白色 10YR6/2 灰黄褐色	細砂粒	杯 B 類。外方に開く低い高台が付く。	9c
214	Ⅱ-3 区 ユニット1 Ⅶ層	弥生土器 鉢	(18.2)	(4.2)	—	7.5YR7/4 にぶい橙色 〃	φ 1～3 mmの チャート	口縁部は外側につまみ出す。内外面ハケ調整。	
215	Ⅱ-3 区 ユニット1 Ⅶ層	弥生土器 鉢	(24.7)	(9.0)	—	10YR6/4 にぶい黄褐色 7.5YR6/4 にぶい橙色	φ 1～4 mmの チャート	口縁端部は面を成す。上半部は横位のハケ調整。下半部は斜めのハケ調整。	
216	Ⅱ-3 区 ユニット1 Ⅶ層	弥生土器 甕	(6.0)	—	2.8	10YR7/3 にぶい黄褐色 5YR6/6 橙色	φ 1～3 mmの チャート	底部は丸底を呈する。内面底部には横位のケズリ、体部は斜めから横を基調とするハケ調整。外面ハケ調整。	

遺物観察表10

表1 I区 遺構(SB)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
36	円形	0.28	0.23	0.244	B	土師器杯×1・土師質土器杯×1	SB1 11c ~ 12c No.1土師質土器杯
39	円形	0.33	0.31	0.325	C	—	SB1
46	円形	0.24	0.20	0.158	C	土師器×6	SB1
48	楕円形	0.37	0.29	0.039	B	土師器×3	SB1
200	楕円形	0.27	0.21	0.279	C	—	SB1
211	円形	0.25	0.24	0.066	C	—	SB1
63	円形	0.34	0.29	0.351	C	—	SB2
69	楕円形	0.52	0.40	0.331	C	土師器煮炊具×3・土師器×12・須恵器壺×1(口縁部)・ 瓦質土器×2	SB2 No.2須恵器壺
75	円形	0.37	0.34	0.296	C	土師器×1	SB2
114	円形	0.22	0.21	0.200	C	須恵器×1	SB2
122	円形	0.24	0.22	0.337	C	土師器×6	SB2
135	円形	0.25	0.25	—	C	土師器椀×1	SB2
410	円形	0.30	0.26	(0.411)	A	土師器×6	SB2
76	円形	0.16	0.14	0.241	C	—	SB3
161	円形	0.25	0.25	0.121	A	—	SB3
239	楕円形	(0.48)	0.41	0.389	C	土師器煮炊具×1・土師器×4・瓦器椀×4	SB3
242	円形	0.30	0.30	0.201	C	黒色土器A×1・土師器×6	SB3 10c 前
49	円形	0.26	0.23	0.157	C	—	SB4
68	円形	(0.20)	0.25	0.123	C	—	SB4
73	円形	0.51	(0.42)	0.134	A	土師器×2・粘土塊24.1g	SB4
77	円形	0.27	0.26	0.328	C	土師器×14・粘土塊10.3g	SB4
82	楕円形	0.26	0.21	0.489	C	土師器×4	SB4
88	楕円形	0.52	0.42	—	C	土師器煮炊具×5・土師器椀×2・土師器×24・土師質土 器椀×1・瓦器椀×1・瓦質土器×2	SB4 12c ~ 13c No.4土師質土器椀 No.3土師器椀・No.5瓦器椀
116	円形	0.35	0.33	0.062	C	土師器×2	SB4
123	円形	0.26	0.24	0.388	C	土師器煮炊具×2・土師器×12	SB4
130	隅丸方形	0.58	(0.28)	0.073	C	土師器×15・須恵器×1	SB4
227	円形	0.17	0.16	0.053	C	—	SB4
231	楕円形	0.24	0.18	0.052	C	—	SB4
313	円形	0.38	0.37	0.160	C	—	SB4
438	円形	0.17	0.16	(0.085)	—	—	SB4

表1 I区遺構(SB)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
460	円形	0.27	0.31	(0.095)	D	土師器×2	SB4
84	円形	0.22	0.22	0.260	C	土師器×6	SB5
91	円形	0.28	0.26	—	C	土師器×4	SB5
97	円形	0.51	0.46	0.511	B	弥生土器×5・土師器煮炊具×1・土師器×10	SB5
107	楕円形	0.30	0.24	0.190	C	土師器椀×1(輪高台)・土師器×4	SB5 12c後
155	円形	0.30	0.27	0.376	C	土師器杯×2・土師器×22・瓦器椀×4	SB5 13c末~15c No.6土師器杯・No.7瓦器椀
165	円形	0.28	0.27	0.236	C	—	SB5
171	円形	0.25	0.23	0.023	C	—	SB5
182	円形	0.28	0.26	0.190	D	—	SB5
221	円形	0.23	0.22	0.088	C	須恵器壺×1	SB5 平安時代
248	楕円形	0.32	(0.22)	0.161	C	土師器煮炊具×2・土師器×5	SB5
255	楕円形	0.27	0.23	0.104	C	—	SB5・SB6
273	円形	0.35	0.33	0.252	C	土師器煮炊具×3・土師器×13・瓦器椀×1	SB5・SB7
292	円形	0.31	0.24	0.095	C	土師器×4	SB5
294	楕円形	0.26	0.22	0.301	C	土師器×4・瓦器椀×1	SB5
81	円形	0.42	0.40	0.248	C	土錘×2・土師器×15	SB6 No.9・10土錘
87	円形	0.30	0.27	0.372	C	土師器×11・瓦質土器×1	SB6・SB7
105	円形	0.26	0.25	—	B	瓦質土器×1・土師器×11	SB6
148	楕円形	0.40	0.31	—	C	黒色土器A×1・土師器×6	SB6 9c末
154	楕円形	0.37	0.28	0.234	C	弥生土器×6・土師器×3・瓦質土器×1	SB6
169	円形	0.27	0.25	0.195	C	—	SB6
181	円形	0.32	0.28	0.254	D	—	SB6
204	楕円形	0.35	(0.14)	0.159	C	土師器煮炊具×1・土師器×2	SB6 10c後
212	楕円形	0.46	0.39	0.472	C	土師器椀×1・土師器×18・瓦器椀×1	SB6 12c後 No.8土師器椀(10c後)
291	円形	0.30	(0.24)	0.260	A	土師器煮炊具×1・土師器×3	SB6
419	円形	0.17	0.16	(0.163)	G	土師器×1	SB6
67	円形	0.40	0.39	0.335	C	土師器杯×1(円盤状高台)	SB7
86	円形	0.18	0.18	0.160	C	—	SB7
136	楕円形	0.26	0.20	0.117	C	土錘×1・土師器×6	SB7 No.11土錘
205	円形	0.21	(0.17)	0.027	C	—	SB7

表1 I区 遺構(SB)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
259	楕円形	0.28	(0.27)	0.124	C	土師器×2	SB7
278	円形	0.41	0.37	0.096	C	土師器×4	SB7
280	円形	0.19	0.18	0.122	C	—	SB7
307	方形	0.65	0.33	0.102	C	土師器煮炊具×2・土師器×6	SB7
315	円形	0.23	0.21	0.121	C	土師器×3	SB7
458	楕円形	0.29	0.24	(0.124)	D	—	SB7
461	円形	0.15	0.13	(0.153)	D	—	SB7
24	円形	0.35	0.32	0.377	A	土師器×1	SB8
28	円形	0.25	0.22	0.157	B	—	SB8
29	円形	(0.20)	0.28	0.303	B	—	SB8
54	円形	0.24	0.22	0.076	C	土師器×6	SB8
55	円形	0.26	0.23	0.171	C	土師器×12	SB8
187	楕円形	0.16	(0.12)	0.172	C	土師器×5・青磁×1 (同安窯)	SB8 12c 後
188	楕円形	0.24	0.20	0.099	C	—	SB8
295	円形	0.30	0.26	0.294	A	土師器煮炊具×1・土師器×18	SB8

表2 I区 遺構(SA)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
61	楕円形	0.36	0.28	0.100	C	—	SA1
80	円形	0.28	0.26	0.126	C	土師器煮炊具×1	SA1
192	円形	0.18	0.16	0.082	A	土師器×3	SA1
298	円形	0.38	0.35	0.211	C	—	SA1

表3 I区 遺構(SK)計測表

SK No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
1	楕円形	1.33	0.89	0.077	10YR3/4 暗褐色粘土質シルトに2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質シルト混(φ2mmの礫、炭化物を多く含む)	土師器煮炊具×2・土師器×28・瓦質土器鍋×2・瓦質土器羽釜×1・弥生土器×3・粘土塊4.9g	14c No.18 瓦質土器羽釜(10c 後)
2	楕円形	(0.70)	(0.70)	0.093	10YR5/4 におい黄褐色粘土質シルト(φ1~2mmの礫含む)	土師器×10・瓦質土器鍋×1・瓦器椀×2	
3	円形	1.08	0.98	0.145	10YR5/4 におい黄褐色粘土質シルト(φ1~2mmの礫含む)	土師質土器×5・須恵器×1	
4	楕円形	1.30	1.02	0.088	10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト(φ3~5mmの礫含む)	土師器甕×1・土師器×6・須恵器甕×1・瓦質土器×1	Pit157・159に切られている
5	楕円形	(1.05)	(0.85)	0.251	10YR5/4 におい黄褐色シルト(φ3~10mmの礫を多く含む)	黒色土器椀×1・土師器煮炊具×7・土師器×28・須恵器杯B×1・弥生土器×1 (混入)	9c 後 No.19 黒色土器椀
6	円形	(1.03)	0.95	0.179	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト(φ1~2mmの礫含む)	土師器煮炊具×5・土師器甕×3・土師器杯底×5・杯口縁×3・土師器皿底×2・土師器×52・須恵器×1	9c 後~10c 後 No.20・21・22土師器甕

表3 I区 遺構(SK)計測表

SK No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
7	円形	(0.78)	(0.73)	0.298	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト(φ1~2mmの礫を含む)	黒色土器A×1・土師器杯底×2・土師器×64・須恵器×5・鉄滓21.1g	
8	隅丸方形	(1.01)	(0.92)	—	10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト	—	
9	楕円形	(1.40)	(0.65)	0.411	10YR5/3 におい黄褐色粘土質シルトに10YR6/4 におい黄褐色粘土質シルトを含む(φ3~8mmの角礫を多く含む)	土師器×6・東播系捏鉢×1・瓦質土器×2	14c
10	楕円形	(0.87)	(0.74)	0.528	10YR4/4 褐色粘土質シルトに10YR6/4 におい黄褐色粘土質シルトを含む	土師器×18・須恵器×1・瓦質土器×1	Pitに切られる
11	楕円形	1.35	0.80	0.202	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト(φ1~2mmの礫と炭化物を少量含む)	土師器煮炊具×1・土師器×18・須恵器皿×1・瓦質土器鍋×1	須恵器皿(9c初頭) 瓦質土器鍋(古代)
12	楕円形	(1.30)	(0.29)	0.203	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト(φ1~2mmの礫含む)	土師器煮炊具×1・土師器×9・土師質土器×4・須恵器×1	
13	—	(0.72)	(0.71)	0.165	10YR3/3 暗褐色砂質シルト(φ5~10mmの礫含む)	土師器煮炊具×3・土師器×4・瓦質土器×1	
14	楕円形	(1.15)	(0.36)	0.172	2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト	土師質土器×10・須恵器×1・瓦質土器鍋×1・常滑焼甕×1	14c後
15	楕円形	2.10	1.43	0.185	10YR4/3 におい黄褐色粘土質シルトに10YR5/1 褐灰色粘土質シルトを含む(炭化物・土器片を少量含む)	土師質土器×58・鉄滓43.1g・82.4g・粘土塊52.7g・焼土	No.23鉄滓
16	楕円形	0.79	0.58	0.133	10YR5/2 灰黄褐色シルト(φ3~5mmの礫含む)	土師器×4	
17	円形	0.74	0.71	0.082	10YR3/3 暗褐色粘土質シルト(φ1mmの礫含む)	—	
18	楕円形	(0.73)	(0.65)	0.150	焼土(炭化物含む)	焼土	
19	溝状	2.29	0.60	0.312	2.5Y3/2 黒褐色粘土	弥生土器甕×11・壺×5・鉢×1・高杯×2・叩き石×1	No.24・33・37・39・42壺 No.25・26・30~32・34~36 ・38・40・42甕、No.27鉢 No.28・29高杯、No.43叩き石

表4 I区 遺構(SX)計測表

SX No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
1	円形	4.25	3.83	2.569	I	土師器煮炊具×1・土師器甕×1・土師器×3	No.46土師器甕
					II	土師器×2	
					III	—	
					IV	—	
					V	弥生土器×3・土師質土器×12・鉄滓70.6g	
					VI	備前甕×1	15c
					VII	土師器×1	
					VIII	土師器甕×1・土師器×2	
					IX	土師器椀(輪高台)×1・土師器煮炊具×3・京都系Gタイプ×1・土師器×22・鉄滓24.3g	14c
					X	弥生土器×4・土師器×5(土師器×2)	
					XI	—	
					XII	—	
					XIII	—	
					XIV	—	

表4 I区遺構(SX)計測表

SX No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
3	—	(0.33)	(0.33)	(0.097)	—	土師器×1	
4	—	(0.66)	(0.50)	(0.050)	—	土師器椀(輪高台)×1	12c後～終末

表5 I区遺構(Pit)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
3	楕円形	0.48	0.38	0.709	A	近世陶磁器皿×1(備前系磁器)・土師器×1	17c No.70近世陶磁器
4	円形	0.33	0.33	0.337	B	土師器×1	
11	円形	0.29	0.26	0.592	A	青磁碗×1(無文D類)	14c～15c前 No.69青磁碗
12	円形	0.29	0.29	0.122	B	土師器灯明皿×1	
15	楕円形	0.35	0.27	—	C	土師器×2	
16	楕円形	0.41	0.30	0.520	C	土師質土器羽釜×2・土師器×4	14c～15c No.63・64土師質土器羽釜
18	楕円形	0.40	0.29	0.332	D	黒色土器A×1・土師器×1・鉄釘×1	
19	隅丸方形	(0.27)	0.27	0.082	D	土師器×2	
20	円形	0.25	0.22	0.197	C	土師器×2	
22	隅丸方形	0.73	0.61	0.109	—	土師器×3・須恵器×1	
23	楕円形	0.34	0.27	0.384	—	土師器×4	
25	円形	0.38	0.36	0.150	B	土師器×5	
27	楕円形	0.36	0.29	0.170	B	土師器×2・須恵器皿×1・須恵器×1	8c後 No.57須恵器皿
31	円形	0.30	(0.30)	0.359	B	土師器×2	
32	楕円形	0.40	0.32	0.664	A	土師器×11	
33	円形	0.22	0.21	0.192	A	土師器×1	
35	隅丸方形	0.36	0.34	0.286	C	土師器×1	
41	楕円形	0.38	0.30	0.406	D	土師器×3	
42	円形	0.46	0.40	0.450	B	土師器×4	
44	円形	0.19	0.19	0.178	C	土師器煮炊具×1	
45	円形	0.24	0.23	0.130	C	土師器×1	
47	隅丸方形	0.26	0.22	0.138	C	土師器×7	
52	円形	0.27	0.26	0.291	C	土師器煮炊具×1・土師器×5	
53	円形	0.21	0.18	0.087	A	土師器煮炊具×2・土師器×12	
56	円形	0.18	0.18	0.155	A	黒色土器B×1・土師器×2	
57	円形	0.21	0.20	0.086	A	土師器×2	
58	円形	0.23	0.22	0.191	A	土師器×10	

表5 I区遺構(Pit)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
60	円形	0.16	(0.10)	0.082	A	土師器×6	
62	円形	0.40	0.36	0.193	C	土師器×8・須恵器皿×1	8c後
64	隅丸方形	0.60	0.54	0.080	C	土師器×4	
65	楕円形	0.59	0.50	0.181	C	土師器杯×2・土師器煮炊具×4・土師器×16・粘土塊67.5g	
66	円形	0.16	0.14	0.037	C	土師器×3	
70	楕円形	0.53	0.44	0.046	C	土師器×6・須恵器×1・瓦質土器×1	
71	円形	0.26	0.26	—	C	土師器×5	
72	円形	0.25	0.22	0.057	C	瓦質土器×1	
78	円形	0.26	0.26	0.140	C	土師器×6	
79	円形	0.16	0.16	0.241	C	土師器煮炊具×1	
83	円形	0.20	0.19	0.173	C	土師器×1・須恵器×2	
85	楕円形	0.30	0.25	0.194	C	土師器×4	
86	円形	0.17	0.16	0.129	C	—	
89	円形	0.28	0.24	0.202	C	土師器×4・粘土塊5.4g	
90	円形	0.26	0.25	0.436	C	土師器×5・瓦質土器×1	
92	円形	0.23	0.21	—	C	土師器×3	
93	円形	0.63	0.57	0.135	C	土師器椀×3・土師器甕×1・土師器杯×1・土師器煮炊具×6・土師器×26	8c後(混入)・12c後～13c初頭 No.56土師器甕・No.52土師器杯 No.53土師器椀
94	円形	0.34	0.34	—	C	土師器×4	
95	楕円形	0.31	0.25	0.327	C	土師器×5・瓦質土器×1	
97	円形	0.51	0.46	0.511	B	弥生土器×5・土師器煮炊具×1・土師器×10	
98	楕円形	0.33	0.24	0.194	C	黑色土器A×1・土師器×4	9c後 No.59黑色土器A椀
100	楕円形	0.46	0.38	0.445	B	土師器×10	
101	円形	0.29	0.26	0.176	C	土師器×2	
102	円形	0.31	0.28	0.072	C	土師器×6	
104	楕円形	0.46	0.34	0.107	C	弥生土器×1・黑色土器A×1・土師器×5	混入
106	楕円形	0.44	0.34	0.120	C	土師器×1	
108	円形	0.26	0.26	0.384	C	土師器煮炊具×1・土師器×14・須恵器×1・粘土塊2.6g	
109	円形	0.28	0.28	0.126	C	土師器×5	
112	楕円形	0.20	0.15	—	C	土師器×1	
113	円形	0.42	0.37	—	C	土錘×1・土師器×3	
120	円形	0.43	0.42	0.084	C	弥生土器甕×22	

表5 I区遺構(Pit)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
125	円形	0.27	0.24	0.078	C	土師器×2	
126	隅丸方形	0.64	0.58	0.163	C	土師器×5・瓦器椀×1 (和泉型Ⅳ-2)	13c 後 No.67瓦器椀
127	楕円形	0.35	0.27	0.231	C	土師器×6・瓦質土器×1	
129	円形	0.10	0.10	—	C	土師器×2	
131	楕円形	0.52	0.44	0.091	C	土錘×1・土師器煮炊具×2・土師器×4	No.72土錘
133	楕円形	0.50	0.41	0.087	C	土師器×1	
134	楕円形	0.34	0.20	0.072	C	土師器×2	
138	円形	0.34	0.30	0.284	C	土師器×14・瓦質土器×4	
139	円形	0.38	0.34	—	C	土師質土器羽釜×1・土師器×1・須恵器×1	15c No.65土師質土器羽釜
141	楕円形	0.26	0.22	0.257	C	土師器×1	
142	楕円形	0.19	0.16	0.157	C	土師器×3・瓦質土器×1	
144	楕円形	0.34	(0.18)	0.188	C	土師器×7	
146	円形	0.24	0.23	0.111	C	土師器煮炊具×1	
147	楕円形	0.48	0.40	0.616	C	土錘×1・黒色土器A×1・土師器×10・瓦器椀×1	
150	楕円形	0.30	0.22	0.338	C	土師器煮炊具×1・土師器×5	
151	円形	0.29	0.28	0.188	C	土師器煮炊具×1・土師器×12・瓦質土器×1	
153	円形	0.31	0.27	0.273	C	弥生土器×2・土師器煮炊具×1・鉄滓97.2g	混入 No.74鉄滓
156	円形	0.31	0.28	0.485	C	土師器×10	
157	楕円形	0.31	0.21	0.219	C	土師器×10	
158	円形	0.30	0.26	0.222	C	土師器×4	
159	円形	0.51	0.46	0.206	C	土師器×5・瓦器椀×2	
160	楕円形	0.30	0.25	0.374	C	土師器煮炊具×1・土師器×10	
164	楕円形	0.32	(0.32)	0.263	A	土師器×2	
166	円形	0.35	0.30	0.209	C	土師器×6	
167	楕円形	0.42	0.35	0.375	C	土師器皿×1・土師器×10・須恵器甕×1・瓦質土器鍋×1・鉄滓44.4g	
168	楕円形	0.34	0.28	0.292	C	土錘×1・土師器×3	
172	隅丸方形	0.38	(0.14)	0.132	C	土師器×4	
174	円形	0.22	0.20	0.049	C	黒色土器A×1	
176	楕円形	0.30	(0.12)	0.032	C	土師器煮炊具×1	
177	楕円形	0.16	0.13	—	A	土師器×3	
178	円形	0.15	0.14	0.133	C	土師器×10・瓦器椀×1	

表5 I区遺構(Pit)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
179	円形	0.19	0.17	0.241	C	土師器杯×1・土師器煮炊具×1	15c No.60土師器杯
180	円形	0.22	(0.13)	0.146	C	土師器×12	
184	円形	0.38	0.36	0.052	C	土師器×3	
185	楕円形	0.16	0.13	0.105	C	土師器×4	
186	円形	0.20	0.18	0.145	C	土師器×1	
189	楕円形	0.28	0.23	0.220	C	土師器煮炊具×1・土師器×7・土師器杯×1・須恵器×1	10c後 No.54土師器杯
193	円形	0.16	0.15	0.101	A	土師器×1	
194	楕円形	0.38	0.26	0.221	A	土師器煮炊具×1・土師器×5	
195	円形	0.22	0.22	0.160	A	土師器煮炊具×1	
198	円形	0.36	0.36	0.355	C	土師器×10	
199	隅丸方形	0.68	(0.64)	0.022	C	土師器×4	
206	円形	0.25	0.23	0.076	C	瓦質土器鉢×1	14c後
207	円形	0.14	0.14	0.058	A	土師器×2	
208	円形	0.20	0.18	0.317	A	土師器杯×1・土師器×20・土師質土器杯×1・粘土塊 17.0g	13～15c No.61土師器杯・No.62土師質土器杯
210	円形	0.34	(0.04)	—	C	土師器×1	
213	楕円形	0.46	(0.44)	0.443	C	土師器煮炊具×4・土師器×26・瓦器椀×2	12c後
214	円形	0.26	0.24	0.141	C	土師器×2	
215	円形	0.19	0.18	0.151	C	土師器×2・瓦質土器×1	
216	円形	0.16	0.16	0.390	C	土師器煮炊具×1・土師器×5	
217	円形	0.34	(0.24)	0.076	C	土師器×4	
218	円形	0.28	0.25	0.101	C	瓦質土器鍋×1	
222	円形	0.20	0.19	0.049	C	弥生土器×1・土師器煮炊具×1	
223	楕円形	0.29	0.22	0.168	C	土師器×2	
226	円形	0.23	0.22	0.066	C	土師器×2	
232	楕円形	0.31	0.19	0.093	C	弥生土器×1・瓦質土器鉢×1	混入
234	楕円形	0.35	0.24	0.091	C	土師器×1	
240	楕円形	0.48	0.42	0.150	C	土師器×2	
241	楕円形	0.60	(0.50)	0.088	C	土師器×6	
243	円形	0.18	(0.10)	—	C	土師器杯×11	9c後 No.51土師器杯
244	楕円形	(0.24)	0.20	0.126	C	黒色土器B×1	11c
249	楕円形	0.16	0.13	0.058	C	土師器煮炊具×1・土師器×5・瓦器椀×1	

表5 I区 遺構(Pit)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
253	楕円形	0.29	(0.12)	0.030	C	土師器煮炊具×1・土師器×1・瓦質土器×1	
256	楕円形	0.33	0.23	0.172	C	土師器×2	
257	楕円形	0.37	0.20	0.048	C	土師器×3	
258	楕円形	0.30	0.18	0.189	C	土師器×1	
260	円形	0.29	0.26	0.582	C	土師器煮炊具×1・土師器×4	
262	楕円形	0.18	0.14	0.076	C	土師器×2	
269	円形	(0.38)	0.36	0.058	C	土師器×1	
271	円形	0.09	0.09	0.085	C	土師器×4	
272	円形	0.21	0.19	0.154	A	土師器×2	
275	円形	0.30	0.28	0.216	C	土師器×10	
281	円形	0.31	0.29	0.231	C	土錘×1・土師器×10・瓦器椀×2 (和泉型IV-4・IV-3)	13c後 No.68瓦器椀
284	方形	0.29	0.26	0.248	C	土師器×3	
285	円形	0.30	0.24	0.265	A	土師器煮炊具×2・土師器×10	
286	楕円形	0.40	0.30	0.263	C	土師器煮炊具×1	
287	円形	0.30	0.28	0.117	C	土師器×2	
288	円形	0.22	0.19	0.177	A	土師器煮炊具×1・土師器×1	
289	円形	0.24	(0.15)	0.227	C	土師器煮炊具×2・土師器×3	
290	楕円形	0.49	0.31	0.269	A	土師器煮炊具×1・土師器×10	
293	円形	0.20	0.18	0.096	C	土師器×5	
296	楕円形	0.25	0.20	0.167	A	土師器×2	
297	円形	0.20	0.18	0.130	C	土師器×1	
299	円形	0.30	0.28	0.113	A	土師器×2	
300	円形	0.29	0.28	0.292	C	土師器煮炊具×3・土師器×6	
301	円形	0.19	0.18	0.175	C	土師器×3	
302	円形	0.34	0.32	0.174	A	土師器×1・須恵器×1	8c末~9c
303	円形	0.14	0.14	0.249	C	土師器×3	
304	円形	0.21	(0.17)	0.210	A	土師器煮炊具×1	
306	方形	0.27	0.20	0.305	C	土師器煮炊具×1・土師器×7	
308	方形	0.26	0.22	0.187	A	土師器×4	
310	方形	0.34	0.28	0.191	C	土師器×4	
311	楕円形	0.37	0.31	0.358	C	土師器×4	

表5 I区 遺構(Pit)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
312	円形	0.30	0.28	0.433	A	土師器×8	
321	円形	0.27	0.26	(0.135)	F	土錘×1・土師器×6	No.73土錘
329	楕円形	0.46	0.34	(0.408)	G	土師器×6	
331	円形	0.38	0.35	(0.101)	G	土師器×1	
333	円形	0.25	0.23	(0.120)	G	土師器煮炊具×2・土師器×12	
335	円形	0.30	0.27	(0.052)	G	土師器煮炊具×1・土師器×5	
337	円形	0.21	0.20	(0.306)	G	土師器×5	
338	楕円形	0.26	0.22	(0.138)	D	黒色土器A×1・土師器×3	9c末
340	円形	0.28	0.27	(0.278)	G	土師器×9・粘土塊9.3g・焼土	
341	円形	0.24	0.24	(0.041)	D	土師器×1	
342	楕円形	0.40	0.20	—	D	土師器×3	
343	円形	0.22	0.20	(0.228)	G	土師器×5・瓦質土器鍋×1	14c (混入)
345	円形	0.22	0.20	(0.077)	G	土師器×3	
346	円形	0.27	0.25	(0.058)	D	土師器煮炊具×1・土師器×1	
350	楕円形	0.39	0.33	(0.483)	A	土師器×1	
351	楕円形	0.37	0.30	(0.508)	A	土師器×14・瓦質土器鍋×1	14c
352	楕円形	0.55	0.46	(0.344)	F	土師器×6	
354	隅丸方形	0.40	0.37	(0.520)	F	土師器×1	
356	楕円形	0.36	0.27	(0.336)	F	土師器×5	
357	楕円形	0.50	0.40	(0.218)	F	土師器×6	
361	円形	0.32	0.30	(0.236)	F	土師器×1	
364	円形	0.27	0.26	(0.561)	G	土師器×2	
365	円形	0.32	0.28	(0.291)	A	土師器煮炊具×1・土師器×1	
367	円形	0.22	0.22	(0.069)	A	土師器杯×1・土師器×1	9c後 No.50土師器杯
368	円形	0.19	0.18	(0.121)	A	土師器×1	
370	円形	0.25	0.26	(0.045)	G	土師器煮炊具×1・土師器×1	
373	楕円形	0.39	0.30	(0.228)	G	土錘×1	
374	楕円形	0.31	0.25	(0.161)	G	弥生土器×2	
375	楕円形	0.30	0.25	(0.137)	D	土師器×1	
376	楕円形	0.29	0.25	(0.149)	D	土師器煮炊具×1・土師器×2	
377	円形	0.22	0.20	(0.095)	D	土師器甕×1・土師器×3	

表5 I区 遺構(Pit)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
378	円形	0.28	0.25	(0.103)	G	土師器皿×1・土師器煮炊具×2	
380	楕円形	(0.26)	(0.19)	(0.155)	D	土師質土器×2	
381	円形	0.25	0.22	(0.270)	D	須恵器×1	
382	楕円形	0.37	0.29	(0.358)	G	土師器×2	
384	楕円形	0.26	0.16	(0.202)	D	土師器煮炊具×1	
386	円形	0.32	0.32	(0.355)	G	青磁×1(幅広蓮弁B類)	14c
388	円形	0.25	0.25	(0.194)	A	土師器×8	
389	円形	0.20	0.18	(0.210)	G	土師器×1	
390	円形	0.30	0.29	(0.262)	A	土師器×3	
392	円形	0.21	0.20	(0.328)	D	土師器×5	
393	楕円形	0.61	0.50	(0.095)	G	土師器×2	
394	円形	0.44	0.40	(0.416)	D	土師器甕×1・土師器×4	
395	円形	0.28	0.25	(0.238)	D	土師器×6	
396	円形	0.40	0.35	(0.189)	D	土師器×9	
397	円形	0.23	0.20	(0.116)	A	土師器×3	
398	円形	0.64	0.55	(0.154)	D	土師器煮炊具×1	
399	円形	0.29	0.27	(0.192)	A	土師器×5	
401	楕円形	0.46	0.34	(0.024)	D	土師器×1	
402	円形	0.20	0.18	(0.052)	D	土師器碗×1・土師器×3	
404	円形	0.28	0.24	(0.072)	A	土師器×3	
405	円形	0.20	0.20	(0.167)	A	土師器×1	
407	楕円形	0.35	0.30	(0.083)	F	土師器×4・須恵器壺×1	8c No.58須恵器壺
411	円形	0.40	0.35	(0.223)	D	土師器×1	
417	円形	0.20	0.20	(0.157)	A	黒色土器B×1・土師器×3	
418	円形	0.14	0.12	(0.118)	A	土師器×1	
422	楕円形	0.20	0.17	(0.112)	G	土師器×1	
425	円形	0.25	0.24	(0.122)	A	土師器×3	
434	円形	0.31	0.31	(0.125)	A	近世陶磁器×1(広東系染付碗)	19c後 No.71近世陶磁器(広東系染付碗)
437	円形	0.14	0.12	(0.107)	E	土師器甕×1	No.55土師器甕
439	円形	0.29	0.29	(0.133)	G	土師器×3	
446	円形	0.37	0.32	(0.102)	D	弥生土器壺×1	弥生後期 No.75弥生土器壺

表5 I区遺構(Pit)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
449	円形	0.34	0.32	(0.124)	D	弥生土器×2	
452	円形	0.23	0.20	(0.068)	G	瓦器椀×1 (和泉型Ⅳ-1)	13c前 No.66瓦器椀
454	円形	0.26	0.24	(0.178)	A	土師器×3	
455	円形	0.25	0.24	(0.117)	G	弥生土器×1	SK19内

表6 II-1区遺構(SB)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
26	楕円形	0.49	0.37	0.308	B	土師器皿×1・土師器×6	SB1
27	円形	0.42	0.40	0.194	B	—	SB1
30	円形	0.42	0.38	0.311	B	—	SB1
31	円形	0.40	0.38	0.292	B	—	SB1
32	円形	0.32	0.20	0.383	B	—	SB1
12	円形	0.27	0.26	0.059	C	土師器×2	SB2
13	円形	0.38	0.36	0.322	C	土師器×1	SB2
15	円形	0.31	0.30	0.426	C	—	SB2
18	楕円形	0.49	0.41	0.468	C	土師器×1	SB2
25	円形	0.44	(0.42)	0.491	B	—	SB2
33	円形	0.30	0.26	0.094	C	—	SB2
34	円形	0.40	0.38	0.471	B	—	SB2
35	円形	0.28	0.24	0.085	C	—	SB3
36	円形	0.20	0.18	0.122	C	—	SB3
37	円形	0.28	0.24	0.085	C	—	SB3
38	円形	0.40	0.30	0.195	C	—	SB3
39	円形	0.28	0.26	0.089	C	—	SB3
40	円形	0.42	(0.20)	0.251	C	—	SB3
6	円形	0.35	0.34	0.424	A	弥生土器×4・土師器×1・瀬戸灰釉×1	SB4
7	円形	0.35	0.30	0.356	A	瓦器椀×1・瓦質土器鍋×1	SB4 南北朝
16	円形	0.28	0.24	0.156	A	—	SB4
22	円形	0.23	0.23	0.501	A	土師器杯×1 (底部)・土師器×3	SB4
41	楕円形	0.52	0.38	0.119	A	—	SB4
42	円形	0.46	0.38	0.113	A	—	SB4
43	円形	0.30	0.24	0.119	A	—	SB4

表6 II-1区 遺構(SB)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
44	円形	0.20	0.14	0.046	A	—	SB4
45	円形	0.34	0.30	0.116	A	—	SB4
46	楕円形	(0.38)	0.28	0.041	A	—	SB4
47	円形	0.22	0.20	0.263	A	—	SB4
48	円形	0.28	0.26	0.095	A	—	SB4
49	円形	0.26	0.26	0.428	A	—	SB4
50	円形	0.34	0.30	0.366	A	—	SB4
51	円形	0.26	0.24	0.162	A	—	SB4
52	円形	0.30	0.30	0.299	A	—	SB4

表7 II-1区 遺構(SK)計測表

SK No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
1	隅丸方形	0.49	(0.32)	0.120	—	—	
2	楕円形	1.38	1.11	0.116	—	—	
3	円形	0.85	0.74	0.070	A	土師器×3・瓦質土器×1	
4	円形	1.14	1.14	0.235	—	土師器杯底×2・土師器×9・瓦質土器×4・白磁×1・常滑焼甕×1	白磁混入 粘土塊
5	楕円形	0.76	0.63	0.360	—	—	
6	楕円形	0.84	0.53	0.055	—	土師器×1	
7	楕円形	0.99	0.74	0.213	—	土師器×4・瓦質土器×1	
8	楕円形	0.69	0.57	0.067	A	弥生土器×1・土師器×1	弥生混入
9	楕円形	1.11	(0.81)	0.128	C	土師器×1	
10	楕円形	(0.86)	(0.39)	0.137	C	土師器×1	
11	楕円形	(0.67)	(0.24)	0.178	C	—	
12	円形	0.78	0.75	0.171	A	土師器×2	
13	円形	0.84	0.83	0.089	—	羽口×4・土師器×2	

表8 II-1区 遺構(Pit)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
2	円形	0.28	0.25	0.232	A	鉄釘×1	
3	円形	0.29	0.25	0.240	A	土師器×2	
4	円形	0.36	0.35	0.129	A	土師器×2	
5	楕円形	0.51	0.38	0.208	A	近世陶磁器×2・鉄釘×1	
8	円形	(0.39)	0.38	0.081	A	—	

表8 II-1区遺構(Pit)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
9	円形	0.23	0.23	0.140	A	土師器×1	
10	円形	0.58	0.56	0.292	C	土師器×1	
11	楕円形	0.52	0.42	0.115	C	弥生土器×1・土師器×1	
14	隅丸方形	0.47	0.42	0.042	C	土師器×2	
17	楕円形	0.58	0.46	0.202	C	土師器×1	
19	楕円形	0.45	0.35	0.159	C	土師器×2・瓦質土器鍋×1	
20	楕円形	0.20	0.12	0.117	C	—	
21	円形	0.37	0.37	0.226	A	土師器×1	
23	円形	0.44	(0.41)	0.235	A	土師器×2	
29	円形	0.37	0.36	0.119	A	土師器×2	

表9 II-2区遺構(SB)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
1	円形	0.32	0.29	0.491	D	—	SB1
2	円形	0.32	0.31	0.110	D	土師器×1	SB1
3	楕円形	0.38	0.30	0.353	D	土師器×4	SB1
5	円形	0.32	0.30	0.402	D	—	SB1
6	楕円形	0.54	0.42	0.462	D	土師器×3・瓦質土器×1・鉄釘×1	SB1
7	楕円形	0.38	0.32	0.206	D	土師器×1	SB1
9	円形	0.36	0.32	0.201	D	—	SB1
10	円形	0.28	0.22	0.131	D	—	SB1
11	円形	0.26	0.26	0.150	D	—	SB1
12	円形	0.28	0.28	0.188	D	—	SB1
13	円形	0.30	0.26	0.086	D	—	SB1
14	円形	0.38	0.36	0.259	D	—	SB1

表10 II-2区遺構(Pit)計測表

Pit No.	平面形	規模(m)			埋土	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
4	円形	0.40	(0.26)	0.243	D	須恵器×1・染付青花碗C群×1	15c後～16c前より前
8	円形	0.19	0.19	0.180	D	土師器×1	
15	円形	0.26	(0.12)	0.166	E	土師器×2	

第V章 考察

今回の天神溝田遺跡発掘調査では、古代から中世を中心とする遺構が検出された。調査Ⅰ区では8世紀後半～13世紀代を中心とする掘立柱建物跡や溝・ピットが検出された。さらに、下層では弥生時代後期中葉に位置づけられる土坑が検出され、時代が重複した調査区であることが明らかとなった。調査Ⅱ区では、14～15世紀代を中心とする掘立柱建物跡・溝などが検出された。これらの調査成果は、本格的な発掘調査が数少ない当地域においては、新たな知見を生む結果となった。特に、古代の遺構については当地域においては初めての発見であり、周辺地域の様相を知る上で重要な成果となった。

ここでは、今回の発掘調査で得られた成果について、時代ごとのまとめを行い、歴史的変遷・位置付けを行いたい。

1. 弥生時代－調査Ⅰ区のSK19出土遺物について－

Ⅰ区下層で検出されたSK19から出土した土器について位置付けしたい。土坑は溝状を呈した土坑であり、県内では物部川流域にあたる香長平野部に立地する田村遺跡群と天神溝田遺跡の所在する仁淀川流域の北高田遺跡⁽¹⁾などで弥生時代中期末～後期初頭にかけての資料が見られる。この形態の土坑については、性格は不明であるが、田村遺跡群や北高田遺跡で検出された土坑については掘立柱建物に付属するものと考えられている。建物の長軸方向に平行して土坑の長軸方向が向く特徴があり、中からは土器がまとまって出土する傾向がある。土坑の断面形態はU字もしくはV字を呈し、土坑の一端に深い掘り込みを持つものもある。天神溝田遺跡で検出された土坑は長軸が2.29 mであり、今まで県内で検出された土坑に比べ規模は小さく、掘立柱建物は伴わない。南四国における土器編年は田村遺跡群を中心に高知平野東部の諸遺跡出土の土器を中心にして編年⁽²⁾されている。東部地域と西部地域では、形態・技法に差異が認められる事が指摘されており、近年西部域にあたる仁淀川流域資料の蓄積により、西部域の諸遺跡出土土器の詳細な位置付け⁽³⁾がなされている。天神溝田遺跡のⅠ区SK19出土の土器は一括性があり、西部域の遺跡の資料の中に組み入れる事が可能な資料になるものと思われる。ここでは、北高田遺跡・東江曲遺跡⁽⁴⁾など弥生時代後期前葉から中葉にかけての土器資料と比較を行いたい。

(1) SK19出土土器の分類

土坑から出土した土器は壺5点・甕11点・鉢1点・高杯1点であり、総点数は19点であった。それぞれの器形の内訳は甕の割合が高く57%を占める。出土した甕はいずれも貼付口縁であり、中期末の神ノ西遺跡・バーガ森北斜面遺跡・北高田遺跡などで出土している甕・壺の口縁部に見られる特徴で、いわゆる南四国型甕⁽⁵⁾に属し、その系譜を引くものと思われる。以下にSK19から出土した土器について分類を行う。

i 壺

Ⅰ類：口縁部が短く直立する短頸壺である。(図54No.24)

Ⅱ類：全体形状のわかるものは図54No.33のみである。胴部上位に最大径があり、頸部は窄まり、口縁部はラッパ状に開く。内外面ハケ調整。外面は縦ハケ、内面は横ハケが施される。

ii 甕

I類：口縁部が粘土帯貼付のもの。(図26・54No.30・31)胴部上位に最大径があり、頸部は明瞭に認識できる。いわゆる南四国型甕に系譜を求めることができる。

II類：口縁部に粘土帯貼付による肥厚が認められないもの。(図26・54No.32～35)胴部の張りがI類に比べ弱く寸胴になり、短い頸部が認められる。

III類：素口縁で「くの字」に外反するもの。(図26・54No.25・26・36)口縁部外面に粘土帯を貼付し、ヨコナデによる調整が施され、下端が隆起帯状を呈する。頸部は縦方向の板状、もしくはヘラ状工具によるナデ調整が施される。胴部最大径は上位にあり、底部にかけて窄む。文様は前者の中期末葉～後期初頭のものに比べ、櫛描文や刻みなどが無く省略されている。

iii 鉢

鉢は1点しかなく、体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁端部は内傾する面を成す。(図55No.27)

iv 高杯

杯部(図55No.28)は外反し、口縁端部は外方につまみ出し面を成す。口縁部内面は横方向のミガキが施され、体部は分割ミガキ。脚部(図55No.29)は杯部との境界に沈線が施される。

(2) SK19出土土器の位置付け

i 器種組成

SK19から出土した主要器種は壺・甕であり、壺：甕の割合は概ね3:11である。高杯と鉢は各1点の出土であり、例外的である。北高田遺跡の主要な遺構では、壺：甕の割合が3:7～4:6を示し、東江曲遺跡ST1・SD3では壺：甕が2:7を示しており⁽⁶⁾、比較すると北高田遺跡から東江曲遺跡と僅かながら甕の組成比が増加している。割合的には東江曲遺跡ST1の組成に近く、器種の特徴も類似している。

ii 各器種の特徴

壺はI類の短頸壺と、II類の広口壺しか認められず、それ以前の北高田遺跡のようなバリエーションは認められない。文様も櫛描文や凹線文・浮文などは完全に消失している。

甕は形態的には3タイプが認められ、II・III類のように口縁部の貼付帯が認められず、短い頸部になる東江曲タイプIV類の割合が高い。また、図54No.32のように頸部の一部にタタキ目を残すものも見られ、東江曲遺跡ST1資料同様、新たな要素として認められる。



図54 I区 SK19出土土器分類図1

iii 編年的位置付け

天神溝田遺跡SK19から出土した土器は、仁淀川流域の周辺の遺跡である北高田遺跡に比べると壺Ⅱ類の広口壺への統一化、甕Ⅱ・Ⅲ類の主流化と文様の消失化⁽⁷⁾などが認められる。前述した東江曲遺跡ST1の組成に近く、器種の特徴も類似している。これらの事からSK19出土土器は東江曲遺跡ST1・SD3と並行する時期として高知平野西部における弥生時代後期中葉に位置づけられる。

このことから、天神溝田遺跡に隣接する弥生時代中期末～後期前半にかけてのバーガ森北斜面遺跡、弥生時代後期後半の天神遺跡出土資料の間を埋める土器として位置付けが可能である。今回の成果は、今後いの町の弥生土器編年・集落の変遷を知る事ができるだけでなく、仁淀川流域に展開する周辺部の遺跡と比較する事によって、より詳細な弥生時代の地域的様相・変遷が見えてくるものと思われる。

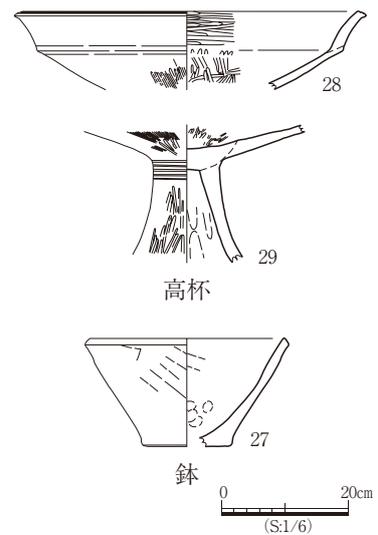


図55 I区SK19出土土器分類図2

2. 古代—調査I区の古代掘立柱建物跡の方向性—

(1) 古代の条里とI区掘立柱建物跡の方向

I区で検出された建物はN-16°~18°-Wを示すものが見られる。調査区は丘陵裾の谷部に位置しており、地形的な制約はあるものの、建物方向の規則性を見る事ができる。いの地区の古代の条里型地割⁽⁸⁾については、現在のJR伊野駅敷地に相当する「一の坪」から枝川地区にかけての宇治川流域にN-16°-Wの地割が認められる事が指摘されていた。調査I区の宇治川を挟んだ北側には塔の向遺跡があるが、この北岸の耕作地の一部に同一の方向を示す部分が認められる。特に、町道中沢塔ノ向線の方向が「一の坪」から想定した条里ラインに沿う。塔の向遺跡の発掘調査は行われていないが、古代の土器片が採取されており、奈良～平安時代頃の遺跡とされている。この条里方向性は高知市の鏡川流域の一部に見られ、隣接する朝倉～鴨部地区にかけても規則性が見られる事からこの地域との関連性が指摘されている。

律令期には、いの町の大半は吾川郡大野郷に属していたとされており、仁淀川西岸の波川付近は高岡郡吾川郷に、南部の八田地区は吾川郡桑原郷、東部の枝川・池内は土佐郡朝倉郷に属したとみられる。また、大野郷は天平勝宝4年(752年)東大寺の封戸となっており、大野郷の貢納は国司を経て納められ、以後古代を通じて封郷であったとされている。当時の土佐で東大寺の封戸となっているのは高知市の鴨部郷であり、朝倉郷との関わりがみられ、条里の施行も関連性がうかがえる。今回の天神溝田遺跡I区で検出された掘立柱建物跡の方向性は、丘陵裾に限られた地形的制約条件はあるものの、当時の土地区画を読み取る事ができ、当地域の条里型地割の一端を垣間見る事ができた。また、出土した緑釉陶器や黒色土器などの搬入品から畿内中央部との関わりがあった地域である事が判明し、高知中央部の様相の一端を知る上で貴重な成果となった。

さらに、I区で検出された遺構と遺物は平安時代末～鎌倉時代にかけて連綿と続いており、当地域の荘園制をうかがう資料が得られた。文治元年(1185年)、源頼朝の守護・地頭設置により、吾川郡は京都六条若宮八幡の別当秀巖の所領とされ、吾川郡のうち大野郷・仲村郷は室町期以後、六条若宮八幡を管轄する京都醍醐寺三宝院門跡の所領になるが、こうした変遷を知る上でも貴重な成果となっ

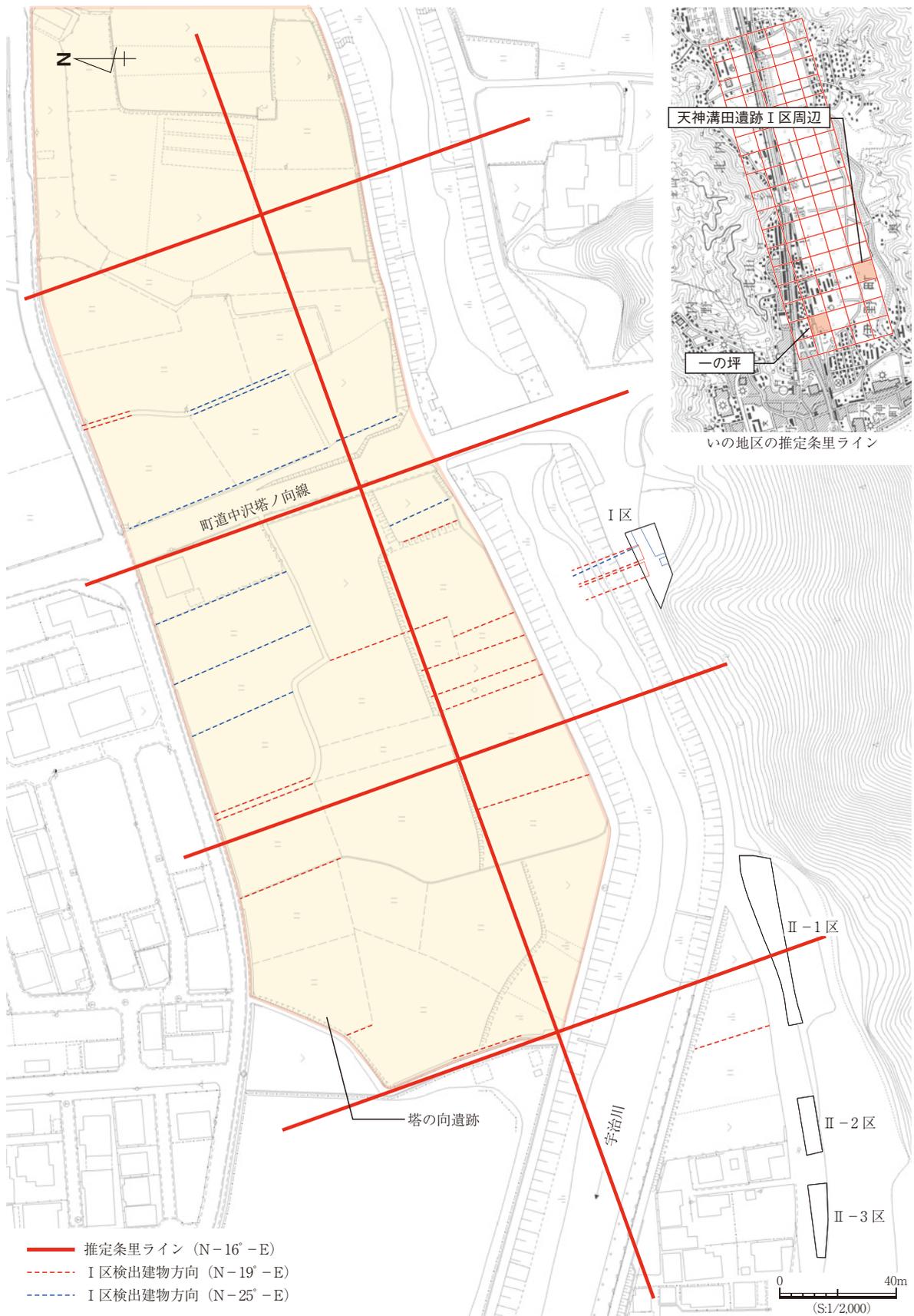


図56 推定条里ライン検出図

た。畿内系の瓦器碗や貿易陶磁器など搬入品もみられ、仁淀川を介した流通・往来のあり方を知る上で重要である。

(2) I区出土遺物の帰属時期

I区から出土した遺物の大半は奈良時代後半～平安時代全般にかけてであり、土師器供膳具・土師器煮炊具・須恵器供膳具・須恵器貯蔵具・黒色土器・緑釉陶器で全体の90.7%を占める。鎌倉時代以降の土器は、土師質土器・須恵器(東播系)・瓦器・貿易陶磁器などがあり、全体の9.3%を占める。これら包含層・遺構の出土遺物からみた時期的なピークは8世紀後半～9世紀前半と9世紀末～10世紀代が中心であり、組成では土師器が主体を占める。8世紀後半～9世紀前半の遺物はSD3出土の遺物が挙げられ、土師器・須恵器の杯・皿など供膳具が主体を占める。供膳具の中で須恵器の占める割合は2.4%と僅かであり、9世紀末～10世紀代が中心になるものと思われる。その他、土師器甕など古代の煮炊具の割合が高く、土師器全体の7%を占める。煮炊具は内外面ハケ調整が施され「くの字」に外反する律令期から系譜のひける甕が主体であり、10世紀後半頃になると摂津型羽釜(C類)⁹⁾の搬入がみられる。黒色土器碗は内黒のAタイプ¹⁰⁾であり14点が出土しているが、畿内からの搬入品が主体で、在地系は2点確認できる。搬入品は黒色土器A類杯の底部に微隆起帯状の貼付高台を有するものであり、胎土には雲母片の確認出来る資料もあり、明らかに搬入品である。土佐では在地生産が本格化されてくるのは10世紀代であり、南国市に所在する小籠遺跡出土資料¹¹⁾の中に初現が見られる。小籠遺跡出土の在地産黒色土器の高台径は大きく9～10cmを測り、当遺跡出土の黒色土器(図33No.114)は高台径が6.6cmと小さく小籠遺跡に後続する時期のものとして捉える事ができる。緑釉陶器は3点出土しており、内2点は輪花碗である。産地は限定出来ないが、胎土観察から畿内産ではないかと考えられる。時期は、畿内産黒色土器と同じく9世紀末～10世紀前葉に位置付けられる。

以上、古代の遺物の組成を概観してみたが、SD3出土資料が最も古く、8世紀後半～9世紀前半に位置付けができる。その他の遺構・包含層から出土した遺物のピークは、供膳具では須恵器が消失することと、在地産土師器供膳具の形態から9世紀末～10世紀代である。

I区の遺構から出土した遺物の次のピークは12世紀後半～15世紀代であり、和泉型瓦器碗・土師質土器供膳具・須恵器甕などが挙げられる。内訳は土師質土器の杯・皿が主体で89点・瓦器碗27点・須恵器甕9点である。瓦器碗は和泉型瓦器碗であり、Ⅲ-2期～Ⅳ-2期までが認められ、概ね12世紀末～13世紀後半代頃の遺物として¹²⁾位置づけられる。土師質土器供膳具は杯が主体で出土しており、形態的にみて13世紀代に出現する法量の大きい杯に該当する。煮炊具では古代からの系譜をひく甕・羽釜・鍋に加え、播磨型羽釜が出土している。口縁部が「くの字」に外反し、外面縦ハケ調整、内面横ハケ調整が施される律令期から系譜をひく甕は、胴部高が短くなり、口径が大きくなる。形態的に鍋と呼べる器形に変化するが、口縁部の製作手法はハケ調整が踏襲される。土佐では土師質土器煮炊具については15世紀代から新たに播磨型の土師質羽釜が出現する。I区のピットからも出土がみられるが、南国市に所在する田村遺跡群を始め、全県的に搬入されてくる。今までの出土傾向としては沿岸部の遺跡を中心に出土量が多く、内陸部は比較的少なくなる傾向にある。時期的には、I区南背後の音竹城跡と関連する遺物と考えられ、機能時期を知る上で重要である。

3. 中世—調査Ⅱ区の遺構と遺物—

(1) Ⅱ区の掘立柱建物跡と溝

Ⅱ区では、南北朝期を中心とする遺構と遺物が確認された。まず、溝についてみてみたい。溝はⅡ

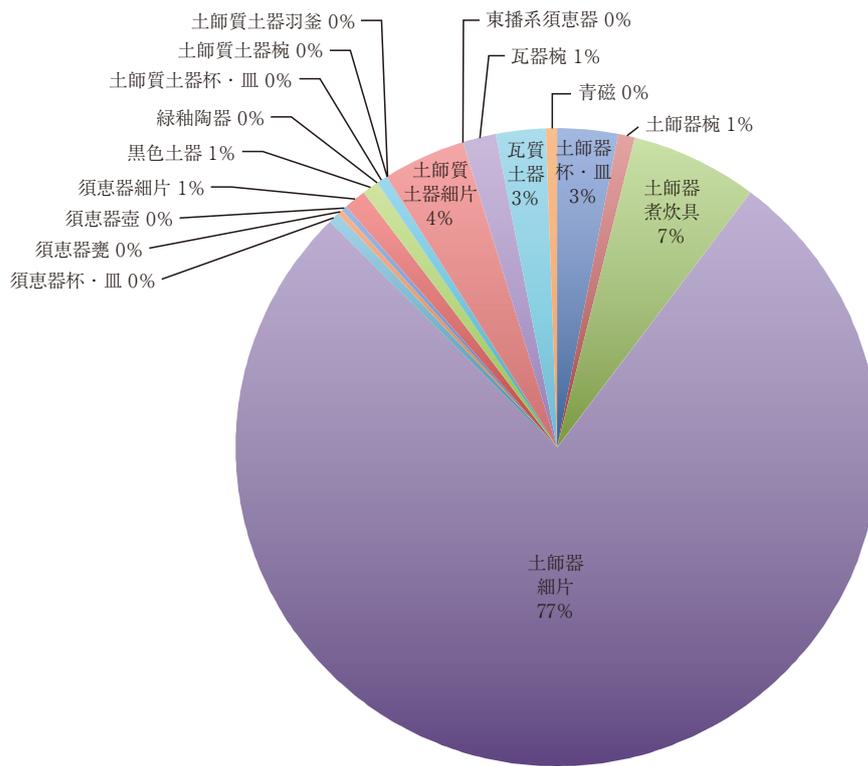


図57 I・II区 全体出土遺物組成図

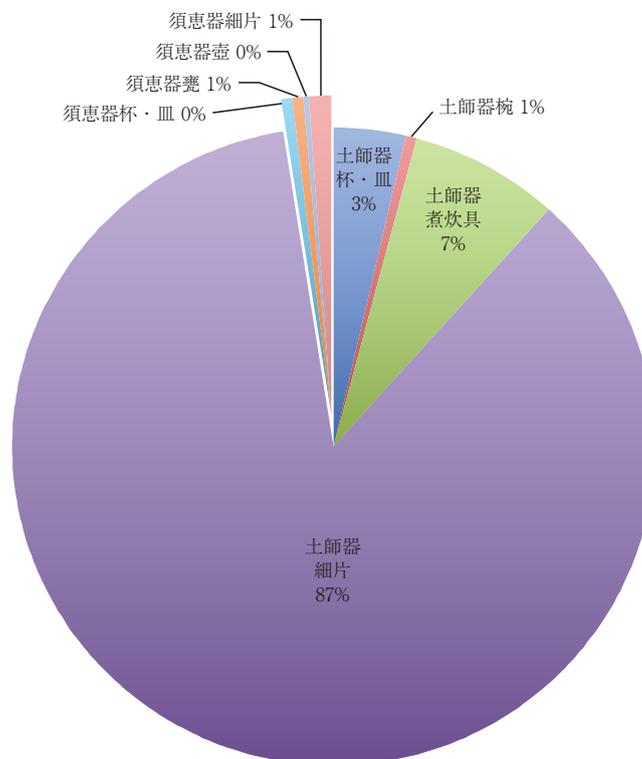


図58 I区 出土遺物組成図

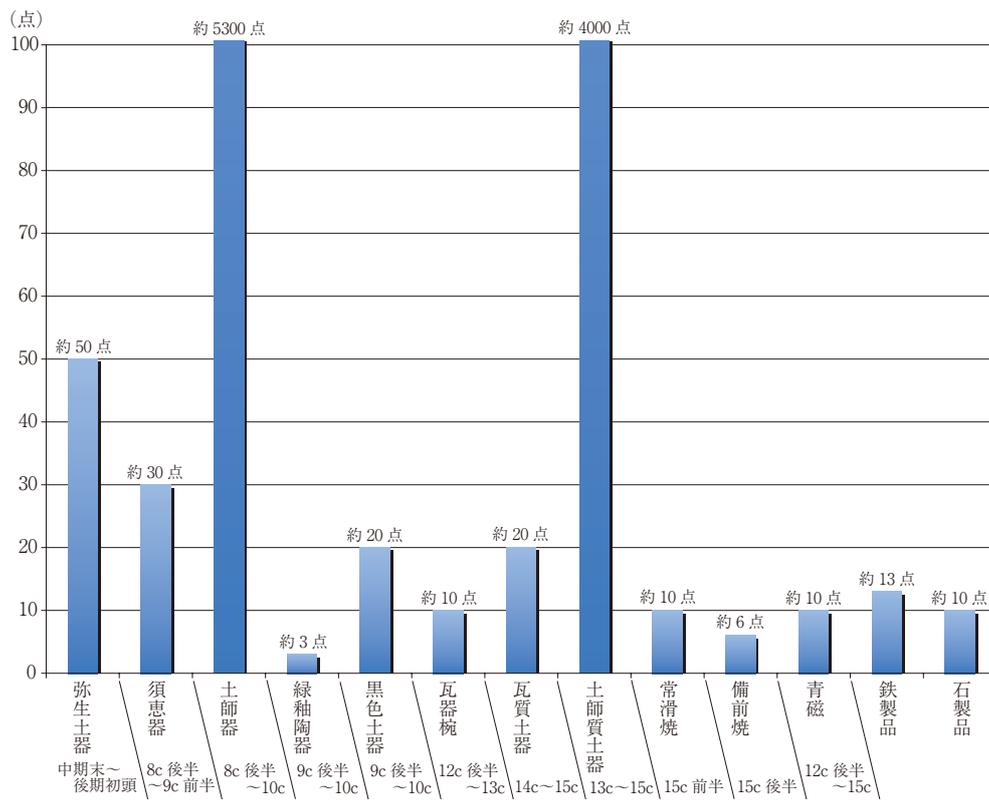


図59 I・II区 全体出土遺物器種別象徴図

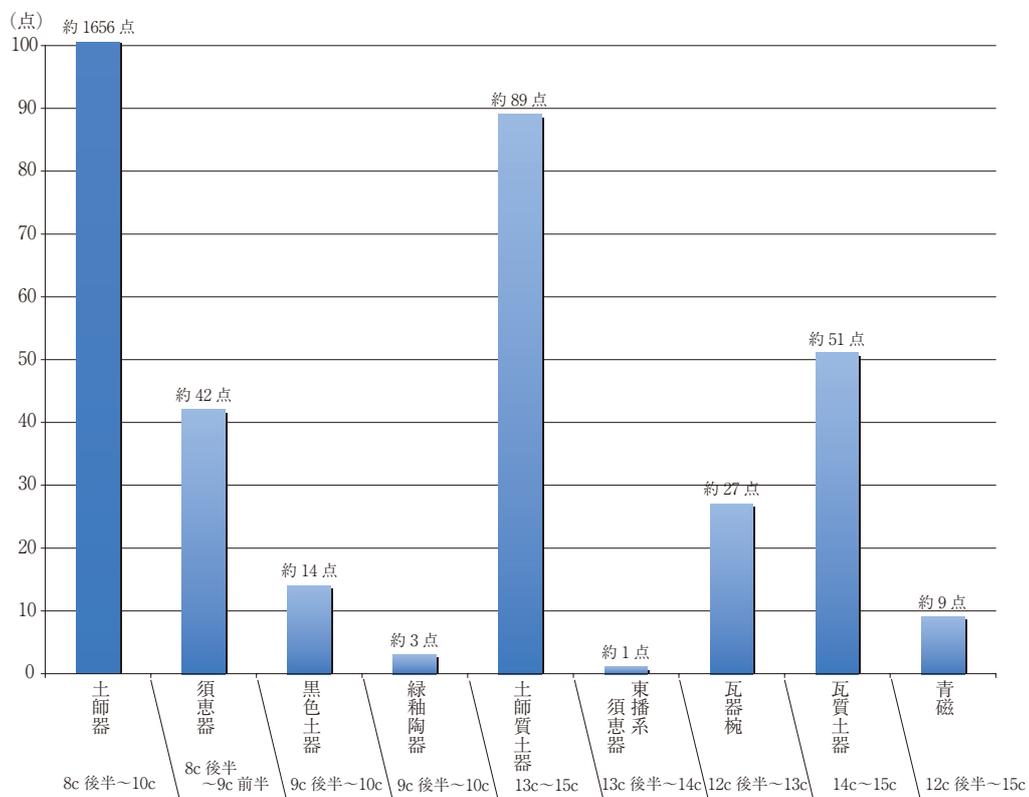


図60 I区 出土遺物器種別象徴図

ー1区の中央部で検出されたが、4条が並行して検出された。SD18については溝断面がV字形をしており、調査区中央部で南側に屈折し全体は不明であるが、屋敷地を区画する溝として捉える事ができる。V字形の掘方は、南北朝期の特徴を示すものと考えられ、瓦質土器などの出土遺物からも裏付ける事が可能である。調査区の背後の山頂には、音竹城跡の本丸に相当する主郭があり、城跡との関わりのある屋敷地が調査区南側の丘陵山裾にかけて展開しているものと思われる。建物跡はこれらの溝の内側、もしくは並行して検出されており、調査区東端で検出したSB4は、桁行3間×梁行3.5間以上の総柱東西棟建物跡であり、北東に1間の張り出しを持つ構造で検出された。身舎の面積は28.30㎡であり、張り出し部は2.63㎡を測る。規模からすれば母屋的な建物と考えられるが、屋敷地全体の構造については不明瞭である。ピットから瓦器椀と瓦質土器鍋が出土し、14世紀後半代の建物跡であると考えられる。SB4については、SDと同じ方向性を示していることから、溝の時期と相前後する時期に機能していたものと考えられる。

(2) 調査Ⅱ区出土の瓦質土器について

調査Ⅱ区では、鍋・播鉢を中心とする瓦質土器が出土した。鍋については14世紀後半～15世紀前半代にかけての土佐の諸遺跡で出土が見られる。南国市に所在する田村遺跡群⁽¹³⁾では溝に囲まれた屋敷群の溝から一括性の高い鍋・播鉢が出土している。また、仁淀川流域でみると、春野町の木塚城跡⁽¹⁴⁾で瓦質土器鍋の比較的まとまった出土が見られる。土佐で出土する瓦質の鍋については、形態的に口縁部が「くの字」に外反するタイプ(鍋B2)と、短く「直立」するタイプ(鍋B1)に二分⁽¹⁵⁾される。天神溝田遺跡調査Ⅱ区で出土した鍋は、後者の短く「直立」するタイプ(鍋B1)(図61No.170)に限られ、例外的に(図61No.167)の全体が内湾する器形のもの(釜C)⁽¹⁶⁾が見られる。No.167は口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚させており、13世紀後半から出現する畿内系瓦質羽釜の鏝が退化したタイプのものである。口縁部外面に粘土帯を貼付し、端部にヨコナデを施す技法は他の鍋と同じ調整手法である。他に搬入品の受け口を呈するタイプの鍋(図61No.174)が認められる。播鉢は、口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚するタイプ(図61No.166)と、粘土帯貼付がないもの(図61No.164)があり、前者の方が体部内面に施される条線が多くなる傾向がある。羽釜については河内・和泉型(図61No.175)の畿内系の搬入品がみられる。

(3) 瓦質土器の編年

土佐の瓦質土器については13世紀後半頃、畿内系の羽釜の搬入から始まる。この頃の製品については、寺院や城館で羽釜・火鉢を中心に比較的多く出土が見られる。煮炊具の中で鍋についてはそれ以前に求める系譜が無く、14世紀代に出現する。それ以前は、器高の深い土師器の甕や羽釜といったもので占められるが、煮炊具形態の大きな画期はこの頃に求められる。ここでは土佐の瓦質土器、特に鍋・播鉢・釜を中心に編年・分布⁽¹⁷⁾をみてみたい。

i 釜

13世紀後半頃の畿内系足付羽釜の搬入から始まる。このタイプ(釜B)は土佐東部域に比較的多く分布しており、夜須町に所在する口檜ヶ谷遺跡、香我美町に所在する拝原遺跡・十万遺跡に出土がみられる。調査面積の割合に対して、ひとつの遺構及び包含層からまとまって出る割合が高い。県内全域に羽釜は見られるが、脚付の三足羽釜形態のものは極めて少なく、脚の出土も僅少である。足付羽釜について土佐では神社・寺院関連遺跡で出土する傾向があるが量的に僅少であるため、確信に満たない。足の付かないタイプの羽釜(釜A)が主体で、14世紀後半頃になると鏝の退化が著しく、

薄い粘土帯を貼付したタイプ(釜C)に変わり、土佐型鍋と同様、この頃から在地で生産されるものと考えられるが生産期間は短い。それと入れ替わり、14世紀末～15世紀前半代になると畿内系の羽釜(釜D)の搬入が始まる。仁淀川流域の千本杉遺跡・木塚城跡・四万十市の坂本遺跡など神社・寺院・城館で出土している。このタイプは15世紀前半代に入ると集落遺跡にも定着化するが、土師質のものが主体を占め、瓦質のものは城館・寺院などの遺跡で出土する傾向にある。15世紀後半代になると瓦質土器羽釜は茶釜を除いて消失し、播磨型羽釜など土師質土器鍋に淘汰される。

ii 鍋・播鉢

瓦質の鍋は13世紀後半～14世紀代にかけて畿内系の受け口状を呈した鍋(鍋A)が見られる。土佐市の天神遺跡・林口遺跡と四万十市の具同中山遺跡で確認されている。14世紀代に入ると所謂、「土佐型鍋」と呼ばれる在産の鍋(鍋B)が出現する。細川氏の田村城館を中心とする田村遺跡で比較的まとまって鍋・播鉢が出土している。調査面積も広大であるが、他遺跡に比べ土佐型鍋・播鉢が集中して出土する割合は多い。特に田村城館南側に隣接する「寺の前」地区周辺に多く分布する。土佐型鍋は口縁部に特徴がみられ、「くの字」に外反するタイプ(鍋B2)と、短く「直立」し、端部が面を成すタイプ(鍋B1)の二系統がみられ、前者が先行するものと思われる。鉢も二系統みられ、器壁が比較的厚く、粘土紐を巻き上げ成形しヨコナデ調整が施され条線が櫛状の工具により施されているもの(鉢A)と、器壁が薄く、指頭により調整が施され、口縁部は強いヨコナデにより端部が凹むもの(鉢B)がある。鉢Bの内面の条線はヘラ状工具によるものが多い。鍋と鉢の成形・調整の特徴は、型に粘土を乗せ指頭により器壁を薄く伸ばしたものと、粘土帯を巻き上げて成形し、ナデ調整が施されたものに分けることが可能であり、鍋B2と鉢B、鍋B1と鉢Aの成形・調整の特徴が共通する。鍋の型作り技法についてはそれ以前に土佐では確認されておらず、工人の影響が考えられる。この技法は底部から体部下半に認められるものであり、完形復元できるものが少ないが、高知市春野町に所在する木塚城跡出土資料の中で確認されており、型作り技法タイプの特徴をみていく上で貴重である。鍋の分布をみると県内全域で確認できるが、数量的な差はほとんど見いだせなかった。播鉢は、東播系捏鉢から備前焼Ⅲ期の播鉢にスムーズに移行する遺跡において、出土量は皆無、もしくは僅少であり、搬入品が主体を占める遺跡と、播鉢が主体の遺跡との相違がみられる。ただ、この

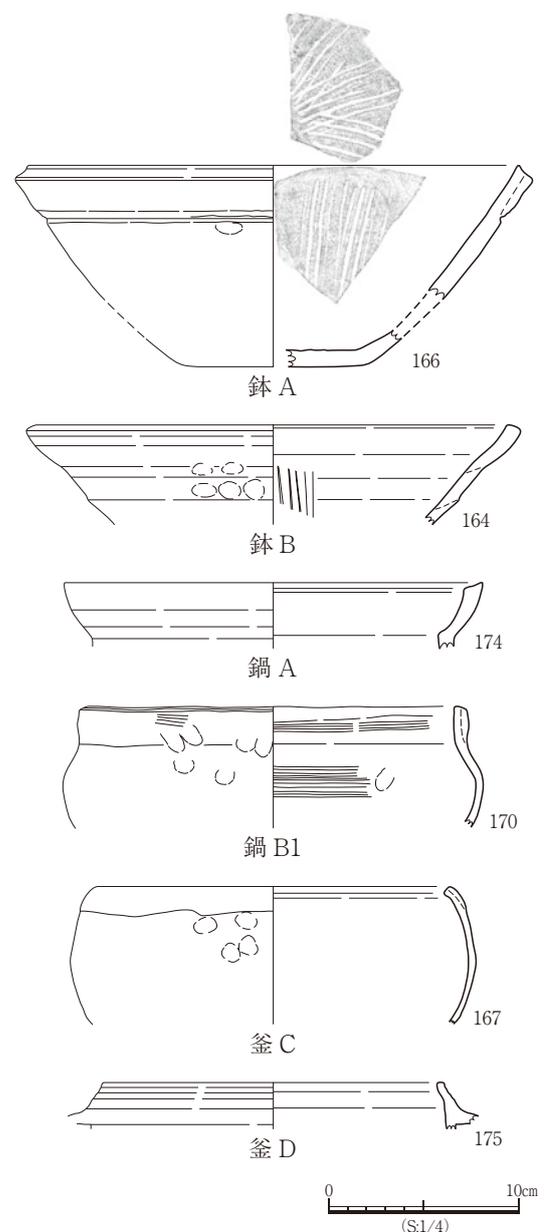


図61 II区出土瓦質土器分類図

鉢も二系統みられ、器壁が比較的厚く、粘土紐を巻き上げ成形しヨコナデ調整が施され条線が櫛状の工具により施されているもの(鉢A)と、器壁が薄く、指頭により調整が施され、口縁部は強いヨコナデにより端部が凹むもの(鉢B)がある。鉢Bの内面の条線はヘラ状工具によるものが多い。鍋と鉢の成形・調整の特徴は、型に粘土を乗せ指頭により器壁を薄く伸ばしたものと、粘土帯を巻き上げて成形し、ナデ調整が施されたものに分けることが可能であり、鍋B2と鉢B、鍋B1と鉢Aの成形・調整の特徴が共通する。鍋の型作り技法についてはそれ以前に土佐では確認されておらず、工人の影響が考えられる。この技法は底部から体部下半に認められるものであり、完形復元できるものが少ないが、高知市春野町に所在する木塚城跡出土資料の中で確認されており、型作り技法タイプの特徴をみていく上で貴重である。鍋の分布をみると県内全域で確認できるが、数量的な差はほとんど見いだせなかった。播鉢は、東播系捏鉢から備前焼Ⅲ期の播鉢にスムーズに移行する遺跡において、出土量は皆無、もしくは僅少であり、搬入品が主体を占める遺跡と、播鉢が主体の遺跡との相違がみられる。ただ、この

現象は時期的に備前焼Ⅲ期～Ⅳa期⁸⁸⁾の段階に限られており、備前焼播鉢Ⅳb期以降になると瓦質の製品は消滅し、播鉢については備前焼が主体となる。

iii 風炉・火鉢・茶釜

瓦質の火鉢・風炉・茶釜については、坂本遺跡などの寺院や、田村遺跡群・西山城跡など拠点的な城館を中心に出土が見られる。瓦質土器の中でも特殊品といえる。

茶釜(釜E)の初現は14世紀代であり、具同中山遺跡群(四万十市)に出土がみられ、しっかりとした鍔が付き、体部上位に陰刻が施されている。図62No.36は搬入品であると考えられる。その後、双耳が付くタイプがみられ、16世紀後半代まで続く。火鉢は奈良火鉢など搬入品が主体である。西山城跡で出土した火鉢は3タイプあり、図62No.33は口縁部に二重の凸帯が巡り、凸帯間に唐草文が施されている。風炉は城館を中心に出土している。図62No.31・32のように口縁部外面に短冊状の凸帯が付くタイプが比較的多く見られる。風炉や茶釜は茶湯に関係する道具であり、城館・寺院でしか出土がみられない。

(4) 出土遺物からみた木塚城跡との比較と今後の検討課題

仁淀川流域でみると、東播系の製品については捏鉢・甕などの搬入が12世紀代にピークがあり、10世紀後半～11世紀代にピークがある物部川流域とは様相が異なる。特に、供膳具の椀の比率が大きく変化する。また、この時期は在地供膳具も変化がみられ、椀については輪高台椀・円盤状高台椀など各地域色が出てくる。また、瀬戸・常滑といった東海からの搬入品も認められ、13世紀後半～15世紀前半にピークがある。天神溝田遺跡の調査Ⅱ区で出土した遺物の中心的な時期は、14世紀～15世紀前半を中心としており、背後の音竹城跡の機能時期を知る上で重要である。音竹城跡の城主・築城時期については不明な点が多い。今回の出土遺物と比較する遺跡を周辺地域に求めれば、木塚城跡出土遺物の組成と類似している。木塚城跡は、春野町に所在しており、北部丘陵から派生する尾根丘陵端部に立地する南北朝期の山城である。曲輪と小規模な堀切で構成される山城であり、発掘調査では、古瀬戸・常滑焼など東海系の製品が数多く出土しており注目される。また、東播系須恵器の捏鉢、備前焼Ⅲ期の播鉢など調理具も多く出土している。瓦質土器の製品は鍋がみられるが、播鉢は見られない。鍋の中で、1点だけ完形復元が可能なものがあり、南伊勢系鍋の製作技法と同じ技法で作られた鍋が確認されており⁸⁹⁾、製作技術の伝播を知る上で貴重である。出土遺物からみた木塚城跡のピークは14世紀代であり、鍋については鍋B2タイプが主体をしめる。播鉢が見られないのは、東播系捏鉢から、備前焼播鉢にスムーズに移行しているものと思われる。また、東播系捏鉢の中には、外面に煤やタールが付着しているものが認められ、煮炊具として使用された可能性も指摘されており、山城での調理具の使用方法について検討する必要があると考えられる。天神溝田遺跡から出土した遺物の組成と比較すると、調理具では備前焼播鉢はⅣ期を待たないと当遺跡には認められない。東播系捏鉢から備前焼Ⅲ期へはスムーズな移行が認められず、補完するかたちで播鉢が認められる。また、鍋については鍋B1タイプが主体であり、工人差がうかがえる。これらは地域差(領域)によるものなのか、出現時期差なのか、この点については、今後更なる検討が必要であると思われる。

天神溝田遺跡を含む仁淀川流域では、こうした広域流通品が多く見られ、仁淀川を使った水運が活発に行われていた事を物語っている。天神溝田遺跡は仁淀川と支流である宇治川の結節点に位置しており、川の利便性の高い所に立地している。仁淀川流域で見た場合、川に面した結節点に山城が構築されており、右岸側との渡し場、物資の流通を管理する目的で双方に城郭が分布している。例え

ば、音竹城跡と貢山城跡、八田城跡と人麻呂様城跡、西畑城跡と新居城跡などがみられ、仁淀川の渡し場として想定される場所に分布⁹¹⁾がみられる。近年、こうした城館麓周辺の調査が行われており、中世の水運を物語る広域流通品の資料が増加してきている。こうした資料について、仁淀川流域の流通を考える場合、南北朝期の吾南平野を治めていた吉良氏、高岡平野を治めていた蓮池氏や大平氏など、その当時の領域を納めていた領主の動向や、求心的な寺社勢力との関連を併せて考えていく必要があるものと思われる。

前述した瓦質土器の分布にもどるが、東部では、南国市田村遺跡群のある物部川流域の香長平野を治めていた細川頼氏など足利方(北朝方)の領域に多く分布している。細川氏は貞治四年(1365年)になると本家の頼之があらたな土佐守護となる(『地蔵院文書』)。頼之は幕府の管領となる一方、摂津・丹波・讃岐と土佐の守護を兼務し、14世紀後半の幕政を主導した武将である。この頃から田村遺跡群のある香長平野周辺も再編が行われたものと考えられる。領域的には物部川左岸の香美市・香南市一帯まで拡がりがあったものと思われ、大忍荘南部域の十万遺跡では土佐型鍋や供伴する京都系土師器皿など遺構から出土する組成が田村遺跡群と同様であることから、15世紀代については細川氏入国以降の再編により発展していく可能性が考えられる。京都系土師器皿の分布をみれば、高知県中央部を中心に東部域に多く分布しており、仁淀川の右岸から高知県西部にかけては僅少であり、京都系土師器皿を模倣した製品が主体となる。手づくね成形ではなく、従来の回転台成形により京都系Gタイプの形態を意識した製品がみられる。また、土佐西部の方にも分布が見られ、幡多の具同中山遺跡や坂本遺跡でも、ある一定量出土している。このように、仁淀川を境界に土器の製作手法の相違や、搬入品と在地品による遺跡の遺物組成に違いが認められ、今後は、このような遺跡との比較検討を行っていきたい。

補註

- (1) 『北高田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000
- (2) 出原恵三「土佐地域」『弥生土器の様式と編年四国編』木耳社 2000
- (3) 久家隆芳「北高田遺跡出土の弥生土器について」『北高田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000
- (4) 出原恵三・小嶋博満「東江曲遺跡」(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2003
- (5) 久家隆芳「田村遺跡群出土の南四国型甕」『田村遺跡群Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004
- (6) (7) 出原恵三「ST1及びSD3出土土器について」『東江曲遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2003
- (8) 大脇保彦「土佐の条里－その復元再考と補説」『高知の研究2古代・中世篇』清文堂 1982
- (9) 菅原正明「近畿における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1986
 福島正和「古代末から中世初頭の煮炊具」『中世土器の基礎研究21』日本中世土器研究会 2007
- (10) 森隆「西日本の黒色土器生産(下)」『考古学研究第37巻第2号』1991
- (11) 出原恵三「小籠遺跡出土の古代土器について」『小籠遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2003
- (12) 橋本久和「第3章瓦器椀編年の今日」『中世考古学と地域・流通』真陽社 2009
 森島康夫「瓦器椀」『概説中世の土器・陶磁器－中世土器研究会編－』真陽社 1995
- (13) 『田村遺跡群』第6～10分冊 1986
- (14) 『木塚城跡Ⅱ』春野町教育委員会 2004
- (15) 「土製煮炊具の諸様相」第25回日本中世土器研究会 2006の発表資料の吉成分類による。田村遺跡群の資料を中心に分類・編年試案を行った。

- (16) 上記分類の「釜Gタイプ」に該当する。15世紀代に入ると土師質土器煮炊具の割合が主体を占め、在地系瓦質土器羽釜の最終形態を示すと思われる。
- (17) 吉成承三「四国の土製甕・羽釜・鍋」『中世土器の基礎研究21』日本中世土器研究会 2007 で述べた編年に基づき再検討を行うものとする。
- (18) 重根弘和「中世の備前焼」『備前焼研究最前線Ⅱ－備前歴史フォーラム資料集－』備前市歴史民俗資料館紀要7 備前市歴史民俗資料館・備前市教育委員会 2005
- (19) 三重県埋蔵文化財センターの伊藤裕偉氏の木塚城跡出土資料と田村遺跡群出土資料の実見により、ご教示を頂いた。
伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要第一号』1992
- (20) 仁淀川流域の川に面した城館の機能を考える上で、立地とそれに関係する街道も視野に入れて考える必要がある。近年、仁淀川河口付近の様相が発掘調査により明らかになりつつあるが、新居城跡が立地する土佐市新居と、西畑城跡が立地する春野町側には「十文字の渡し」が戦後まであったとされている。近世、山内氏の時代には「鯉街道」として宇佐に水揚げされた鯉を新居から渡して川をわたり、陸路で春野町から高知市あじろ山を経由し運ばれたとされている。古代・中世の段階から陸路の結節点と考えられる場所に城館の分布が見られる地域である。

参考文献・調査報告書

- 岡本健児「神西式土器の再検討」『高知女子大学紀要人文・社会科学編』第20巻 1972
- 伊藤強『バーガ森北斜面遺跡』高知県伊野町教育委員会 1999
- 岡本健児・横川末吉「考古篇・古代篇・中世篇」『伊野町史』伊野町 1973
- 池澤俊幸「煮炊具」『具同中山遺跡群Ⅳ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001
- 鋤柄俊夫「土製煮炊具に見る中世食文化の特質」『国立歴史民俗博物館研究報告第71集』1997
- 森島康夫「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会 1990
- 長谷川眞「播磨における土製煮炊具の様相」『中近世土器の基礎研21』2007
- 川口宏海「中世日本の土釜について」『食の考古学Ⅱ』考古学ジャーナル409号 1996
- 『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995
- 『田村遺跡群Ⅱ』第1分冊（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004
- 『口槇ヶ谷遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2008
- 『拝原遺跡』高知県・香我美町教育委員会 1993
- 『十万遺跡』香我美町教育委員会 1988
- 『土佐神社西遺跡・土佐神社』高知市教育委員会 2006
- 『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会 2005
- 『芳原城跡Ⅱ』春野町教育委員会 1993
- 『千本杉遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004
- 『天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ』高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001
- 『林口遺跡Ⅱ・蓮池城跡北斜面遺跡』高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001
- 『姫野々城跡Ⅰ』葉山村教育委員会 1995
- 『西山城跡』高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2008
- 『具同中山遺跡群Ⅳ』高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001
- 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992
- 『坂本遺跡』高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2008

写真図版



天神溝田遺跡全景(西より)



天神溝田遺跡全景(東より)



調査区遠景(北より)



調査区近景(北東より)

図版4



I区調査前風景(東より)



I区遺構検出状態(西より)



I区遺構完掘状態(東より)



I区遺構完掘状態(上空より)



I区西側下層遺構検出状態(南東より)



I区南壁セクション(北西より)



I区Ⅲ層石包丁出土状態



I区Ⅲ層土師器・須恵器出土状態



I区 Pit 11 青磁出土状態



I区 Pit 136 土錘出土状態



I区 Pit 65 柱痕検出状態



I区 Pit 88 礎盤出土状態



I区 Pit 147 礎盤出土状態



I区 Pit 311 礎盤出土状態



I 区 SD3 遺物出土状態1(北より)



I 区 SD3 遺物出土状態2



I 区 SD3 遺物出土状態3



I 区 SD3 遺物出土状態4



I 区 SD3 完掘状態



I 区 SK19 遺物出土状態1(西より)



I 区 SK19 遺物出土状態2



I 区 SK19 遺物出土状態3



I 区 SK18 炭化物検出状態



I 区 SX1 完掘状態



Ⅱ-1区東側遺構検出状態(南東より)



Ⅱ-1区遺構完掘状態(上空より)



Ⅱ-1区南壁セクション(北より)



Ⅱ-1区SD完掘状態(西より)



Ⅱ-1区SB完掘状態(西より)



Ⅱ-1区 Pit7礎盤出土状態



Ⅱ-1区 Pit15礎盤出土状態



Ⅱ-1区 Pit28礎盤出土状態



Ⅱ-1区 Pit28柱痕完掘状態



Ⅱ-1区Ⅲ層土錘出土状態



Ⅱ-1区Ⅲ層古瀬戸天目茶碗出土状態



Ⅱ-1区Ⅲ層瓦質土器播鉢出土状態



Ⅱ-1区Ⅲ層瓦質土器鍋出土状態



Ⅱ-1区Ⅳ層土師質土器釜脚部出土状態



Ⅱ-1区Ⅳ層土錘出土状態



Ⅱ-1区Ⅳ層青磁碗出土状態



Ⅱ-1区Ⅳ層鉄滓出土状態



II - 1区IV層瓦質土器鍋出土状态



II - 1区IV層瓦質土器羽釜出土状态



II - 1区IV層常滑焼広口壺出土状态



II - 1区IV層砥石出土状态



II - 1区SD22白磁碗出土状态



II - 1区SD22瓦質土器播鉢出土状态



II - 1区SD22砥石出土状态



II - 1区Pit8土師質土器杯出土状态



Ⅱ-1区CⅡ-21-7グリッドⅣ層遺物出土状態(西より)



Ⅱ-1区Ⅳ層瓦質土器搦鉢出土状態



Ⅱ-1区Ⅳ層常滑焼甕出土状態



Ⅱ-1区Ⅳ層瓦質土器鍋出土状態



Ⅱ-1区Ⅳ層須恵器捏鉢出土状態



Ⅱ-2区遺構検出状態(西より)



Ⅱ-2区遺構完掘状態(上空より)



Ⅱ-2区南壁セクション(北より)



Ⅱ-2区 Pit1 礎盤出土状態



Ⅱ-2区 Pit3 柱痕完掘状態



Ⅱ-2区 SK1 セクション



Ⅱ-2区 SK2 完掘状態



Ⅱ - 3区遺構完掘状態(東より)



Ⅱ - 3区南壁セクション(北より)



I 区 SB 出土遺物(外面)



I 区 SB 出土遺物(内面)



I 区 SB 出土土錘



I 区 SD3 出土土師器皿(12)·杯(13) (外面)



I 区 SD3 出土土師器皿(12)·杯(13) (内面)



I 区 SD3 出土須恵器皿



I 区 SD3 出土須恵器杯



I 区 SD3 出土須恵器蓋



I 区 SD3 出土須恵器甕(外面)



I 区 SD3 出土須恵器甕(内面)



I 区 SK 出土遺物(外面)



I 区 SK 出土遺物(内面)



I 区 SK19 出土弥生土器



I 区 SK19 弥生土器甕(26·34)·高杯(28) (外面)



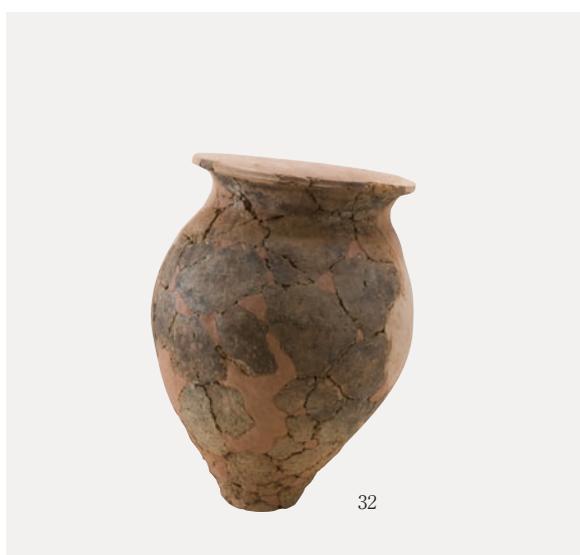
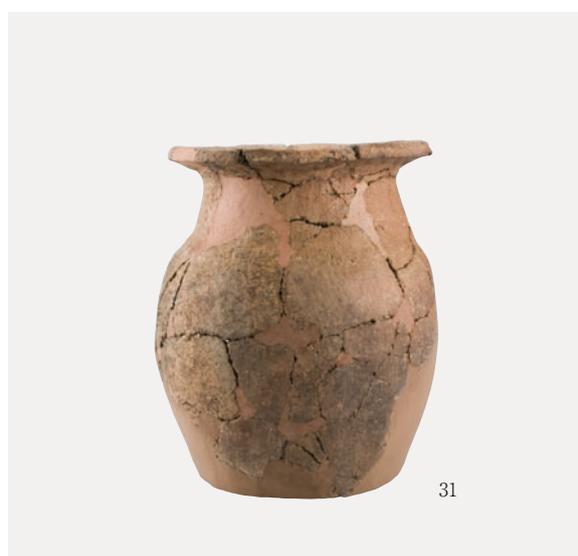
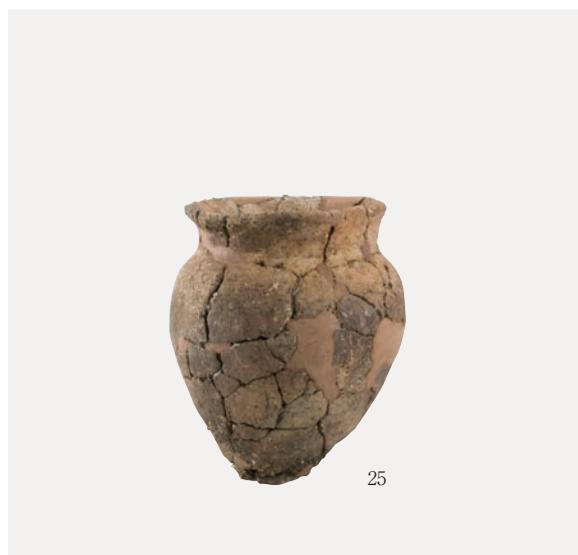
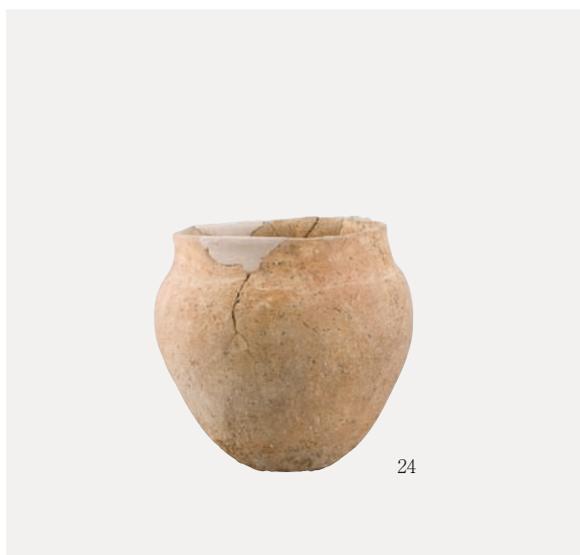
I 区 SK19 弥生土器甕(26·34)·高杯(28) (内面)



I 区 SK19 弥生土器甕(35·36) (外面)



I 区 SK19 弥生土器甕(35·36) (内面)



I 区 SK19 弥生土器壺(24·33)·甕(25·30~32)



I 区 SK19 弥生土器鉢



I 区 SK19 弥生土器高杯



I 区 SK19 弥生土器壺(底部)



I 区 SK19 弥生土器甕(底部)



I 区 SK19 弥生土器壺(底部)



I 区 SK19 弥生土器甕(底部)



I 区 SK19 弥生土器甕(底部)



I 区 SK19 弥生土器壺(底部)



I区SK19叩石(表面)



I区SK19叩石(裏面)



I区SX1黒色土器碗(44)・緑釉碗(45)(外面)



I区SX1黒色土器碗(44)・緑釉碗(45)(内面)



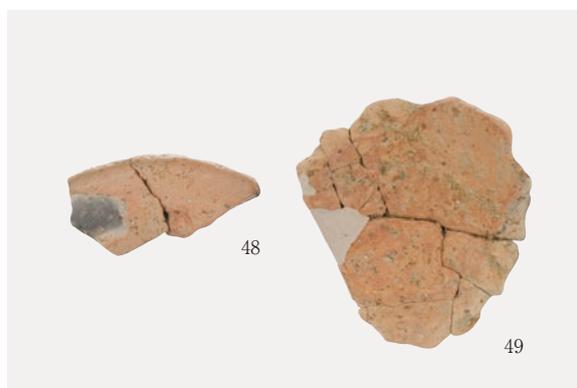
I区SX1土師器甕(46)・青磁碗(47)(外面)



I区SX1土師器甕(46)・青磁碗(47)(内面)



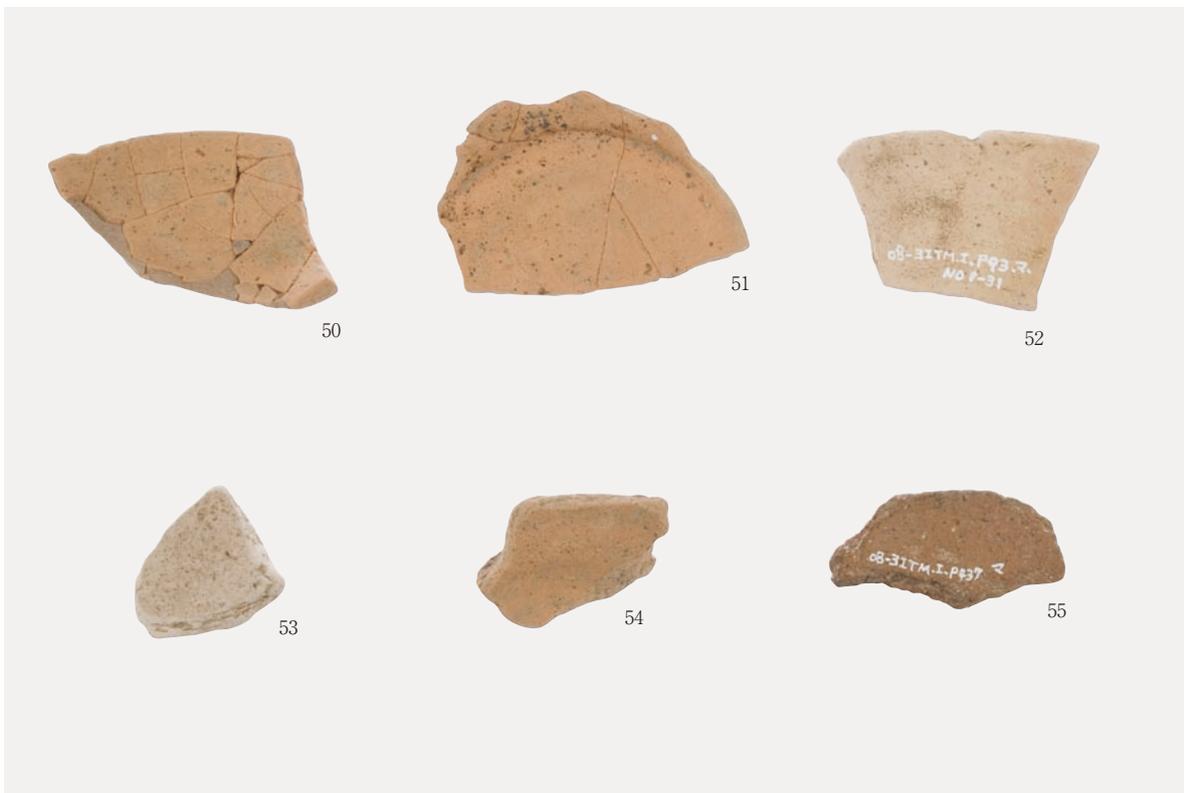
I区SX1弥生土器壺(48)・弥生土器(49)(外面)



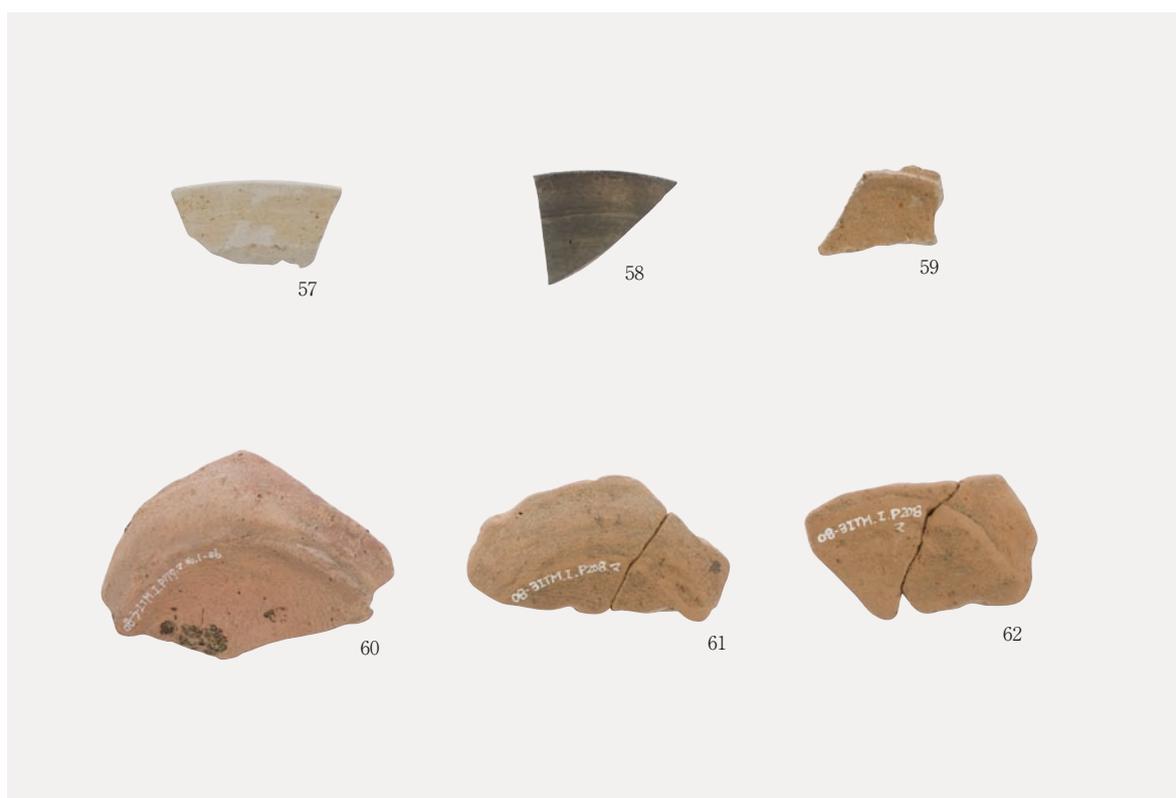
I区SX1弥生土器壺(48)・弥生土器(49)(内面)



I 区 Pit 出土土師器(外面)



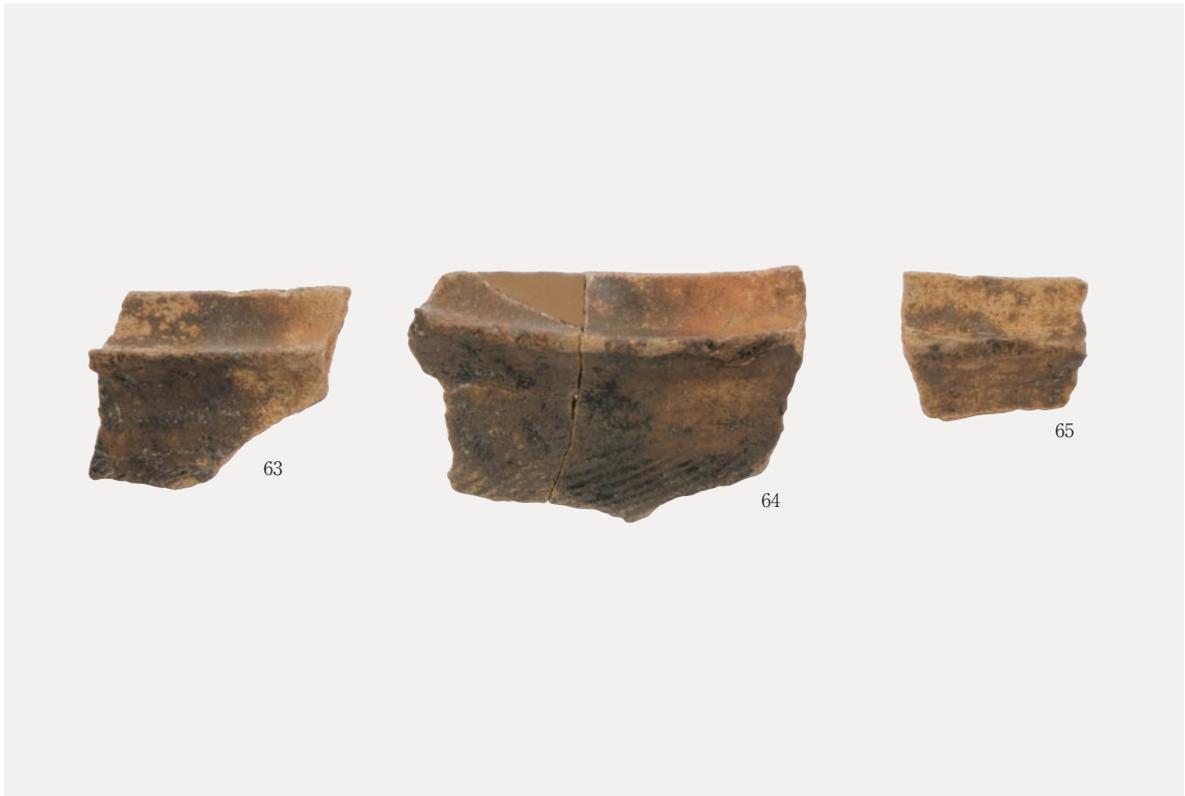
I 区 Pit 出土土師器(内面)



I 区 Pit 出土須惠器皿(57)・須惠器壺(58)・黑色土器碗(59)・土師質土器杯(60~62) (外面)



I 区 Pit 出土須惠器皿(57)・須惠器壺(58)・黑色土器碗(59)・土師質土器杯(60~62) (内面)



I 区 Pit 出土土師質土器羽釜(外面)



I 区 Pit 出土土師質土器羽釜(内面)



I 区 Pit 出土瓦器碗(外面)



I 区 Pit 出土瓦器碗(内面)



56

I 区 Pit 出土土師器甕(外面)



56

I 区 Pit 出土土師器甕(内面)



69

70

71

I 区 Pit 出土青磁碗(69)·近世陶磁器(70·71)(外面)



69

70

71

I 区 Pit 出土青磁碗(69)·近世陶磁器(70·71)(内面)



72

73

I 区 Pit 出土土錘



74

75

I 区 Pit 出土鉄滓(74)·弥生土器(75)



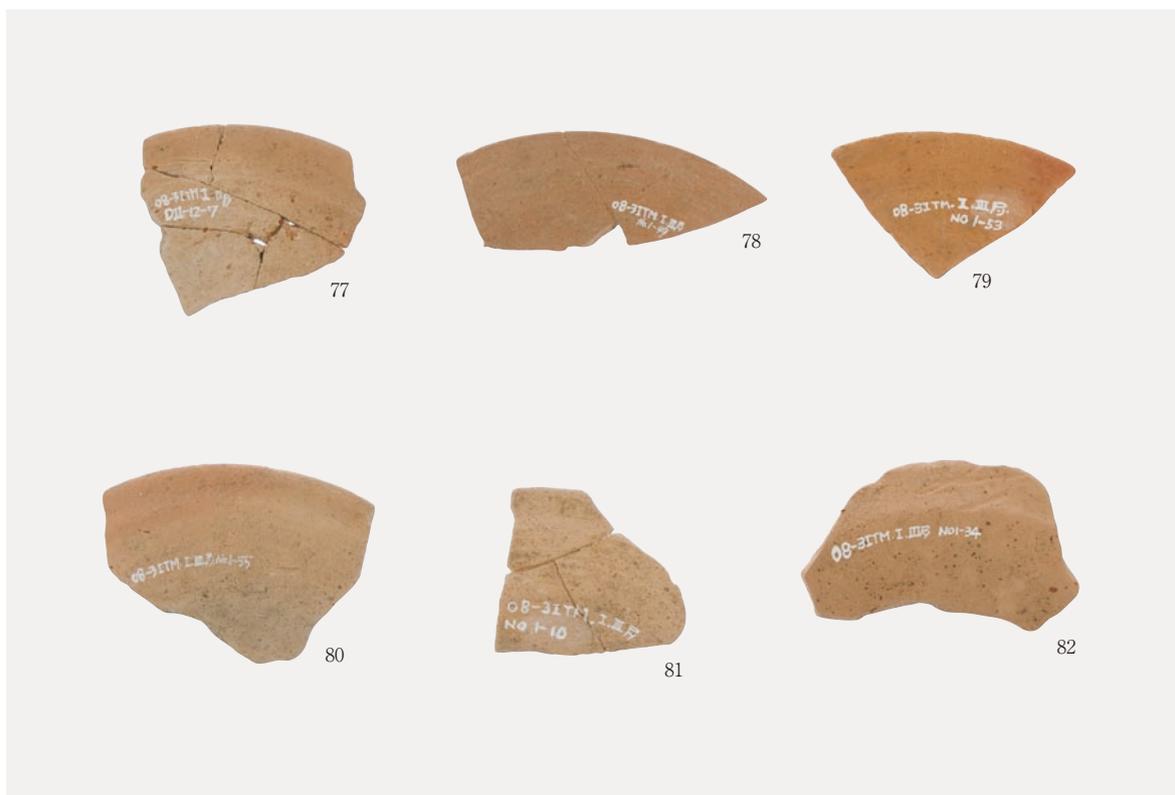
76

I 区包含層出土土師器皿

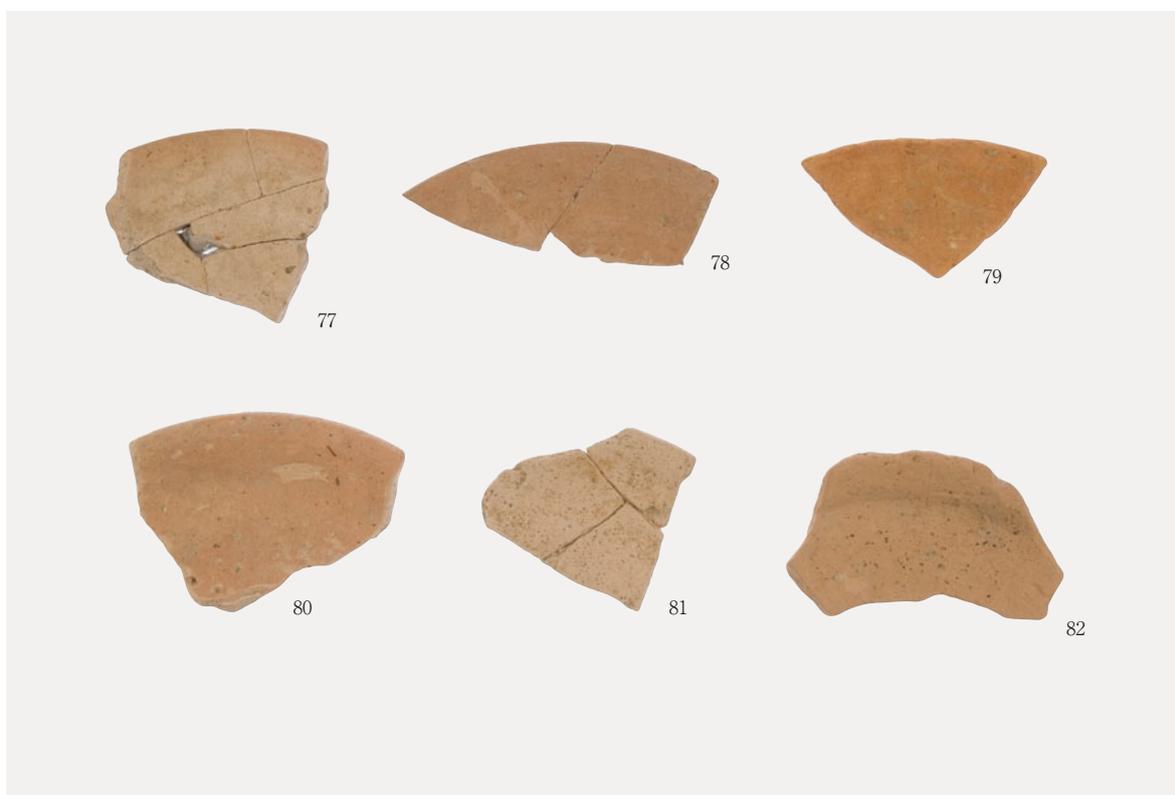


85

I 区包含層出土土師器杯



I 区包含層出土土師器皿(外面)



I 区包含層出土土師器皿(内面)



I 区包含層出土土師器皿(83)·杯(84·86·88·90·91) (外面)



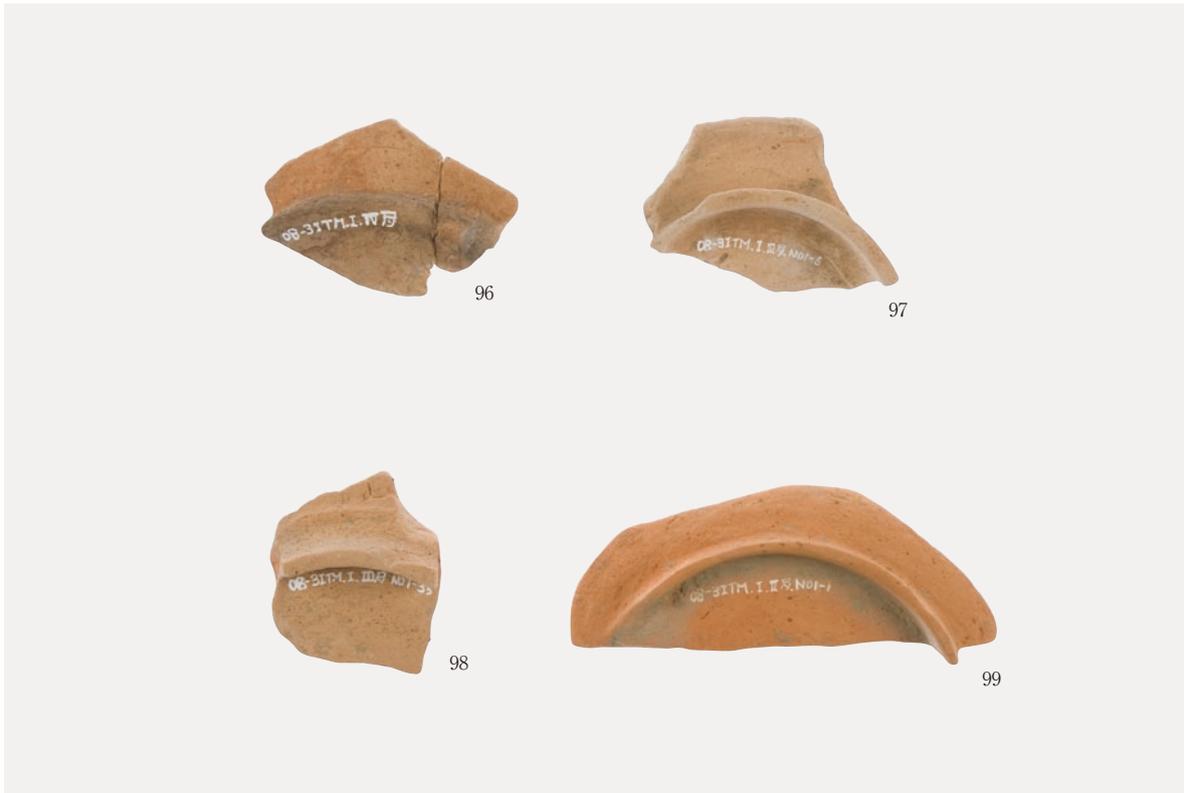
I 区包含層出土土師器皿(83)·杯(84·86·88·90·91) (内面)



I 区包含層出土土師器杯(外面)



I 区包含層出土土師器杯(内面)



I 区包含層出土土師器杯(96)·盤(97)·碗(98·99) (外面)



I 区包含層出土土師器杯(96)·盤(97)·碗(98·99) (内面)



I 区包含層出土土師器甕(外面)



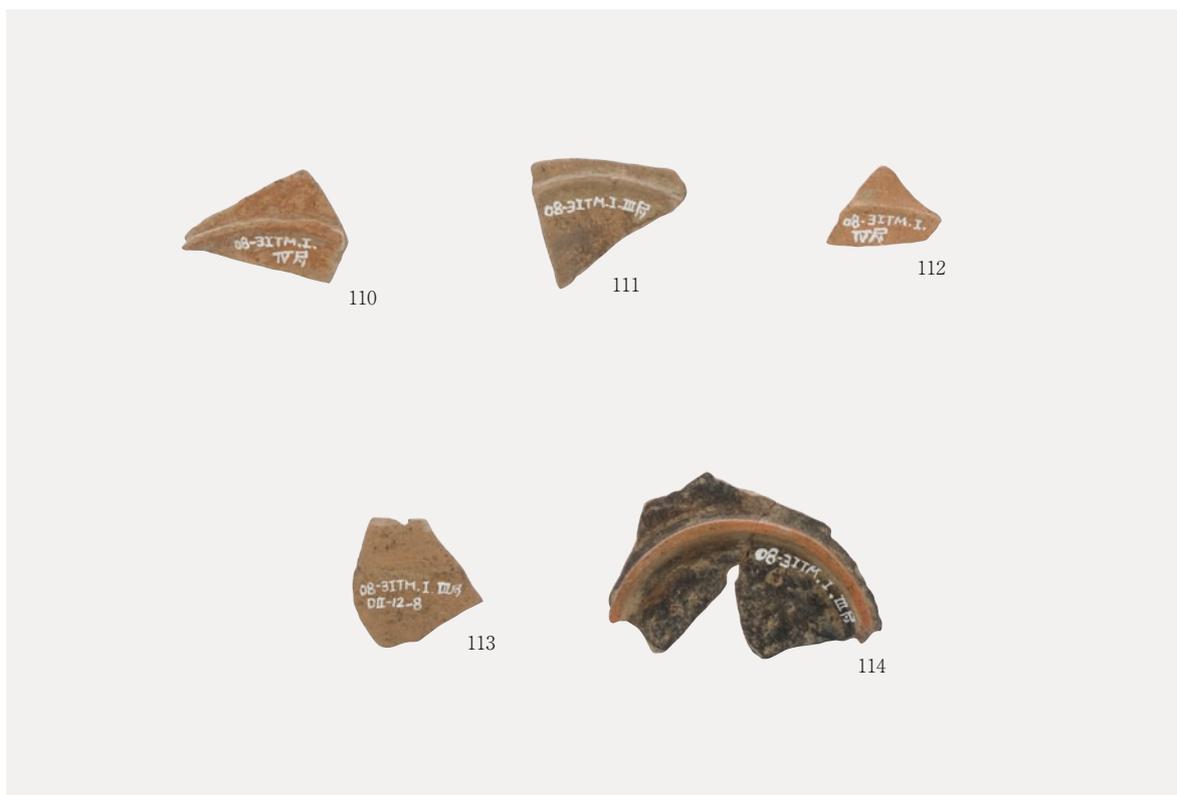
I 区包含層出土土師器甕(内面)



I区包含層出土土師器甕(103～106)・羽釜(107) (外面)



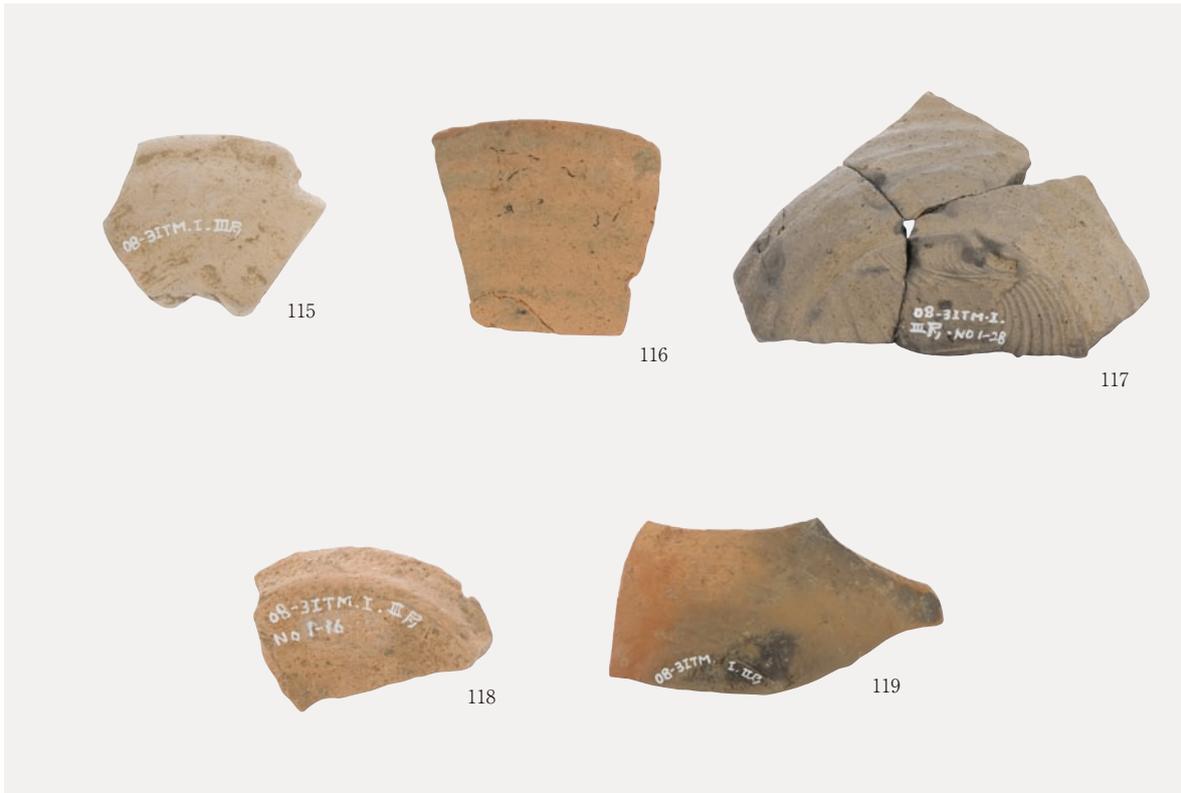
I区包含層出土土師器甕(103～106)・羽釜(107) (内面)



I 区包含層出土黑色土器碗(外面)



I 区包含層出土黑色土器碗(内面)



I区包含層出土土師質土器皿(115)・杯(116～119) (外面)



I区包含層出土土師質土器皿(115)・杯(116～119) (内面)



87

I 区包含層出土土師器杯



89

I 区包含層出土土師器杯



108

109

I 区包含層出土綠釉輪花碗(外面)



108

109

I 区包含層出土綠釉輪花碗(内面)



120

121

I 区包含層出土瓦器碗(120)·瓦質羽釜(121)(外面)



120

121

I 区包含層出土瓦器碗(120)·瓦質羽釜(121)(内面)



122

I 区包含層出土須惠器壺



126

I 区包含層出土須惠器高杯脚



I 区包含層出土須惠器甕(外面)



I 区包含層出土須惠器甕(内面)



I 区包含層出土備前播鉢(127)・天目(128) (外面)



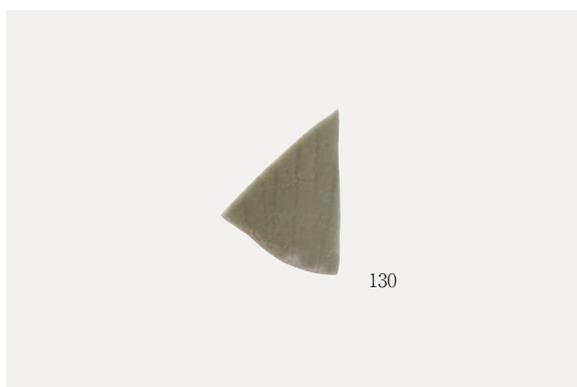
I 区包含層出土備前播鉢(127)・天目(128) (内面)



I 区包含層出土青磁碗(外面)



I 区包含層出土青磁碗(内面)



I 区包含層出土青磁碗(外面)



I 区包含層出土青磁碗(内面)



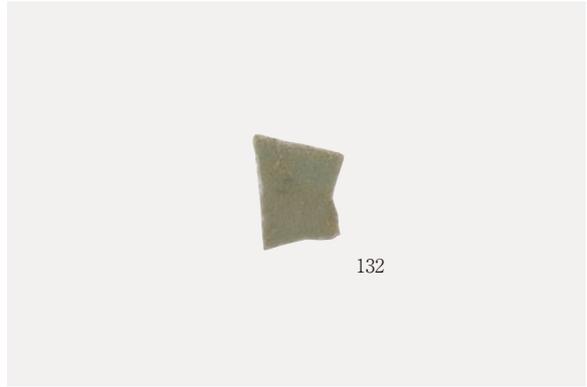
I 区包含層出土青磁瓶(外面)



I 区包含層出土青磁瓶(内面)



I 区包含層出土青磁碗(外面)



I 区包含層出土青磁碗(内面)



I 区包含層出土陶磁器(外面)



I 区包含層出土陶磁器(内面)



I 区包含層出土土錘



I 区包含層出土鉄滓



I 区包含層出土砥石



I 区包含層出土石包丁(表面)



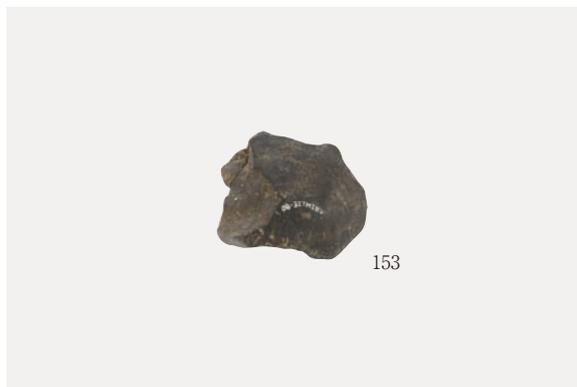
I 区包含層出土石包丁(裏面)



I 区包含層出土弥生土器壺(外面)



I 区包含層出土弥生土器壺(内面)



I 区包含層出土弥生土器壺(外面)



I 区包含層出土弥生土器壺(内面)



Ⅱ - 1区出土土師器碗(154・155・156)・土師質土器杯(157)・土師質土器釜脚部(外面)



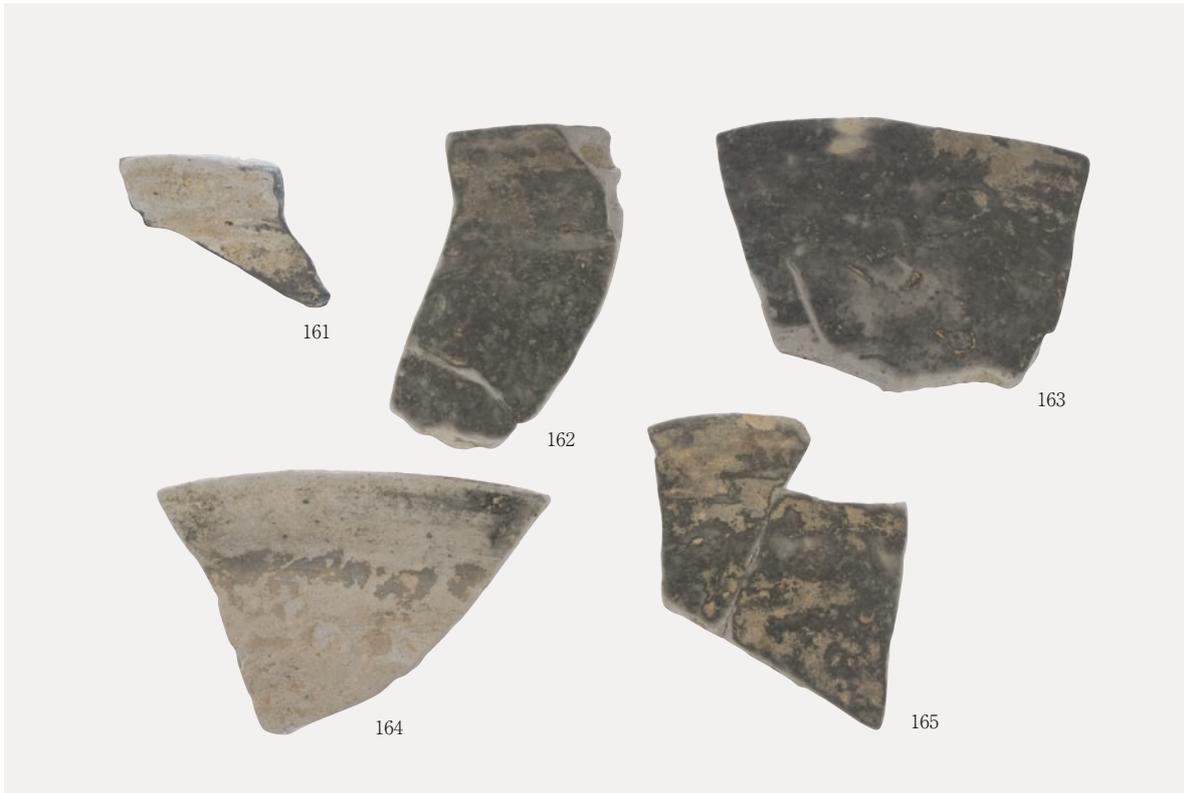
Ⅱ - 1区出土土師器碗(154・155・156)・土師質土器杯(157)・土師質土器釜脚部(内面)



Ⅱ-1区出土須惠器捏鉢(外面)



Ⅱ-1区出土須惠器捏鉢(内面)



Ⅱ - 1区出土瓦質土器播鉢(161・163～165)・片口鉢(162) (外面)



Ⅱ - 1区出土瓦質土器播鉢(161・163～165)・片口鉢(162) (内面)



II - 1 区出土瓦質土器鍋(外面)



II - 1 区出土瓦質土器鍋(内面)



II - 1区出土瓦質土器鍋(外面)



II - 1区出土瓦質土器鍋(内面)



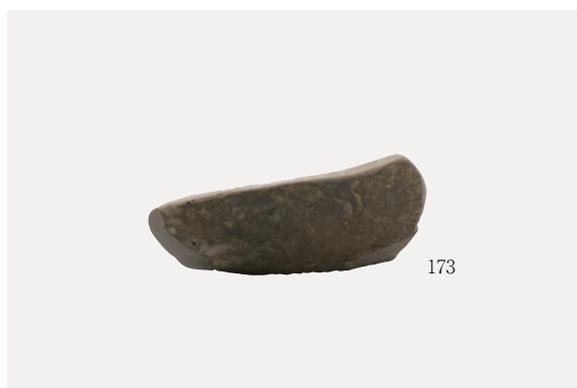
Ⅱ-1区出土瓦質土器播鉢(外面)



Ⅱ-1区出土瓦質土器播鉢(内面)



Ⅱ-1区出土瓦質土器鍋



Ⅱ-1区出土瓦質土器鍋



Ⅱ-1区出土瓦質土器鍋



Ⅱ-1区出土瓦質土器羽釜



Ⅱ-1区出土古瀬戸天目(外面)



Ⅱ-1区出土古瀬戸天目(内面)



Ⅱ-1区出土白磁碗(178·179)·青磁碗(180)·青磁稜花皿(181)·青磁碗(182~184) (外面)



Ⅱ-1区出土白磁碗(178·179)·青磁碗(180)·青磁稜花皿(181)·青磁碗(182~184) (内面)



II - 1区出土須恵器甕(185)・備前焼擂鉢(186～188)・壺(189) (外面)



II - 1区出土須恵器甕(185)・備前焼擂鉢(186～188)・壺(189) (内面)



Ⅱ - 1区出土常滑烧广口壶(191)·甕(192·193) (外面)



Ⅱ - 1区出土常滑烧广口壶(191)·甕(192·193) (内面)



II-1区出土備前甕(外面)



II-1区出土備前甕(内面)



II-1区出土土錘



II-1区出土土錘



II-1区出土石鍋(外面)



II-1区出土石鍋(内面)



II-1区出土砥石



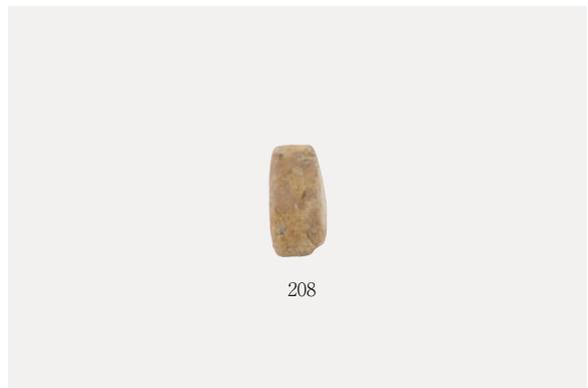
II-1区出土鉄滓



II - 1区出土砥石



II - 2区出土青花碗



II - 3区出土土锤



II - 3区出土土師質土器羽釜



II - 3区出土須惠器皿



Ⅱ-3区出土須恵器皿(210・211)・高杯(212)・杯(213) (外面)



Ⅱ-3区出土須恵器皿(210・211)・高杯(212)・杯(213) (内面)



Ⅱ-3区出土須恵器皿



Ⅱ-3区出土須恵器高杯



Ⅱ-3区出土須恵器杯



Ⅱ-3区ユニット1出土弥生土器鉢(外面)



Ⅱ-3区ユニット1出土弥生土器鉢(内面)



Ⅱ-3区ユニット1出土弥生土器鉢(外面)



Ⅱ-3区ユニット1出土弥生土器鉢(内面)



Ⅱ-3区ユニット1出土弥生土器甕(底部)

報告書抄録

ふりがな	てんじんみぞたいせきいち							
書名	天神溝田遺跡 I							
副書名	いの町道奥名西線発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第113集							
編著者名	吉成 承三							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437-1							
発行年月日	2010年2月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てんじんみぞたいせき 天神溝田遺跡	〒781-2110 こうちけん 高知県 あがわぐん 吾川郡 ちやういの いの町伊野 あざしろやま 字城山 他	39386	320028	33°	133°	2008.7.15	1,425 m ²	町道奥名西 線道路改良 工事
				54'	43'	2008.10.31		
				36"	22"			
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
天神溝田遺跡	集落跡	弥生時代	土坑 ピット(炉跡)		弥生土器 土製品 石製品		弥生時代後期の 土坑を検出した。 古代では平安時 代を中心とする掘 立柱建物跡・溝跡・ 土坑を検出した。 中世では南北朝 期を中心とする溝 で囲まれた屋敷跡 を確認した。	
		古代 中世	掘立柱建物跡 土坑 溝跡 ピット		土師器 須恵器 土師質土器 瓦質土器 備前焼 常滑焼 青白磁			
要約	天神溝田遺跡は、仁淀川支流の一つである宇治川河口付近に位置する。背後には音竹城跡が立地し、発掘調査では南北朝期の遺構と遺物が出土した。また、奈良～平安時代の遺構と遺物も出土し、古代から中世にかけての複合遺跡であることが判明した。							

本書作成データ

システム：MacOS X (10.5.8)

ソフト：Adobe Photoshop®10.0.1, Adobe Illustrator®13.0.3, Adobe Indesign®5.0.4など

フォント：モリサワOTF基本7書体, Times New RomanItalic

データ：すべてデジタルデータで入稿

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第113集

天神溝田遺跡 I

いの町道奥名西線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

2010年2月26日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 (有)西村謄写堂

